山岳

第三十六年



山

岳

第三十六年第二號

山岳第三十六年第二號目次

 シラムレン―ラマ廟本堂(純西藏式)	西スニト―ラマ廟(純支那式)… 同		シラムレン近傍―包と糞の煉瓦塀	同		張北近傍―驢馬の放牧、遠景楊の植林	中古功	草原を走る道路(東スニト―貝子廟)	明神尾根「鷲の巢」の天幕 同	······ 同	明神岳主奉(右端)、鷲の巢附近より	コブ尾根 同 一	明神尾根第二キャンプ早 大 山 岳 部 三 瞬順	1	圖版
	丰		黑部古道附近略圖 1分	玉 王瀧川槪念圖 14	蚕 御岳白地獄谷略圖 支	裹 御 岳	西明神岳東稜近附略圖	护匠	fi	20 カシナギ尾根の針葉樹林 同 110 ⁺	鬼の保存する山道 同 1104	セ 柳又の架橋作業塚 本 繁 松 10米	☆ 鷲を捕ふ (徳化―西スニト) … 同 ~	賣買の幕營(徳化-東スニト)… 同 な	既婚婦人(西スニト)平吉功令

登山五十年

日本山岳會講演會 (昭和十五年) に於ける講演大要

木 暮 理 太

郎

暫く御靜聽を煩したいと存じます。

どうせ狗の肉を賣るのでありますから、 十年」としてくれたのださうであります。演題のことですから羊頭ほど融通のきかないものではありませんが、 あつては困るといふので、司會者の塚本さんが思ひやり深く、これなら支障もあるまいと、私の演題を「登山五 のでありました。それが生憎複さんのも未定となつてゐたのださうでありまして、 りまして、これは誠に申譯ないのであります。實は私は講演を引受けました時に、 ん、どこまでも羊の肉でなければならないのであります。ところが皮肉にも今晩の私の演題がその羊頭狗肉であ でありまして、その狗肉が羊肉よりも實際榮養價値に富んでゐるか如何かといふやうなことは問題ではありませ る標識として、店先に羊の頭を出して置きながら、 この際思ひ切つて「登山二千六百年」とでもした方がよいかも知れません。 支那の古い諺に「羊頭を掲げて狗肉を賣る」といふのがありますが、これは誰しも御承知の通り、 大いに賣ることにしませう。 實は狗の肉を賣る、つまり招牌に偽のあることを譏つたもの 登山五十年、 題未定として通知して置いた もとより結構でありますが、 一の講演會に題未定が二つも 羊の肉を賣

登山五

十年

(木暮

(255)

阻害されようなどゝは、最早斷じて信じないものゝ、斯様な記事は出來ることなら新聞紙上から、 よりも になるのは當然であります。それに新聞紙などは、競つて「魔の山」といふやうな大見出しで、登山者の不注意 に行けば大抵は必ず遭難するもの、山は遭難の場所であるやうに早合點し、登山に對して危惧の念をいだくよう 興味本位に墮した記事の多いことであります。勿論私はこれが爲に、向上の一路を辿りつゝある登山 それはさて措きまして、近頃のやうに山の遭難者が續出しますと、 山の魔性といふやうなことを誇張した、遭難記事を掲げたりします。一層惡いことには、それが多少と 山の事情を知らない世間の多數の人は、 永久に影をひ の趨勢が Щ

通路と考へられてゐたからでありました。神座山とか、神路山とかいふ名が、今も残つてゐるのは神のいます又 あたのであります。それといふのも、 れどころか山を神聖視してゐたのであります。山は畏いもの、狎れ親しむことは許されないが、深く心に愛して りますが、上代の日本人卽ちわれ等の祖先は、決して山を遭難の場所とも魔所とも考へてはゐませんでした。そ さうしますと今の人は、とかく山と遭難とを結び付けたがる、私にいはせると、よくない癖が付いたやうであ 山は神のいます所、若しくは神の降臨する所、或は天に近いので天界との

(256)

そめてしまふことを祈つて止まないのであります。

とに氣付かぬ 平地に齎き祀られてある神社には、其側に必ず神木として崇められた大木があつて、夫に注連が張つてあるこ 人はありますまい。これは即ち祭の時に神座ともなり、又通路でもあることを示すものに外ならな

は天降るかよひ路であつた古代信仰の名残でなくて何でありませう。

日本書紀を見ますと、景行天皇の十八年秋七月四日の條に、九州の八女ノ縣で栗崎(今の黑崎であらうといは

れてゐる)を望ませ給ふた時

其山峰岫重疊して、且美麗しきこと甚し、若しくは神其山に在る乎

詔らせ給ふたと書いてあります。これは山、 殊に尋常と異つた特色ある形貌を具へた山が、 上代人によりて

岳の一ノ倉などは、神の居ます最も神聖な箇所でなくてはならない筈でありますから、これに常習の遭難場所と 神の居ます所であると信じられてゐた思想を示す恰好の例であらうと思ひます。さうしますと、さしあたり谷川

が神の降臨の場所であることは、皇孫瓊瓊杵尊の御降臨あらせられたのが、日向の襲の槵觸高千穗之峯であ 魔の山など」いふ名を負はせるやうな行為は、大いに飛愼しなければならないと思ふのであります。

か、

Ш

河内の河上、蜂、峯に天降つたと傳へられてゐるのも、亦このよき例であります。

(257)

つたことによりて、最も雄辯に語られてゐるのであります。又鳥見の長髓彦が主君と奉戴した櫛玉饒速日命は、

聖武天皇の天平十八年七月に、越中の國守となつて赴任した大伴家持は、翌十九年四月に立山の賦を作つて、 かし、それと同時に又一方に於て、山そのものが神として崇められてゐたことも、否めない事實であります。

皇神の 主宰き坐す 新河の その立山に

と歌ひ、之に和した大伴池主も亦

ながら 御名に負はせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山

坐す所であることを、 と歌つて居ります。「皇神のうしはきいます」といひ、「神ながら御名に負はせる」といふ、孰れも立山が立 と崇めたものと言ひ切るには少し躊躇されます。けれども高橋蟲麿の不盡山を詠める長歌になりますと、 崇敬の念をこめて禮讃したものであることは疑ひありませんが、 これ文ではまだ山體を神 山神の

33

14

五十年

(木暮

H

日 本 0 まとの國 0 鎭めとも います神かも 資とも なれる山

IOS

と歌つてありまして、 明かに山體を神と崇めたことを顯はして居ります。

地方に於ける殆んど名を知られてゐない神々になりますと、 がそれで、延喜式には載つてゐないものもありますが、 耆の大山)、阿蘇比咩神、 獨り富士山のみに限らず、山を神と崇めた例は他にも澤山あります。白山比咩神、 火男神・火賣神(鶴見岳)、石橋神(磐梯山)、 國史には明記されてゐる顯著な神であります。其の外各 餘程其の數は多くなります。 月山 神、 駒 形 神 雄山神(立山)、 (陸中駒ヶ岳)、 大山神 石鎚神 など 伯伯

始めから祭神のきまつてゐる社では、

祝詞のはじめに祭神の御名が擧げられ

てゐ

る。 たとへば春日祭では

延喜式の祝詞に據りますと、

恐き鹿嶋に坐す健御賀豆智ノ命 香取に坐す伊波比主ノ命

とあり、 廣瀬大忌祭では

とあります。然るに神の名として山の名が擧げられ、 「瀬の川合に稱辭竟へ奉る、 皇神の御名を白さく、御膳持たす若宇加ノ賣ノ命と御名は申して 石岩 特に祭神の御名があげてないのがあります。

Щ

0

ロに

坐す

皇神等の前に白さく、

飛鳥、

忍坂、

長谷、

畝火、

耳無と御名は申して

とあ あることから、 る のが 其の例であります。そして是等の神々は、 擬ふ方なく山の神格化されたものであることが察せられるのであります。 天皇の御殿を造營する木材を供給することが本來の使命で

開民族の間には、 Ш を神と崇めることは、 今も尚ほ行はれてゐるのであります。 東洋諸國に共通した習俗であつて、 雲南省永寧縣の西北約 中 央亞 細亞 百 かい ら西南支那に Ŧī. + 丰 H 0 所に在 かけて はるコ 0 奥地 ンカ

の未

1)

(258)

鐘乳洞 婆の宮殿に擬せられ、 K 思議の存在として、 大日岩、金峰 既に皆さん御承知の事と存じます。 食物を供給する女神の名であるから、 ふことであります。 ことからも祭せられ、 れたものであること、恰もわが國の神社の多くが後になつて、主祭神が一 話したといふことが其の紀行に書いてあります。 巖も亦古代人によりて、 ı 客ナアシ 佛教に所謂大自在天卽ち濕婆の妃鳥摩の別名で、 曾て探檢登攀隊に隨行した人夫が 0 ンバは、六千米を超えた三座の高峯を有してゐるが、附近住民の尊崇の標的として、 けれども其の根柢に於ては、早くから山體が神として崇められ、後になつて印度教の 石山 山の五丈石などに、 ングは、 權 現 かは、 ٤ 神と崇められました。 又大正十二年の大震に惜しくも轉落してしまつた塔ノ岳 且山自體が一の大きなリンガムとして象徴され、印度教徒に隨喜渴仰されてゐることは 毘紐天の第四の權化である獅子の名であるといふことであります。 マーラヤに於ても、 洞 笳 の例であります、 今も昔の名残を止めてゐるのであります。 之等の神々は大抵印度教の神であるから、 わが 「昨夜チ エヴ 伊豆 國 の保食神や大宜都比賣神に似て居ります。 富士山 × 山の走湯權現や、 13 モ V ガール ル ストやカンチ 歡喜の女神の意であり、八千米を超えたアンナプル 2 0 七 人穴などもこ ワル (H ヴ . 湯殿山噴湯丘 ヒマー ェンジュンガなどは、 × 2 スト) 0 ラヤ 例 定したのと同様であらうと思ひ 皇孫の坐す高御座が天の磐座 K 入れ 其の外溫泉や洞窟さ 0 の番犬が吠える 最高峰ナンダ・デヴィ 神名が山名となつたものに外なり の湯殿權現は、 の孫佛岩 てよい 叉シッ 山麓の住 やうに思はれ 大 有名なカイラス 巡拜者が のを聞 山 神 温泉の例で、 丰 0 石 民 ム・ヒマ 1 6 から神 0 絶えない 名が はナ たし 鳳凰 であつた ナは、 ング女 と除り ます。 與 Ш 1 日 不 j とい Ш

(259)

斯 くの如くに 签 14 五. D -1-が上 华 代人は、 (木暮 山に對 して一の宗教的觀念を持つてゐたのでありますが、 それは畢竟自然に對す

*

な勢で、あのやうに一般民衆の間に普及したのでありませう。 い間育てられてゐた登山の萠芽が、よい機會を狙つて、一時に成長したればこそ、後になつて宗教的登山が非常 純眞無垢の愛とを基として成り立つたものであるやうに考へられます。これを溫床として、長

考を持つてゐたやうであります。ですから國見する爲は言ふに及ばず、族の憂さ晴らしにさへ登山してゐるので られますが、事質は必ずしも然らずで、明朗ですが~~しい心の持主であつた上代人は、登山を神が喜ぶといふ あります。暫く例を筑波山に借りて、萬葉歌人の歌に聞くことに致しませう。 Ш .が神聖視されることは、却つて山に登ることを恐れ憚るやうな結果を來しはしなかつたか、一應はさう考へ

欲し山」と稱 筑波山は二峰雙び聳えてゐるので、丹比眞人國人の長歌に詠まれてゐる通り、「二神の貴き山、並み立ちの見が へられ、「神代より人の言ひつぎ國見する筑波の山」でありました。その筑波山へ、

今は冬で雪があり、 登山には誂向きではないが、見過して行くのは心残りであるから、雪消の山道に悩みなが

と、國人は歌つてゐるのであります。

檢税使大伴卿が登山した時に、同行した人の作らしい長歌には、

女の神も幸ひ給ひて、残る隈なく晴れ渡つた展望が得られた、夏ながら今日の日の樂しさ、昔の人が登つて樂 ところ、いつも雲が懸つたり雨が降つたりして、容易に全容を露はさない山なのに、今日は男の神も許し給ひ、 筑波山を見たいと君が來ましたので、暑さを厭はず、木の根につかまりながら、汗をかき~~頂上に案內した

(260)

かい つたらう其の日も、 到底今日 には及ぶまい。

神が登山を嘉した意味が强調されてゐます。

高 橋蟲麿の作と傳へられてゐる長歌には

湖水には秋風に白浪が立ち、思つた通りの佳景に、 積日の憂さがはれた。

族の憂さを慰むることもあらうかと、筑波山に登つて見たところ、尾花散る師付の田には雁が來鳴き、

歌つてあります。 同じ人の作といはれる筑波山の嬥歌會の歌にも、

の山 を ろしはく神の 昔より とどめぬ行事ぞ

神が昔から山上で行はれる民間行事を許してゐることが歌はれ、

天の原雲なきよひにぬばたまのよ渡る月の入らまく惜しも

める歌」と題し、

なかつたことが判らうと思ひます。筑波山は高さも低く、まして平野に孤立してゐる山であるから、 なく登れることも、 首が錄されて居ります。これ等の歌からして、春夏秋冬を問はず、目的は異つても、筑波山に登山者の絕 登山者の多い原因であつたに相違なく、 この程度の登山ならば、廣く諸國で行はれたものと 大した困難 文

想像されるのであります。

磐た」みかしてき山と知りつ」も吾は戀ふるかなみならなくに 根のこどしき山に入りそめて山なつかしみ出でがてぬかも

3

14 h.

-1-45 ほ萬葉集に載つてゐる他の二三の歌も、迂闊に見過し難いものでありますから、序に述べることに致します。

-E

又作者未詳として「筑波山に登りて月を詠

奥山 の磐に蘿むし畏けど思ふ心をいかにかもせむ

すまいか、 しかし之を山の歌として觀ますれば、 嘆とが離し難く結合してゐるものといふことが出來るやうであります。古事記にある隼別王の 是等の歌は「山に寄す」と題してある作であつて、譬喩歌の部に入れてあり、 素朴な單純さの中に深い感情がこもつてゐる。 相當に山を知り、 山に打ち込んだ人でなければ詠める作ではないと言 また戀の歌としましても、 戀の歌であるとされてゐます。 自然に對する詠嘆と戀の詠 へま

梯立の倉梯 山は嶮しけど妹と登れば嶮しくもあらず

てゐることは、 の歌に現はされてゐるやうに、全人格をうち込んだ萬葉人の熱烈な戀の歌に、比較の對象として山が詠み込まれ 山に就いて相當の知識があり、從つて相當に登山が行はれてゐた證據として、妥當であるといへ

要のなかつた事と、 念を植ゑ付けた爲であると思ひます。勿論この當時に登られた山は、 て開かれ、古代人が神と崇めてゐた火口や巨巖の類に、怪奇を極めた様々な傳說を尤もらしく附會させ、 例外はありますが、二千米以上の高山は、 の山を愛し、 山に親しんでゐた心を、本當に山を怖ろしい魔所と考へるやろにさせたのは、 登攀の困難とが最大の原因であつたに相違ありません。 殆んど登られてゐないのであります。 皆千米前後の低山性の それとい ふのも、 山であつて、三、五 山が僧侶により 恐怖觀

はれた、 ある僧灼然、 然るに徳川時代に於て、最高潮に達した宗教的登山の發端は、 僧侶 白山の泰澄和尚、 0 山開きに始まるのであります。 立山の慈興上人など、そのよき例で、 大峯を開いた役行者、 この奈良朝の末から、 他に記録を有しない多くの高山が開かれて 男體山を開いた勝道上人、 平安朝 0 石鎚山 初期 K d's けて行

あれば、 ゐる

ことは、 そこに寺が建てられ、 言ふ迄もありません。 佛法弘布の根據として利用された爲に、 この外既に神が祭られてあり、 少しは登山者の 庇を貸して母屋を取られ あつた山でも、 た神様も少くな それ

かつた。 勿論地 主の神として、佛法守護の善神と崇められはしましたが。

を加 山するやうな事は極 どもこの時代には、 間 からであります、 夫に依つて行を積み、 に功徳を施すことを忘れ 終に本地垂迹説が形成されるに至つて、 ばれ、 ですから唯經を讀み佛を拜する許りでなく、加持祈禱によりて、災厄を攘ひ、病苦を救ひ、 宗門の徒弟が鍛錬修業の爲に登山することはあつても、 めて稀であつたのであります。 徳をかさね、 大徳といはれた僧侶達が、 なかつたと共に、 洽く佛法を世に施し、 古來からの崇神思想と牴觸しないやうに、 神佛兩道の信者を惹き寄せるやうになつたのであります。 身命を惜しまず、 一代の師表として行動しよりとする見識を持つてゐた 努力精進して、 餘程特別の事情なき限り、信徒が登 山を開き、寺を建立したのは 信仰の内容に種 々の

けれ

(263)

I.

にも存在し、その人達は當然山に登つてゐたであらうし、 あらうことは、 此の狀態は徳川時代の初期迄續きました。唯この間に在りて、 想像に難 なくない のであります。 又高僧大德が山を開く際に、導者となり人夫となつた 狩獵を以て生活の資とする人達が、 いつの時代

傳播して、夏になると、 C 0 信者が 徳川時代の初期 踵 を接して登るように この外に の終り頃になりますと、 も國境査定とか、 後に日本アルプスと呼ばれるようになつた高峻山岳の一部を除けば、 なりまし 採藥の爲とかいふ必要に迫られた特殊の登山、 た事は、 一般民衆の間に徐ろに高まりつ」あつた登山熱が急に昂 既に御承知 の事と存じます。 これが明 治時代 或は登山 到る所の 0 0 4 揚し、 爲の登山など 頃 、迄續 Щ 各地 V K 白衣 た

答

111

五

-1-

年

(木暮)

さへ行はれ たてとも 絶無ではありませんでした。

生れて、 は、 た事、 のことは歌舞伎や浮世繪、 的な遊山氣分の旅が續けられようといふ樂しみなども、 が、 この時代に於て擡頭した所謂町人の富の力が、ものを言つてゐることを見逃してはなるまいと思ひます。 個 熱狂 人的 生長を豫約される物皆は、 それに對し、富の力で、 的な先達 には登山によりて親しく謝恩の禮 の誘導によりて、 般民衆の間に急に登山が盛になつたかと言ひますと、生活が安定して暮し向きに餘裕 工藝品 消極的ではあるが徹底的に反抗しようとする町人、この特異な社會狀態 [や下手物の類に就いてもいへることであります。政治的優越感に誇る貧乏な武 であつた宗教的登山が其 町人にとりて比較的自由である方面に向つて、異常な發達を遂げるようにな 信徒の間に「講」と稱する團體が組織された事などが最初に 拜を濟し、 亦其の原因の内に數へられませうか。 將來の安全幸福を祈願すると共に、 歸りは氣散じて娛樂 しかも其の根 擧げられ の生じ ます 2

6 易に雇傭に應じなかつたり、甚しきは登山に對して妨害を加へることさへありました位で、其の頃の登山は困 ところが宗教 0 であります。然るに又一方に於て、明治の中頃から、宗教を離れた近代式ともいふ可き登山が、或る一部の人々 ず骨の折れる仕事でありましたから、 間 宗教的登山 に行はれ始めました。 相 的 は明治の末に衰へてしまひまして、今残つてゐるものは、 當 K の苦心を要したのであります。それですから登山の氣風を一般に普及させようとする企も、 山は怖ろしい場所であると信じさせられて了つた山麓地方の住民は、 その狙ふ所は主として、宗教的登山からは殆んど顧られなか 各地で幻燈使用の講演會を催しなどして、大童になつて宣傳とれ努めた 其の精神を失つた形骸のみに過ぎないの つた高山深谷であります。 導者又は人夫として、 劣 難

るのは當然でありませう。

民衆的

の例に洩れる筈はないのであります。

(264)

速に目覺ましい發展を遂げまして、 ものであります。 其の甲斐がありまして、大正八、九年の頃から登山も漸く盛となり、昭和になつてからは、急 登山技術の發達は、 遂に立教大學山岳部のヒマーラヤ遠征となり、

成功を齎し

たの

であります。

ますが、恰も胎盤によりて母體と胎兒とが連絡してゐるやうに、 登山のそれと能く似てゐることに氣が付くのであります。この二の事實の間には、表面上關係はないやうであり 維新後に於けるこの新しい登山が、目覺ましい發展を遂げた有樣を眺めて見ますと、內容は別として、 祖先以來の傳統である山岳愛が胎盤の役目をし

ういふ事をして來る。 げ棄て、 す抗議が出るでせう、「目的なしに山へ登る者があるか」と。まあお待ち下さい。山の上で罐詰を開け、空罐を投 あります。憚りなく言ひますが、これは誠に氣の毒な人達であるといはなければなりません。 うな行動に出る人が、 す。然るに現今の多くの登山者の中には、登山の目的さへも忘れ果てゝしまつてゐるのではないかと思はれるや 命には絕對に服從しなければなりません。 宗教的 兩者の心と心とが結び付けられてゐるものと信じてゐるのであります。 紙屑を散らかし、 登 Ш には 確 固 それが目的であるなら、 遺憾ながら少なくないやうであります。しかも其の人達が皆山へ登る、 たる目的 煙草の火や焚火の不始末から山火事を起す。山へ登つて何一つ心にとめないで、唯さ があり、 指導原理は徹底したものでありました。 かくて山の神聖は保たれ、遭難事故なども殆んど無か 何といふ大きな間違つた事でありませう。 先達に引率され かう言ひますと必 實に驚く可き事で た信 つたので 其の

(265)

私共は事變勃發以來、登山する人が減つたことであらうと想像してゐました、 ところが實際には減るどころか

水

14

五.

+

年

(木暮

では濟まされなくなつた、よろしく全國の登山團體を打つて一丸とし、 しようではないか、さう意気込みで、心ある登山者の間に自肅的新運動が開始されたのであります。夫に就いて それも主として「氣の毒な人達」であるといふ。それではいけない、 お互に規律と統制ある登山を行ふように 最早默つて見てゐる文

は只今冠さんから詳しいお話がありましたから、

私は觸れないことに致します。

などゝ平氣で言ひます。本當にさうでせうか。「俺は火事が好きだから、燒け死んでもい」」など」は、 るのもさらいふ人達に多いやうであります。それにも拘らす動もすると、山が好きだから、 此の頃の登山者の中には、全く締りのない、放縦な人達が居るやうで、山を荒したり、遭難したりす 山で死ねば本望だ」 江戸つ子

は無闇 ながら死んだとしても、私は一向に感心しません。若し其の人が私であつたとすれば、「君以て瞑す可き也」と弔 本望の二字が脳裏に閃くかも知れませんが、私の經驗の範圍外に屬するもので、 あります。 1しまつたと叫ぶ代りに、あゝよかつたと思ふ人があるものでせうか。尚ほ墜落の時間があれば、次に諦めの に口にしなかつたものだと聞きました。たとへば墜落の瞬間、これは私の乏しい經驗からの想像ですが 力量不相應な、 手に負へない場所を、 惡天候を冐して登つた爲に、途中遭難して、 何とも言ふことは出來ない ある本望だと言ひ 0

(266)

幾度か生死の境を彷徨ふにも似た危險な登攀をも經驗し、登山の快、 登山の喜び、登山の面白味を本當に體得

辭を手向けられても、

瞑する代りに大きく眼を開けて、

山を睨んで居ります。しかし「身から出た錆だ、

生しろ」と言は

れたら、

往生する積りであります。

る可きでありませう。然し山らしい山にさへ登つたことのない、驅け出しの登山者が、 してゐる人に對してならば、山で死んで、さぞ本望であらう、さぞ幸福であらうといふ言葉を用ゐることが許さ 自慢らしく自ら口 にす可

き安つぽい言葉ではない筈であります。況して其の死が何等の貢献する所もないのに、 强ひて同情の安賣りをす

死者に對しては誠に氣の毒でありますが、慎しむ必要があるのではありますまいか

れが如何いふ內容でなければならないかは、正直に白狀しますと、私も未だ充分に考へてゐないのであります。 生れない、日本的 それで私は、 現 の登山原理と指導精神の完成に努力邁進して戴きたいと、希望して止まないのであります。そ に進行しつ」ある新運動に携はるであらう此の席にお出での若い皆さんに、 生る可くして未だ

題は放任して置きましても、二十年三十年の後には、おのづからにして解決される場合もありますが

樣 な問

それ 質剛健な歩みを續けて、 派な成果 諸君は諸君の正しいと信する道を辿り、お互に扶け合つて誤りを正しつゝ進んだならば、久しからずして立 を目的として努力しますれば、三十年のものは十年、二十年のものは五年にして仕上げることが 同志の力で送り出せるのではないか、必す送り出せます。この希望が諸君の力に依りて實現される日迄 を擧げられるに相違ないと信じます。そしてこの原理とこの精神とに指導された登山團體も個人も、 登山が一般に深く理解される日が來たならば、當分はまだ望めないが、 ヒマーラヤ遠征 出來ませ

(267)

死んでも私は瞑さない積

りであります。

他にないといはれる通り、 のとしました、 て、日本的佛教が出來上りました、卽ち佛教の日本化であります。漢字は支那で發明され、亦朝鮮を經て日本に 諸君、 つたといはれて居ります。 佛教は印度から支那に傳はり、 卽ち漢字の日本化であります。成程、 財布を空しうして舶來の登山用具を手に入れることに苦心しました。そして岩 日本人はこの漢字から片假名を作り、 朝鮮を經て日本に輸入されたものであります。そして日本人に消化され 吾々は、 日本人ほど敏感に新しいものを取り入れる民族は H 本風の訓讀を漢文に施して、之を に飛び わが

14 Æ. +

答

壇上に立たせた日本山岳會の幹部を叱咤激勵し、課せられた大きな使命の達成に精進されんことを切望して止ま 思はれません、諸君は是非とも之を成し遂げる義務があります、宜しく大いに奮起して、私のやうな老骨をこの にはないであらうと言はれる吾々に、それが日本精神を昻揚する登山原理を完成するに何の障礙となるものとは から何まで舶來づくめであります、舶來づくめではありますが、日本人ほど忠實に古いものを保存する民族も他 付き氷雪に挑んだのであります。ピッケル、ザイル、ルックザック、ネールド・ブーツ、スキー、ランタン、

ないのであります。

KH

何

極 地 法 と明神岳東 稜

早 稻 田犬學體育會 Щ 岳 部

1 1: 至 3 迄

和六・ や岩壁を探し求めたところも少くなかつたやうである。 もその一つであつた。それとは又別に、 舍を根據としたのでは行動出來なかつた廣い範圍迄自由に登攀を行ふために高處雪中露營の研究を行ひ出したの 積雪期登山と云つても今迄のやうに小舍を根據地とするのではなく、遠く小舎から離れた高い地點に露營し、 高 處雪中露營を我が山岳部が始めて試みたのは昭和九年の十一月、富士山に於てどあつた。積雪期の登山 七年 頃に は、 その初登頂は大體終末を告げ學生登山界もこゝで又新しい對象を求めて進んだやうである。 1 リエ 1 2 ्रञ ンルートなる名の下に、 その時、 早稲田の採つた途はこの後者に屬するものであ 未だ試みられなかつたやうな尾根 も昭 小

(269)

なか 昭和 つた。 積 雪期 七年 昭和九年の春になつてその瀧谷の計畫も一段落の形となつたがこの時は既に進んだ各大學の山 の計畫には行動出來得る殆んど凡ての部員をこの計畫に當てたため、 カン 5 我が部は槍平の小舎を根據地として北穂高岳の飛驒側瀧谷の各尾根の登攀を第 雪中露營の研究等をする餘裕は 線の目標とし 一岳部は

つた。

X

極地法と明神岳東稜

(早大)

應經 ヒマラヤへの接近を匂はせ始めて來た時であつた。

時後立山連峯の鹿島鎗岳の北壁が、二・三の學校によつて試みられたが未だ登攀されずに殘つて居た。そこで之 處に於て我が山岳部も遅ればせながら雪中露營の研究に着手することになり、その場所を方々物色した。當

を對照とし、 遠見尾根を極地法によつて前進し最後に此の北壁を攻撃すると云ふ計劃が立てられた。

装備等は全然なく、

種々研究の結果曲りなりにも一通り揃へることが出來た。

そこでトレーニングを兼ねて之等装備の試験に初冬の富士へ出掛けた。

何しろ始めての試みである為、

達し、 とが大體解り、 を引拂ひ、 幕を張るのも容易でなく、强風に一晩吹かれ通して充分に睡眠もとることが出來なかつた。二十五日頂上の つたが、水を得るだけでも容易でなく米を炊くのに五・六時間も要した。翌二十四日は全員で大澤を登り頂上に 屋の前に慕營を設けた。積雪は非常に少く、敷糎程度であつた。天慕内でガソリンコンロによる最初の炊事を行 三郎、小林雄次郎の十一名は昭和九年十一月二十二日東京を出發し、翌二十三日吉田口より登山して七合目 あるが、實際に雪中で睡ることが出來るであらうかと云ふ事を真劍に考へ、皆必要以上に防寒具を持つて行つた 今井友之助、 金明水小舎の横に四人用ウィンパーテントを張り赤松以下四名が泊る事になつた。頂上は雪が氷と化 七合目で全員合して下山の途に着いた。この富士登山により、 赤松速雄、 雪中でも充分生活出來ると云ふ自信を得ることが出來た。 田村正男、石澤五男、新名彥英、 灘波清一、 廣瀬麟 後から考へれば實に馬 雪中幕營とは如何なるものかとい 一、小西宗明、 尾關正二、 應 岩津太 3. 天幕 の小

(270)

くして次の遠見尾根の生活までに、 装備等の改良すべき點は至急改良した。 同年十二月二十四日東京を出發

ものであつた。

斯





十大山岳部



コブ尾根

早大山岳部

ど無く、 岩津太三郎、 遠見尾根に向つた。 今の遠見小屋のある附近に設けて生活を開始した。 人夫組 廣瀬麟 合等も出來て居らず、 メンバーは、 小林雄次郎の九名であつた。 リーダー赤松速雄以下、 同部落の青年團員の 大絲南線神城驛にて下車、 ベースキャンプには六人用ウィンパー天幕二 助 力に 田村正男、 より荷の運搬を行つた。 寺西恭、 當時此の附近は登山するもの 灘波清一、小西宗明、尾 二十六日 ~ 1 ス 張を用ひ 7

之等の天幕を雪を掘り下げて其の中に張つたので、降雪の爲め埋れて穴倉へ入るやうな事になつてしまつた。 トには、 U.

方の天幕には蓆を用 他方には厚さ約 时の フェルトを用ひた。 煖房には木炭を用ひた。

進キャ プの手前の豪地上に設けた。第二キャンプよりは北壁を真正面に望み、 ソ IJ プの建設が遅れてしまつた。 H を用 CA た ス x 1 デン製のコ 三十日に第二キャ ンロは良かつたが、 ンプを小遠見より大遠見から遠見への 國産のは調子が悪くその修理 **聴の太陽にばら色に染められた壁は全く** 中途に に三日も費 あるギ

力

埋もれてくるにつれ、

をつ

めて持つて行つた石油鑵に灰を入れて火鉢の代用にした。

換氣が悪くなり最後には一酸化炭素中毒を起すやうなことになつてしまつた。

之は最初は非常によかつたが、

天幕が次第に雪に

炊事用

には

(271)

小西 神 の交替等を行ひ、 0 的 で 名が泊つた。之より一月五日まで毎日、 我 なの 登攀然は愈々そ」られるばかりであつた。 極地法の基礎的 な訓練を行つた。斯くして二週間の生活を終り一 ベースキ 二 7 ンプ・第二キャ 日第三キ ャンプを白岳頂 ンプ・第三キ 月六日下山 E 7 K V 建設 プ した。 間 した。 0 連 此の生活 メンバ

K より我 人々は 極地 法の概念を得、 雪中キ + ンプに充分なる自信を得ることが出來た。

次いで第二次遠見尾根生活は昭和十年三月十三日より 小西宗明、 小 林雄 次郎、 村田愿、 佐野源 柏倉健也の八名であつた。 行 つた。 参加者は、 IJ 1 今回はベー ガ 1 田 村正 スキ 男以下、 ンプを前囘より 近藤克二、

極

地法と明神岳東稜

進め、 より後立山の主稜を前進し、最後に八峰のキレット附近よりカクネ里に下り、 することには何等不自由を感することがなく、大なる進歩と云ふことが出來るであらう。今回は最初の遠見尾根 子よく、 も不必要と思はれる位暖く生活する事が出來た。マットもフェルトを防水布でつくみ、ガソリン焜爐も非常 るやうになつた。前囘の失敗により天幕も雪上を踏み固めて張つた爲、埋れるといふ事もなく、 ふ計劃を實行するつもりであつた。 小遠見の頂上より少し下に設けた。 すべてがコムフォタブルであつた。 前回の經驗によりすべてが完全になり、 前回では雪中で幕營することだけで精一杯であつたが、 而して鹿島の北壁を攻撃すると云 炊事等は極めて敏速に 叉暖房用 今回は生活 の火鉢 に調

支稜を四○○米餘り下つた所の臺地上に前進キャンプを設け、之を根據地として北壁を攻撃する事とした。三十 里に下り北壁を攻撃する事に變更し、二十八日第二キャンプを引拂つた。三十日大遠見より白岳澤 れ、二十七日まで無為に過してしまつた。そこで後立山主稜の前進といふ計劃を放棄し、遠見より直接に 日 此の生活により我 再び攻撃を行つた 田村、 近藤は北壁を真正面から、小西、小林は右寄りから攻撃したが、途中より天候惡化し斷念す。 々は盆々雪中キャンプに自信を得、最早小舎と少しも變らぬ位の生活をすることが出來る が、 頑强に抵抗され止むを得ず引返す。 斯くして今回は此の登攀をあきら 8 四 へ落ちて居る 月五 カクネ 四月 下山 (272)

三月二十日第二キャンプを白岳頂上に設け田村以下三名が泊り次の前進を劃したが、吹雪と强風にさまたげら

征 服 當時は極地 せずんば止ますといふ空氣が部内にみなぎつてゐた。翌年も此の計劃を實施せんが爲、 法とい ふ登攀技術よりも登攀そのものに重きが置か れて居り、 前回 にも失敗した北 昭和十年夏、 壁を何 劔岳に

やうになつた。

於ける全部員の合宿後、 冬のメンバーのみで北壁の偵察を行つた。 カクネ里に約 週間 滞在し北壁を登攀

細にそのルートの研究を行ひ、充分なる自信を得る事が出來た。

は前 北壁を攻撃する事とした、我々の目標とするルートは、夏季登攀したルート即ち頂上より真直にカクネ里へ けはしておかうと、 てより五十五時間後キレット小舎に到着した。 んざ尾根上をさ迷ひ歩いてキレットに達し、此處で第二回目のビヴァックを餘儀なくされ、 上に立つた。そしてその夜は頂上でビヴァックし翌 候は惡化し吹雪となつて來たが、 で居る尾根であつた。三十日灘波、 見尾根に乘込んだ。 大事件となつてしまつたのである。 を越すだけで精 同年冬季には灘波清一をリーダーとし、小西宗明、 回の灘波、 ンプへ歸ることが出來なか 小林のラッセルにより、 一杯であつた。 前 七日下山して地元と東京の本部へ連絡した。 回 [前進キャンプを設けた大遠見より白岳澤に落ちてゐる尾根上の豪地 翌十一 兩名は約六○度の尾根をひたむきに登り、 つた。 小林が攻撃を試みたが、多量の積雪に悩まされ約一〇〇米の垂直に近いバン 年 丰 キーポイントたるバンドを僅か一時間で登つてしまつた。 + 一月一日第二隊の小西、 1 この兩名の登攀中より生じた吹雪は十日まで續き、 プで兩名の安否を氣づか 日日 尾關正二、 牛 v ット小舍へ向ひたるも、 小林雄次郎、 之が新聞社に知れて正月の三面紙上を騒 村田 ふ他 0 兩名が第二回の攻撃を行 壁に取り附いてより十二時間後に の四名は萬 山田兵輔、 吹雪の爲め方向分らず、 一を思ひ、 村田愿の六名が に天幕 翌三日天幕を出發し との頃 兩名は根據 つたが を張 應の手筈だ から より天 せた 一度遠 直

(273)

以上の如く雪中露營に よる登攀は自信を得たのであるが當初からの計劃の

地法と明

神岳

東稜

之で兎に角

我

1

0

目的

とした北

壁

の攻撃は

段落を着けたので

あつ

つであつた極地法迄は試みる餘裕

はなかつた。當然次に行つてみなければならなかつたのは模型的な極地法を採用した登山であつた。 1 チの長い山がよい。 當時の他の種々の條件も考慮され舞臺を小長白山脈に持つて行つた。(山岳 それにはア

迄もないが、 心に望んだ。 まされたが、 はなく適當な距離ををいて目標に近付くことが出來た。それであるから各テント間の連絡等も寒さと强い風に惱 冠帽峰を目標にして極地法を行つたのであつたが、坦々とした廣い尾根は到る處キャンプ地にならないところ 歸つて來た部員は今後技術的にみて相當困難な內地の山岳に於て極地法を實踐したいと云ふことを 豫定通りにとることが出來た。この朝鮮の計劃が唯極地法の練習のみが目的でなかつたことは言ふ

ければならない仕事も澤山あつたのである。 その頃は海外遠征への氣運が濃厚になつて來た時であつた。それであるから內地の山岳に於ても當然試みてみな であつたためか隊員も不整ひで唯西穂の山稜にテントの生活を續け、雪洞の生活を試みただけで終つてしまつた。 十二年の春には上高地から西穂に登り、順吹キャンプを前進させて奥穂迄行く計劃がたてられたが、遠征直後

(274)

根 を舞臺に計劃されたのもこんな理由が大きく働いてゐたやうに思ふ。 になされずに終つた西穂からの縦走をもう一度試みるよりも、 更に多くの試練を與へるやうに思はれ

かけての冬の對象と決定され その年の十月に岳川で分宿した人々によつて瘤尾根は偵察され、直ちにリーダー會に於て十二年より十三年に た

ところがその年は第一線部員が始めて制定された年であつて、 その數も少く冬の計劃に参加した者は僅 カン

リル

後からやつと晴れ始め、 入つてからは連 澤 b で たのは夜の白む頃であつた。 つた。星のきらめく空高く黑い瘤が見えた。秋の偵察により第二キャンプの所在地と斷定された鞍部 ダー難波清一 思ひ込んでゐたのでこの時受けた衝撃は決して小さいものではなかつたが、自然の現象を怨むわけにもい 明るくなるのを待つたが雪の の對岸より少し上の方の明神澤の雪崩が眼下を流れ去るやうな崖の上にベースキャ 以下吉阪隆正、 日吹雪で眼前に聳えてゐる筈の瘤等は一 一月一日のまだ夜の明けぬ中に前進キャ 鞍部は一 笠原茂雄、 形は薄暗い時に見たま」で少しも良くはならなかつた。 面雪庇を形成してゐてキャンプ地になりさうに見えなか 桑島光雄、 宮川重男、 向見ることが出來なかつた。それが十二月三十 百瀬孝、 ンプの用意を整へて暗い急なルンゼをつめて行 川原章、 關根吉郎の八名であつた。 ンプを設けたが、 簡單に張れるものとば つたので暫く休ん に登り着 上高 日の かず、 カン 4 10

ぎ碧い空に鋭く峙つ岩峰を見つめ乍ら寂しく退却したのであつた。 と二つの隊を組み先頭をどん~~交代して雪の中を突き進んだが僅か敷百米のところに五・六時間を要し、 ベースキャンプに歸ると亦吹雪始めその後僅 午過

ンゼを登る時でも腰迄埋り、

鞍部から先は想像以上の困難さであつた。

灘波

川原

吉阪。

宮川

百

瀬

關根

りに積つてル

(275)

登攀のみを續けることに決めた。ところがそれ迄に降り續いた雪は積

ントを張ることを斷念し、

かい

の瞬間

を利

用

して再び登攀にか

ムつたが鞍部のところから又も吹雪出して引歸して來たやうな始末であ

つた。

雪の狀態 鞍部が普 冬は結 通の方法を以つでしては容易にテントを張ることが出來ないと云ふ事と、それから先、 局瘤尾根の計劃に關しては殆んどなすところなく終つた。學び得たところは單に第二キャンプ地 0 時でないと樂ではないといふ知識ば かりであ つった。 瘤の岩迄も餘程 である

東京 かに歸 地法と明神岳東稜 からの檢討會では冬の不成功の第一の原因は天候に惠まれなかつたことであるとして、 春

の休み

には再び瘤尾根の計劃を進めることに意見を一致させた。

るかも た。 は空中にとび出で」ゐる部分であるのかこちらからでは少しも見當が付かなかつた。その次には左右に廣く橫は T ンプ地を造るより他に方法はなかつた。シャベルを三本用意して鞍部にたどり着いた時に先づ驚いたのは想像し つた。然し、今度こそはどうしても其處にテントを張らなければならない、それには雪の斜面 ニキャンプの建設 界にはつきりと、 キャンプは西穗澤の對岸、 程度の危險性はあるのであるからベースキャンプから遠いだけに第一の候補地とはなり得なかつた。 てそれを越すと亦鞍部を形成してゐるところがある、 第一の候補地であることは今も變りはなかつた。その鞍部から二〇〇米程進むと低い豪地のやうなピー つてゐる龜裂が目に付いた。下手なところを掘つて其處が尾根を外れてゐたらテント諸共數百米下の澤迄墜落す ゐたのよりは遙かに大きく雪庇が成長してゐたことであつた。 併し考へてみればみる程第二キャ 紫が」つた碧空に岳川を圍む銀色に光つた峰々が突きさ」つてゐた。冬よりも雪は大部多か 杉本義信、 月の試驗が終つて上高地に入つた者はリーダー小林雄次郎以下吉阪隆正、 知れない。 磯邊俊明、 それかと云つて下の方に寄り過ぎると澤の雪崩が危險である。 我々の挑戰を「さあ來い」と待ち受けてゐるやうであつた。ベースキャンプを張つた翌日は第 に向つた。 伊藤久行、關根吉郎の十名であつた。冬とは異つて釜のトンネルを出ても快晴であ 明神寄りの森林帶に設けた。晴れた日が續いたゝめか瘤の雪は落ちて黑い岩が白い世 岳澤の雪の狀態からして鞍部の雪庇は冬よりも大きいだらうと云ふことは明 ンプ地は問題であつた。 此處もキャンプ地として考へられないこともなか 秋の偵察の時から豫想されてゐた第一番 どの邊まで行つたらまだ下に尾根 宮川重男、竹內孝、 雪庇が落ちても巻き込まれず亦 に穴をあけてキャ つた から | 瀬孝、 目 あ 0 0 3 鞍部 たが がい 白 0 あ 1 JII カン であ 原 0 が 或

(276)

掘つてキャンプ地とするより他にどうするわけにもいかなかつた。晴れが續いてゐて澤の雪はよく締つてゐるの 雪崩の影響もないやうな地點を求めることは畢竟兩方の危険性を兼ね備へてゐる地點にすぎなかつたがその だけはテントを張り終り、 で吹雪でも續かない限り雪崩の心配はいらない、けれどもテントのすぐ傍を不氣味な口を閉いて延びてゐる龜裂 夜寢袋に入つても拂ひ切れない不安となつてじわりくと全身を卷付けて來た。「まだ

當分雪庇は落ちやしない」、「落ちてもこの下は岩さ」等と慰め合つたが確かに不安な一夜であつた。

シャベルもないので雪庇を崩すことも出來す一旦引き返すより他に方法を見出すことが出來なかつた。登つて來 200 つたが荷が輕がつたのでそれ程苦しむことなく登ることが出來た。ところが間もなく全く想像もしなかつた障碍 察することになった。 ならない。頂の細い岩稜は又々一面雪庇を形作つてゐた。四人は雪庇の前に立竦んでその場の對策を考へたが 我 カン その翌日は薄曇りの天候であつた。夜の白む頃、關根―百瀬。小林―杉本。の二隊となつて瘤を登り上部 一時間で通過して直ちに瘤の登攀にかゝつた。瘤はすぐ下まで來てみると遠くから眺めてゐたよりは急であ 々を待ち受けてゐたのであつた。 アイゼンの齒が堅い雪にサクく~と刺さつた。冬來た時には半日以上も苦しんだところを 瘤を登つて次の鞍部に下るには、傾斜が非常に急な爲、懸垂で下降しなけれ

(277)

n つた時に、ベースキャンプからは食料・燃料それにこの上で用ゐる筈のテント等を運んで來て吳れてゐたが、そ のであつたが、 緒にその日 との瘤の上から見ると、どうしても雪庇の上に乗り出してゐるやうに見えた。 速 座 にべ 、穂迄登つたが、 ースキャ ンプ迄退却してしまつたのである。 瘤尾根を舞臺にした極地法の計劃は此の如くにして失敗に終つた。 翌日、 吉阪、 宮川、 磯邊、 第二キャンプに歸 III 原はベース そ

た途を振返つて見れば、

岳川の溪深く落ち込んだ白い尾根の中途に小さなテントが見えた。心配し乍ら設けたも

た、然し計劃としては失敗の部類に屬した。

の後鷲の巢のキ ンプ地を見付け、 明 神の附 近の岩場を登つたりして、その合宿は我々によい經驗は與

合宿檢討會やリーダー會で出た意見を綜合し、計劃の失敗の原因がどこにあつたかを、少しく述べてをく。

結論の如きものを先に述べてみると、登攀それだけでも相當の力を要し、それ以外の試みに對してあまり餘裕

原因してゐたと云へるのではないだらうか。

以下各項に付いて極く簡單

に説明する。

の持てないやうな尾根に極地法を試みたといふ經驗は、

我が部としてはこれが始めてどあつたといふ事に凡てが

二キャンプが大體二五○○米の第一の鞍部より下には絕對に設け得ないので、ベースキャンプを出來るだけ高 ンプ地の問題。 ~ ースキャンプを岳川に設けることは、今迄の經驗からして別に困難も感じなかつた。第

に設けることがその後の活動には大いに有利であつた。冬は明神澤のすぐ下迄持つて行つたが、

春は雪積

(278)

地

の話 も多く一八〇〇米位の森林帶に限つた。結局キャンプ地で問題となるのは第二キャンプであつた。 では四人用のテント位なら幾つでも張れる立派な鞍部であつたといふことである、ところが冬も春 秋の偵察の時

ح

とは不可能のやうに考へられる。危險はそればかりでなく、前述したやうに、少しでも傾斜の緩いところに張 れは澤がそのま」の斜面で空中迄のし上つてゐるやうなものであつて、 な雪庇が下の方は四○度、上の方で三○度位の傾斜を以つて出來てゐて、一尺四方と雖も平な處はなか 知らぬ中に尾根から外れてゐるやうなことにもなつた。 何處に張つても雪崩の影響 の外に出るこ つた。

以上要するに、 この鞍部に第二キャンプを設けた事は無謀に近いものだつたかも知れない。 然し、 毎雪積期に

6 春 2 ス 2 のが 牛ャ の鞍部 のやうな雪庇が出來るとは限らないから、 必要であ このやうな雪庇は無かつた。何れにしても瘤尾根で極地法を行ふためには、 プの に雪庇が出來てゐなかつたとして次の困難や障碍を考へて見ると、やはり瘤の岩峰とベースキャンプと 役割を務めねばならないことは事實であるから、 0 たのである。この意味からすれば、 これだけでこの計劃を無謀視するのも早いと思ふ、 確實さに缺けてゐたことは否定出來ない。 此處のキャンプはベースキャンプ同様、 この第二キャンプが前 それでは若し、 現に今年の冬も 安定した 進

設けるとしても、 た 定綱として用ふるために八〇米の綱等も用意したことはしたのである。 を 0 持つて果して越せるものだらうかと云ふことである。 連絡であらう。 我 が部では未 瘤の岩峰も空身で登るならそれ程問題ではないが、此處をテントを始め食料・燃料等の重い荷 だ繩梯子を用ひた經驗がないので、 この瘤の岩峰は其處から逆に登ることは梯子を用ひない限り殆んど不可能と見て差支へなか どれ程の効果があるも 實際はこんな餘裕は全然無かつたのであるが、 瘤を越して其處の鞍部に第三キャ のかも知らず、 7 の障碍は未だに 悪場に

(279)

險で第二キャ も深くなれば相當の困難を伴ふことは事實であつたらう。 1 スキャンプとの連絡も狀態のよい時は簡單に上下出來る澤を通路とすることが出來たが、雪でも續くと危 ンプ以下も岳川迄尾根を通らねばならなかつた。 宮川、 JII 原が此の間の連絡をとつてみたが、

豫想も出來ない。

隊員の方から考へてみても、第二キャンプが安定したとし、第三キャンプを設ける迄には十名では足りなか 人夫を用 CA ない ので訓練され た十五名以上の隊員は必要であつたらう。 0

だけ考へてみても、 極 地法と明神岳東稜 當時の 部 の經驗、 質力で瘤尾根で極地法の訓練をすることは少々無理 であつたといふ

村均名 2 日前书 3 元 人

結論は妥當なものと思

一、明神の東稜とその計劃

の方面 5 から テ 雪の鞍部をなしてゐてカンチの「鷲の巢」のキャンプ地を連想させたので此處を鷲の巢と名付け、 ントを運び全員交代してこの附近の岩を登つたり前穂へ行つたりした。 尾根の計劃を一 の偵察に出掛けた。 段落と見切つた時、 稜線上の一岩峰を見上げると二羽の鷲が大きな弧を描いて滑走してゐた。 早稻田はまだ明神の方面を殆んど知らないので關根、 III 原 0 その岩 翌日岳川 二名は明 の下

うだらう等と語り始められたのはこの時であつた。登つてしまつたりしては次の興味が無くなるのでとの時は單 部があつて十分キャンプ地になることだけは確めた。 た頂上の K 四方から眺めたどけにしてをいた。 明 0 直下に双のやうな鞍部があり、 主峰から梓川に向つて白い大きな尾根が延びてゐるのを見付け、 この時の印象は甚だ漠然としたものであつたが、 其處にテントが 張れるだらうといふ事と、すつと下の方に大きな廣い鞍 この次にはこの尾根を對象にしたらど ピラミッ ドのやうに

(280)

111 んでをくことも出來す、 岳の東稜と決定された。 0 原章、 計 その年の冬、 劃は 關根吉郎あとは桂成光、 時中斷されること」なつたが 即ち昭和十三年から十四年の正月にかけては極地法とは無關係に新高山に出掛け 至つて小規模なものであつた。 この春の計劃は遠征直後のことであつて、 松田 郎、 歸 宮崎二郎、 つて來てからの 参加した隊員もリーダー鈴木正俊、杉本義信以下二宮忠 東濱義男等の新らしい人々であつた。 リーダー會に於ては次の對象は豫期され 秋の中に裝備品や食料等の多くを上高 た」め、 た通 極 地 に運 地 明 神 法

灵

始めい てゐては相當惡いに遠ひないことは想像出來た。 非常に時間のかゝることを見てとつて引返した。又吹雪が續き、少い食料の限量もあつたのでそれ以上この尾根 この溪は約四○○米程上ると急に廣く展けて來て一見カールのやうな型をなし、それを右に折れて進むと第一の てから一週間 については何も爲すことなく歸つて來たが、杉本、 つのテントなら樂に張れ第二キャンプ地としては適當するやうに見えた。其處から尾根の上部の方を仰ぎ見ると である通 千尺から約四粁寧ろ德澤に近い梓川から少し上つた森林帶にテントを張つたが春には珍らしい惡天候で入つ くらか 近くも吹雪き續けられた。三月十九日、吹雪の靜まるのを待つて尾根の下部の方の偵察に出かけた。 傾斜が緩いが雪の付いてゐない黑い一枚岩のやうなものから急になつてゐる。 瓢簞池に出るのである。其處を登つてこの附近を偵察した。池も凡て雪で覆はれて廣く五つ六 川原等の話を綜合してみてもその鞍部から上は重い荷をもつ 偵察に登つて みたが

自覺と各部員にもたせる動機となつたことも確かであつた。 春は天候にも惠まれず、亦氣力を缺いてゐたことも事實であつたが、これが却つてこの次ぎこそはと云ふ强い

(281)

來た。五月に行ふ谷川岳の合宿、 の合宿は第一線部員のための合宿である。この冬は豪灣に行き、春は氣力を缺き昨年度の雪積期には内地の山岳 部員もそれを自覺し、その覺悟も出來上つてゐるやうに見えた。 に於けるまとまつた計 尾根を試みてから二年の後には毎年多くの新人を加へ第 劃が無かつた。それで今年こそは二十餘名の者を一つの目的のために動かす必要があつた。 夏秋の合宿等はその大半は新人のための合宿と云つていゝ。然し積雪期特に春 一線部員だけでも二十名に滿たんとする程 なつて

夏 ◇の體力合宿を終へ、そろ ✓ 第一線部員が張り切り出した九月早々、本年度の冬及び春の合宿は關根をリー

地法と明神岳東稜(早大)

ダーとし明神岳に於て行ふことが決定され、計劃が進められた。

L 改良し、瘤尾根で成さんとして成就出來なかつたことを成し遂げ、そ の後進んで來た部の主張を實現するにあつ たのであつた。 瘤尾根で失敗したことが明神の東稜に於ては出來さうに見えた主な理由は大體次に述べるやうな點から判斷 の計 割は更めて言ふ迄もなく、瘤尾根の計劃に次ぐ性質のものであつて瘤尾根で失敗したところをよく考へ、

ニキャンプ地 來ることが出來ないやうな決定的なところもこの東稜には見當らなかつたこと等であ 無理をしたのに此處ならば大きなテントを二つも三つも張つて隊員の大部分を集結させ上部の困難な行動に對し て十分サポートが出來るのである。それから瘤の岩峰のやうに梯子を用ひなければ、行つたらもうそこを歸つて 迄大體六○○米であり、 二つの尾根の第二キャ の瓢簞池は瘤の鞍部から見ると問題にならぬ程安定してゐる。 明神の方は三〇〇〇米の明神から二三五〇米の瓢簞池迄六五〇米で大體同じであるが第 ンプから上の標高差を見ると瘤尾根は三一〇〇米のジャンダルムから二五〇〇米 瘤尾根では四人用テント つった。 張 りに

(282)

鞍部が候補地であつたが、といは右も左も鋭く切れてゐて果してキャンプ地になり得るかどうかは疑問であつた ので冬に偵察することにしてをいた。最終キャンプである第四キャンプ地としては第三キャンプが二八〇〇米以 よからうと、 ンプ地としては別に何も問題にすることも無かつた。梓川近くの森林帶にしても或は五千尺か德澤にしても差支 は無かつた、 冬は兎も角として春には必ず出來るだらうと云ふことを前提してこの計劃は進められたのである。 長七谷にベースキャンプを置くことにした。 が我々は五千尺を交通機關の最終點と考へ瓢簞池が第二キャンプならその中間に位する長七谷 第三キャンプ地としては鷲の巢から見えた頂上直下の べし

L た冬の山 にした。 の地點であるので三〇九〇米の前 に入る部員もゐるのでこの東稜と限らず、 冬は休暇の期間も極く短かく極地法等と云つてのんびり出來ないし、 穂の頂をそれに當てるのが極地法の形式から云つて相應し この附近の登れさうなところを登つて春のため その上始めてスキー合宿 V から前 のト V 穂の頂上 1 =

ガ の傍ら偵察をすることにした。

秋の試驗休みには、若い部員は各地に岩登りの練習や縦走に出掛けたが、上級の部員は上高地に荷上げを行ひ、

ベースキャ ンプの場所を確定し、 此處に最新式のベースキャンプを設けた。

+ 月の末になると新らしい第一線部員も追加され隊員は大體目星が付いて來た。 十一月一 日からは全部員でト

レーニングを勵み、傍ら心配の種であつた石油を八方手を盡して集めた。

幸ひ或る方面の御好意に依り必要量の

(283)

最小限度は買ふ事が出來た。

た二十四名であつた。 十二月學院の試驗が終ると間もなく上高地に入つた者は、 第一 線部員の大部分とその他數名の一 般部員 を加

冬 0 偵 察

V 入口も出口も殆んど雪が無く歩いたま」で通れた。 ふ程度で 澤渡でバスを降りた時 これならば穂高 から雪の少い 0 山も夏の縦走路をその のが目立つた。 産屋澤迄の例年の雪崩 ま」歩けるのではない 中の湯に一泊して例年惱む釜トンネルに差しか カン の斜面も、 と思はれ 12 新雪で僅かに白くなつたと ムつたが、

私共 の冬休みは一 地法と明神岳東稜 一週間 しかない。 だからテ ントの生活はせいん 週間である。 この一 週間をどれ

ても 察出來たらその上の方もよく見て來ることにした。 本、川原、松田に百瀬を加へ、それ等の人々によつて瓢簞池の前進キャ て 春 の訓練として附近の山々を吹々に登らせることにした。 神の東稜だけに二十四名の全隊員を展開させることは不可能に見えた。それで岳川に過半數の部員を入れ 一方明神の方は昨年の春に偵察に來てゐる鈴木、杉 ンプから東稜を登り第三キャンプ地を偵

願 なければならない仕事を目前に控え乍ら、どうせ來るにきまつてゐる吹雪の障碍を出來るだけ輕くあつて吳れと さうしたらきつと續く」誰の口ともなくこんなことが呟かれたが、これは不安の念とか愚痴と云ふよりも、やら ふ氣持であつた。 五千尺に着いた翌日も晴れてゐた。 却つて薄氣味悪く思はれる位であつた。「もうそろく、吹雪き出すだらう、

方から氣遣つてゐた雪が曇りかゝつた空の何れからともなく靜かに音もなく降つて來た。 豫定地長七谷の川から一五〇米程上つたところのベースキャンプに到着したのは十二月二十七日であつた。夕

前穗や西穗に出發したが、彼等だけは奥穗に行く豫定のところこの雪だから止めて此處へ來た等と否氣に話して

一十八日。

風は別に强くなかつたが雪は降り續いてゐた。

正午頃、

岳川から三人遊びに來て、

岳川の隊は各々

(284)

行つた、 翌日は亦名殘りなく晴れた。 明神の方も今日は休養なので岳川を訪ねたりして一日過した。 少しばかりの雪では積雪量も増したとも思へなかつた。この分ではどこを登つて

岩小屋にもなりさうに窪んでゐる、荷物の貯藏所にもなるし、こゝでスキーを輪カンに代へる 思 も雪崩の心配はない。悠々と澤の眞中を登る。森林帶を出たところに仰ぐやうな大きな岩があつて下部が少しく へた。 澤は次第に廣くなつてそれが大きな岩壁に遮られてゐるところを右に曲つて三〇度程の斜面を登り鞍部 のが 適當だらうと

に出 るやうに頼んだ。 た、一張りの アークチックテントを張り前記の五名に二年の藍田を残して適當な日を擇んで上部の偵察をや

ることに決め隊員を擇んだ。少々調子を害した鈴木を休ませ、昨年來た杉本、川原、 が 午頃から雲も切れて陽が射して來た。下のキャンプからの激勵を受けてこの位の天候なら明日はどうしても登 朝は曇つてゐた。どこからともなく雪片ががちらくしと舞つて來た。 出發を見合はせ一日休養とした 松田に百瀬を加へた。

時間、 霧の中 間 を切り開いたが、その二人を確保してゐた百瀨も杉本も上から落ちて來る雪をかぶつて手足の感覺を失ふ程の時 い雪が降つて來たが大したこともないのでそのまゝ登つて行つた。松田は下半部の雪を落し、 ゐるところは春より餘程 春とは大分異つてゐた。下半部は一枚岩の上に二三寸の粉雪が積つて一寸厄介に見えたが上の方の雪庇をなして い廣いところを過ぎて春に退却した悪い一枚岩の下に來たのは九時三十分であつた。下から見ても雪の附き方は を費した。 日。 十五時春 から姿を現はしたかと思ふと亦白い細い雪の彼方に沒してしまつた。 約三時 の第三キャンプの豫定地であるピラミッド下の鞍部に到着した。 H の朝と同じやうな曇り方であつた。 間かい ムつてこの壁を登つた時 小さく、 なんとか叩き落して通過出來さうであつた。其處を登り出さうとする頃 には氣 七時頃には薄日も射した。 の附かぬ中に四 人は既に吹雪の世界にゐた。 默々として登り續けた。 八時にテ ントを出る。 川原は上 その後約二 東 不稜は時 始め の雪庇 から細 0

(285)

原と松田が先に立つてこの壁を中程迄降つた時にはまつたく暗くなつてしまつた。 相當骨を折つ た 枚岩の急斜 面には十六時三十分に着い たが多の日は短かく既に黯黙たる夕闇が漂 胸に付けたライトは雪を覆つ つてゐ JII

地法と明神岳東稜

つと共に吹雪は盆々猛烈となつた。

ピラミッドは登ることを斷念して、

そのま」引返した。

登る

のに

てその 過ぎなかつた。 くことにした。登りのラッセル等は跡方なく、 N 叫び合 【を降ると、今度は例の刄のやうな稜線がある、雪庇になつてゐる下又白側を避けて成る可く宮川谷の斜 効力は つて連絡をとる、 極 ビイヴァ 度に弱い められ、 1 クの その聲さへも唸りをあげて體を襲つて來る吹雪に消され勝ちである。 唯四人の居どころを示すにすぎない。 用意があるので明ける迄待つた方がよいだらうと語り合つて、 暗中摸索、 三時間程下降路を求めたが、 網を結び合つてゐる二人の 僅かに數十米を下つたに 終に岩蔭に休み乾 强温 新雪を積 る ロか 面 h ら五 を卷 だ斜

我 b 効果は前と變らなかつた。それでも下からは パンを食ひ出すと下の方で聲が聞えた。キャンプから心配して出て來た鈴木と藍田であつた。 る雪の上を一つく〜足場を刻んだ。互に言葉の通じる距離になつたのはそれから敷時間の後であつた。惡場を下 ることが出來た。然し、ライトの方向に直進することも出來す、 々は荒れ 腰迄沒する深い雪の中を歩いてテントに歸つたのは年の明けた元日の二時であつた。祝すべき新しい世紀を 狂 ふ天候の下に迎へたのである。 テ 歩々々と次第にこちらに近付いて來るので心强く感じられ ントにたどり着いた時の感想を杉本は次の如く記してゐる。 兩方から照し合つても猛り狂 ライトも仄 ふ雪に邪魔 され かに見 再び積

つてアークチックテントにころがり込んだ時は、たつた一坪にも足りないテント、 實に吹雪の中で十七時間アルバイトしたわけである。 が 何なる殿堂よりも有難く思はれ た。 心盡しの茶を飲み、 その上外界とは布一枚で隔て 藍田にアイゼンをほどいて貰

昭 和十五 月

ント

如

- 1 1 スキ 中 に吹雪は止んでしまつた。 ンプにゐた者共とを交代させたので前進キャンプとの連絡はとれなかつたが登攀隊は雪の中を登つた 眼で見た始めての紀元二千六百年は快晴であつた。 昨 日は岳川 0 治い 連

カン あと杉本や百瀬は大したことはないと云つて、ベースキャンプに下つて行つた。 り手首のところの水疱を見せた、それから昨日の登攀に付いて手短かに語り、第三キャンプは大丈夫張れるし、 走るやうに下つて來た。 ぎ米・味噌・石油等を補給するために登る。スキーを輪カンに代へ澤を曲らうとする頃、上の方から二人の者が も知れないと云ふ豫感がした。登つたとしても午後からのあの吹雪ではすぐ引き返したらうとも思つた。午過 近付くと川原と松田であつた。どうしたと聞くと少し凍傷にやられたと云つて手袋をと

昨 日の模様を語り、二人の凍傷が少し心配だから下した、このテントも明日出來たら下したいと言つた。 鞍部に着くと、雪は深く積つてテントは低く穴倉のやうに見えた。殘つた四人は代る~~入口から顔を出して 佐野と

平井を二人の代りに泊つて貰つた。偵察も一段落濟めば春のために食料や燃料を節約した方がよい。 に五千尺に下るやうに記して我々は瓢簞池の前進キャンプの撤収を手傳ひに行つた。 つてゐる、朝早く岳川の隊に連絡に行つたが、この時とばかり全員出掛けてゐてテントには誰もゐない。 日。 續くだらうと思つた吹雪は姿を見せず、今日はどこにも雲が見えない。冷く輝く峰々には雪の 噴 明三日

12 なつた。然しあの登攀隊の行動は春には大きな自信となつて現はれると思ふ。 氣味の悪い程晴天が續く。今になつてから考へてみれば 一番天候の悪い時を擇んで登攀したと同じ結果

四 春 0 行 動

ント 冬の偵察の結果、 から 極地法と明神岳東稜 張れることがわかつたので、 第三キャンプ地として豫定してゐたピラミッドの下の鞍部も、 (早大) この春こそは年來の計劃を實行出來さうだといふ希望が部全體に漲り渡つ 餘程狀態の悪くならない限

P39

極

特別 た。 K 然し瘤尾根 雪 0 少なか の計劃の失敗の第 つた冬の偵察のみで安んじる前に、もう一度反省してみる必要があつた。 一歩が秋に行つた偵 察の判斷の誤りにあるとすれば、 この 秋の新雪で冬の狀況 明 神 の計 割に かても

出 第四キャ 斷するより仕方がない、 を判斷することは不可能であり、 たのは、この懸念を打消す具體案であつた。確かにこの案は明神の計劃の可能性を増す上に必要であつたが、 ンプを援助し、 最悪の場合の逃げ場として明神稜線の かう考へてみると上方のキャンプに對しては多少の懸念があつた。 冬の積雪を見て春を豫想することも出來ない、要するにその時々にその場を判 「鷲の巢」にテントを張つてはどうかと云ふ案が 檢討會に於て第三・

それならば明 こムに隊員の 穂と鷲の巢のキャンプを利用して行ける範圍の行動をとつたらよからうといふことになつてこの案が成立 神 中の數名を泊らせてをいて登攀隊の登るのを唯見つめてゐるだけではあまりに迂濶な役目で 0 二峰 の附近には相當悪いところもあるから前穂のテントは鷲の巢から持つて行つて、 2 ある。 の接

ころであつた。これ以外は冬前に計劃したのと變りは無かつた。

た。この邊が多くの部員を動かし、併も出來るだけ全員に同じやうな經驗を與へ、訓練するのにむづかしいと

(288)

L

今迄の經驗、冬の活躍狀況 日 頃 0 1 V 1 = ングの狀態、それに各隊の力の平均等を考慮に入れ春の隊員は次

如く決定された。

0

登攀隊 第一 宮川重男、百瀬

孝

和

男

山崎

鵜飼養

山賀祭

接隊「對の巢」 吉阪隆正、笠原茂雄、磯邊

松本義信、川原 章、松田一郎、桂 成光 吉阪隆正、笠原茂雄、磯邊俊明、加計朋吉、大庭 明、

间

同 ~ ス 關根吉郎(リーダー)、 藍田 務 青木正雄、 關戶順吉

眞 THE 青柳英雄

寫

以上

二十二名

文

ず行動するのだと云ふ强い 數へた。スクラムを組んで敵をどこ迄も押し切らなければならぬ氣合から、 三月の試験を控えてゐた」め、 1 ーニングが濟むと戸塚のグラウンドは眞暗になつてゐた、其處にぐつたりと坐つて指折り山に入る日を 團體精神を養ふには隨分効果があつたかと思ふ。 1 V 1 = ングの方は歸ると早々始め二月の上旬迄毎日腰も立たなくなる程 この春こそは明神の尾根に一糸亂れ 鍛

H

三月

九日

記

雲間 濡れて澁々出發した。 に勢力を増したりして何時になつたら止むのか見當もつかなかつた。今日中に五千尺迄行く豫定だつたので雨に 雪は少なかつたが、バスは奈川渡で停つた。電車に乗つてから降り出した雨は、小降りになつたかと思ふと急 の瀧からスキーを着けて先を急いだが、 バ スに乗る筈のところを歩くと長い、幸ひ澤渡の附近から晴れ始め暖 坂卷溫泉から雪が降り出し次第に量を増し風を加へて荒涼じい形勢 かい春の日となつた。

三月十日

K

なつて來たので中の湯に一泊した。

新雪がぎらく~と輝いて目映しい程の快晴であつた。五千尺で先發の三名と落合ひ、 荷の無事に上つてゐるの

れてゐて水は流れてゐなかつた。 てをくことが今後の行動に餘裕を與へることにもなるので、登攀除六名はベースキャンプの接除と共にベースキ を見て先づ安心した。昨日は思ひがけない吹雪のために中の湯に一泊したし、この晴れの間を利用して先を進め マンプの建設に出掛けた。 昨日の雪が何寸か上に積つてゐたが概して雪は少なかつた、然し川原は堅く雪に鎖さ

三月十一日

少しく偵察したが先日の新雪もよく締つてゐて雪崩の危險は無いと見て差支へないと思はれた。夕方から大部氣 キャンプ迄ベースキャンプの隊に米を運んで吳れと書置きしてあつた。ベースキャンプに歸つてから澤の上方を 第三キャンプの装備品を運ぶことにした。鷲の巢の隊も一度には仲々荷が揚らないらしく、成るべく早く岳川の 今日もよく晴れてゐるので、上の方に行つてみたいとは誰しも思ふところであつたが、五千尺を往復して第四

(291)

三月十二日

温が下つた。

といふ様な苦しみは少しも無かつた。正面の澤から出たものと思はれるデブリが右側の山裾に沿うて無慘な跡を 有つて第二キャンプの建設に向つた。例の岩からはアイゼンを用ひたが雪は適當にクラストしてゐて腰迄沒する 残してゐる。右に曲つて鞍部に出る最後の斜面も雪は落着いてゐた。 快晴。六名の登攀隊は寫眞班の青柳を加ヘテント・マット・石油・炊事器具及び第二キャンプの食料三日分を

らばきつと池のあるところと思はれる窪地に張つた。冬と同様廣い鞍部であつてどちらの溪へも落ちるやうな心 瓢簞池と呼ばれるこの鞍部には六人用アークチックテントと四人用輕量ウィンパーテント各々一 極地法と明神岳東稜 張づ」を夏な

と落合ひ、明日からの計劃と鷲の巢キャンプとの連絡の方法等に就いて最後の打合せをした。 張り終ると登攀隊も一旦ベースキャンプに引き返し、再び五千尺から岳川 へ荷を運んだべー ス 牛 * ンプの援隊

愈々始まる登攀を前にして選ばれた登攀隊員を簡單に紹介してをきたい。

は西穂

島、二宮に、若いがそれだけに元氣一杯學院を代表してゐる佐野、山崎であつて、彼等四名は如何なる惡場に遭 を有してゐる。それであるからこの二人で組む一隊は登攀の可能性の點からも確實さの點からも全隊員を安心さ 立つて來た部員であり、それに對する宮川は朝鮮遠征の留守隊として穗高に入つて以來每期の合宿に豐富な經驗 つても、 せ得るものであつた。それを支持する第二登攀隊は古く池谷尾根の計劃、 の計劃に於て旣にその姿を現はし、冬春の瘤尾根の登攀、新高山の東山北稜、この冬の偵察と長く部の第 今迄の經驗と力とを以つて無事に重い荷を運び得ると思へた。 川原、松田といふ三名が學校の都合で遅れた」め第一登攀隊は大きな打撃を蒙つたが残つた百瀬 朝鮮冠帽峰の遠征から活躍してゐる桑

(292)

幸ひな事に又晴れ上つた。登攀隊は登攀が終る迄はもう歸つて來ない筈なのでベースキャンプに名殘りを惜し

んで午前中は用意が出來てもごろくしてゐた。

カン スキャンプの隊は第四・第三キャンプの裝備食料を有つた。明神の上の方はまだよく晴れてゐて鋭い輪廓を柔ら い春の空に浮ばせ、 午後になつてからベースキャンプにゐる全員で第二キャンプに向つた。上に泊る七名は各自の個人裝備をベー 鷲の巢の岩峰の下には人影らしきものが見えた、が六百山の方面からは陽の當つてゐると

ころは褐色をし、蔭になつてゐるところは灰色のやうな重さうな雲が次第に押寄せて來てゐた。

三月十四日 第二キャン。

も朝此處へ來てからもう歸らない、四人用のウィンパーテントはもう壞されたかも知れない。今迄は前後左右 く動いた。張り綱は胸に應へるやうな悲しい唸りを放ち、圓く張つた支柱が反對に內側に曲つて來ることさへあ 風は何か硬いものに感ぜられた。テントは叩かれてばたくくと鳴つて震へ、中に溜つた煙草の煙がその度に細か をゆるがした。午後から夕方、暗くなる時分には盆々威力を加へ四方八方からテントを目がけてぶつかつて來る つた。それが元の 夜の中から雪となつた。その上風が加はり出して文字通りの吹雪と化し、風に强い筈のアークチックテント 通りに廣がると急に壓力が變るためか耳ががーんと鳴つた。隣のテントに寢る筈の學院

ら吹いてゐた風は今度は下から吹いてテントを一度に覆さんばかりの勢を示して來た。一本々々支柱を持つてゐ

一寸氣をゆるした時にその中の一本は折られてしまつた。

ないと忽ちの中

にテントは破壞されてしまひさうである。

各自背中のところにあるのを確かりをさへてゐたが、

(293)

三月十五日。同じく第二キャンプ

夫さうな木を切つて來て支柱としたが彼等二人は未だ不安なのですぐ傍に雪洞を掘つて其處で生活することにし の修繕等をして時を過し心を休めた。隣に張つたウィンパーテントは案の定支柱が全部折れてしまつた。太い丈 三時頃迄起きてゐたが風が弱まり出したのを見て七人ごろりと横になつた。 まだ風は相當の勢で吹いてゐた。 の上の方の雲の薄い部分が割れて中から蒼い空が恰も蒼い太陽でもあるかのやうな暖かさを有 空には灰色の雪が千切れ (に一定の方向に忙しさうに飛んで行つた。午 眼を醒して十時頃から折れ

地法と明神岳東稜

つて現はれて來た。 夜になると星も出て來た。 明日は第三キャ ンプを建設に出掛ける豫定でその用意をし、

三月十六日 ベースキャンプ

今日邊りから亦晴れるのではないかと思つてゐたが外に出てみると雪が激しく降つてゐた。今日の雪は非常

戸、藍田は今日で第二キャンプ用の食料が無くなるのでその補給に第二キャンプへ行つた。林の中は風の吹く度 堅く、その上速い風に乗つて來るので顔にぶつかると痛く感じた。關根、青木は五千尺に石油と米をとりに、 關

いたやうな明神の岩壁に執拗にたゝきつけてゐた。

にごうくと鳴り渡つた。

五千尺に行くと鷲の巢の笠原、 吉阪、磯部、 山賀、 鵜飼の五名が上に加計と大庭を残して、米が無くなつたの

林から出ると上の澤も下の川原も身體迄飛ばしさうな風が、白い細い雪片を薄墨

で描

(294)

でそれを取りに下つて來てゐた。 その中に遅れた杉本、 川原、 松田、 桂の四名が來たので、その四名にはすぐ岳

トが足らないので不自由するが、このテントが前穂の上に張られて第四キャンプとなる豫定なのである。 川に張つてある四人用のテントに行つて貰ひ、出來ればそのテントを明日鷲の巢迄揚げて貰ふことにした。

のでベースキャンプに一泊し明日登ることにした。七人でベースキャンプに歸ると關戶、藍田は第二キャンプ 0 五名は吹雪のキャンプで相當傷め付けられてゐるし、その上今からすぐ歸つても明るい中 には着けな

との連絡を終つて歸つて來てゐた。

ノ天幕ノコトモ心配デアル。 日。 雪ノタメニ滯在。 味噌· 若シ明 福神漬・鹽辛・フランスパン・薬品適量・以上タノム。』との簡單な手紙を渡 日天氣ョケ V バ 建設 ニ向フ豫定。 食料 ノツック 限リコ

明神岳主拳(右端) 鷲の巢附近より

早大山岳部

明神尾根「鷲の巣」の天幕

早大山岳部

し乍ら若い二人は第二キェンプは雪と强い風で相當の被害のあつたことや、ベースキェンプよりの大部分食料が

良い事等を語つた。

五人の鷲の巢の隊員が來たのでベースキャンプは賑かである。 彼等の口から聞いた今迄の鷲の巢の行動をこっ

で簡單に記してをく。

『三月十日

隊員笠原、 吉阪、磯邊、 加計、 鵜飼、 大庭、 山賀以上七名、十五時B·C 隊及び登攀隊と別れて岳川に四人用

三月十一日

九時。殘部

の食料を持つて、

テントを鷲の巢に張るために五千尺出發。

ウィンパーテントを張りに行く。 器具と食料の一部を運ぶ。十八時三十分。 五千尺歸着。

部にルックサックをしばり付け引返す。荷を餘り慾張つて持つた爲時間が足りなくなつた。 の一部を持ち澤を登る。尾根はガスが卷いてゐたが下は晴天、時々曇る程度の天候。

三月十二日

七時四十分 五千尺發

八時二十分 岳川のテント

十時三十分 瀧の上

荷を持つて出發。

半分程

の荷。

十一時

十四時 鷲の巣着

極

地法と明神岳東稜(早大)

(295)

十時岳川のテント十二時、器具と食料

十七時。

瀧を越し、その上

十五時 吉阪、 鵜飼はテントの補强工作をし、 あと五名再び瀧の上迄荷を取りに下る。

十七時十五分 全員鷲の巣に入り、 生活が始まる。

三月十三日

吉阪、 加計、 鵜飼、 大庭は殘部の食料を取りに岳川のテント迄下る。

磯部、 山賀は天氣を幸ひ、

笠原、 綱は一峰側と中間のテラスの所に夫々一本づゝピトンを打ち、後は岩にくゝりつけ四十米で快適な固定綱とな 固定綱を取付けに明神の二峰迄行く。

る。 邪魔な石は全部拂ひのけた。

三月十四 日 吹雪 0 爲休養

三月十五日 吹雪の爲休養

三月十六日 吹雪

上つて來る豫定であつたが吹雪は益々激しくなつたのでテントに歸るのを見合せベースキャンプに泊りに行く。』 食料の中、 米が不足して來たので、加計と大庭をテント番に賴み、五名は米を取りに五千尺に下る。 この 日再び

細かい計劃には凡ゆる點で惠まれてゐたし、大庭、山賀、 これも遅くても二三日の中には上ると思ふ。 以上のやうにまだ第四キャンプに用ふる四人用テントは岳川にあつて、今日來た四名が泊つてゐるのであるが、 この鷲の巢の隊は吉阪、 鵜飼等の體力ある部員のゐることも、 磯邊、 笠原といつた器用な人々がゐるので この高處雪中露

營確保には大きく與つてゐた。

ベースキ 面 霧の世 ャンプから真直ぐに澤をつめて霧の中に歸つて行つた。 界であつたが霧を通してその上に碧い空のあることを窺ふことが出來た。 鷲の巢の五名は米を持

0

愈々登攀が始まるといふ時に第二キャンプと鷲の巢のキャンプを訪問した關根の日記をこゝに掲げる。

『三月十八日 晴、風は强

明神 の上 明日は必ず登るから安心して吳れと付け足した。テントの中央は例のやうに凹んでしまつてゐた。 安定であつた。それで一日無駄にして歸つて來たのだと言ふ。もう風も靜まつたし、明日も晴れるに決つてゐる、 ため厳しい寒さを感じた。細い稜線上では背中の大きな荷が風に振られ、それを確保するにも寒さのため甚だ不 ント が い。どうしたんだと理由を聞くと、 のに上の方にはラッセルの跡が見えない、これは變だとテントに近付いて中を覗くと佐野を除いた六人が丸い 眠むさうな眼をして起きてきて、 青木と二人で先日賴まれた品物をもつて第二キャンプへ連絡に行く。今日は登つてゐるのだらうと思つてゐた に車 の模様を心に描いてゐるためか、 具や食器が雑然と置いてあつた。今は風も止み、强い春の陽に照されてテントの中が暑いためか、 0 稜線 座になつて食事の最中であつた。私は出掛けてゐないのが不滿であつた。中に入るとむつとする程溫か に寫真班を連れて行くために私は此處で一泊すること」し、 山崎と二人で寢てゐたテントが眞中から裂けてしまつた時の模様 今朝は早く用意をして出發したのだと言ふ。然し風が非常に强かつた。 シャツー枚になつてゐる隊員達は大部昻奮してゐるやうに思はれ 青木一人を歸した。 雪洞 で寝てゐた佐野 其處に汚い炊 を語 明 た。 つた。 日かか その 明 テ H 6

(297)

極

地法と明神岳東稜

(早大)

早く寝るためにすぐ夕食の仕度にかくつた。この冬から使つてある久能木式焜爐が真中で飛行機のやうな音をた てゝ鍋の雪を融してゐるのが賑かでいゝ。私一人增へたゝめ四人雪洞に行つた。

三月十九日 CⅡより鷲の巣

えて見える岩の峰も、下に廣がる絲の森林もまつたく靜かで、動いてゐるのは唯太陽と自分達であるやうな氣が ら出て長い影を雪の斜雪に寫し乍ら各々持つべき荷を靜かにつめてゐる。遠い空に浮んでゐる白い雲も、 夜は寒かつた。 **寢袋から顏を出すと炊事の湯氣が丸い天井に白く凍り付いてゐる。** 尾根を登る六人はテ 上に発

の胸 峰の鞍部に出た時、 私と青柳は鷲の巢の連中がまだ出發しない中にと思つて、彼等がまだ細かい物を整理してゐる時に、 につかへるやうな澤を登り始めた。 下を見たが登つてゐる姿は見えなかつた。上手に取付けてある固定綱を傳つて第 岩角を曲るともう六人の姿は見えなかつた。明神の稜線の第 一峰と第二 の上

向つて左

(298)

出た。 蔭になつてゐて動いてゐる人の姿は見出せなかつた。その代り知らぬ間に寄せて來た灰色の雲が間もなく我々を 此 處からは尾根がよく見渡せるが、第二キャンプのすぐ上の急な段で悪戰苦鬪してゐるのであらう、 丁度

包まうとしてゐるのを知つた。

邊と今後の打合せをした。ころのテントも中央は凹んでしまつてゐるし、寝袋等もすつかり濕つてゐるが、何よ てゐなかつた。 鷲の巢では出掛ける用意をしてゐるところであつた。 笠原は鵜飼、 山賀を連れて第四キャンプの偵察に暫くしてから出發した。残つて吳れた吉阪、磯 杉本、 川原、 松田、 桂はテントをとりに岳川 に下つてゐ

も心配の種となるのは既に燃料の三分の二を使つてしまつたことであつた。

う。それより明神澤の頭によいところがあると言つた。外はもう一面霧の世界となつた。風がバター~とテント 時間程して笠原達が前穗から歸つて來た。前穗の上はシャベルの齒が立たない位堅いから張るのは無理だら

を叩く度に小さい通風の窓から白い霧が吸ひ込まれるやうに入つて來た。

が下つてゐた。」 問題の第三キャンプは出來上つたかどうか、遂に見極めることが出來なかつた。ベースキャンプには加計と大庭 ンプに下ることにした。テントの近くから梓川の方を見下してみたが、明神の東稜は深い霧の中にかくれてゐて、 方から見ても是非さうあつて欲しいと思つた。今後青柳を殘して、私は鵜飼、山賀と二人で岳川からベースキャ 今日は岳川からテントを揚げるであらうから、著し明日天氣がよければ持つて行ける筈である。登攀隊の進み

この 日 の登攀隊の行動は稜線上では見定められなかつたが、豫定通り第三キャンプを建設し、 其處に宮川と百

(299)

瀨が泊つたのである。佐野の日記の一部を拔萃する。

た一枚岩は雪に覆はれてゐた爲比較的樂に上部の垂直な岩場の下端に達した。 食料・石油等を持つ。七時二人づゝ綱を結び、アイゼンを着けて出發する。 なく登る、此處で岩場を避ける爲左へ雪の急斜面をトラバースしたが行き詰り、 一登攀隊の宮川、 萬瀬は自分の装備を持ち、第二登攀隊は之をサポートして第三・第四キャンプのテント・ 細い急な雪稜を、 叉尾根に戻つた。 一枚岩の下まで難 此の冬苦心し

足元から流れ落ち、 桑島と佐野の隊が行く、 非常に不安定なので、下にゐた二宮が佐野の綱の端を自分に結び付けて佐野を確保した。重 桑島が登り佐野が確保する。 この附近 一帶雪が極く細か V 粒狀となつて

極地法と明神岳東稜

地法と明神岳東稜

「早大」

荷を背負つた桑島は、 ならなかつた。手で足場を造り乍らゆつくり登つて行く佐野の顔が兩足の間から見えたと、後に下で確保 二番にゐた佐野に登るやうに合圖した。岳樺から先は七○度位ある非常に急な雪稜が一○○米以上も續いてゐる。 然し危くて足踏みも出來ない。その中トップは三〇米位進んで、一本の確かりした岳樺を見出し、そこで確保し 眞直ぐ伸びた卷雲がひろがつてゐる。ぢつと止まつて確保してゐた爲、手足の指は次第々々に感覺を失つて行く、 ら何とも仕様がない。二三十分すると變な寒い風が吹き出した。ふと氣が付くと空には一面刷毛ではいたやうな の頭や首に容赦なく降りそゝぐが、下又白谷と宮川谷へ眞直に落ち込んでゐる身動き一つ出來ぬ處にゐるのだ た人達が語つた。その急なところを登り切つた頃我々は一面霧に包まれてしまつた。其處から上の鞍部の手前の 今度は佐野がトップで登り始める、雪はやはり細かい粒狀で不安定極りなくピッケルは頸迄突きさしても頼りに 佐野の頭上敷米の處で苦心して足場を刻んでゐる、その落す雪片は下で確保してゐる佐

三月二十日 鷲の巢

着いた。

狭い雪の鞍部の又白側をけづり、

踏み固めてテ

ント地を造つた。』

割に容易な雪と岩の細い尾根が續いてゐる。

十五時出發以來八時間で漸く五〇〇米を登り上の鞍部

(300)

10 者も確實に通過することが出來た。昨日偵察してをいた鞍部の明神寄りの岩蔭に四人用ウィンパーテントを張 此處には磯部と桂が泊り明日奥穂を往復することにした。ベースキャンプから交代のため大庭、青木、關戶 青柳の八名で明 ひな事 に崩れるかと見えた天候も暗い中に回復したので今日は全員笠原、 神澤の鞍部に第四キャンプを設けに行つた。 第二峰の下りも固定綱を設けた」め荷を有つた 吉阪、 磯邊、 川原、 松田、

藍田が登つて來たので杉本、川原、松田は下つた。

第三キャンプに引返した。然し鷲の巢との連絡はとれて第四キャンプが出來たことを知つた。 この日、 登攀隊の方は二人共寢袋・食料・石油等を有つてピラミッドを登りかけたが登路を誤り雪の狀態惡く

三月二十一日 第四キャンプ

三時間で往復出來た。 神岳を登り笠原、大庭、青木、關戸等に迎へられて間もなく到着した。 こ」に一泊した磯部、 第四キャンプに歸つて來ると昨日は引返した百瀬、 桂は午前中に適當にクラストした雪を踏んで奥穂を往復した。雪の狀態が良かつた」め 宮川の登攀隊は今日は左側の岩稜から

島と共に第四キャ 方吉阪、青柳、 ンプを訪れた」め珍らしくも十四名のものが一度に會合すること」なつた。 藍田は第三キャンプに登つて來た二宮、桑島、佐野、山崎等と連絡を取り午頃から二宮、桑

百瀨、宮川は磯邊、桂と交代した吉阪、關戶と共に第四キャンプに泊りあとは雪の中を第三キャンプ鷲の巢へ歸 つて行つた。 風の岩を切る音が小さなテ

午後になつてから雲を増して來た空は十五時頃から雪を降らし、

三月二十二日 第四キャンプ

てゐるやうであつた。午後吉阪、關戶は鷲の巢へ歸り代つて桂、藍田が食料を持つて來た。 のは幸ひである。テントを出ると一面銀世界と云ふのであらうか、見えない筈の風までが今日は白銀で装はれ 雪の量は意外に多くテントの半分は埋められてゐた。岩蔭にあるので悲しい音のみ聞えても風が直接に當らな

三月二十三日 ベースキャンプ

極地法と明神岳東稜

(早大)

(301)

ントを震はせた。

極地法と明神岳東稜 (早大)

動を終 は二十一日に五千尺に行き電話で質ねて貰つたが要領を得なかつた。それがやうやく今日手に入つた。學校 日 へ無事に歸つて來ることのみを願つた。ところが東京の本部より島々に電報の來てゐることを知り、 に第 四十十 ンプが設けられたことを知つたベースキャンプでは石油・食料の續く限り各自定められた行 關根 0 用

料もあと四、五日よりないのである。それならば全員で早く歸つた方がよいと云ふ關根の決心に基いて明朝早く 事ですぐ歸京させねばならぬ部員のあることを告げて來たのであつた。 はやうやく止みさうである。 JII 原、 大體計劃も豫定通り進んだ今日に至つて二三の者のみを先に歸すのは忍びないことであつた。その上食料も燃 加計に鷲の巢に行つて貰つて明後日迄に全キャンプを五千尺に引上げる旨を傳へて貰ふととにした。 吹雪

三月二十四日 ベースキャ

も明 キャンプの人々は今日こそはと動き出してゐるに違ひない。 1-等を下の川原に干しに行つた。其處で松高の遭難を知つた。 暗い中に川原と加計は登つて行つた。 砲の如くに聞いた。 明神の連峰を見上げれば積つた雪を澄んだ空に吹上げてゐる、何事も知らずにゐる前進 夜が明けると快晴無風。ベースキャンプも歸り支度である。 絶え間なく向ふの溪にボーンへとよく雪崩を恰 濡れ た

登攀隊の日 記

H

0 吹雪でも奥穂へ行かうと六時に起きて見たが幸にもよい天氣で大急ぎで支度する。尾根の端に出てC 夜遅く迄雪が降つてゐたので今日の晴は一寸意外であつたが、燃料も食料も缺乏して來たので今日は少し位

· IIIに撃

Ⅲへの下りは積つた雪が今日の晴ですつかり締りステップを切ればザイルを結ぶことなく樂に下れた。C·Ⅲ着、 十六時半。 雪で全部倒壞したので今日引拂つたので登攀隊はB·C 迄下る樣」とのこと。登りに苦心したピラミッドからC・ 時半C·IVを出發。ピラミッドの上で鷲の巢から來た磯邊、加計がB·Cからの傳言を傳へた。「C·IIは先日の吹 んで引返す。 これもリッヂ通しに行く。 穂は大部 をかけて連絡をとり九時出發。桂は鷲の巢からB·Cへ下る。宮川、百瀬、藍田の三名、ラッセルを交代し乍ら て十七時ルンゼへ下る。スキーデポからはスキーをかついでB·C隊が付けたステップをたどつて薄暗くなつた えて無くなつて行く。C·IV着は十五時。C·IVはC·IIIから上つて來た第二隊の手で旣にたゝまれてゐた。 ヂ通 近い しに登る。 陽はかげつて氣溫はぐつと下り凍り付いたテントを疊むのは樂な仕事ではなかつた。大急ぎで片付け 岳川側はガスが深く何も見えす唐澤側は綺麗に晴れて、岳川から吹き上げて來る霧はこの稜線で消 がラッセ 新雪が五〇糎ばかり積つて歩き難いこと夥しい。普通ならば左をトラバースし乍ら上れば前 ルの方を幾分でも省く為リッヂ通しをとる。 ラッセルを交代して到々休まずに頂上に達す。立教の金子君等三名に會ふ。三十分休 約一時間 で前穗。前穂から奥穗迄約 十 五

(303)

鷲の巣

森林帶を下り十八時B・C着。』

隊と相談し、 キャンプ撤收の時期を傳へた。磯邊は加計と直ちに第四キャンプに連絡をとりに行き、丁度登つて來た第二登攀 笠原は大庭、 第四キ 青木、 關戶と明神尾根を下り最南峰迄行つた。午後川原、加計がベースキャンプから登つて來て ンプは彼等が直接ベースキャンプに下すことにした。

三月二十五日

地法と明神岳東稜 (早大)

.

吾

ら暖かい陽の光を小さな體いつばいに吸ひ込んでゐるやうに見えた。五千尺のストーヴの周りに濡れた物を干し 會合である。多くの新しいものを經驗した隊員達の話は何時になつても盡きさうもなかつた。(完) て待つてゐると鷲の巢の連中が笠原、磯邊を先頭に重い荷に體をふらつかせ乍ら歸つて來た。久し振りの全員の を呈してゐても上高地は春であつた。川原に積つた雪も目に見えて融け、岸の柳の紅い芽が長かつた冬の眠りか B·C隊で第四キャンプからベースキャンプ迄の荷を五千尺に運んだ。 山の上では冬そのま」の景觀

(附記 雪中露脅始めてからの裝備・食料等に就いては、 第二次冠帽峰の記錄を報告して後に、こゝに報告する豫定であり

ます。

內 古 0 調 查 旅行 \subseteq

宮

崎

武

夫

鈴

木

信

學術調査隊について

八月十六日 晴 京都發、 神戶 出 帆

携行する地圖や銃を持つて午前八時七分發の省線電車に乗車、 備のため あ D 10 どしい日を送つてゐたが今日はいよく一出發の日だ。

準

國外帶出に關する手續をする。

吉林丸は正午靜かに出帆、天氣は清朗で波も靜か、

港外に出て船が走りだすと凉しい風が吹いて來て洵に爽かで心地がよい。

浴衣に着かヘサロンで寛ぎつゝ蒙古の知識を互に交換しつゝ、雜談し、

絕好の航海日和だが陽はぢり~~と照りつけて隨分暑い、

神戸ではまづ税關で寫眞機、

V ル 1

ンズその他

加藤と淺井辰は學校の

4

に立ちよ

けなくともそんなに暑くなく快的な睡眠をとることが出來た。

な初め、

しよげ出した。どうも食當りらしい。

夕食後も話題は蒙古のことでもちきつ

室内は別に煽風器をか

内蒙古の調査旅行 (宮崎、鈴木) てゐた。

加藤が夕食後間もなく嘔吐と下痢

H

八月十七日 晴 門司出帆

五時にもう目 が醒めた。門司に入港、碇泊時間を利用し、敷名は間の斡旋で關門海底トンネル工事を見學に

行つた。

食卓に顔を見せぬ者もあつた。 くなりへさきの方では盛にしぶきをあげだした。別に大した動搖ではないのだが、名にしおふ玄海灘だけあつて 正午門司出帆、 中食、 午睡、 入浴と型通りの船族が初まる。 海面には白い波頭が立つてゐる。 だんく 波が高

八月十八日 晴 航海

〇丸の甲板には多勢の勇士が立ち列んで盛んに或は手をふり、 さらな雲が空に残つてゐるが、波浪なく船の動搖全く止む、九時四十分頃御用船○○丸をすれ~~で追越す、○ 海 水の色は緑に變つてゐる。 朝鮮南端の多島海水域を走つてゐる。氣壓は七五四ミリを示してゐる。 或は手巾をふつてゐる。吉林丸でも早速愛國 一癖あり (306)

10 いての話に花が咲きサロンで、甲板で、キャビンで夜おそくまでつどいた。夕方ごろからかなり凉しくなつてき やがて船は黄海に入つた。水の色は大分線になつて來たが、黄海といふほどではない。支那大陸の氣候型につ

曲を擴聲器で放送してこれに和し、皇軍の武運長久を祈りつゝ交歡する。

八月十九日 晴 大連着 天津へ向ふ

ため逸ち早くとび込んで來た苦力共のニ 風は流 石 に肌寒い位だ、 九時大連着、 7 蒼天白雲下に半褐半綠のゆるやかに起伏する丘陵が目を惹く、 ニクの臭味に大陸の香をかぎ、 曳船の煙筒に、 倉庫に、 タラッ プに、 荷役の

料、 た。 事を依頼して後髪をひかるゝ思ひをしつゝも辭去した。この時我々の氣持は何とも言へぬ重苦しいものであつ では淺井はベッドの上に坐りこんで顔をしかめこんでゐる。 て今西、 リアでロシア式の中食をとつてゐると、大連病院へ行つた淺井東から「虫様突起炎、手術を要す」と電話があり 廻すやうに手配をして易損品のみを携へ九時半上陸、峯内氏に迎へられた。滿鐵資料課の關口氏を訪れ貴重な資 どちらを向いても目につく滿鐵のマークに今更らながらその底力の偉大なのを知つた。荷物を天津行の遼河丸に 同愕然とした。この度の旅行についての何か不吉な前兆ではないかとさへ氣をもませる。食事もそこ~~にし 冊子の 埠頭に來てみると荷物の所在が判然とせず、平吉、淺井辰等が右往左往してゐるところであつた。手わけし 加藤と宮崎は淺井東の見舞に大連病院 頒布をうけ、 大連圖書館では館長から支那、 へ、他は遼河丸へ荷物積込手配のため埠頭へと急いだ。 滿洲に關する貴重圖書について説明をうけた。 隨分痛たさうだ。荷物の打合せをし、外科醫長に萬 ヴィ 大連病院 カト

暑苦し 三等船室しかない遼河丸は流石にきたないし、 粗末な夕食を了へて甲板に出て見たが太陽はまだかなり上の方にあり、隨分北に來たものだと思つた。 大廣間の雑魚寢は心地よいものではない。雜居のためかかなり

て探し廻つたが土地不案内の上、言葉が通じないので齒がゆいこと一通りではない。大連ですらもう大分勝手が

(307)

違ふ。

船は遼東半島の突端を廻り出した。

八月二十日 曇後晴 天津上陸 北京着

合から打ち見たところでは白河

々口は全然判らない。

かなり澤

山の船が沖が

ムりをしてゐる。

白河

カジ

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

す濁 水のためか海水が間 もなく濃い黄褐色に變り、ところんしに航路の標識が見え出す。 九時すぎ白河に入つた。

暑い、 早く、 物は殊の外美味しかつた。夕食までの時間を利用して朝日新聞の支局を訪れたのち寫眞用フィルムを探し 0 n から うねとしてゐる、 河 出迎へをうけ荷物の通關も案外簡單に終り、 同入浴して蘇つた心地がした。大連を出てからは用心して冷たいものは口に入れてゐないので浴後の冷たい飲 る。 盛んに行き來して П 天津には一時半に着いた。舊ドイツ租界の一角で、桟橋は粗末ながらも便利に出來てゐる。 蟬がぢい 白河の兩岸は聞きしにまさる滯貨の小丘がずつとつどいてゐる、 近には赤褐色の水邊植物が密生してゐて淡緑色の草と綺麗なコントラストをなしてゐる。 ~鳴いてゐるのも尚更ら暑苦しく感する、しかし乾燥してゐるせいかあまりべたく~はしない。 河幅は狭いが船が小さいから悠々と遡航出來る。 ある。 流石にユ = オン・ ジャ フランス租界の齋藤氏邸に到つて休憩した。 " クがあちこちに飜つてをり、 英國旗をかゝげた艀や日の丸をつけたランチ 滿潮時であつたので、 その勢力の根強さもほど想像 日中はやはり 豫定よりもうんと 河 齋藤氏や間 筋は實にうね 相當に

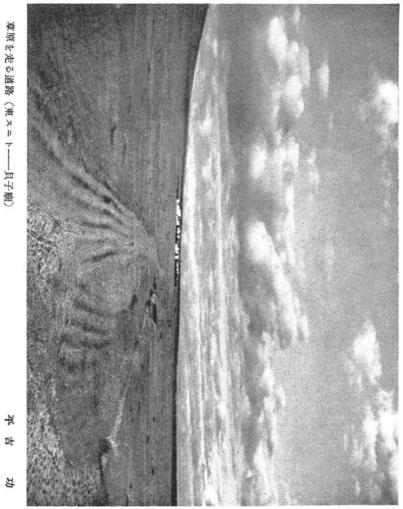
つた。 りでなく荷物も隨分輻輳してゐるらしく、 北京行きの汽車は水害のため延着を重ね、五十分も遅れて十時五十分着、 十二時半北京正陽門驛着、 宿舍六國飯店に入つた。 我々一行の大行李はとうたう積み切れないので翌日廻しにされてしま こ」では英語が通じるのでホッとした。 車内は滿員で混雑してゐる。

たがどうも都合よく手に入らなかつた。

(308)

八月二十一日 晴 北京發張家口へ

ねばならないが、 食を攝つてゐると伊藤愿氏來訪、 苦力を急がしても 暫くすると天津からの列車が到着し大行李がついたが、 ---向に埒が明かず、 久濶をのべ、間もなく打ち連れて正陽門驛に行く、 驛員に委しておいたのでは何時のことになるか判らない これ を短時間 こ」では堀龍 内に京綏線 K 積 み換



마



張北近傍――驢馬の放牧、遠景楊の植林

平 吉 功



百 窶 廟---楡の野生

平 吉 功

要領 車掌が苦情をいつて來たので支那語を知らない宮崎がこれが應待に當り、 畑中記者が來た。 な押問答をデスチュアー入りでやつてゐるうちに積 我々が自らどん~~運び出した。積み換へをしながらも、矢張り支那は支那だと獨りおかしくなつて來た。 畑中氏は張家口でいろく一の打ち合せをとげて一昨夜北京に歸つて來たので、 み換 へは了つてしまつた。 お互に言葉が通じないので極めて不 我々と同行する朝日 張家口 この模様が 聞社 0

却つて一 大分はつきりと判つてきた。 んで來る。 ふ萬里の長城が は有名な北 層壯大にしてゐた。 南口、 目前に展開する。丁度狭霧がたれ罩めてゐてあまり遠方までは見えなかつたが、この霧が長城を 居庸關と今次の事變によく出て來る處を通り、 京の城壁に沿 流石にいろく~の歴史を織り込んだ世界的の大土木工事のこと」て種々の感慨も浮 ふて走る。そここ」に咲き亂れてゐる雜草にはもう秋の色が漾ふて 山間の驛青龍橋でトンネルをぬけると名にしお ねる。 北 京

(309)

城が、 いこの つてもそんなに差異 この邊から景觀は全く一變し乾燥地特有のカラリッとした大氣となり、空まで晴れ上つて來た。今まで川畔に 五々生え茂つてゐた楊柳もやうやく少くなり、 政上 の南と北側とではその景觀があまりにも變つてゐる。これは我が國などでは到底想像が出來ない 本州の最も 0 奥地 區劃であつたのは勿論だが、 へと進むに從つて小さな峠でさへも、 から な 幅い中部地方にしても大陸に比べればその廣さは些小なものであり、 0 しは、 やはり周圍 また氣象的區劃でもあることが判る。 を取 りまい 草が波狀性丘陵をわづかに蔽ふてゐるにすぎない。 それを越える度毎に乾燥の度合が増加してゐる。 てゐる海洋の影響をうけるからであらう。 さほど高い山 太平洋側 稜とは思はれ L 萬里の カン 北側と ほどの L 2

0 な 長

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

くもあつた。 もう七時を大分過ぎてゐるのに陽はまだあか があつた。 所謂懷來盆地を走つて六時半張家口着、 荷物をそれんく分擔し、 故國を遠く距つた異郷塞外の地で現役と〇・B班とが折よく相會することが出來て感慨 大行李は宿屋の番頭さんに頼んで、學生班と共に宿舍日本旅館に入つた。 驛には學生班が出迎へてゐてくれたのは意外であつたゞけに くと照つてをり、 不馴れ のため些か奇妙な感がする。 入深いも

た 足のやうな顔をしてゐる。 るのでサ 今日奥地を出てきた現役班の勞を犒ふべく一同卓を圍んで壽き燒會を催し、 話の模様では内地で想像してゐたほどのこともなささうで、案外呆氣ないものであつたらしい。 リしてゐて非常に氣持ちがよい。 食事後中庭で星空を仰ぎつム雑談を交はし夜の更けるのも知らなかつた。 席上蒙古人地帯の模様 何れ も旅不

八月二十二日 曇 夕方俄雨 張家口滯在

が到着、 淺井東がゐない 出來るやうに準備しておか 除員一同打ち連れて町の南方にある○○○○を訪れ種々細々したことを聴いた。午後は荷物の整理にか 荷物を軒下に積み重ね茣蓙やズックを被せておいた。承徳からの飛行機がやつと飛び出し夕方木原先生 北大の佐藤教授、 ので路藥品 館脇博士も同道され偶然の邂逅を喜び合つた。 ねばならない、 が一切判らず非常に手間どる。 ドンョリとしてゐた天候は次第に惡化し、 木箱などは縄をほどき、 釘を拔いて容易に出 五時過ぎにはとうたう雨に 入れが しる、

も時と共に増加する一方で事變前僅かに數十名であつたのに、今日では三千名近くにもなつてゐるとのことであ 付いてをり、 食後町を散歩した。 流石は蒙疆聯合政府の所在地だけあつて、いろく一の日用品も移入販賣されてゐる。 大粒の夕立に見舞はれた、 店舗は九時ごろには早くも戸を閉めてしまふ。 町は至 在留邦人の數 つて落

る。 我々の宿舎になつてゐる日本旅館にしてもいろ~~と變つた料理を出して吳れる。鐵道があるとは云ふもの 國外のこの不便な奥地で、よくもこれだけの材料が揃へられたものだと感心させられる。

先生、平吉、淺井辰等が見送りに行つたが、この汽車は隨分混み合つてゐた。 生班のうち周布、 金子の二名か我々の班に同行することになり、他は十一時の夜汽車で大同へ行つた。 木原

八月二十三日 雨 張家口滯在

み込みを終へ、精密計測器の調整をし、通信、日記を整理して夜は久しぶりに早くねた。 ○との打ち合せや、買物を濟ませ、 から雨がしとく、降つてゐる、 天津に上陸して以來最初の雨天である。 雨天を幸ひ休養することにした。午後は自動車に大行李や器具類、 流石に浴衣一枚では肌寒い、〇〇〇 食糧 の積

八月二十四日 晴 張家口滯在

(311)

必要品を買ひ集めに走り廻つた。量的にはさほどでもないが、地理不案内であり、規格がうまく揃はないのでな う。しかし荷物が多い上に人敷も相當あるので窮屈だ。正午前に試運轉も一通り了り、停車場へ行つて不着荷物 かく「厄介である。 を探したが見當らない、結局四ケ紛失してしまつた。もう今となつては何とも致し方もないので諦めること」し、 十時ごろから試運轉をしてみる。貨物自動車ながら思つたほどの動揺でもないのは運轉が丁寧だか -成る可く避ける可きであらう。 この種遠征の如き場合に一部の物資を現地で調辨するといふことは -特別な物資は別とし らであら

まくない支那料理を喰べる氣がしなくなる。 中食は支那料理店で攝ることゝした。その安價なのに驚いた、こんなのを見ると内地の高くて、その割合にう

内蒙古の調査旅行

(宮崎、

八月二十五日 晴 張北

とは 立 のた 前 地 で一同記念の撮影をして出發した。 に向 め 面 0 粟畑である。 思つたほど塵がた」ないので案外快的なドライブが出來る。 つていよ 空はくつきりと晴れ上り、 出發する日が來た。一同コンディション頗るよく非常な張りきりぶりである。 奇異なまなざしで見送る町の人々をかきわけて、 我々の首途を祝福して つねるか の様であ 北門を出はづれ る。 先日 カン 5 日本旅館 0 るとそ 雨

帶で、 槪 とい は粗笨的なものであるから農家一戸當りの耕作面積が比較的廣い。然るに外長城線附近の土地は山 前 めて旺盛な北方進出ぶりを目のあたり見せつけられてまづ驚いた。 てゐるが、 斜 カン は張 なり ね薩确 面 左右 ふの IC. 灌漑 の畑 狹 い範園 心 かい П 0 傾斜 支那大陸 なり上の 0 地であつて、 0 地 便 現 ほ の作物はよく穰つてゐる。案外なことには畑が山のかなり上の方にまで拓かれてある。 地帶 在 0 h K 悪い 限られ、 0 0 0 耕作 北部 方まで農耕地が階段狀に開かれてゐるのがこの附近ではしば~~見うけられた。「田 2 地域のこと」て、 の開けぶりはどうであらう。 その上水の便が殊の外惡い 0 しかも謂はど新開地ともい に極く僅かの 光景は、 從つて水利の便などのある箇所 狭 畑地が散在してゐたにすぎず、 山國 我が國など」は反對に日射のよい南側を避けて、 K 澤 Щ ので、 これは一見隨分不可解のやうに考へられるが、 ふべき蒙疆地方でもすでに見られる。 0 人間 如何に乾燥地農耕に依るとはい が押し合つてゐる處に發生、 へは耕地が勢ひ密集して來たものと思はれ 十數年前までは黄羊も盛んに出沒 成育するものだと思はれ 却つて陽裏にあたる北 これ等漢 耕作 可 能地 地で、その上 この邊の農耕 人種農民の極 Ŧi. る。 十年 域 して 毎の月」 は實は ほど

この道路は遠く外蒙古の庫倫に通する所謂張庫街道であるが、道幅も廣く手入れも洵によく行き屆き、

斷續

(312)

軍は戰はずして明け渡してしまつたのであらう。 問 そんなに荒廢してゐない。 内には樹 はあまりに を胸裡に秘めてこの峠を踏み踰えて行つてゐる。 を率ひて往來し、 であらう。 てゐる。まだ眞新しいトーチカがすぐそこにあり、 としたところを登りきつたところが てはゐるが、 しかつた位であらう。 C 萬 ある。 全の北方に 木が茂つて一杜の立派な森が出來てゐていろ~~の鳥が啼いてゐた。 神 今度の事變にこれ等一 も立派すぎる。 ドロ柳 威臺のすぐ北側にあるト 一麼寺が 近年に至つては宣教師を初めとし、各國の夢多き探檢家、各種の蒙古調査隊がいろ~~な計圖 :の並木まであるといふ頗る豪勢なもので、 あり、 今次事變が勃發するや皇軍は潮の 何 川を渡り、 と」でしばらく休憩した。 れ何かの目當があつて歴代の省首席が補修工事を鋭意督勵したも 連のトーチカが、 神威臺、 1 左側に典型的な惡地 チ カなどは何等の損傷もうけてゐない所をみると、 即ち外長城線の 峠道 かつては大汗や幾多の將領、 稜線には處々に丹頂が見うけられるが、 勇敢な皇軍 の側に この寺はかなり古くから建立されてゐたも 如く押し寄せ、 形の廣大な丘陵地を見て、 ある古びた牛崩れ 角で、 北方の庫倫や、 の進撃をどれだけ阻止するに役立つ こ」が蒙古と北支那方面 北方からこの峠を越えて南下し、 最近まで僧侶が居たらしく建 張北、 英傑がそれん、夢を描きつ の望樓はこれ等を送迎するのに忙 かなり勾配の急なうね 多倫など」の交通路として 折 あれも多分トー 角 との分水嶺になつ 0 の防禦線 なのであらう。 のらし たかは頗 ン大軍 瞬く間 \$ 支那 る疑 チカ 境

(313)

この分水嶺を界として南北の景觀はかなり變つてゐる。南方は山勢急であるが、 内蒙古の調査旅行 北側は丘陵がゆるやか に起伏

10

張家口を攻略した。

爾來一年餘、今は我々の一行がと」を踰えて北上し奥地の調査に赴くのである。

外長城線の石壘や望樓の崩壞した瓦礫

0

かげには無心の野生罌粟の花

日本人と

感慨

なき能はずとい

ふ所である。

から L

花瓣を峠

0

秋風にひらく

させてゐたのは愛らしくもあり、

片の哀愁味

も漾はせて

る

出來るものらしい。 たときもその内側と外側との差異の大きさが我々の注意を惹かずにはおかなか 高 いものではないが、大陸で海岸線から遠ざかつてゐる所では小さな峠でもその內側と外側とでは顯著な差異が ゐる所謂波狀高原になつてゐるし、
 数日の後、徳化のすぐ北方で峠とはいへないやうなほんの小さな丘であつたが、 乾燥の度合も兩者の間にはかなりの差異がある。 つた程である。 峠といつてもそんなに これ

栗や黍が姿を消して小麥がぼつ~~出てきたので、農作物の分布を調べてゐる平吉は畑の中をあちこちと走り廻 だりしてゐる。 つていろく一の穗尖を蒐めるのに忙しい。車上では淺井辰が寒暖計をとり出したり、 と掘り採られ、綺麗なその色彩を失はないやうに乾燥して標本を作成しやうと苦心してゐる。 この様な分水嶺は植物の種類が比較的多いものか、大井博士は採集に餘念がない。 こんなときは何の技能もない私などは隊員一同の活躍ぶりを眺めてをればよいのであるから至極 バ 可憐な罌粟も幾株 17 × 7 この邊では畑 をのぞき込ん カン 14 根ご

否氣である。

で、中央の大通りなどはかなり賑つてゐる、物資もまづ一通りのものは整ふであらう。町のはづれでは丁度野外 つて巢を作つてゐるので、實に見すぼらしく見える。 0 クらしい。石ころ道ではあるが車は比較的快走して、間もなくかぎの手になつた二重の城門に辿りついた。 澤山に輸送するだけの貨物があるのかと思はれる位數多くのトラックにすれ違ふ。大部分蒙疆汽車公司のトラッ 町である。 威臺からは 丁度正午。 一走りで張北 城壁は大きさの割合には上出來なのであらう。 の城壁が望まれる。 張北、 農産物の地方的な集散地となつてゐる張北の 張家口間 には自動車の往來がなか 城壁の南側などは無數の雀か燕が穴を穿 〈 頻繁で、 こんなに 町 は繁華な方 張北

芝居をしてゐた。甲高いくせに哀調を多分に帶びたメロディーが流れ出てくる。日本人經營の食堂があるといふ

がけなくも故郷の香に接して一同大悦びであつた。 のでそこへ飯盒を持ちこんで食事をした。熱いお茶と香の高い漬物を出して吳れたのは有難かつた。

見えない。ゆられく、てたど北進するばかりである。俄雨は間もなく止んだ、いやこの邊の地面は乾いてゐて埃 間もなく雷鳴、閃光ついで沛然たる驟雨で、實に大粒の夕立である。 な駄菓子屋でども、 廣漠とした草原に羊群を逐ひ、或は馬車の旅を悠々とつゞけて來た人達は街道の追分に辿りついたときは、こん 當に砂塵吹き舞 屋が散在してゐる。 づいてゐる。やがて畑が少くなつて來た。間もなく二臺の寒村に着いた。こゝは耕作地のほど北端で、數軒の店 b は相變らず頗るひどいから我 軒あり、 度々あるらしい。 多倫街道を二臺まで行つてみることにし、二時ごろ出發、 四辻の角には駄菓子屋がある。 ふ中に一握の駄菓子を並べてゐるのである。我々のやうに自動車で來たものはとにかくとして、 一息入れて行くのが普通なのであらう。 幌をまき上げると、空は青空、地には丘も見えず谷もなく、遙か彼方の地平線まで麥畑が 土壌の關係か耕地をすて、他へ移り住んでしまつたのであらう。 々が俄雨地帶をつきぬけたのである。蒙古にはこのやうな極小區域 こ」を通る旅人は日に何人あるだらうか、この僅かな旅する人々を目 北門を出ると、急に空模様がおかしくなつてきた。 自動車の幌を卸してしまふので景色は何も 四辻を少しはいると宿屋が う内の 驟 雨 がかか な、

(315)

ながら小まめによく働く、 歸着した。 北進しても限りがないので今日はこゝから引き返すことにした。時に四時十分、同じ道を張北にか 宿舍は公會堂なので、 公會堂は木造の一 車から寢袋などを卸し、 階建だがなかく 車のまわりに群り集つてきた子供連に運ばせる。 立派である。 へり六

月二十六日 晴 張北滯左

(宮崎、鈴木)

K つい 日二臺か 今日はこの林へ行くことにした。各自それら一の調査をす」めながら、 5 り途で、 張北の北方一キ H ばかりの地點にこの邊にしては珍らしく大きな森林 南から、 西方から我 カミ あ × る 0 のが 眼 專

Vo いろの はこの林に辿りついて正午でろに一同揃つて林の中で中食をとつた。 この もあつた。 射手が交代してもやはり同様である。 虫も跳 林は面 四つもあり、 地味はよいらしく、附近の畑地の作物の成育ぶりも割合によい。 積四、 ねたり、 五町步、 水鳥さへ泳いでゐる。 飛んだりしてゐるし、下生えには雜草が生え茂り、 約三十年生のドロ柳の林で、 三時でろ町にか 銃もよく、 腕も確かな筈なのだが、どういふもの ~ b. 明かに殖林されたものである。 盟公署を訪問してこの附近の事情をいろくと 花は散つてもう種子が稔りかけて 林の南側には沼のやうな水溜りが 林には鳥もをり、 かい 一向に鳥は落ちな いろ

が されてあり、またこの邊の所謂藥草などもすでにかなり整理されてゐる。官吏といつても、もとくは政治工作 かりで、 敬服に堪 極く手狭なものであるが、そのうちの一室をさいてこの附近にある野生植物がすでに一通り採集 えなかつたのは日系官吏の質に眞摯な研究的態度であつた。 例へば役所とはいつてもほ h

尋

ねた。

日本軍が張家口に入城して丁度一年目である。治安狀態が比較的良好だといはれてゐる蒙疆地區とはい

戦後工作に多忙を極めてゐるときであるが、かゝる所謂兵馬倥偬の裡

K

ありな

(316)

いさ」かも安心は出來ない。

理したものである。 員であり、 性植 物や作物のいろく~について必しも造詣がふかいわけではなからうが、よくもこれだけ蒐集整 このときは丁度木原先生も一緒であつたので、お役人達はこれ幸ひと植物名を質問してをり、

その熱心さにはいたく心を打たれるものがあつた。

日大通りを通つたとき教會が目についた。牧師はスエーデン人で長らくこの地にあつて布教に從事し、

町民

が丁度二十人ばかりの蒙古兵にお説教中であつた。お説教が了るまで傍で待つてゐるつもりでお説教をつじける 門をはいると割合に便利よく出來てゐる。刺を通するとすぐに布敎室に案内された。宣敎師は不在で、その夫人 0 尊敬を集めてゐるといふことである。盟公署を出て木原先生と二人で訪れた。教會の外觀はさほどではないが

ステーラをとり出したり、 お説教の邪魔をしてどうも氣の毒ではあつたが、とはいふものゝこちらはこれで非常に寛ぎ、夫人はお手製のカ やうに勸めたが、蒙古人の方が氣がねをしてか一人去り、二人かへり十分ほどの間に皆歸つてしまつた。折角の コーヒーを勸めたり、話はだん~はづみだした。ことに木原先生が先年スエ ーーデン

存ぜぬの一點張りである。そしてこれにつけ加へて

に旅行したときの事や、

轉じて友人同志のやうになつた。ころはよしとこの邊でそろ~~質問の矢を向け出したが、何をきいても知らぬ

スエーデンの言葉について語り出したので、双方氣分も打ちとけて、布教中の闖

我々はたゞ布教に從事してゐるだけなので宗教以外のことは何も知らないし、知らうともしない」

といふのである。それでは

8

「ラマ教を如何お考へですか」

と切り込んでみると

「他宗教のことは一向知りません」

りではあるまい。 して、こんな筈はなく、 とあつさり逃げられてしまつた。十八年間もこの地にあつて、蒙古語の讃美歌まで作つてゐるこの宣教師夫妻に たゞ質問者が日本人であるといふので、時節柄うかつな言動や批判を差控えてゐるのであらう。 この邊のことは一通りや二通りのことは勿論心得てゐること」思ふが、

Ę

内蒙古の調査旅行

(宮崎、

この町に出入した探檢家の名をあげてもそんな人は一向知らぬといふし、スエン・ヘディンの名を出してさへ

(宮崎、

「あ」そんな人が居ましたね

といふやうな有様である。外人宣教師の目に映じた張北事情を聽かうと思つてやつて來たのだが、全然失敗であ つた。宣教師の立場にしてみれば日本人に對し、かゝる態度をとるのはこの場合已むを得ないことではあり、

れ以上の追究を諦めて蒙地布教の苦心談に話題を轉じ、しばし雑談をつざけて辭去した。かへる時に 「長年月に亙つて故國を離れ、こんな不便な所で、不自由な生活をしてゐて故里へ歸り度くなりませんか」

と何氣なく尋ねたのであるが

ス様と倶に居りますから歸國などゝいふことは考へたこともなく、どんな不自由な所へ行つても決して里心も起 「張北に來て三年目に宗務打合せの爲め一度歸國しましたが以來引つゞきこの地に居ります。我々は常にイエ

らないし、淋しくもありません」

丸いく、大きな眞赤な太陽が西に沈むと、夕闇が駈足でせまつてくる、黄昏時といふやうなものはない。 私の質問があまりにも日本人的な、島國的なものであつたことを恥しく思はずに居れなかつた。

內地

(318)

でも秋の陽は釣瓶落しなどゝいふがこの邊の夕方は全くその通りである。陽が落ちるとだん~~大氣は冷えだ し、眞夏だといふのにうすら寒くさへ感する。夜などカモシカの寢袋に這入つてゐて丁度である。

八月二十七日 晴 張北發德化

る。 張北の北門を出てすぐ左へ進む、道は概してよいのでスピードが出るのはよいが、朝風は冷々として身に沁み 間もなく土塀をめぐらした小部落につく、公會である。門は自動車がやつと通れる。どの地圖にも記入され

なか 流 記憶してゐる。 ものだと語つてゐた。 ないが、 活な人で、 てゐないがこの部落には實に立派な煉瓦建の教會がある。一八八七年かの建立にか」る白國系の教會であつたと これだけの設備を整備するだけの資材を蒐集、運搬することが出來たものだと驚かされた。先を急いでゐたので、 の牧師と倶によく語る時間がなかつたのは残念であつた。 石である。 7. この愛嬌も我々に對するものやら、 1 な モアーを交へつ」はきくしと應答し、 丁度牧師が居合せたが、 面 もある。 京綏線が開通してゐる現在でも相當困難であらうが交通が開けない當時にあつて、よくも この教會には十八挺の銃を備へてゐる。 獨佛語を共によくし、割合達筆に漢字も書く五十四、 我々が身につけてゐる裝具に對するものか、 そのうちにも愛嬌をふりまくのを決して忘れてゐない これは義和團事件の際急ぎ準備した舊式 その邊の處は判ら 五歳のなか 〈快 のは

棄したものであらう。 道路はよく、自動車のゆるやかな動揺は睡氣を催すに丁度よい。 前にはしとく 0 元軍の元の兵營の前庭にもう停車してゐた。十二時半である。 地も目立つて少くなり、休耕地らしいものも出てくる、これは恐らく休耕地ではなく、 歸着を待 公會の部落からはもう集團的な大きな聚落は姿を沒してゐる。 つて ねた。 と降り出した。 間もなく町の 麥の外に馬鈴薯が澤山現はれてきた。十時すぎから空模様がおかしくなり、とうたうおひる この邊まで來ると沿道には部落もなく車馬の往來もそんなに頻繁ではないので、 ほど中央にある元の善隣協會の建物に泊ること」なつた。 急に寒氣を覺えたので毛皮の外套を着こみ設營班 私が目を醒したときには徳化の西端にある宋哲 こ」かしこに土屋が點在してゐるのみであ 地味の關係上耕作を放

(319)

德化の町は蒙支兩軍 内蒙古の調査旅行 の間に幾度か争奪がくり返された處で、度々の兵亂のため隨分荒廢してゐる。 (宮崎、

次に調査することにした。 ひ、その談話 と歩哨が捧げ銃をして吳れたのには少々恐れ入つた。夜は玖村顧問を訪れてこの邊の事情について色々と話し合 b ンとしてゐて何となくうす氣味惡くさへ感じる。戰鬪帽に星章がついてゐるからであらう、蒙古兵營の前を通る 0 兩 側 に立ち のうちに徳化の西北方にかなり廣大な區域に亙つて森林の跡があるとのことであつた。 並んでゐる住宅も半分以上は空家のま」である。 この森林は玖村氏の非常なる骨折のおかげで、 宋哲元の元兵營であつたといふ建物などは 約一ヶ月後平吉が踏査し、 貴重なる資 これは是非

二月二十八日 晴 德化滯在

料を蒐集することが出來た。

にはもうその徴候が現はれ出した。 蒙地に入ると水質變化のためか、 何れも一 度はかなり猛烈な下痢をするものだと聞かされてゐたが隊員のうち

憶がなかつた。 けられることがよくある關係であらう。 が れて 被 あらう。 麥もアメリカ系統のものがかなりあるやうだ。それは飢饉などの場合アメリカから救恤品として種子類がとど 木原先生、平吉、 ひをかけたまゝで徳化の町に入つたので何も判らなかつたが、この附近は東側を除く外三方は丘陵にとり園 何れも失敗した。 ゐる高燥な地で、 この 肥料について聞いてみたが、そもく、肥料といふものを知らす全然問題にならなかつた。 百姓は山 宮崎等は馬王廟方面の農地の調査に向つた。 農家の前庭で偶然洋種のカボチャ 地味は比較的よく、 西省から數年前來住したことを告げてゐたが、 このカボチャも何れはそのやうな經路を辿つてこの奥地に入り込んだの 牧草の成育狀態もよく、井戸深く水質も珍らしくよい。 が目にとまつたので一ケ十錢で二個買ひ上げた。 途中で黄羊七、 種子の入手經路については判然とした記 八頭を見つけ追かけて射 宋哲元は附 この邊 Ħ L

た邊へも行つてみたが雑草の間に二、三尺に伸びた十數本の若木が軍閥の興亡を知らぬげに淋しく列んでゐる 近に農事試驗場を作り、 にすべく大いに意氣込んでゐたが、計畫漸く緒につくや今次の事變が起つたのである。農事試驗場の苗圃 徳化の地は樹木の成育上興味ある處と考へられたので携行して來た朝鮮五葉松その他の種子を公署の前 アメリカからトラクターを輸入して大農法により開發し、 徳化を對蒙古政策 0 庭

やつてゐる。これから奥地には漢人の家もなくなるので野菜類の補充をした。 夜は加藤、 間、金子等は射落した鳥の假剝製に忙がしく、淺井辰は腹痛を耐へつゝ徹宵ミクロクリマ の調査

八月二十九日 晴夕立 德化發西蘇尼特へ

(321)

らう。 は隨分長く畑も帶狀の長方形をなしてゐる。なかには丘を越えて十數町も續いてゐるのがある。 方向轉換の手間が省けて便利だらうなどと笑ひ合つた。耕地を東北斜面に選んでゐるのも恐らく水分の關 してしまつた。察哈爾盟の西境を越すあたりから乾燥度は加はり、牧草は一段と惡くなつて來る。 七時半には自動車が整列してゐる。七時五十分一齊にスタート。町のすぐ背後の芝生の丘を越えてどん~~走 耕地は隨分減少してきた。 作物の 成育狀態はよくない。牧草も丘を越える毎に目立つて惡くなつてくる。間もなく耕地は全く姿を沒 東北側斜 面の所々に耕地が目にとまる。その多くは変を作つてゐる。 犂き返すときは 道傍には僅 この邊の 係であ

すると西蘇尼特に到着し 右手はるか に白 の調査旅行 弫 0 ラ た。 7 (宮崎、 廟が見える。 二時半、 少憩後王府や廟を見物した。 ハンバラス・スー ムであらう。 廟は新舊二つあり何れも支那風のものである 間もなく街道筋から左にそれ 心

ながらも包が散在し、放牧の羊や馬の群も目にとまる。

n が るので至つて吞氣であり、少人數でもあるので靜かで氣持がよい。夕方テント附近にわなをかけておいた。 草地に露營することになり、早速圓型テントを張つた。善隣協會の宿舍の方で炊事をして食物を持つて來て吳 同目を瞠つた。本日は木原先生、淺井辰、 畑中の三名は善隣協會の一室に入り、他は〇〇〇前

りに 部から自動車をもつて避難をすゝめに來てくれたが、永年愛用のテントを見捨てゝ引き上げるのも氣がすゝます、 洩りがしてきた。グランド・シーツに溜つた雨水の排水に大童である。 張つた小さなテントであるから風當りのよいことは申分なく、夕方空模様が變つてきたので、早速補强工作をや ふ極めて厄介な操作を雨と競争で繰り返さねばならず、せまいテントの中であるから面倒この上もない。宿營本 土性の固い地 あつたので、わけなく吸ひこんで臭れて排水といつても樂なものであつたが、今度の場合は水分を吸收しない黄 つておいたが、それでも吹き倒されさうになる。またこのテントは冬用に作製されてゐるので間もなくひどい雨 夕食を終へてのびてゐると俄然强風吹き募り、電光閃き、 あつたが、そのときは洩れ水を一ケ所に誘導して、グランド・シーツに穴をあけると地 盤であるから富士山のときの様にうまくゆかないので手拭にしみこませて洗面器で手拭を絞るとい ついで物凄い大雨となつた。 先年このテントで冬の富士山でも大雨洩 曠野の眞 面が輕石性のもので 中にポツンと

(322)

八月三十日 晴 西蘇尼特滯在

つてふみ止ることにした。

雨は十時頃にふり止んだ。

つたが何一つなく餌もそのまゝになつてをりがつかりした。どうも不思議でならない。 がさめると昨夕しかけたわなのことが急に氣になり、目をこすりつゝテントを這ひ出してトラップを見て廻

八時出發、 西蘇尼特からほど東に進んで滂江に向つた。いろく一の地圖にはこ」に電信所があるやうに記入し

は珍らしい。 軒には門がついてゐるが建物は隨分荒れてゐる。この家の前には井戸が一つあつた。水質試驗用の水を汲み上げ 比較的清澄な水が、 ごく淺く、水は甚しく黃濁してゐるのが普通であるが、こゝの井戸の狀況から推して豪地でも深く掘り下げれば も珍らしい。蒙古の井戸は伏流のありさうな凹地を物色して掘つてゐるから大抵二、三米で水面にとゞき水深 たところ清澄な水であつた。 T あるが、 **贖野を貫いてゐる張庫街道沿ひに廢屋が一、二軒淋しく崩れ殘つてゐるばかりである。** 今度の旅行で我々が目撃した範圍ではこれが唯一のも 豐富に得られるのではないかといふやうな氣がした。 この井戸にはちやんと井戸枠があり、 鐵製の井戸側もあつた。 のであつ た。 地 面から水面まで七米もある とんなことは蒙古で

登山者に利用されてゐる實例がかなりあるのに、 しい。雑木が は電信所があつて通信連絡に當り、 と疑はれる位である。 ぶりは彼是對照して甚だ意外であつた。 兩側から生え茂る日本アルプスなどでも二十年、三十年前の道が今日尚その痕跡をとどめてをり、 しかし嘗つて德華洋行のトラックが張家口庫倫間を頻繁に往復してゐたころはこの滂江 主要な役目を果してゐたのであらう。 張家口庫倫間の交通が閉鎖されて僅か數年にしかならぬのにそ それにしても道路 の荒廢ぶりは實に甚

この邊ではさしも音に聞えた張庫街道も轍の跡がかすかに残つてゐるのみで、有名な赤色ルートが

とれ

(323)

難行をつゞける。 張庫街道に岐れて東に入る。 などは二、三人が 帶植物の常として、 しかし今までとは隨分變つた植物が目にとまるので、幾度も~~自動車から降りて採集したが 19で引張つてみたが根は途中で切れて仕舞ひどうしても完全な根は採れなかつた。今 根を地中甚だ深く下してゐるのでなか 別に目標があるわけではなかつた。かなり行進してから濕地帶に入り、 掘り出せないので厄介至極である。「むれす

内蒙古の調査旅行

(宮崎、

鈴木

废 この濕地は滂江の東々南約三五キロの地點で、東西二キロ南北一○キロ位の區域であ つた所は他になかつた。 の旅行 中 には度 々濕地 植物擔任の隊員は西蘇尼特に止り、こゝに來てゐなかつたのは實に惜しいことをした。 にも踏みこんだが、この濕地ほど植物の種類多く、 かつその成育ぶりがきわ立つてよか つた。

型の谷とでも云ふものが考へられるのではないかと思ふ。 普通に云つてゐる谷といふ觀念とは凡そ大きな隔りがあり、 二、三十米にも達せぬやうな質に廣大なもので、むしろ昔は湖底であつたのではないかと思はれ 起伏はある。谷といつてもU字型のものであるが、その幅が二、三キロにも及ぶが、それでゐて深さは僅 Ħ のとどく限り涯しなくつどいてゐる草原ではあるが、ドライブしてみると、 普通にい ふY字型、V字型、 やはり丘もあり谷もあつて少々 U字型の 谷等の外に る位で、 我 かい K

け、 る の植物のことをお話ししたらわざ~~起き出て、ガソリン罐二箱にぎつしり詰つてゐる採集植物を調べ、十數種 かい 谷間と豪地とは植生がかなり變つてゐる。谷への降り口なども車をとゞめて悠つくりと調べたら石器位は見當 6 ンバラ・スーム 植 九 物が が 出て來たので隊員一 時間がこれを許さなかつたのは殘念であつた。途中隨分汚い包に立ち寄つて乳茶の接待 のはるか南方を廻つて西蘇老特に歸着した。昨日來下痢のため寢てゐる木原先生に濕地帶 同大悦びであつた。 目にとまつたものをたど無茶苦茶に手當り次第引き拔

他はレ 前 記の包である。 今日の走行距離は約一○○キロであるがこの間に唯四つの包を見たどけである。一つは約一キロ距つた箇處に、 ンズで見て包だとやつと判るほど遙か遠方に二つあつた。 張庫街道を通つてゐるとき包があまりないので大街道から距つた奥地に蒙古人達は逃避してし 他の一つの包は立ち寄つて乳茶の接待をうけた

て來た私も一

廉の採集家に煽て上げられてしまつた。

た。人口の密度は普通一キロ平方を以つて數へられてゐるが、蒙古に於いては五〇キロ平方位を單位として數 まつたのであらうと我々は勝手に推測してゐた。ところが今日は殆んど街道以外の處ばかりを一〇〇キロも走つ て廻つたのに矢張り包を殆んど見かけなかつたので、蒙古が如何に人日稀薄であるかといふことをつくらく悟つ

な點は流石にステップ地帯である。 昨 夜は夕立のためテントやカポック寢袋なども大分濕つたが、今日一日ですつかり乾き上つてしまつた。こん

るのが適當なのかも知れない。

て來る筈なので、 西 **|蘇尼特に殘留した隊員は附近の調査や、荷物の整理に一日を送つた。また張家口から徳化へガソリンを持つ** こちらからは四臺の自動車が徳化までこれを受け取りに行つた。

(325)

八月三十一日 晴 沙刺穆林廟

ると思つてゐたのに自動車の故障頻發し、案外の難行になつてしまつた。 部の者は二連に向つたが、我々は沙刺穆林廟目指して前進した。廟までは近いのでおひるすぎには到着出來

築いた土壘の遺跡であらうと言はれてゐる。土壘にしては幾分腑に落ちかねる點もあるが、さりとて何の爲め こんなものをわざ~~築造したものかまだよく判つてゐないやうだ。とにかく蜒蜿と隨分長くつゞいてをる。 西蘇尼特を出はづれると堤の上を滑べるやうになめらかに走る。 この堤のやうなものは恐らくデンギス カンが

氣で銃聲を聞いても逃げ出さないで、水面を右往左往してゐるだけであるから、射手の腕次第では居るだけの鴨 ので、大急ぎで銃をとり出してねらふが距離が遠く單發であるためなか 我 0 車 が故障 を起した。 附近に池があつたので、水中の虫でも捕るつもりで行つてみると鴨が四、 (うまく當らない。蒙古の鴨は實に否 五羽 かねる

蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

当

これで初めて氣がついたのか他は飛び立つてしまつた。射止めた鴨を取りに池の中へはいつて行か から 捕 れるわけだが、 水面をぢやぶくしてゐるから、さう理窟通りに旨くは行かない。やつと一羽を捕 ねば

い。池といつても窪地に出來た水溜りに過ぎないから遠淺であつて、その中央でも深くはないが、眞夏であるの

に足がしびれるほど水は冷たかつた。

が 折れた。 動き出した自動車は間もなくパンクをした。この修理にまた可成の時間がかりつた。ところが今度はシャフト 荷を他の車に移し替へて牽引して行くことにしたが、これはどうも具合よくゆかないものである。

かうなつて來ると牽引用のマニラロープもまるで藁縄の如く、極く簡單にプツリくへと切れるので綱を織いだり、 間もなく土壘跡らしいものは姿を消し、道らしいものもなく、砂地さへ所々に出現し、續々とエンコを初めた。

取り替へたりするだけでもかなりの手數と時間を要し難行すること甚しい。ことに廟の間近の丘を越える邊や、

谷間を通り抜ける處は砂地つゞきであつたから實に甚しい難行で、自動車の先曳き、後押しで一同へと~~にな

つてしまつた。

静養は今のうちだといふわけで氣分も初めて寛いだ。 することになつたので手廻品をいろくくと部屋に持ちこんだり、荷物を引き卸したり、腹をこわしてゐる連中は 今日の宿舍は廟のすぐ傍の僧房とその前面の包で、テントも附近の丘の上に張ることにした。こゝに三日滯在

九月一日 晴 沙刺穆林廟滯在

本などでかねて包の良さを讀まされてゐたが、初めて包のなかで起居してみた。寢心地は上々の方であるが、下が 夜寢るとき閉めるのを忘れてゐた包の天窓から朝陽がさしこんで來たので目を覺ました。アンドリュ 1 スの

(326)

が隨分厚く、その上入口も小さく、窓も小さくて少いので、 は言へないであらう。 めに提供して吳れたものである。 粗惡なフェルト敷なので立居振舞に埃が夥しく立ち昇り、食事時など困るが、うすぎたない僧房に比べると贅澤 我 々が寢た包は僧房の前庭にある固定式の粗末なもので蒙古兵が使つてゐたのを我々のた この包だけでは全員還入りきれないので、 内部は薄暗い。 下は板張りで壁に添ふて高さ二尺五 半數は僧房の中に もねた。 僧房は壁

寸

位

の床があつてその上で寝起きするやうになつてゐる。

大變よく調和 下の方は左右に僧房が擴がつてゐるので、少し離れた所から眺めると、 午前中はラマ 立派に見える。ことに背後の山容や、 落付いてゐる様に思はれた。 廟を案内してもらつた。この廟は背後が山で、その斜面に廟の建物が階段狀にずつと並んでをり、 この廟を園む附近の地形と西藏様式をとつてゐるこの廟の建物とが とても奥行があり、 間口も弘く見え、

廟の内部は一般のラマ寺と大同小異であり、

壁畵も幾面かあり、そのうちには豫ねて噂に聞いてゐた猥褻なも

(327)

土地でも、 なに澤山 散兵壕を見に行つた。 を測定してこの植込みの狀況を忙しさうに調査してゐる。 のもあつた。一番下手にある御堂の前庭には蒙古では珍らしい楡の大木の植込みがある。 は今は徒らに 造り上げたものだ。 その手入れの仕方では立派に樹木が成育することを證明してゐる。 雜草が生え茂つてをるばかりである。 交通の不便なこんな奥地にはるく~資材を運びこんでよくもこれだけの 死角の出來ない様に、 その配置に苦心した跡も見える、散兵壕やこれ等のトーチカ 私は裏山に登り、 襄に傅作儀軍が構築し 今西は幹の太さ、 これほど乾燥してゐる トーチカを、 その根 た 1 0 長さ等 チ こん カや

2 0 廟の南側にはかなり幅の廣い川 内蒙古の調査旅行 (宮崎、 ガジ ある。 この川は年中水があるとのことだが、淺く水量も少いけれども、

用水にでも用ふるならば、 かなりの區域を潤すことが出來やう。この様に附近の景觀と廟の建物がよく調和

占

灌溉 て、今まで荒涼たる曠野を走りつゞけてゐた我々には大變親しみのもてる極めて印象的な處であつた。 してゐたり -日本的な觀方であるにしても--川には多少濁つてはゐるが珍らしくも水がさら~~と流れてゐ

親切で何度も水車で水を汲んで來て吳れたり、 屋で僧侶の敷は事變前の五分の一程度に激減してゐるとのことである。復歸して來てゐるラマ僧達は私達に んでゐるのである。 このやうに平和そのもの」やうなこの廟ではあるが先年の所謂綏東事件には悼ましくも、 僧房の壁には大小の穴が無數にあるが、これは事件當時の彈痕であらう。 器具を貸してくれたり、 なかくよく世話をしてくれた。 匿れた悲話を織り込 僧房も大部分は空

九月二日 晴 沙刺穆林廟滯在

うな感じがしてとてもテント内に居堪らないが、包だとなか~~居心地がよい。ことに裾を少したぐり上げると 午睡もした。綏東事件記念碑建設候補地 から採集品の整理をしたり、肌着類の洗濯、 近に張つてある圓型テントに這入つて午睡してゐたが日中になるとテント內は隨分暑く、 雜誌 行李の詰替へなどをし、氣分も久しぶりでのんびりとしたので 「蒙古」昭和十四年十一月號によれば十月九日除幕式が その上息詰るや あつた

涼しくて居心地のよいことだけは確かである。 凉風適度で、何とも言へぬ爽快さである。包は夏は涼しく冬は暖かだといふが、冬はどうか判らぬにしても、

夜は一同包に集つて種々の立脚點から色々の人々の「蒙古」についての意見を述べ、互に大いに語り合つて見 この廟では駱駝を三十頭ばかり飼 つてゐる。駱駝の放牧は今度はこ」が初めであつた。

開の交換などをした。

(328)

九月三日 晴 哲斯ホンゴルへ、百靈廟

耕作區域を走りぬけるだけでも相當時間がかゝり、 から 栽培されてゐる。 帶はたちまちのうちに一面の農耕地に化してしまふであらう。農民はこの地を土城坡子といつてゐた。この 四十分出發、 作物の生育ぶりもなかくしよい。兩三年前入殖したとのことであるが、 川を渡つて暫く行くと思ひもかけぬ處に土家屋があり實に廣大な耕地が展開し、 奥地としては珍らしく廣大なものである。 この調子だとこの附

程は依然そんなに捗らない。テンゲリノールは隨分大きな湖で、變つた生物も棲息して居ることだらうが をつどけて行つた。 本隊は直行して百靈廟に向ひ、 想はれるのであちこち隨分探したがたうとう包一つ見當らなかつた。たべ珍らしくも三、四百頭からなる放牧の 來たが、兎に角劣等になつて來た。間もなく湖底を思はす樣な平坦な廣い野原に出た。哲斯ホンゴルはこの邊と ないので總て割愛せねばならなかつた。 である。テンゲリノール近くからは障害は少くはなつたが、何れにしても道のない所を疾驅するのであるから行 した道らしいものは姿を消し、 馬の大群 暫くするとホ に出合つたどけである。 トン廟についた。堂が一つきりでしかも小さなものではあるが、その建築様式は西藏式であつた。 途中沼地にも悩まされ、 轍のうすい跡がかすかに残つてゐるが、何れにしても道がなく見當をつけて北進 北上班はこゝから右折して北方へ進み、哲斯ホンゴルへと急ぐのであるが 北上するに従つて牧草は小さくかつ粗となり、その種類も少し變つては 涸川の砂床突破には自動車の後押しなどしてなか~~の難行 つべき 間

(329)

草原に沈んで行くさまはこの様な曠野でないと味へぬ神秘的な偉大さを感ぜしめる。夕方暫くの間だが珍らしく 些とした谷間に這入り、 谷沿ひに西進してハイリンガッシ a スームに夕方辿りついた。大きなく一紅い夕陽が

内蒙古の調査旅行

尖

もブトの密群にせめ立てられて殆んど何も出來す一同大弱りであつた。

不潔な印象をうけた。 僧房がある。本堂で泊めてもらふことにしたが、隨分きたなく、扉などは垢で光つてゐるといふ有樣で、 な大きな猫が一匹ゐるだけで、外蒙古に程近い地點ではあるが、 廟は西藏式の本堂を中央とし西側には小さくて飾り氣のないが比較的スマートなラマ塔があり、東側には この廟には病に呻吟してゐる腰の曲つたラマ僧たど一人ときたない廟には不釣合にきれ 質に靜穏なものであつた。 非常に

本隊は割合順調に百襲廟に辿りつき廟の本堂の仁王さんの前に泊りこんだ。

月四日 晴 百靈廟

自分が案内してゐるんだとこの邊の地理については隨分自信のある口ぶりであつたが、さてとなるとその應答ぶ は捗らない。 て見當らず、 してくれたお禮を懇に述べて七時に雲王府に向つて出發した。この附近は前日同樣道の跡かたもなく、 は極めて曖昧模糊としてゐて、何を聞いても 行のうちに生憎醫者がゐなかつたが、 廟の附近にゐた中年の蒙古人を道案内に連れて來た。慓悍さうな男で、 たゞ方角に注意しつゝ家畜の踏み跡を辿つて行くので車のスピードは出ないし、動搖は甚しく行程 病めるラマ僧に素人で出來るだけの手當をしてやり、 この附近へ來た人々は總て 夜の宿り 轍の跡と を提供

(330)

「まだもう少し行くんだ」

整つた王府である。 點張りで頼りないこと夥しい。それでもどうにか正午すぎには雲王府に辿りついた。 例によつて乳茶の御馳走をしてくれた。 と」は小規模ながらも

雲王府からは判然とした道が付いてゐるが、惡路の部類に屬する方である。暫くすると川添ひの道になつた。

ジラムレン近傍――包と糞の煉瓦塀

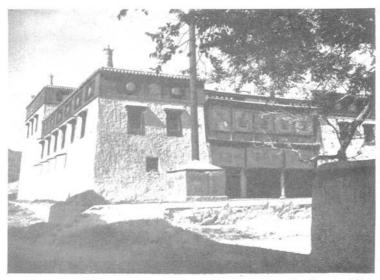
파

Ä



西スニト―ーラマ廟(純支那式)

平 吉 功



シラムレン――ラマ廟本堂(純西藏式)

平 吉 功

間 河 てゐるので大助りである。 加 を通 水は珍らしくも清洌である。所々に楡の老木もポッ~一出て來だした。 して行く。白塔が聳えてゐる山の裾を廻ると前面に百靈廟が展開した。 Ш を渡ると百靈廟である。 沙刺穆林廟で三日、 本隊はすでに昨 引つゞきて」で二泊といふ具合に割合樂な行程となつたので一同 日着いてゐたので荷物の整理もしてあり、 屋根が大半ぬけ落ちてゐる土造家屋 百靈廟近くになるに從つて楡の數が 寢る場所 も出

九月五日 晴 包頭

は

元氣大いに回復し、下痢に惱まされてゐた者も旣に平常に復してゐた。

けられて一同苦笑させられた。やがて黄土性の土質に變り、 急造したものと見えてなかには芽をふき出してゐる電柱もあり、「電信柱に花が唉く」とい 民の精力的な北方進出ぶりと、その生活力の强靱なのには驚くの外ない。 霜害に痛めつけられたらしい惨憺たる馬鈴薯畑もあつた。二、三キロ毎には一 時半出發、 電柱に沿ふて南方に進む、 電柱は處々殘つてゐるが、電線は一尺もない。 高家于子附近に來るともう一面の耕作地つどきであ 部落があるといふ狀態で漢 F. ふ俚謡の標本を見せ H 柳 を切 つて電

昇る黄色い土煙りは視界を阻み、先行する自動車がよく見えず、 凄さは殺人的で筆紙では到底表現し得ない程であつた。 連日の快晴つゞきで質にひどい塵埃である。 道とはいつてもこの邊のは實にひどく、 道だか、 蠅と砂 塵を氣にして 川床だか判らないやうな所を進むので、動揺は實に甚しく、 勿論足許などは見えないといふ狀態で、 あたのでは

蒙古旅行は出 一來ない が 濛々と立ち

1 圍 チ カが望まれる。 を 內蒙古 Щ K とり園 の調査旅行 まれ 陽 た固 (宮崎、 0 南門を出ると、 陽 の町 に入る。 幅員廣く、 城壁を持つた小さな町ではあるが要害の地 排水溝まで備へてゐる急に立派な道がついてゐる。 である。 中中 背後

山頂には

やが

やうな質にく一大らかなものであつた。 輝いて銀蛇のやうに見えだした。この邊が陰山々脈の頂點なのであらうが、 他の工作物と結合して穴居してゐる處も目擊出來た。一面に耕された高原を暫く走ると遙か彼方に黃河が夕陽に T 谷間 に入り河床道を暫く行くと、黃土地帶によくある典型的 僅かに道が通じてゐる。黄土をくりぬいて穴居してゐるのを初めて見た。又穴居ではあるが入口やその な地隙を通つた、 どこが分水嶺なのか見當もつかない この地 隙 の北側 0 中 腹

きばかりはまるで天國の様にさへ思はれた。 實に張家口以來の宿 りすると包頭の城門に辿りついた。物見高い包頭市民の注視を浴びつゝ町を通りぬけ「包頭ホテル」に入つた。 たシルエットを浮き出してゐた。黄河はだんく一近くなり、 遙か西方には頂が尖り南側が急に傾斜してゐる相當高度を有する山が夕陽に照されて何とも言へない凄味をも 急に道はデグザグに下り出した、陰山々脈の南側はその下り口の暫くの間だけではあるが、急坂になつてゐる。 屋ではあるし、 百靈廟から の殺人的な砂塵を洗ひ落すことも出來て、薄汚い風呂場もこのと 坂を降り切つて例によつて埃の隨分ひどい道を一走

九月六日 晴 包頭滯如

ペラ船に乗つて上流下流へ各ニキロばかり航行してみた。 頭 時には葦のやうな水草をかき分けて岸邊すれ ホテルで握飯を作つてもらひ、 治安の關係上オルドスへの上陸は願望相叶はず、徒らに指を銜へてゐるより仕方がなかつた。 水筒をさげて八時出發、 くまで接近し、 對岸は豫ねてから望を多いに囑してゐる 小學生の遠足といつた型である。黄河北岸 オルドスの北邊を文字通り咫尺の間 オ からプ 1, K スで

この邊では黄河の河幅はさ程廣くはないが、

丁度増水期に當つてゐるので水勢も平素よりは速いらしく、

黄濁

(332)

地 0 水が溢れるばかりに流れてゐた。洪水敷とてある樣子はなく堤防もない。よくこれで氾濫せぬことである、 の治水工事を見馴れてゐる我々にとつては不思議といふより、ひとごとながら氣懸りになる。

內

假

剣製動物等を托すること」なり、荷造り作業に大童である。 泉寺へ行つた。今夜おそく金子、周布の兩名は鐵路張家口に直行し、 歸國するので採集植物標本、

九月七日 曇後雨 小白彦花

金子、 たり、遮二無二猛進をつゞけるが、道路偵察の為めに停止したり、或は引き返したりするので行程は大して捗り の邊まではまだ屆いてをらぬ。 してゐる。一昨日通つた道を逆に進んで陰山々脈の峠にかゝる。空は不相變どんよりと曇つてゐるが、 土家屋が二、三散在するばかりで少々心細くなつて來た。そのうち井戸を取り圍んで十數軒の農家が建ち並んで りつどくので氣温もかなり下つて、夕方とゝもに寒くもなつて來るが確とした道は ふり出して簡單に止みさうにもない。 てゐない。 ゐる小部落に辿りついた。土民の言によると小白彥花である。空模様は段々よくなり、幸ひ雨はこの邊には降つ 時包頭出發、 大急ぎでテントの架設にとりか」つた。 周布は張家口に去り、畑中は綏遠に先行すること」なつて人員が減つたので、今日は自動車の上も悠くり 閻陽北方の銀號附近で大分時間を費してしまつた。大體海拔一五○○メートル近い高地であり、 もうすでに薄暗くもなつてゐる。 空模様は刻々と怪しくなり、 再び固陽の町に入り、固陽からは大體西進をつどけてゐるうちにまた大粒の雨が 細い道があちこちにあつてよく判らず、 こゝの井戸水が比較的よい方なので今夜はこゝに露營することゝ 包頭の北門を出て幾らも行かないうちにボッくへと降り出した。 時には畑を横切つたり、 一向に判ら ず、 所 × Ш K 細 雨は降 漢 を渡 雨 3 人の

(333)

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

は悪路 ついぎであつたばかりでなく、 道路不明のため可成り手古摺らされたので氣疲れをしたらしく一

氣勢昂らない。

九月八日 晴 武川へ、一部は厚和へ

間、 6 少し道路の補修をすればうんと輕減されるのだが、この悪路では自動車の破損率、 石ころが非常に多い羊膓の坂道を下るとまた今度はかなり長い河床道になつてゐる。 態に著しい特長があり、松の大木や白樺さへ見うけられたが、これは植物の分布上興味ふかい點である。 る。 河床道に入り、 さが漾ふてゐるやうな氣がした。こ」で隊を二分し、今西、 ゆるやかな起伏がつどいてゐる波狀性の高原をどん~~走る。武川の町に到着した。活氣乏しく何となく物淋し れをやつてゐる。成育狀態はあまり良い方ではない。バロメーターは一七二〇メートルを示したこともあるが 晴れくし、道路も今日はスラくしと行つて行程も大いに捗つた。所々に悠麥の畑がある。もう盛んに刈り入 昨 宮崎は更に綏遠まで急行することになつた。武川から暫くの間山腹につけられた赤褐色の道を走り、 夜は心配してゐた風も出ず靜かな夜で安眠出來た。 こ」は眺望のよく利く所で足下に綏遠の町が展開してゐる。 武川綏遠間はそのコースの一部に當つてゐたが、こんな惡路をよくも定期運輸を行つてゐたものである。 變前 には新疆省の哈密と綏遠との間には新綏汽車公司の手で、機續的ではあ ケルン傳ひに走りつどけ、石ころの馬鹿に多い坂道を登りつめるとそこが蜈蚣嶺といふ峠であ 八時露營地出發、 淺井辰、 この峠の北斜面には小 平吉、 昨日の雨空に引きかへ、大快晴で氣分 加藤は武川に残り、木原先生、大井、 燃料の消費量もかなりのもの 何れにしても相當 つたが 區域ながら植物 自動 車 の悪路 0 やはり やがて 行はれ 成育狀

(334)

であつたらう。

6

たので引き上げて下山するところなのである。沿道にはこれ等の苦力目當であらう、木蔭などでは駄菓子や果物 更に陰山々系を越えて最前線の農耕地まで進出し、 ぬ苦力がとぼ~~と歩いてゐた。これ等の苦力達は主として山西、山東省方面からはる~~蒙疆地區に入り來り、 る苦力の多いことであつた。 では駱駝隊に大分出會ふやうになつた。 一挺の鎌を腰にさし、小さな風呂敷包の様なものを小脇にかっへて幾百人とも知れ 驢馬隊も相當多い、それよりも我々の目を惹いたのはこの峠道を下 所謂農業勞働者となつてゐた者が、穫り入れも一段落とな

つた。 K を越えて兵站部の横で車を止めてゐると淺井東と釣田がやつて來た。意外の處で出遇つたので共に大いに悅び合 域に來た様に感じた。 屋が出來てゐた。坂を下つて平地に出ると埃はひどいが並木をもつた立派な街道に入つた。兩側は急に肥沃な地 も元氣がある。 市街地に入ると道路は鋪裝してあり、質に立派な並木があるといふ有様ですつかり氣持よくなつた。住民 打揃 この邊から歸化城、 つて厚和旅館に入つた。 綏遠城 一帶にかけてが大規模な所謂 オアシスなのであらう。

鐵道

線路

(335)

九月九日 武川

見せて吳れた。ラマ寺の境内はかなり廣いが蒙古奥地の廟のやうにラマ僧が澤山をらず、 し淋しいやうな氣がした。 か一、二時間位で相當のものを掘り當てやうと云ふのがそもく〜無理な注文であらう。 まづ清眞寺とラマ寺を見に行つた。一體に排他的な清眞寺もこゝでは快よく我々を案内して吳れ、 綏遠銅器の掘り出し物でもと思つて三、四軒探してみたが、 收穫は皆無であつ 静かとはい 沐浴所まで ふも ム少 僅

6 南 補給の食糧品を積みこんで正午出發、 へくと下つて行く我 々が すれ違つた敷だけでも五百人は下つてゐない。 昨日通つた道を武川へ向つた。今日も幾百人とも知れ 武川へ着くと食糧の補給がついた ぬ農業苦 力 が北か

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

のと發病、入院して大連に殘してきた淺井東が元氣な顔を見せてやつて來たし、 我々と一 緒に出發出來なか つた

釣田も天津で淺井と落ち合つて馳せつけて來たので、やゝ消耗氣味の我々一行も意氣大いに昻つた。 をつどけてゐた者はもう馴化したのか、すでに元氣を取り戻してゐるが、不落を誇つてゐた今西、宮崎がたうと

九月十日 晴 四子王府

う下痢を初めた。

然し共に輕微なものであつた。

がザラに見られるといふわけのものでもない。 ときは蒙古といへばすぐに駱駝を聯想されたが、 なり減少して來た。 相變らず陰山々脈の稜線近くのゆるやかに起伏した波狀地につけられてゐる悪路を辿る。 駱駝の隊商も目立つて多くなつて來るし、 これも地域によることで、蒙古に來たからとて何處にでも駱駝 組の駱駝の頭数も大分増えて來た。 耕地は昨 日に比し可 內 地 K ある

地 方的な小 は小さいながら割合に纏つてをり、活氣もあるやうな印象をうけた。これは恐らく、この部落が附近農産物の地 我 込んで區劃を廣くとつて城壁を作り、 陰山 體今までも度々目撃したところであるが、 が残され × あることだらう。中食を了へ部落の人々に見送られて出發。部落の東側にはかなり廣い空地が残されてゐる。 の到着をどうして知つたのか町の人々が日の丸の旗を手にく、持つて出迎へてくれたのには驚いた。 集散地であるといふ外に、漢人部落の最前線に位してをり、蒙古人との取引地になつてゐる關係 てをり、 も段々遠ざかり、ゆるやかな起伏もなくなつて一望千里の曠野になつて來た。 街道も井然としてゐる。 街路も廣くとるのであらう。 この種漢人部落では、城壁を巡らしてゐる場合、城内にかなりの空 土 地が安い關係もあるが、 漢人部落最奥の烏蘭花のやうな小部落でもや 最初に部落を作るときにうんと餘裕を見 間もなく鳥蘭花に着

はりそうであつて、こんな所にも土木事業に天才的である漢人の特點が現はれてゐる樣に思はれた。

うに轍の跡が草原にわづかに残つてゐるに過ぎない高原地に入つた。 烏蘭花から暫くの間は立派な道であつたが、耕地が全くなくなり、いつの間にか道も消え去つて蒙古奥地

四子王府には案外早く着いた。折角淺井東もゐることであるから施療を開始した處、つぎく~に押しよせて來

て打ち切るのに困つた。

こゝは漢人部落である鳥蘭花に近いためか蒙古人の間にも大分支那風がしみこんでゐる樣である。

套を着こみ、包の外で獣糞を焚いて暖をとりながら蒙古草原の月の出を觀た。豪氣なキャンプファイヤーといふ 象的な觀月の夜であつた。 三河地方のことに話は飛んで互に大いに語り、大いに論じ、 酒をとり出して盃を廻しながら、 わけには行かないが、獸糞でも割合よく燃える。酒はもうなくなつたので僅かに殘つてゐる藥用と稱するブドー 今夜は丁度滿月である。丸い大きな月が涯なき草原の中から悠々と昂つて來た。九月初旬とい 黄土地帯によくある地隙の成因を論じ合つたり、大興安嶺越えやホロンバイル、 月が高く昂つたころには氣焰も隨分昂り、極めて印 ふのに 毛皮の外

(337)

九月十一日 晴 トロム臺へ

率の年貢をラマ寺に納付して耕作を許されてゐるらしい。 タラムスム附近まで來ると耕地が大分現はれて來た。作物は何れも大同小異である。この邊の漢人農民は相當高 |賊が近くに出たとの報が夜半に齎されたので、危きに近よらずといふわけで、豫定をくり上げて七時半出發 タラムスムはそれが爲めか小型ながら西藏式の割合に

内蒙古の調査旅行(宮崎、鈴木)

立派なお寺であつた。

どういふものか子供が非常に少いが、漢人地帶に入ると子供がうよく~としてゐる。乏しい農作物を以てその が 現はしてゐる、 特に目を樂しませて吳れ、 で かい 岸を思はせるやうな處で中食を攝つた、果てしのない草原ばかりを眺めて來た我々には小規模なこの海岸風景が ゐるの 加速度的に増加し、 K 小 轍 區域 0 跡が草原に残つてゐるばかりの質に哀れな姿となつてゐた。この邊には小さいものだが雑木も少し姿を 見えた。 植物も從つてかなり變つて來てゐるので植物班は採集に忙しい。舊張庫街道を南下すると農耕地 漢人農民部落に入ると目立つのは子供が多いことゝ豚と鷄を飼つてゐる點である。蒙古人は 石が 此處彼處には部落も見え、土造家屋の間には長圓型の土造の穀倉がニョキくと立ち並ん = 食慾も思はず進んだ位である。 ョキーと突出してゐるその下には黄土まぢりではあるが砂が堆積 間もなく舊張庫街道に入る。 舊張庫街道といつても僅 してゐて、一寸海

民族の强味を持つてゐるのではなからうか。

活の全資料とし、窮迫した日常生活を送つてゐながらも尚かつこれだけの繁殖力をもつてゐる漢人種は底知れ

(338)

も部屋の前 紙代用としてベタ 東の方に小山を負ひ、 に張り分宿することにした。 くと張りつけられてあつた。 城壁を巡らしてゐるトロムに到着、 部屋の壁には排日とも、 役所の一室が我々の宿舍に充てられた。 親日ともちよつと判斷がつき兼ねる様な繪が壁 圓型テ

九月十二日 晴 トロム臺滯在

愛嬌のよい軍人で、

通譯銀器員助手となり、

なかく

よく病人の世話をしてくれた。

しい。つぎくしといろ 今西、平吉は西蘇尼特へ往復することになつた。 くな病人がやつて來た。 こゝに半島出身の若い蒙古軍の小隊長がをり、よく氣轉のきく 當地の病人に施療すること」なつたので浅井東はなかく忙

二十錢、五錢出すと兩手で持てないほども馬鈴薯をくれる。 午後は附近の農地調査に行つたり、背後の山に出かけてみたが、別に變つた收穫はなかつた。こゝでは鷄一羽 フライパンを出して、加藤が腕によりをかけて鷄の

テキを作つたり、いろくの洋式料理を作つて吳れた。

九月十三日 晴 商都

つた。 白馬に跨り、第二の隊は全員栗毛の馬を揃へてゐるといふ凝り方である。 人は馬を質に上手に乗りこなす、蒙古の騎兵は質にあざやかである。このときは二ケ小隊ゐたが第一小隊は全員 城門の外側には蒙古騎兵隊が整列してゐて我々を見送つて吳れた。喇叭の合圖でこの騎兵隊は突撃の隊形に移 まづ見事に横隊に展開し、 質にあざやかな突撃ぶりを見せて吳れた。 丁度我々が下駄を履くやうに、

言へないが、この臺地はあまり平坦すぎるので或は溶岩臺地ではなからうか。耕地が復た増加し、農家もあちこ ちに見られ てゐた。西方には三〇〇メートル位の高度を有する臺地が隨分長く續いてゐる。 とにかく宿営の用意を整 ム臺から南進すると間もなく耕地は殆んどなくなり、 所々には清眞寺も見られる。そのうちに活氣のある商都の町に入つた。 へてから調査事項の概要をお互に發表し合ひこれを整理した。 相も變らぬ草原で、 遠望したどけであるから何とも 所々に池があり、 小學校が宿舍に充てられた。 黄羊が 出没し

(339)

九月十四日 晴 平地泉

來るやうな頑丈な車輛を作るのが一般の習しであるとのことだつた。こんな狀態では街路も堪つたものではな 轍がうんと深く喰ひ込み荒れ放題になつてゐる。或る人が言つたが、 都からは幅 の廣い道がついてゐる。 この邊では一生懸命道路の新設工事はするが、これに手入をしないので、 道路 の補修工事をしないで、 惡路 に對

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

回々教徒の家も目につくし清眞寺も姿を現はして來てゐる。また部落の入口には男〇〇名、女〇〇名といふやう 道の兩側 は 面 0 耕 地でこの附近は比較にならぬ程のよい成育ぶりである。部落も増えてきた、 なかには

葉はたゞでさへも判らないのに、ひどい訛で少しも判らないが、窮すればどうにか通する道もあるものだ。 名の如く清洌な水が豐富なのも洗濯氣狂、風呂氣狂の日本人の氣に入つた。食事は附近の集華飯莊でとつた。言 あつた。埃まみれで他客に迷惑だらうと思つて特別浴室のバスを準備させて大いに意張つたのは良いが、どうい な數字が立札に記されてゐる。 ふものか湯錢をとらなかつた。 中食は平地 宮崎が平地泉に残つた。錢湯があつたので早速とびこんだ。なか~~立派なもので特別浴室が四箇 泉で攝つた、案外早く到着出來た。木原先生、大井、間、 湯をふんだんに浴びて襯衣を着かへ久々でさつばりとした氣分になつた。その地 加藤、平吉、釣田は鐵路大同に向ひ、

れて行く、荷役中のおこぼれ屑石炭を巡ぐつて何十人といふ子供が手に~~筬や金盥をかゝえて、質にすばしこ やうだ。貨物驛には恐らく大同からであらう石炭車が丁度到着してゐた。貨車の上で取引されてどん~~と運ば

大同班は木原先生以下炭鑛、石佛を見て鐵路張家口に向つた。

く立ち廻つてゐた。

は鐵道

の東と西にあるが何れも相當繁盛してゐるし、

町並もよく整つてゐる、寫眞屋、

薬屋が目立つて多い

(340)

九月十五日 雨 南壕塹へ

ゐる無慘な光景も目にとまつた。恐らく敗殘匪の仕業であらう。歌激攤海の西側を通つたが、 嶮悪な空模様だが 八時出發、 大體鐵道線路沿ひに南下をつぶける、 機關車が線路から顚落して仰向けになつて 隨分大きな湖水で



旣婚婦人 (西スニト)

平 吉



賣買の幕管 (徳化──東スニト)

平 吉 功



鷲を捕ふ (徳化---西スニト)

平 吉 功

質に活氣があり、 り、かなりよく成育したドロ柳の植林地もあつて今まで曠野を見馴れて來た我々の目を非常に樂しませてくれた。 これ て吳れてゐた。 にふるへながら砂地の端に一列に生えてゐるポプラ林の傍でわびしい中食をとつた。 返したり、 多い町である。 介和の を通りすぎるのにかなり時間がかしつた。そのうちにたうとう雨になつてしまつた。 町 には四時前到着した。 JII を渡つたりする。 この菓子はビスケットの類であるが森永や明治製菓製のものとあまり變らぬ美味なもの こゝから興和までは砂地に行き惱まされたり、畑の中を横切つたり遮二無二の行進で幾度か引き 商店街も殷盛である。 迂廻したり、 空が曇つてゐるので、先程から何だか夕方の樣な氣がしてならない。この町は 隆盛莊から聯絡があつたものらしくお土産のお菓子を準備して待つてゐ 乗り越えた小山も幾つか あつた。 雨覆ひの下で陰氣な思ひをし寒さ たど柳や楡林が處 隆盛莊に入る、 であつ 男子の なに

來た。右手に大鎭山(一六二三M)が見え、南には相當の急崖さへ望まれた。 の北側にある川を渡つて北進をつじける。道は幾分良くなつて來た。雨も全く晴れ上り、 **空模樣** 8 好轉して

た。

山間

の小さな町でよくもこれだけの菓子が出來るのに驚かされた。

(341)

その H 求めて謂 0 丸の小旗を持つて出迎へて吳れ 町を廻つてゐる間にこの種大砲を外にも二、三箇所で目撃した。 なつて南壕塹に到着、 集してをり、 に教會がある。 喧しく囀り 教會の大門の傍にある大きな楡の木には丁度夕方のこと」て何百とも知れ やはり興和から連絡があつたのだらう、 合つてゐた。 た。 町に入る城門の傍には木製の玩 町の中央にはこんもりと茂つた森が 町の入口では約百人ばかりの町の人々が 具の やうな大砲が何 0 た 8 ぬ雀が塒 かい 置 て を

内蒙古の調査旅行 一八七三年の創立にか」り、 鈴木) 實に立派なもので、十四、五人の外人宣教師が居て、 公 中等程度

0

學校

物のみ煌々と電燈がついてゐる。 よりも驚いたことにはディーゼル・エンデンで自家發電の設備を持つてゐることである。 を開設してをり、 立派な寄宿含もある。 運動場も夜間使用が出來るやうに照明設備さへ整へられてあつた。 我が國でもこれ程整つた寄宿舎を持つてゐる學校は少いであらう、 この教會とその附屬建 此 0 種 それ

連の實行力と信念とには癪ではあるが敬意を表さゞるを得まい。 我 々の宿舍はこの教會の向側にある小學校であつた。 田舎の寒村ながら設備の割合よく整つた學校で、 恐らく

お向 .ひの教會や學校の影響を多分に受けたのであらう。 この南壕塹といふところが落付きがあつて物靜

九月十六日 晴 張家口

などの

所在地としては實に

ふさわしい部落である。

は色づき、 出る。そこにはかなり廣い區域に亙つてドロ柳の植林がしてあつて、その成育ぶりもなかくしよい。 步に出てみたくもなり、 秋の訪れは質に早い。 あまりにも があり、森さへあるこの部落の物靜かな朝の氣分は何ともいへない。 1: H 本人的であるかも知れないが u 柳も かす 折からカランコロ 深呼吸の一つもしてみやうといふ氣にもなる。 かに色ばみ朝靄 ンと時を告ぐる教會の澄んだ鐘の音が鳴り響いて來た。 がたれこめてゐて何となく秋やうやく深しといつた感じである。 北京と綏遠の二ヶ所だけで、實に久しぶりの朝であつた。 **寝袋をそつとぬけ出して小學校の裏門を** 内地を出發以來この樣な朝景色は この植林地 林 の下生え 朔北 200 散 僅 0

前 に運動も少しやつて來たし、とても氣持のよい朝なので、 いつち ねむい目をこすり~朝食をかき込み急いで出發の準備に取 食慾は旺盛であるが、 りか 2 のだが、 これは强ち張家口入りだから 今朝は早起きして、 朝

カン

な空間地には競爭用の一○○米のしかもストレートコースが作つてあつた。

で學校

ふわけでもあるまい。

柳が茂つてゐたりして、今までの農村風景とは若干趣が變つて來た。 道 Ŧi. り工事に苦心をした跡も見えてゐる。珍らしく埃もスピードの割合に舞ひ上らない。まづ快的なドライブである。 が黄土に代つて現はれて來たのが目立つが、恐らく火山質のものであらう。道路は割合よく、處によつてはかな 火土 の兩側には耕地が果てしなくつどいてゐる。比較的集約的な耕作方式がとられてゐるやうである。所々に三々 木が多いのはこの南壕塹附近一帶のことで、溶岩臺地とも思はれる波狀地をどん~~疾走をつゞける、黑 屋の農家があり、その多くは浴岩を積み上げで造つた低い石塀でとり圍まれてをり、そこには一群のド ±

の町の大きさ、殷盛さ、 を一巡した時は實に埃ポイ田舎町の様な氣がしたが、今內蒙古の奥地を一わたり廻つて再び張家口に入ると、こ 午張北到着、支那料理店で中食をとり、神威臺を越えて張家口へ向つた。最初張家口の停車場に到着し、 物資の豐富なこと等が沁みく~と判る。大同から先着してゐる木原先生等に迎へられて 町 (343)

日本旅館に入つた。

IE.

るのも面倒になつて仕舞ふ。 入浴して久しぶりで座蒲團を敷き、 高足のついたお膳の前に坐つた。かうなると一度に疲れが出て來て何をす

九月十七日 張家口滯在

はいへないが、それにしても割合美味しい料理が出來る。 查事 項や採集品の整理をし、 中食、 夕食とも町の支那料理店に行つた。不便な土地のこと」て材料は豐富と

九月十八日 H 張家口滯在

内蒙古の調査旅行

(宮崎、

鈴木)

元

內

たの

中は物資

の買入れ

で何を喰べても美味しい。 荷物の整理をし、 このロシャ喫茶店のよさはロシャ姉妹がかなり衛生的なので、何となく安心して 中食はカルガンといふロシャ喫茶店に行つてみた。 奥地 かい ら出て來

ち

てきちんとしてみると、やはり神經質になつてくるものらしい。午後は休養に當てる。 喰べられることである。 奥地を旅行してゐるときは隨分きたないことも平氣でやつてゐたが、町へ戾つて來てさ

九月十九日 晴 德化

昨 れはバラスを少しも入れないからであらう。迷案、 た。 張 池には何千とも知れぬ雁がゐたので早速飛び下りてねらつたが駄目であつた。然し一發の銃聲とゝもに數千羽の 何 北と型通 日 の故障もなく快的に走りつどけて徳化の町に入つた。 から 先日は何のわけもなく走りぬけた所だが、少し雨がふるとこの始末では雨季の張庫街道が思ひやられる。こ 雨が降つたので道は埃がたゝす、しかも空はくつきりと晴れ上つたので景色がはつきりと見える。 原先生、 時に飛び立ち、 りに 大井、 此 の間通つた道を行進をつどける、公會部落の北方ではたうとう泥濘に車輪をとられてしまつ 間は歸國することゝなり、他は九時出發、後半の旅程についた。張庫街道を北進するのだが 頭上をガアくと鳴きながらとび舞つてゐる樣は實に壯觀であつた。 珍案を出し合つてやうやく泥濘區間を突破した。 途中の小休止を利用して鳥も少し獲れた、 徳化の手前 これか 5

(344)

少いので落ちついてゆつくりとお話をきくことが出來た。 夜は顧 問 0 玖村氏を訪れ て森林調査の打合せをしたり、 夜はもろ冷えくとする。 徳化附近のことについて色々と伺つた。今度は人數も

九月二十日 晴 東蘇尼特

洗面をする水は手がちぎれるほど冷たい。外は一面の霧である。 八時出發、 東烏珠穆沁出身といふ蒙古歩兵の

造りなども氣持よく手傳つて吳れ、その上支那語をよくし、なかくしよい案内者であつた。 人を道案内のため連れて行くことになつた。この蒙古兵は無口で慓悍な顔貌をしてゐるが、溫良で、炊事や荷

荒れはて」るて草原にわづかに轍の跡がかぼそく残つてゐるのみで、赤色ルート華かなりしころの面影は更にな 間ではあるが、先日とは隨分の變り方である。 たつて進むのであるが下手な街道などよりも行程は捗るし、 ませ尚も張庫街道をどんく一進む、 の尼僧を初めて見たが、どうも變なものである。 道はところく~凍てついてゐる。峠の附近などは秋景色といふよりは冬のそれに大分近かつた。 明安では蒙古兵が練兵をしてゐた。と」で張庫街道に岐れ東の方に入る。 しかし別 に悪路ではないので調子よく行進出來るが、それにしても滂江までが案外に遠い。 ホルトンスームでは大人、子供のラマ僧が出て來て怪訝さうに見送ってゐ 西蘇尼特への岐れ道附近から黄土が赤土に代り、 動揺も少い、 六時に荒廢したサリスー と」からは草原に記された轍をつ 張庫 滂江で中食をす ほ ムに到着、 ん 街道も急に 0 僅 カン

(345)

は外で寢ることにしてテントを張つた。 であつたが、日も暮れたので豫定を變更してこゝに泊ることにした。蒙古兵は親切に部屋を明けて吳れたが我 あつて小さな凹地 道案内のためラマ僧一人を車にのせて出發、すぐ近くのアルシャントスームへは六時半に着いた。丘もあり沼 0 角に廟がある。 ラマ僧は全部巡錫中の由で蒙古兵が駐劄してゐた。東蘇尼特までの

晴 阿巴嗄

様な夢を見て、どうも安眠も出來す、氣持もよくなかつた。八時出發、廟の東方の丘を越すと一望千里の草原で、 夜半蒙古兵がテン 内蒙古の調査旅行 トの近くに馬を繋いだので、 馬が小便をする度毎に目を醒まさ」れ、 小便をかけられてゐる

ドラ 0 日からずつとつどいてゐるものであるが、 舊式トラックながら動揺は少く、 相變らずの轍 トに トがある。 耽り、 もう二日立往生してゐるとのことで、 道 ではあるが その丁度横手に二臺のトラックが衣服を滿載したまゝ停つてゐる。 加藤は鳥打ちに行つたりして約一時間餘り待つてゐると修繕箇所が直つた。蒙人運轉手 質に坦々たるもので、 まるで滑るが如くに快走をつじける。 時間がなくて親しく踏査出來ないのが残念であつた。 餘り氣の毒なので修繕をしてやつた。 五〇キロ位の高速度で疾走してはゐるが、 右側一帶は凹地になつてをり、 東蘇尼特に向 修繕時間中今西は フ 道側に 才 ふ途中 1 K これ Ш 四 何度 は昨

を燈臺に喩 調子が たがる先入感を持つてゐるが、 車上から遠望してゐると船上にゐる樣な氣がする。蒙古の廣大な草原を海原に、所々に立つてゐる よい た人が ので自動車は飛ぶやうに走る、 あるが、 これは質に凱切な譬である。 オボの附近に部落らしいものを見受けぬことが度々 自動車はガタくとは搖れないで、 たドオボがあると我々はすぐに近くに部落が ふわりく あ つった。 と船の 動 ある

お禮をくり返してゐ

たが、

よほど嬉しかつたものらしい。

大きな白いラマ塔が見える。ダルキン廟だといふ、このラマ塔にはあざやかな色彩でいろく

の壁畵が

描

授業の始終の合圖に使ふものでかなり哀調を帶びたメロ 央に爐を築造するのに忙しくしてゐたが、 集つて來てゐて六十人ばかりゐた、 包の學校であるから野外で授業してゐる。 この塔の横手には珍らしくも包が九ツも並んでゐる。よく聞けばこれが學校であつた。 皆男子である、 他の班は讀本を一心に讀んでゐた。 我々が着いたときは作業班は冬籠りの準備であらう、 先生は一人で算術、 デ 1 を發する。 教練、 この學校は教育に理解ある王様が 包の 蒙古文等を教へてゐるとの 中に は喇叭が 近在 あつた、 から學童が これは 包の中 昨

1

年創設され で學費は一切王の負擔になつてゐるとのことであつた。携帶の菓子を學童にといつて先生に差し渡すと早速喇叭 たもので、 蒙古人地帯に於ける最初のかつ唯一の盟立小學校で、 學童は各自の食糧を持つてくるだけ

學校のそばに盟公署がある。 立派な口髭を生した五十格好の上品な老人に、 片言の日本語で迎へてくれた。

を吹いて全學童を一列横隊に整列させ、全員に分配してゐた。

はかつて北京にあつて、 で返事をされて驚いた。 た。そのうちにこの邊にしてはスマートな二名の青年が來室した。覺束ない支那語で話しかけると流暢な日本語 川島浪速氏に師事したことがあるが、日本語はもうすつかり忘れてしまつたと言つてゐ 彼は二ケ年間張北青年學校に在學し、 その時に日本語を習つた由であるが、その上手な

なが 5 こゝで中食をとり、案内役として二人の青年を自動車に乗せて東蘇尼特に向つた。

導的な地位に就くやうになれば蒙古奥地の事情もかなり變つて來ることであらう。我々はいろ~~のことを聞き

に驚いた。彼等は盟公署で事務をとつてゐるのだが、その應答擧止ともに頗るよく、これ等の青年階層が、

0

あり、 てゐたが、結局折角の來訪ゆえ、齒痛で寢てゐるが面會するとのことであつた。王の包は固定式のもので煙突が VC くうなづいてゐた。 いやうな覆ひがしてあつて包としては立派なものであった。王は五十あまりの人で茶色の絹の蒙古服を着てを \pm 身長體重ともにすぐれ、實に堂々たる風采である。折敷のやうな姿勢をして王に通譯する青年の言葉を大き 蘇尼特では王様は丁度居られたので、蒙古青年に面會の斡旋を依賴した。 侯の風格を備えてゐ 入口には小門がついてゐる。 カメラを向けると早速居づまひを正し眼をパチリと瞠り、 る。 齒が痛いといふことであつたが、 内部には貴族の包の常として、朱塗りの四本柱があり、 生憎妙藥の持ち合せもなく、 その眼光は炯々として輝き、 執事の様な人と二、三打合せをし アスピリ 側壁は骨組がみえな ン錠劑を贈 流石

(347)

指

内蒙古の調査旅行

(宮崎、

樣である。この邊の樣な不毛に近い土地で作物の成育を期待するのは無理であらう。 むに從つて益々砂漠的となり、 してあつた。 つたが、王と面會して出て來たときにはもうスッポリとカバーが被せてあつた。 三箇の綺麗な包が並んでをり、王の家族や役人、若干の兵士もゐるらしい。包の側に新型の乘用自動 つたところ大變悅んでくれた。 珍らしく思つて聞き訊してみたところ、 辭去するときは王もわざく一包の外まで出て見送つて居られた。 所々には砂丘も見うけられ、 王様の専用で、 包の横手に垣を作つて葱が 蒙古青年と別れて出發、 2 革が には十二、 臺あ

急坂が た K 0 側をまいて東の方へぬけてゐるが、山をすぎ廣い谷を渡ると溶岩臺地らしい隨分廣い曠野を走る。 ちょつと不似合なテレ つたのは甚だ残 順調には捗らぬどころか、 直徑三キ 間 曹達が 所々 なくゴリノル廟着、 K 時間ほどして阿巴嗄王府に到着、なかく一立派であるが、先を急いでゐたので凡て割愛せねばならなか 結晶 ロば れてゐる。 散亂してゐる。 かりの 念で して 湖岸を眞白にして奇觀を呈してゐる。 あつたが、 スの 圓 溶岩臺地の上に山が噴出して出來たものではなからうか、 V さき程 他の廟とやゝ異り何だか住宅風の建方である。ラマ僧は僅かに三名のみで淋しい廟で 湖が見えた。岸は真白になつてゐる。下車して水際まで行つてみたが、 ある山が目にとまる。 幾度か自動車 これも已むを得ないことである。一 から我々の目を惹いてゐたテレスは東の方へずつと續いてをり、 の後押しもせねばならなか 中腹より少し下方にテレスらしいものがある。 水深はあまり深くはないやうである。 自動車も難行をつぶけること夥しく、今までの様に 時間ばかり進むと、 つた。 毎日朝夕二度づつ水をやり、苦心してゐる 七時十五分日沒、 行手にこの邊の草原 道はこ 曹達 溶岩のやうな 間もなく左手 湖であつ 0 Щ には 0 南

よく

夜行軍である。

ヘッドライトをつけての行進はこれが始めてどあつた。もう夕陽もとつぶりと落ちて

(348)

る。 曇り氣味であつたが、空はすつかり晴れ上つた。質に澤山の星が見えるので何れが何の星座か見わけ難い位 **瞠つてゐるには及ばないので却つて氣樂でもある。自動車の上に寢ころんで星の多い空を眺めてゐた。夕方少し** に見える。「砂漠地と星空」これには何か關係があるのだらうか。 してゐるが、實際同感で、この邊の夜の星空は實に綺麗で、天の河などは實際その名の示す如く河原と全く同樣 も見えない。勝手のわからぬ地區とて若干心細い氣もするが、かうなると變つたものは何か見當らぬかと目を 中央アジアの砂漠地では、星が近くに見え、かつ大きく、澤山見えると記してある紀行文を讃んだ様に記憶 であ

敷きの部屋に通され、 したのである。暫くの間あちこちとうろ~~させられたが結局大蒙公司の出張所に落ちついた。時に九時半、疊 温地におちこんだので急に自動車の動搖がはげしくなつた。そのうちに前方に火が見えだした。貝子府に到着 早速獣糞をストーブに入れて暖をとつたが、獣糞でも割合にあたいかい、然し火持ちは長

(349)

九月二十二日 晴 貝子府滯在

等は有名な十三オボを見たり、廟を見物し、 で、僧侶の敷も隨分多い、廟の附近には立ち葵が多いのが目にとまつた。 今西、 加藤は特務機關へ行き、その近くの善隣協會小學校の學童診療をし、平吉、 午後は商人部落を訪れた。 廟は支那式のものであるが、 釣田、 畑中、 立派なもの

用 那商人のみで、 品 蒙古奥地屈指の宗教部落だけあつて、人馬の來往も今までになく頻繁である。部落といつても役人と僧侶と支 や装身具を賣つてをり、 内蒙古の調査旅行 蒙古住 民は極めで少く、 (宮崎、鈴木) なかには車鍛冶まであり、 その包も附近にはあまり見られない。支那商人は三、 附近の蒙古人はこゝまで來て家畜と日用品とを交換する 四十軒も あり、

日

ある。 のたが、恐らく實際は

これの

倍額位では

なからうか、 してゐる蒙古兵などで、商人によつて勿論異るが、一軒の店で年額二千圓乃至四千圓の賣上げがある樣に話 店はやはり包の方が、蒙古人は寄りつきがよいらしい。尤もこれ等商人の顧客は廟のラマ僧や附近に駐 支那商人達は我 々が聞いたのでは色々のことを懸念して眞

の配給品だが、こゝまでよくも手がとどいたものである。 相を隠蔽する傾が多分にある。大蒙公司は一兩年前、こゝに開店したものであるが、卸賣小賣をしてゐる。 善隣協會の小學校は奥地としては隨分立派なもので、生徒は茶色の揃ひの小倉服を着てゐる。これも學校から 邊陲 の地に止り、 不便不自由に堪え忍び、 寒氣と闘

夕食は大蒙公司の好意による蒙古料理に一同舌鼓を打つた。

て蒙菫教育の衝に當つてゐる日本人訓導の熱と力とには自然と頭が下る。

九月廿三日 曇夕立 西烏珠穆沁

草原の旅をつどけしかもその收得する處は我 鹽を運んで來る牛車隊にも行き會つた。この輸送車列はダブソノールから察哈爾省北部まで約一ケ月以上もの間 から . 馬車に乗つてゐるのに出會つた。貝子廟の支那人部落へ買物にでも行くのであらう。またダブスノー 曇り勝ちの空でどうも陰氣である。今日も東北方を目指して荒凉たる草原を走りつどける。ブリヤート蒙古人 々の想像をはるかに下るものであるらしい。 12 から岩

茂つてゐる。望遠鏡でよく氣をつけて視ると遙か西方には相當大きな林がすつと續いてゐるのが判る。 いで一本又一本と少しづい樹木が現はれてきた。所々に散在してゐる砂地の周邊には標柳と思はれ 午ごろ大夕立に襲はれた。急に氣溫も下つて來た。道の右側にポツンと楡の老木がたど一本生えてゐる。つ る矮 これは十 樹が生え

萬分ノ一の地圖にも森林の標示がしてあるものである。

まつた。日本人がこの廟にゐるとのことなので奇異に感じてゐると、青い蒙古服を着た青年が駈けよつて來て日 時ごろワンゲンスームに到着、ちよつとした廟である。こゝでもやはりラマ僧達に自動車を取り圍まれてし

本語で話

しかけてきた

夕立が晴れ上りかけたとき頭上に全圓の虹を見た。内地の山地では虹が出ると美觀を添へるが、蒙古の草原では 怪しくなり、夕立がふり出した、雨にうち濡れながら何度も車の後押しをさせられるのはかなり苦痛であつた。 引き返したり、戾つたりし、その上砂地にはまり込んで度々エンコを繰り返した。そうするうちに空模様はまた 沁へ直行することになつた。西島珠穆沁への道は暫くの間は好調に走りつどけたが、道が判らなくなり、 た。今西、平吉、 十才位の小柄な上品な人であるが、包といひ、調度品にしても、先日の東蘇尼特の王室に比し數段の見劣りが では青年は王との面會の斡旋や通譯をして吳れた。この包ではもう獸糞を焚いて暖をとつてゐた。 幾らか道よりにはなるが浩濟特王に面會して行くこと」し、この青年もそこまで同行することになつた。 浅井東、釣田は浩濟特に止り、明日西方の森林調査に向ふこと」し、宮崎、 淺井辰は西島珠穆 浩濟特王は六 何度も 王府

(351)

してゐた。アルタイ野菊などは今を盛りと咲き亂れてゐた。 のこと」で既に秋はかなり深いが、北方に位してゐるこの烏珠穆沁の方が却つて東蘇尼特などより草原は青 Ĺ 夕方西島珠穆沁の菩隣協會の宿舍に着いた。島珠穆沁に入ると牧草の成育ぶりはかなりよくなつてゐる。 てゐたのとは違はないやうだ。牧草が豐富だから家畜の扶養力が大きいのであらう。 の調査旅行 (宮崎、 また家畜も多く、 かねて話や書物で聞いたり、 從つて人口 も他の蒙地

見た

蒙地 々と

寧ろ凄さを増加する。

六

ゐる格好などを見てゐると何だか神代の昔に逆もどりした様な氣がする。 最も多く保存してゐる處であるが、こ」の蒙古人の馬上姿や、 K 比較してやゝ稠密らしく包も所々で見た。鳥珠穆沁は蒙古の奧地でも最も保守的な處であり、 長い捕馬竿を小脇にか」えこんで馬を追ひかけて 昔 からの

九月二十四日 晴 ダグスノール往復

宮崎は昨夜來急に發熱したので宿舍にあつて靜養した。 淺井辰、 畑中はダグスノールへ往復する、途中かなり難行つゞきであつたらしい。薄暗くなつて歸つて來た。

こんでたうとう立往生しこゝに露營することにした、こゝは鳥珠穆沁の東ーキロばかりの地點であつた。 となるものは何物もなく、 今西等の浩濟特残留組は王府の西方にある森林の一班を調査し、 詳細な地圖の持ち合せもなかつたので大體の見當で行進をつどけるうち、 午後鳥珠穆沁に向つた。 途中日が暮 砂地 n に陷 目標

九月二十五日 晴 林西へ

成豆を作つてゐる耕地に出て來た。道ばたには道祖神のやうなものもある。 た。 僧等に例の通りとり圍まれながらホルトスムで攝つた。こゝのラマ僧は水を汲んできてくれたり、乳餅を持つて ると南北から山勢が迫つてきた、大興安嶺の横斷口に到達したのである。この邊は雨期には一面の沼になるので 今西等の班 ح 0 々に勸めたりなかく、親切であり、 漫か 平かな池底のやうな所をうね ら草の成育ぶりは段々よくなつてゐる。包もよく目にとまる。 は夜明けと共に附近のラマ僧等の救援により十時ごろ砂地を脱したので、十一時出發、 ~と曲りながら進むがなか~分水嶺らし 廟も相當立派で、塗直したものらしいが新普請のやうに 野良仕事に從事してゐる農民の言で 廣い谷間にはいてかなり走りつどけ い所に來ない。 新しく見え そのうちに

は、 こ」が滿蒙の 國境線だといふが、これからニキロばかり東方が分水線になつてをり、道ばたには荒れ果てた

あるが、たゞ何となく呆氣ない感がせぬでもない。 かなりひどい、しかしこれも暫くの間で、やがて街道も出て來た。 この分水嶺をすぎると道は急に坂道となり、川床を通じてゐる、細くて曲りくねつてゐて、相當の惡路で動搖 これで滿蒙國境の興安嶺越えをしたけけで

なる。 轉車で一人出て來た。この宣教師の言葉によると林西まではもう近いらしい。林西には夕方到着した。今夜はわ ざと支那宿に泊ることにした。 え出した。林西だらうと思つてゐたが、これは教會であつた。隨分立派なものである。この森の中から外人が 滿洲國領に入ると景觀は急に一變する。第一見當をつけて草原地を疾騙するといふやうな藝當は全然出來なく 畑も段々現はれて來て、耕地の間にはドロ柳や楊も見られ、立派な農耕地帶に入つた。 7 ントーや鷄の丸焼きを賣り歩いてゐる小孩の甲高い聲が響いて來て耳につく。 かなり遠方に森が見

(353)

九月二十六日 晴 赤峰

事を急いでゐたから、そのうちには坦々たる道路となることであらう。そうなれで自動車の積載量は倍加し得て、 これが十幾度も繰り返さねばならなかつた。砂地に入ればエンコし勝ちであり、 かつ所要時間は現在の三分ノーに充分短縮出來るであらう。 とすれ違ひ、交通は割合に頻繁であるが、よくもこんな悪路を定期運轉するものである。しかし當時道路改修工 つた。要するに徹頭徹尾惡戰苦闘の一日であつた、この路線にはバスが通つてゐるし、我々もかなりのトラック 今日は惡路また惡路の連續であつた、深く浸蝕されてゐる川を横切る每に黃土の川岸を上り下りせねばならず、 川岸の道はひどい石ころ道であ

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

名な巴林 を午後 時に渡り、 奥地としては小さいながらも割合活氣のある烏丹城をすぎ、 八時赤峰に到着

今夜も支那宿に泊 つた。

九月二十七日 日とは打つて變つた坦々たる道路である道路の補修が質によく行き屆いてゐるのに感心した。 晴 毎にあり、 白ペンキ塗り

0

里程標が

一定區間

要所々々には圍場、隆化、

承徳等への料程がちゃんと標示してある、

こんな手入

れは何れ滿洲國成立後のことであらうが、僅かな年月の間に、こんな奥地が、これほどまでに整備されてゐるの

Ш h れにつけても先蹤者を思ひうかべ、なかでも河原操子女史、鳥居龍藏博士夫妻や志士横川、沖禎介等の足跡を偲 以 を見ると、 で には小さいながら樹木も疎に出てきた。 前から極めて親日的色彩の濃厚な地方であり、心なしか住民まで我々に親切な様で、なつかしく思はれた。そ 感慨無量 その堂 0 \$ 0 × が たる建國の歩調に驚かざるを得ない。 あつた。 この邊は降雨量もかなり多い地方らしく、 バス路線のことであるから別にとりたて、記す程のこともない。 道がよいので好調に快走をつゞける。 野や山の植生も段々變つてきてをり、 喀喇沁に入る。 中食

(354)

ゐる。 。 寺であるが 邊が國境だつたのであらう。 は圍場であつた。 の大屋根も目についた、いよく多倫である。 午後も相變らずか まだ陽も高い ラマ 僧が離散したのか殆んど空家同然で荒廢に委せてあるのは惜しい この町は靜かで落ちつきがあり、住心地の良さそうな所である。 ので廟 すかに色づき初めた野山の間を快走をつどけ何時の間にやら蒙地に入つた。 を見に行つた、 單調な草原を走りつどけてゐると、 流石は清朝の最盛期に建立された廟だけあつて古色を帶び 多倫は埃ポイ泥だらけの漢人部落で、 東方に砂丘が見え出し、 ものである。 周圍は耕地でとり圍 前方にはラマ 步哨 今夜は兵營に宿 た立派な 線のあつた まれ の本堂

事は支那料理屋へ食べに行つた。樓門のやうな家で、皿數はかなり出るが、こゝの味は一般支那料理とかなり變 含が設けられた。蒙古兵の捧げ銃に迎へられて門を入り、部屋には爐があるので早速柴を焚いて暖をとつた。食 つてをり、 概し T 我 々の嗜好に適さなかつた。 こ」の閃電河で捕れたといふ大魚の丸煮などは悪嗅すらあ

九月二十八日 晴 張家口

ので運轉手はホームスピードを出してゐるらしい。 特有の大平原となる。 狀高原を驀進しつどける、 多倫北東方の砂丘地帯を調査する爲め、多倫に留ることになつた釣田を残して一行は八時出發、 快走また快走、 軈て道は波狀地から丘陵となり、 草原につけられたシ ュプールをどんく一走る。今夕は張家口入りだといふ 圓形の低山も出てくるが、 正黄大旗附近からは蒙古 ゆるやかな波

(355)

第一回 ば準備に長い間ごたくし、蒙古に來てからは忙しく駈けすり廻つた。 宵やみの中を張家口へと急ぎ、八時張家口に無事到着、 つたにしても、 五分ノ一位に縮少してしまつてゐる。五時牛張北到着、德化へ森林調査に行く平吉と案內の蒙古兵をこゝに殘し、 た驢馬、 沼 が左右に出現し、 の概觀的 車など人馬の往來は急に頻繁となつてくる。張北のすぐ北方にある池は一ケ月前に比 行程や時間の都合上調査は思ふに委せず割愛を餘儀なくされたことも一再ではなかつたが、蒙古 の調査としてはこの程度で滿足せねばならぬであらう。 ノール地帯に入る。先日一寸足を延した二臺も間近い。二臺をすぎると自轉車、 これで今回の蒙古奥地旅行はとにかく一應終つた。思へ 從つて踏査の區域は必しも狭小ではなか してその 荷をつけ 不面は約

荷物整理、文献調査に充てた。 九月二十九日 晴 張家口滯在

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)

0

九月三十日 晴 張家口滯在

北京に於ける調査事務の關係上淺井辰は北京へ出發、一同は張家口に殘つて引つゞき文献の調査や、 關係方面

の挨拶廻りに充てた。運送屋の包装作業がなかく一捗らぬので氣を揉まされた。

十月一日 晴 北京

汽車は思つたほど混み合はなかつた。 タ方北京着、 兵站宿舍黄城館に入る。

十月二日 晴 北京滯在

十月三日 曇 北京滯在

北京滯在中は主として文献調査に從事した。

十月四日 晴 天津へ

屋であつた。 混み合つた汽車にゆられて夕方天津着、やはり兵站宿舍新族社に入る。事務室を改装したやうなホテル式の宿

2

夜は朝鮮銀行天津支店にて蒙古奥地事情につき簡單な報告講演をした。

十月五日 晴 航海

ので船室からあまり顔出し」ないで、むつかしい話に花が咲いた。 今度も遼河丸であつたが特別三等室を我々で専用することが出來たので却つて具合がよかつた位であつた。

寒

十月六日 荒天 大連へ

夜中から船は大分揺れてゐる、 スピードも一向に出ない。起きることも出來す、朝食も、中食も食べられない。

遼東半島の突端を廻るころから動搖は次第に少くなつたが午後三時大連入港の豫定が、やつと夜の九時になつて

港に辿りついたが、檢疫の關係で今夜は上陸出來ず、大連の灯を見ながら船中で一夜を送つた。

十月七日 晴 航海

原を滑るやうに進む。 九時遼河丸から上陸、 直ちに手荷物を纏めてうすりい丸に乗りかへ十一時大連出帆、 昨日に引きかへ穏かな海

十月八日 晴 航海

今回の旅行についての檢討座談會を船室でやり、淺井辰が記錄をとつた。

十月九日 晴 門司入港

十月十日 晴 京都へ

午前七時神戸上陸、三ノ宮から汽車で十二時京都へ一同無事到着した。

(357)

十月十一日

一條三島亭で解散式をやつた。 隊員の外に關係諸先生や現役連も列席した。武後先に歸學した現役班の八ミリ

映畵の映寫があつた。

内蒙古の調査旅行

(宮崎、鈴木)



空氣減壓に對する人體の

1 筋肉勞作時に際して

抵抗能

力

所に於ける大氣の酸素分壓に對して 同 耐え得るか 甚だしき高所即ち强き空氣稀薄に對し人體が如何に 人に就ても時に由りて大いに異なる。此の事は高 の能力は個人的に異なる事は勿論で、 如何なる 程 度迄耐 また

組織 え得るかの能力を意味する。 でもある。 への酸素供給と諸器官が酸素の需要如何と云ふ事 高所に於ける勞作時に酸素の供給は身體靜 故に此の問題はまた身體

11:

時に於けるよりも割合が少ない。

即ち勞作時には靜

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(別)

額

敏

はその需要を滿たし得ずして酸素缺乏を發生して、不 は之が一○倍をも要するべきであるから、 快感を生ずる、 止時よりも酸素の必要は五 此の現象は静止時に於て發するよりも 一六倍或は强度の勞作時 高所に於て

遙かに高度低き處に於て起る。 な機構によりて行はれる。 此の際勞作せる筋肉への酸素供給増加は極めて 全循環系統は其の勞作 微妙 の程

度に從つて促進が並行して行はれる

0

みならず、

更に

肉勞作時には開き血液の循環從つて酸素の供給に參與 身體靜止時 して來ると云ふらそれでも其の血液從つて酸素の供給 には殆んど閉塞して居る毛細血管さへ 8

(359)

促進はその需要と均衡を完全に保つこと能はずして、

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田

K 共働者が 其 0 斯 事は既に高度低き所に於て發生す。 0 かる現象の 爲めに物質代謝に亂れを生じて來るのであ 研究せる處に由ると 2,100m の高度に於て旣 發生を認めてゐる。 Zuntz及び其 る。 此 0

高

山に於ては血液増加促進のみでは組織への酸素供

する事 ては此 給を決定的 强度の苦痛が起らざる時でも勞作せる筋 勞作せる身體中に 素供給に困難を來し、 的 さる」も、 現象を惹起することが屢 は、 の事は云ひ得る)、高所に於ける酸素分壓の減 組織中には或る程度の酸素不足を來す故に M に滿足せしめ得られ 液より組織 は 般 假令毛細管に於て酸素供給促進 K へ酸素の移行 m. 1 あ 行の る。 ない 促進が促され 但し かぶ 弱り、 肉中に於て病 低地 るが 即ち酸 K 在 小 b

8

得る。

Dyh-

(360)

身體靜 止時に際して

消 る。 時程には身體機能に烈しき變化は起らず、 費は正常値より高まる事が普通である。 身體靜止 mj して 高所に於ける身體靜止狀態に 時にも高度に對する抵抗力は個人的に異な ありては勞作 その値は勿 而し酸素の

> 論 個 人的 に種 べて 異なる。

は種々あるが就中生理 かな呼吸に由りて肺氣胞中の酸素分壓値を高 大いで循環的に大なる價値を有する、即ち此 空氣は大部分肺氣胞に達すること少く、 である。淺く速かな呼吸は効果少く、 ことが多い。 血色素が酸素飽和度を高め又動脈中の酸素分壓をも高 に使用せられず。之に反し深く且つ緩かな呼吸は効果 身體靜 止時に於ける組織 殊に呼吸の型並びに呼吸量 的機構及び解剖學的 への酸素供給機能の過程 其 代謝 の呼吸による に注意すべき 關係 の血 0 K 深き 有 による

時所謂 るだけ深き呼吸を行ふことによりて暫時にして活 之を推獎して居る (ご)、又 Philipp Borchers で實驗して其の効果あることを體驗し、Hoerlin も亦 力が復活すると云つて居る (3)。 Wieland は之を高所 renfurth の Himalaja Expedition に於て高 此の事は實際に高所に於て必要なる事であり Atemtechnik の重要性が强調せられ、 所 0 出 10 南米 在る

から

あ

る。

量 たが 此 に就 0 問 T は前 高 題 は 地 0 報 肺 住 活 高 量 民 所 K 0 肺は自 8 K 於ける人體呼 關係する事で 然の 必要に應する 吸 あ K る 就 がい 此 て 爲め 0 To 肺

ある。 節する爲め 此 0 呼吸 其の差違は高 0 機 酸素使 能 0 異 なる 废 用 0 差は餘 事 K 對 し肺 b 問 胞 題 K 中酸素分壓 は ならぬ 樣 を調

先天的

K

呼

吸

量大なる

樣

に出來て

居

るいい

n 0

20(5)0

氣中の等 等しく且つ呼吸する空 壓を發生する) 來ない。 肺胞中の しき酸素分壓 下 0 は輕 表 は

(之が

隊員

中六名の平均

値

の調査

せる値

は

値

は 高

IF

70

あ

度 1,600 m

芝

場所及び高

Berlin, 34. Wien

Brienz Rothorn,

Cold' Olen, 2900

Gnifettihütte, 370

Monte Rosa 頂上

補 K

償

作

崩 T

を

發 方

生 0 肺が

L

狹 狭

小

され され

た肺

は空氣

量は これ

小 K

3 對

より

小

た場合には

す

ガジ 3 る 症

Brienz, 500.

居

る 兩 b

叉條件

0

悪し 致し

度 m.	酸素分 壓 mm.	
	靜止時	勞作時
150.	101~109	100~108
	81~ 94	90~100
2300.	62~ 72	74~ 81
).	57~ 69	64~ 71
00.	54~ 56	57~ 64
4500.	38~ 61	55~ 63

時は 2,200mに於て、 叉好 條件 0 時 K は 4,560m 0

高

度

直接觀察は で 移行即ち酸素 呼 初めて苦痛 吸 作 用 がい Krogh 感が起 問 の透過 題 となる限 0 つたと云 測定法即ち 量を測定することによりて り空氣 肺 稀 壁を 薄 K

透過し

T

行

對

す

3

抵

抗

力

Barcroft せ Peru 高 地に於て之を應 用 L T 測 定

行

つたが被質驗者

0

中

極

く僅か

K

苦痛

感を 0

訴

る

何等

の異狀

を示

さぬ者に於ても約四

透過

系

が かい

增

(361)

肺 的 加 6 過 毛 世 りと謂 程 亦皆高 細 IM 0 管 爲 き 8 3. 滲透 酸素移行 K 更に 呼 吸 率を有せりと云 高 面 積が 不充分となる。 所に於て健 制 限 を受ける様な場 3. 康狀態を保 若し 汽胸 何等 症或は水胸 一者に る合に かい 0 病 就

續せんとする能力を發生する。 自 から 然 呼 K 吸 行 1 得る方 は れる。 0 そし 肺 K は T 肺 m. 液 0 毛 豐 进 富 細 だしく 血 10 管に 集まる様 酸 肺 素增 0 呼 K 呼 吸 加

高所に於ける人體の抵抗と順應及び 高 14 病

衙

TH

を狭 血液循 著しく亢進せられることが實驗上から知られてゐる。 なつた時はこれに適應する呼吸を生する様になる。 m に對する抵抗の の爲めに L い小され 肺 環 血液中に收容せられた酸素の輸送が血液並びに 呼吸器に於ける夫れ自體の能力は、 の適合せる狀態によりて行はれる限り良好と た場合ですら空氣稀薄に對する抵抗 素因ではあるが條件の好否を決定す 空氣稀薄 能 力は そ

民が同

ア

南

米

る要素ではない。

かい かい 員 Expedition 失ふ時は を呈する事多く、 分壓が等し 頂上に於ても完全に健康狀態を保持する山案内人は隊 或は 中强 Zuntz 及び其の共働者の研究に依れば Monte Rosa 度の 中等度の高所に於ても不快感を發生し貧血症狀 血液量少量なる者は組織 此 カン Щ の症狀を發す、 に於て隊員中 つたと云ふ。 岳病に罹つた者と殆んど肺氣中 健康人も何等かの原因に依り血 治療の目的で瀉血せし者は Dyhrenfurth 血液中の血色素含有量少き へ酸素供給少き事は明 0 Himalaja 0 酸素の 液を

> 量の影響を精しく研究してゐるが彼に依ると適 血は呼吸面積の狭 るものが少くない。Geruti (5) は動物實驗により で到達する時以後數日にして心臓衰弱を來し 瀉血は酸素缺乏の 其の 共 國 他の原因に 和 の主都 Bogotá(2,700 m)へ汽車 國 コロロ 小には何等の影響を及ぼさぬ 7 ビア あらゆる症狀を呈する より强度の貧血狀態に在る低 0 醫師 0 報 告に 中六時 依 K 遂に 到 机 間 る。 から ば 度 大量 血液 死す 0 行 地 7 住 卽 滇 程 ラ

で既 m.m. 保持する者は(普通人は五 個 症を呈するが、血液一立方粍中三〇〇萬個 0 K 赤 高度 1,800 m で同一 此 血球 0 症狀を發生すると云ふ。 を保持する者は氣壓 690 m.m. 一六〇〇萬個) 症狀を發生し の既 僅 高 カム に氣壓 0 赤血球 度 K Ŧī. 800 600

萬

康なるものに比してその身體の恢復が徐 又減壓狀態より普通氣 歴に戻す場合に貧血 なで ある、 動物は健 例

此

の不快感を起したと云ふ。

ち不安狀態に陷り、

呼吸促進、

衰弱、

叉其の早

期に於

健康者に在

0

て反射刺戟感受性の消失を發すと云ふ。

ては氣壓

300 m.m.

即ち高度7,450mに於て酸素缺乏

な

ば 健 康 動物 は氣壓 130 m.m. 高度13,000 m 1 於て運

在りて 動 不 可 は氣壓 能 に陥 るが 300 m.m. 赤血球數二五〇萬個保持 に於て、 叉血 球數 の動物 Ŧī. 〇萬 個 K

00 0 K 一氣壓迄氣壓を戾した時漸く運動し始めると云 就 快感無くして到達し得る高度は心 0 は氣壓 ては氣壓 600 m.m. で、三〇 460 m.m. に於て、 一〇〇萬個保持の 萬個を保持するも 臓能力と循環系 3 0 6

統器

官の狀態が重

一要なる要素である。

る壓 諸器 b 管を適宜 8 酸素を要求せざる器官に對してはその 同 心臟機能 官に 時に充分なる機能を發揮せずともよき部分即ち餘 力を保持し 卽ち適當なる血行運動 對 擴張してその筋 の强く、 し豐富なる血液を供給爲 血液を最 循環系統狀態良好なる時は活 肉 も必要とする場所に於て 神 へ酸素の供給を充分なら 紅經機能(の作用即ち必 L 得 毛 る 細管 かい 5 を縮 毛 要 で 動 小 L 細 な あ 0

高 所に 高所に於ける人體 対する 耐容 能 力は毛 の抵抗と順應及び高 細血管の 性 能 山病 から 重大なる (額田

せしむる作用を掌ることが

必要である。

此

此

0

3

毛

細

血管

の特

性

役割 年になると耐容性は減退を 齢と共に退化衰弱を來すのが普通 なる機能 其の變動範 を演ずる。 を發揮 でする事が | 国彈 その毛細管の性能はそれが 力の 正 出 來す。 一來る。 常なる場合に於て 年齢と共に發生 T 此 あるか のこう 5 0 E 常 因子は年 0 み完全 般 0 する 構造 K 老

進を來 要に應じての に於て假令靜止狀態に在りても呼吸及び血壓 毛細管先端部分硬化過程と共に組織壁を透過する酸素 の滲透作用は減少し、 i, 勞作時には更に 血液供給增 毛細管擴大力も衰 加 此 0 能力衰 の現象烈し く起 老年者 へ、以つて必 の異 0 カミ は就 狀 高 亢 所

(363)

小組 6 中 中 のであると云ふ。 織 樞 K の毛管硬化と冠狀血管の 6 硬化過程發生を來す。 又最大勞作能力に 循環能退化 關係する K 原 周 因 する

等度 なる。 氣象的 0 の年 の高所に登つ 年 これ 齡 作 0 齢と共に高度に對する耐容性の降下減 VC 用 他 闘し に馴 \$ 年 T 齡 た時老年者の呼吸器は若年者 致性と云 の増 Loewy 加と共に影響の繼續 事 自らが觀察し \$ 加 入する。 T 居 尙 性 退は尚 0 る。 75 長 如 時 中 性

50

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 へ額 田

此

若年者のそれよりも永くを要する。 狀態亢進のまム機續する。 低 の値も低地 10 n る時 0 速かに戻らずして、 値より増し又その正常値に復歸するに 又之れと同様に脈搏數と血 而し一時的に低地 其の後或る期 間 は

に基くもので、却つて若年者よりも毛細血管への血液 よりも降下する。之れは老年者特有の體質の に降るが如き場合には之等の種々の値は若年者のそれ 馴致作用

る硬化作用は個人的に甚だしくその年齢に差違が有 齢に左右せられないと云はねばならぬ。 る、年齢六十乃至七十にて尚矍鑠壯者を凌ぐものあり、 あると云ふ。故に高所氣層に對する耐容性能は直接年 年齢と共に起

輸送が良好となり馴致作用が發生する

K

基 くち

ので

長期間蛋白質少き物を攝取するに勉めたと云 Matterhorn 及び は六十七歳にして、 1,800 m 或は更に以上の高所に登り、其處に永く滯す し彼は此の能力を發揮するが爲めに食物攝取に注意し るも何等の身體に異狀を來さゞる者が多い。Rose(ひ Dufour Spitze に登攀し得た。 何等のトレーニ ングを行はずして 3. 而

攀

に際して隊員中最も頑張りの强かつた Welzenbach

は高度等しき所 動の範圍は又一方馴致によりて變り得る。 て旅行したが、其の間屢 る因子は同一人に於ても時により變動があり、 Andes に於て種々なる高度の地點を幾度か横斷し の高所氣象に對 (4,560m) して の抵 々山岳病に罹つた。 に数年の間に屢々滯在した 抗能力に影響する種 Knoche (7') 叉 此の Zuntz

は

態、 罹つ が、 と云ふ、 たも 其の間種々なる程度の山岳病に罹つたが 耐容能力も變り得ることは當然である。 同一の高所に滯在するも短期 のが最も重く其の後に於て漸次輕 間中に身體の狀 症 此 C 最初に あ 0 身體 つた

臥する場合は座し或は立つ場合よりも不快感を起し易 いと云はれてゐる。 の狀態は、 例へば姿勢を更へる事によりても、 其の姿勢の變化により呼吸器と其 特に横

特に苦痛を感ぜりと云ふ。獨逸隊の Nanga-Parbat 登 れる Poppig ® は彼が 充分發揮出來得ざる狀態となる為め の呼吸型に變化を及ぼす為めであり更に心臓 Andes K 在る間 C あるとも 每夜横臥 の活動 の時 6

Wieland さへも第七天幕中 (7,200m) で呼吸困難に苦

4 他の素因とその作用 しんだと云ふらこ。

すである。而し其れ等の要素はまた個人的に感受性を K 烈なる空氣の移動の如き外的素因が呼吸に、循環系統 な因子も關 今迄述べた體內的要素の他に尚高所に在りては氣象 種の妨害作用を呈し、 係がある。 例 高所耐容能の低下を來すは へば高所に於ける低温、强

至は高山病の發生する場合と然らざる場合とある。 謂はれる。例へば十九世紀初期に於ける高山旅行(1817 又大氣中の電氣的狀態も身體の耐容性に影響すると

件悪しき時は同一高度に於ても發生し得る不快症狀乃 に差違がある。故に身體の狀態等しくとも其の外的條 異にするは勿論、

同一人に於ても時に依りて其の程度

年 Govan, 1834年 Cunningham, 1855年 Häusinger 近代に於て身體耐容能は放射能物質に關係すると謂は れて居る。其の放射能の强く發する場所では耐容性 の報告によれば之に闘する事柄が現はれて居り、

所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額田

4,550 m の放射能强き場所に於て高山病に罹つたが 氣現象に關しては精しき何等の關係を見出し得なかつ も發生せざりしと云ふ。 降下を來すと云ふ。Knoche (10) は Andes に於て高 た (Durig 及び Zuntz, Durig, Reichel 及び Kolmer, ⊌ 1,100 m 高き高度 5,600 m に於て何等の不快感を 而し此の報告に依れば此の大 更

Ducceschi (11))°

際的な研究は確定した結論に達して居ない(19)が Kor-

(365)

故に大氣の電氣現象の身體に及ぼす影響に關する實

fe-Peterson の研究に依れば被實驗者を强くイオン化 き陰性帶電を與へたが其の際不安狀態、心悸亢進、血管 を認めることは出來ない。又 Grobley は被實驗者に强 した低地の大氣中に置くに脈搏、 血壓等は何等の異狀

と云ふ。Loewy 及び Plesch の實驗は Emanation 量 又屢々絞窄感と頭痛を發し、又往々血壓降下を起した 實驗によりて被實驗者は皮膚に冷感を感じ顏色紅變、 運動神經の變化を招來したと云ふ。 Kunow は同様の

血液循環に

2,000 M.F. を含む室に於てはガス代謝、

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病(額田)

の變

化を來さどるが

心臟收縮期

の血

壓が著

しく降下

出來ぬがMaessの實驗に依れ 給良好化 る。 緩慢となり脈搏不整を來せりと云ふが之は高山に於け i. 度に對しての抵抗力の強化する方向に變化が起ると云 る大氣の如 を有する液中に入れる時輸送する血液量減少し、 る事を見た。 叉同 此の實驗によりて心臓に對する作用は何ふことは 人は脳血管の擴大を認め、 き强き放射能と比較し難い の實驗に依れば血液分布に變化を來し、高 必然的 此の實驗より心臓機能に低下を認め得 K 肺 0 血管の縮少を誘起すると云 ば蛙 の小臓はEmanation 脳に對する血液供 點が多い。

4 內 が 變化 外部 部的 外的 を精しく調査してその解決後に非らざれ 狀態 極りない 的條件に 條件の身體耐容性に對する關係は、 進だ 10 關 多様性に關しての解決は出來ない。 難 相關連するが故に此 係することは勿論で、 カン L Vo 身體內部 的 の關係を確實に述 な諸 此 0 內部 第一に 條件と耐 ば外的な而 的 身體 條件 容

5

個

人的

差違

吸困

難、

眩暈感、

心悸亢進、

殊に不快感を發生するこ

者に就ては高所に對する抵抗性の増加如何を調査する 致せる者に就てゞあるかである。 に未だ高所に馴れざる人に就てど 事に就ては二つの因子を考へなければならない。 必要がある。 大なる高 度に 耐 え得る程 度は 個人的 旣に高所に馴致せる あるか、 に著しく異なる 或は旣 K 馴

るか、或は直接に自らの勞作無くして例へば乘馬、轎、就で述べると、其の高所に到達する方法如何が大きな就で述べると、其の高所に到達する方法如何が大きな

汽車等によりて登る

かに依り異なる。

る。 0 他方に於ては登山鐵道で到達する兩試驗を對照せば此 作して登る際は高所に對する抵抗能力はより大とな 症狀が著明 關係を知ることが出來る。 今勞作せる筋肉中に酸素缺乏するが如き卽ち山 これは同 に現はる _ 0 高所に 7 程 登る時一方に於ては徒歩で、 度の高所に登る場合、 卽ち登山鐵道 K 依れ 自ら勞 ば呼 一岳病

(366)

とが せずして登る場合は此の様な作用は起らない。 れによりて酸素供給が滿たされるが之に反し自ら勞作 行により呼吸及び循環系統に刺戟作用が與 不快感を起すことは甚だ少ない。 多い が、 之に對し若し徒歩で登る場合には斯かる 此の事は勞作する登 へられ、 2

對し、 高所に於て屢々見る處である。 た方が耐抗性が大である。勞作登行には不快感を伴ふ 身體勞作時に對する抵抗能は著しく低下する。これ か或は最早やその供給が完全に滿たされざるに到れば 在りては身體靜止時に於て恰も酸素供給が滿たされ し高度が相當に高く3,500~4,000m以上の高所に 斯かる高度に對しては自らの勞作なくして登つ Himalaja 其の他の巨大山岳遠征に際し著しき K る

異狀を生ぜずして殆んど全部到達することが出來る。 を生することなくして登り得る。然るに登山鐵道を利 此 0 中少數は更に 康人は徒歩で 3,000 m 迄の高所には殆んど何等の 5,000~6,000 m の高所に於て既に尠なからず呼吸 の高所に迄不快感

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額田)

攀して登攀者は登行に甚だしく困難はしてゐるが何等 者もある。 くの者が山岳病に罹り、 一難、眩暈、身體衰弱感を起し時には 3,400 mに於て多 (8,540m) 迄到達して居るが、 英人の Himalaja 遠征に際して高度 中には貧血症狀をも發生する 勞作しつ」徐 々に登 28,000

呎

困

狀の發生は比較的遲く高度 5,000 m に飛行して漸く此 phreys(こう)。飛行機によりて上昇する場合には病的 低き位置に當る氣壓で既に失神狀態に陷る 減壓空氣中で高度 耐え難き病症は發生して居ない。 28,000 呎に相當するよりも遙か 然るに勞作せずして N.

(367)

る がご 出せば甚だ不快感を惹起するから此の範圍を越へては h によりて山岳病の發生の原因に他の電氣的因子が加は の症状を發生する位のもので、 極めて重大な關係を有し、搭乘者が機上で活躍し得 爲めには五 得ることが考へられる。 ○分間に 5,000 m 以上の上 飛行機による時上昇 斯かる種々の登行 昇 速 の速度 度を

6 適應試驗 危險である。

所に於ける人體の抵抗と順應及び高山 病 へ 額 田

最

近 0 飛

行機搭乘者に對

し高度適應試験

を行

CA 如

何

て適應の

限度を決定するかは航空技術の發達した

\$ 今日甚だ大切な問 題で ある。 叉今後の登山 方面 に於て

試驗を豫め行ふ必要がある。DyhrenfurthのHimalaja 巨大山岳への遠征に對しては隊員の高所對應の體力

を爲して如何なる高度に相當する氣壓にまで耐え得る

Expedition の器師

Richter

の報告に依れば鼻で呼吸

つた。Kroghに依れば肺氣壁を滲透し得る酸素量を測 かを調査した。 る方法を用ひて居るが、 迄も之を續け得、次に位する者は 5,000 m 其の結果、甚だ優秀なる登山家は7,000 此の方法は科學的で又種々の 迄であ

あるが 經驗に基き實際に適合する結果を得るから重要な法で 實際的に複雑な裝置を要するが故 に實用的 K

不便が多い。

更に便利な方法は肺氣胞中の酸素分壓

を

て相當の馴致作用を起す。

用し 測定し之が正常値 を測る方法である。 のであるが、 た方法 (14) 信賴性は餘り高くない。 は呼吸出來得る 極限に於ける酸素の量 (13) 即ち大なる一定の空氣袋から呼吸 と如何なる 變化ありやを知るも 米國空軍省の採

か

事であり、

實際今迄の巨大山

居て上層

(而し今

入器を携帯することも能率上大い

飛行に於けるが程に酸素吸入は問題ではない に於てすら多く酸素を使用せずして行はれて

其の結果に依ると飛行機搭乘者中最適者は 5.2% 非適 しき變化を來し失神する一 に連續して呼吸し、 者は11.1%で、其の試驗時間は最長者三七分、 の發生を其の限度として、 を行ひ漸次發生集積する CO2と漸次減少する O2 遂に脳或は心臓機能の何れか 一步手前 其の袋中に残るO2を測る。 の衰弱 の著しき徴候 最短者 を共 K

(7) 人類により到達 し得べき最高

酸素吸入を行へば高所に於て發生する酸素缺乏を除

五分であつたと云ふ。

行機によりて上昇するとは趣を異にし、自ら勞作して が兹に云ふ巨大山岳への登攀に際しては、 くことが出來て到達され得る高 度は 高 まる 氣球或は飛 が 我

又背負荷物の關係上酸素吸 岳の 々で に考 あ 最高峰附近 b, なけ 其 th 0 間 ばなら 0 登攀 に於

登るのであるから登行速度は徐

迄の Himalaja 遠征には酸素吸入器は携行されたが)、

H. V. Schrotter (15) は計算上から人類の到達最高度

を算出した。其の後 V. Dringhofen (10) もこれを算出

乃至 14,000m (Dringhofen, Jon-Gbloed C140) である。 酸素吸入により到達し得る最高度 13,000m (Schrotter) したが兩者の値は一致してゐる。彼等が計算によると

m.m. を要する。故に之等の全壓は 130~140 m.m. は數 m.m. 最好條件に於ての酸素分壓は 45 m.m. ペ? 35 m.m., 水蒸氣分壓 47m.m. (37°に於て)、窒素の分壓 害を惹起しこれが大體外界氣壓の限度である。 周圍の大氣壓がこれ以下になることは身體に大なる障 であるから身體に重き異症狀を呈しない爲めには であり、又身體の方から考へれば肺胞中の CO2 分壓は 14,000 m の高度は氣壓は海面上の 1/6 で約 130m.m. 50 て

の高度に相當する減壓では重き無意識狀態に陷ると云 の風胴實驗に於ても假令酸素吸入を行ふとも 14,000m Guglielminetti 及び Aggazzotti (18) 及び Gillert (19) 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 Berson 及び Suring は氣球で 10,800 m (額田)

> Souzek が 11,700 m, 1929 年 Neuenhofen は 12,740 m 12,950 m 迄、飛行機で上昇した記錄としては 1927 迄、1926 年 Callice は 12,400m, 1929 年 Gray は

つて居ないのである。 8 空氣稀薄による活動能力の低下と

等の記錄は人體の周圍は直接大氣に晒らされてゐるの 迄、1930年 Souzek は 13,160 m 迄上昇してゐる。之

であるがその周圍をある一定の壓力を保たす装置を行

酸素稀薄の呼吸

(369)

氣を呼吸する場合は空氣稀薄の場合よりも更に酸素分 ser (%) は酸素のみの分壓低下即ち酸素の特に少き空 降下するから此の兩者の作用が働くことになる。Kai 酸素の分壓低下とは特性的な違ひがある。卽ち大氣壓 の低下は勿論酸素の分壓をも低下せしむるが又全壓も 空氣の稀薄即ち大氣壓の減少と酸素の少きこと即ち

よりも酸素含量の稀薄なるものを呼吸する方が爾後作 又等しき酸素分壓に於ても空氣稀薄なるを呼吸する 壓の低きに堪へ得られると云ふ。

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額 H

場合は實驗動物は倒る」も酸素稀薄な空氣を呼吸する は甚だその性質を異にする。 用 によれば空氣 が 强く且 つ機績的 稀薄な條件で酸素分断。30~35m.m.の であり、 又兩者夫々の場合の症狀 Margaria (21) の動物試

場合は酸素分壓10~11m.m.に於て漸く死すると云ふ。 結果には變りないと、又空氣稀薄な場合には 此 この際は 迄抵抗力を高める、之はガス代謝を旺盛とするに CO2 の含量が 0~11%の間に含有されても CO2 は

基因するが爲めと考へられるいる

又空氣稀薄な場合には酸素缺乏が高度に

なれば

不安

分に はれ して 分壓 K 狀態に陷り次いで局部的、 起すことなくして呼吸緩慢となり途 ・痲痺を起し遂に死の轉機を採るが、 知られざる因子の含有して複合作用を及ぼすもの る症状 酸素低減の場合には動物は初期は安静であり、 故に酸素の分壓 25-27m.m. に到つてよろめき初め次いで痙攣を には単 獨 に作用するものでなく のみの低下は空氣稀薄のもとに現 更に全身的な痙攣を起し急 K 空氣を漸次增 死 K 他の未だ充 到 おると云 0 加

とする順應の現はる」は當然である。

1

迅速なる順應

あると Margaria は云つて居る。

で

於ける人體

高所に

0

順

應

高所に於ける氣象中にも其のまゝ云ひ得る事柄で、 總ての變化は皆その 呼吸系統 所に於ける能力の向上をなさんと勉める作 する機能變化を發生し、低減せる O2 に之に對向せんとする作用を誘起し、 等の諸機能) 種なる榮養機能 する變化が誘起せられる。空氣の壓力低減に關して種 所の空氣稀薄、 る補償現象であると云はれて居る(Pflüger)。此の事は 變化が起る、 身體器官中に於て一定の必要によりて誘起せらる」 K 6 又物質代謝に於ても之の條件に卽應せん に於ては、外界の狀態に對して身體各部 光線の照射等によりて之に卽應せん 血液並びに其の循環系統に (呼吸消化、 必要なる狀態に即應せんとして起 循環、 吸收、 分账 之に卽應せ 分泌、 に順 8 用 亦 から 同様 起 生殖 んと 0

(370)

K, Ŀ 記種 其 への發 々なる機能に於ける 現 1 遲 速が ある、 順應過 卽ち或る部分に於ては順 程 が 現はれ る 0

叉高 應作 度 崩 の變化に從つて其の發現過程に遲速がある。 速 カン K 又或る部分は比較的緩慢に發生する。 順

應の最 從つて動脈 時に於てそれは甚だし 静止狀態に在りては呼吸の亢進は程度少く、筋肉勞働 も早く現はれるものは呼吸に於てどある。 血 中の 02 分壓 S 肺氣胞中の の増加は順應作用中甚 02 分壓 0 亢進 身體 だ重

人が

116~142%の増加せるに對し住民は82.

-92%

0

地に順應せる者に就ての値よりも著しく低き値即ち歐

要なる意義を有する。

2

緩慢なる順應

る。 一一三週間を要する。 赤 中等度の高所に於ては赤 血 球敷の増加は高所順應の緩慢なるも 高度 4,000~5,000 m 血球數の最大値に到 0 或は之れ K 屬す るに

以上

0

高

所に於ては二一二・五ヶ月も之に要する。

而

L

る。

て此 於て六五〇萬、1,800 m に於て七〇〇萬、5,500 m 以上 ける人體血液」三頁に於て述べた如く高度 1,500 m に に於て八〇〇萬を少し越へるが其の增加率は少い。 0 赤 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 血球數の増加には一定の限度あり「高所に於 (額田) 叉

> ことが 球数の mの高地 m. よりて認められてゐるいい。 一色素數も高度と共に増加すれども、 高所馴致に大なる關係の 増加とは並行はしない。 に住む土着民に就き調査した結果歐人で其 Himalaja 地方高度 4,600 あることは多くの人に 而し赤血球 其の 0 增 增加 加率 する は 0 IfIL

ねるも 増加に過ぎない。 强き活動能力を有する。之には何か のと考へなけれ 而も其の土民達は歐人に比し ば ならぬ 他の順應が 遙か 起 0 7 K

80 高 に總血色素量と總血液量が 度 8,000 m 迄殆んど規則正しく比例的 ある。 に變

化

(371)

容易に組 に至る、 重要なる意義を有するものにアチド 順應現象に關係するも これによりて組織 総 即ち血液酸性側 へ酸素 を與 ふることが出來る、 1 の酸素供給を有利 ^ のム中實際的並びに理 反應偏移せば赤血球はより 1 30 ス 之に に導き得る 現 象 論的 對 から あ K

1

Barcroft (23) は赤血球の反應が

アル

カ

リ性に移行すれ

に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額 田

ば、 類を到 叉 他 達可能ならしめる能力を附與すると稱 原 因 との 1936 混 合作 用に Everest よりて甚だしき高所迄 報告中に於 た。

移行 叉 又血液中の炭酸量の減少を來し血液はアルカリ性 に放出すること甚だしく、此の肺胞中の に變る。此の深き急速なる呼吸は肺胞中 高所の空氣稀薄なる所では自然呼吸が深まり急速 せし 8 る。 斯か は る場合には 年 CO2 遠征 K 0 COgの消失は よる刺 CO2 を體外 戟作 へと 用

りては 保 カリの Œ 常に保たす爲めには腎臓の作用により血液中 10 此 h の必要なる深き呼吸を繼續して尚循環系統 過剰は排泄 とする補償作 血液反應には補償作 せられて血液中の反應を常に 用 から 起 用が起る。 る。 斯 0 如 くして高所 をして 一定に のアル に在

弱まり

深き速かな呼吸は止まる様になる。

促進

につき少しく

述べる事とする。

中の 酸素は此 る事は前文「高所に於ける呼吸」 處に 分壓よりも高 分泌せられて動脈 く保持せられ 血中 0 (Bohr, Haldane 中肺壁が力透過 O_2 分壓を肺 胞

る例で

ある。

此

0

Grollmann

の値に

類似の結果を

相

當

02

分壓が急激に變化を來せる事は後の場合に

に發生せる酸素缺

乏が

肺氣胞上皮に於て初

まるや

に於て述べた。

現象例 脈搏增 現象の起るを見る。 して不充分なるが如き場合には又更に 低地 3 住民が高 加と血壓の増加順應とは暫く措き、 へば循環系統に順應的促進作 循環系統の變化による 所に 若し此 登行する時呼吸に 0 順應現象がその 順 應 用が起るに至る。 新 血液中 しき 血液循環 他 K 0 順 順 VC

事は前 る。 環速度が漸次最大値に達するか或は急激 之に依れば甚だしき高所に急速に到達すれ した處によると五日後に低地 さと空氣の稀薄に對する個人的な耐容性に關係し に於ける人體血液に就て 高所に於ける血液循環の促進に關しては前 例へば の場合であり、 Grollmann が 4,600 m の高所に於て調査 5,500 m 37 - 400 値より の高所に於て呼吸氣 頁 に於て述 K がば到達 强く亢進す 增 報 加 高 せる T 72 0 循 高 75 所

(372)

即ち組 それ 於ける動物實驗で其の間の有様を伺ふことが出來る。 が起る。之に關する事柄は Campbell (こが減壓空中に 盡すことは著しく改良せられて居り、 後に於ける筋肉勞働に 値に迄降つてゐる。又 此の値は低下する。 の調査せる結果に依れば長期間高所に滯在すれば再び の亢進を見る。又 Grollmann, Ewig 並びに Hinsberg 著しき空氣稀薄なる場合に於ては特に趣の異つた現象 38頁) も得て居り、3,400mの高所に於て旣に循環作用 Ewig及び Hinsberg (『高所に於ける人體血液に就て』 なる O₂を供給する爲めに心臓への要求は少くて足る。 程に促進せられず、 m の高所に十四日間滯在して殆んど馴致され 織に於ける 飽和度並びに組 に低く、 高度に對し馴致作用が完成せられ 此の低下は數週間 02 之は血色素と血液量の増 総中の 分壓は普通大氣中に於けるより より動脈血液中の酸素を使 Ewig 及び Hinsberg に依れ 從つて勞作せる筋肉 02 分壓は殆んど低 の馴 血液循環現象は 致でさへも元の て静脈 加に 0 よる 必要 用し 血中 地 ば 10 0

(373)

素の供給を正常に保持せんとするものであると云 其の周圍の低下せる酸素分壓に對應せんとし、 重要なる器官 Campbell の酸素使用量はそれに從つて低下する、 値に迄戻すことは出來ぬと云ふ。之と同 液循環の促進現象が高度 4,500 m 以上の所に於て は迅速なる馴致作用は組織中に於て生命に (心臓、 脊髓、 中樞等) の組織中に於て 此 時 の實驗 K 動物體中 且つ酸 3 より

m.

ると殆んど變らざる狀態で競技を行ひ得るに至 以つて一 が之は漸次に解消する、 酸素缺乏を起し、 に於けるが如き場合には假令中等度の高さに られることを示す。甚だしき筋肉勞働例へばスポ 止時に於て身體諸器官殊に腦 の發生する爲めであらうと考へられる。 過すれば著しく輕快せる事を見るに、之れは馴致作用 而も身體靜止 週間の豫備トレ の時にも、 强度の呼吸困難を感ずることが 1 例 發生せる山岳病が二―三日經 へば ニングを行 への酸素供給の改善せ 1,550 m ば低地 此れ の高所では前 は身體靜 ると に於け りても ある 1 "

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額川)

-1-

此の

高所に於ける順應作用は血液の循環が改善せ

110

を得るや、

或は身體靜止狀態に於て呼

吸困

心悸亢

これと並行して呼吸容をも改良し得る (Loewy 及び レーニングによりて勞作時の 5 れることは勿論で あるのみならず、 Energy 高 の消費量及び 所に於ける

Knoll (26))

3,000-4,000 m の高所に在りて血液循環の促進は

一時

して高所に登る時(六─一○週間をも費す如き)は人は

以上の事柄より、甚だしく高からざる高所、例へば

4,000m の高さに於て Lintzel 及び Radefe が調査して 量と血液循環の關係を誘導してゐる。 此の結果を得た、 素となる。その永續的な血液循環促進作用は心臓 掌り得なくなると血液循環の促進は馴致も決定的 が漸次高くなり、 的の手段として現はれるに過ぎないのであるが、 いさが増大することによりて滿たされる。 尚 Murray (い) は數學的に酸素使用 血色素の最大量が最早や補償作 此の事は 高度 の大 な要 用 を

0 限度

異なる。 題 は、 如何なる高度迄順應或は馴致作用が起り得るやの問 此 例へば苦勞しつ」如何なる高度に迄登ること の馴致作用を如何なる意味に採るかによりて

Norton

の報する處(い)によれば彼が最高到達地點附

するか、卽ち第一の場合は高所に對する馴致作用は著 生活を續け得るや、 進等の或る程度の不快感を忍びつゝも如何なる高度迄 しく特徴づけられる。 る勞作能力を續け得るは如何なる高度迄なりやと解釋 或は低地に於けると殆んど變らざ 例 へば逃だ徐 々に卽ち長期を費

5,000~6,000mの高所にも登り而もこ」に滯在し得る。 度の不眠症、 は多く此れに似た狀態で登るので、斯かる場合には輕 Himalaja 其の他の Expeditionに於てそれ等の隊員 精神集注力の減退等を除けば隊員 の殆

で、 其の他の勞作には能力の減 能力を保持し得られる。 るが極めて徐々に登れば、 頻繁なる休息と、最大限度の勞力節約を要する。 而し著しき高所に於ける登行 目的の高度迄は勞作し得る 退することは明かな事實

き所に登るには大なる努力と著しき精神の緊張は要す

ど全部は身體靜止時には不快感を感じない。

叉更に高

h

ふ(%)。 又隊員は Lager III-VI 4,370-5,140 m 近では約20m毎に一一二分の停止休息を絕對必要と 一時間に登り得る最高差は 33 m であつたと云 附

テ 眠も充分で勞作能力も相當に出たが、只總ての勞作の く改善され食慾も皆良好となり高度に對し順應され Lager X. 7,020 m に於ては隊員中總で健康狀態はよ ンポが遅鈍化しては居る。

睡

るGIO。又獨逸隊の Nanga Parbat 登攀 (1934) にも

(375)

を起し夜中胸を締付けられる感が起つたが三週間後に

近に於て呼吸型が所謂

Cheyne stokesche Atmung

Mont Blanc の登攀に際して同様な事を云つてゐる。 低き處に於ても同様な困難を生する。Saussure(この)は 到達し、又1922年英人遠征隊第一回 Everest 遠征の際 又 De Filippi が Karakorum の高度 7,000m の地點に 若し登高速度を早めるが如き場合には、高度は更に

mの間、7,600m~8,200mの間は酸素吸入を行つてゐ る。1924年第二回 Everest Expedition に Norton(31) 8,572 m の高所迄、Somevell は 8,542 m 迄酸素吸 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田)

Bruce⁽³⁰⁾ は 8,200m 迄登つてゐるが而も 6,400~7,000

は

Expedition に於て殆んど遺憾無き迄に發揮されてゐ 狀態により、 を使用した。斯かる馴致現象も登攀者の訓練と精 pedition に際して 7,400 m 迄登つてゐるが、隊員十一 ることが出來ることは1929年獨人の Kangchenzönga 人中唯一人が 7,000 m ~ 7,400 m 間で一時間以內酸素 入無くして登つた。1930年 Dyhrenfurth は其の 相當の高度迄も非常な勞作能力を發揮す

をも精神的緊張により高所に於ける能率を高め、更に 6,000 m の高度になると高所の馴致は充分でなく空氣 神的の訓練により、斯かる心身の機能低下せんとする なかつたと云ふるい。而し除員の平素の訓練てとに精 し、精神力も四肢の運動を、充分支配することが出來 の稀薄によりて運動が鈍り、 運動能力が强く低下を來

5,500~7,000 m の高度に在りても一種の馴致習熟作用 chenzonga ることの出來た實例は 盆々、より高きへの困難に對して、 の遠征が明 Bauer 隊の二回に亙る Kang-かった 其の消息を示してゐる。 征服の意慾に燃え

は其處に到達の初期よりも著しく身體の狀態良好とな 0 から 起り 隊員の一人は高度 5,800 m の處に四週間滯在の後に 得る。 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 英人の Himalaya Expedition & (額田 於て其

b 又他の隊員は同所に十日間の滯在で 7,000 m 迄はより 容易に更により高きへの登攀が出來得たと謂ひ、

よき狀態で登り得た。 尤も此の場合全然身體に故障を

より上を彼は

Absolute Anoxyhämie

と稱し、

peditionの隊員は總て山を降る時心臓の肥大を生じて 起さなかつたのではない。第二回英人 Himalaya Ex-

居て體重が著しく減じ (10-12kg) て居た。 Argyll-

は心臓肥大、及び器官の脂肪變生を起す。Barcroftは 彼が南米 Peru-Expeditionに於て高度としては僅かに Campsell 及び Leonard Hill の研究によりても動物

に體重の最大減少量は 10.5kg であつた。

之等の事より 5,000~6,000m の高所に在りては身體

4,500 m

の地點に滯在せしに過ぎざりしが二十七日間

氣稀薄となるにも拘らず馴致の習熟現象は起り得る。 又勞作條件を特別に注意することによりて 8,000 m 迄 止狀態に於ては餘りに甚だしき不快感を起さず、空

る。

又巨大山岳の高所に充分馴致せる者も更に著しき

靜

は登り得る。 缺乏病を發生する高さより 6,500 m 迄到達 て示した。彼は4,500 m 卽ち之より上は普通重き酸素 つて慣らされる高互差を V. Schrotter(32) Relative Aoxyhämie シレ は徐 大 0 馴 致 したが、之 作 用 によ

の吸入を要した。 又低地住民が低地に於けると同一條件で勞作し得る

高度は如何なる高さ迄であるかと云ふに假令數年間高

は如何なる歐人も肉體的に低地に在る程能力を發揮し 所に滯在するも、それだけの機能を發揮し得られる高 に滯在して Cerro de Pasco (4,400m) に於て最初の さは著しく低き位置にある。Poppig GSD は多年 Andes 年

(376)

は Himalaya の 6,000 m の高所に在りて數ケ月は身

得なかつた。Conway(33) 及び

Jacot Guillarmod (34)

體機能が何等增進しなかつたと云 れば其の高所に對し生活に適切なる馴致作用を誘起す 所の住民ですら更に高所に登り此處に長 期 滯在す

高

高所に登れば山岳病を起すことが屢々ある。之は Con-

せ K way, Sven Hedin (35), Ducceschi (36) 等も報じてゐる。 於ては完全なる馴致作用は發生し難く、それよりも る時に除 Warren (37) は Argull-Campbell, Leonard Hill 等 |物減壓實驗の結果と、實際に人が Everest に登攀 員の身體の狀態により 21,000呎以上の高 所

的 力 0 きであると云ふ。其の高度は著しく食慾の減退、 發生が現はれるとしてゐる。 | 衰弱を來す故に 21,000 呎以上は所謂 Deterioration 狀態殊に咽喉を害すこと甚だしく、 而し Deterioration は 體重の減少、勢 病

攀には成るべく 21,000呎以上の高所には幕營を避ける

急速に身體の衰弱を來すと云つてゐる。

故に實際の

登

之と同様の事を述べてゐる(本文一、(3)項)。

赤 最 起るが而し下降して再度或は三度同 同 カン 5 血 樣 初の如き病的症狀は漸次輕快を感するのみならず、 0 球數及び血色素數は増加することが知られて居る 斯かる意味からは馴致作用が尙發生する。 事が Andes に於て Manhews によりても調査 一の高さに登れば 此れと

せら

れてゐる。

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額田)

5 度高所に滯在 迅速抵抗能力向上の特別様式 の經驗を有するものが其の後相

當

初の登行に於ける症狀最も重く漸次輕症であるのが普 年月の後再び高所に登る場合如何 通である。Knoche⁽⁷⁾ たが、 :は旣に「高所に於ける人體の呼吸に就て」に於て述 斯かる場合に高所に於て起り得る不快感は最 も Andes 旅行中に又 Zuntz なる馴致が 起り得る

~ かい

Expedition に於ての困苦は第 感する處で Hingston Cac は彼が第二回 Himalaya 其の他の巨大山岳遠征隊の何れもが之を 一回遠征當時に受けた 0 Himaraya

(377)

抵抗力を増して行くことは丁度禁酒者に對して致死量 勞少く、登行の時感する呼吸困難も輕く、 も體驗してゐる。 より安易であつたと云ふ。 アル 7 1 ル も酒吞みに對しては適量であると云ふが 即ち高所の經驗を得るに從つて漸次 同様の 事を Humphreys (38) 精神的にも たと報告してゐる、

即ち到達最高地點に於て、

より疲

苦痛よりも大いに輕減せる事が隊員一

般の意見であ

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田)

如き事であると云ふいるこ

上での一つの解決として、尤も之は動物實験の結果で 或る期間を置き交互に空氣稀薄に對する抵抗力の向

られる。此の對照證明として脾臓を除く時は空氣減壓 様になり、此の循環血液の増加により耐容力は増進せ 氣の減壓に對し脾臟は漸次血液を循環系統に送り得る を反復するも何等の耐容性の増加は認め得なかつた。 あるが(Bassano, Bolloli 及び Custo⁽³⁹⁾) 交互に起す空

(6) 太陽光線に對する馴致習熟性

紫外線の吸收による上皮硬化作用より成る。 作用も發生する。之は長波熱線の脱皮紅斑作用と短波 空氣稀薄に對すると同時に又太陽光線に對する馴致

の調熱作用を増進する。 分放出を高め、早期の發汗を促し、過熱に對する一種 され易くなり、局部的に加熱度强く爲めに無感覺的水 紅斑發現によりて第二次的に熱線はより多量に吸收

X

Krogh: Anatomie und Phyoiologie der Capillaren.

3 Bernard: Philipp Borchers. Die Weisse Kordillere

(1935) 363-364

(2) Richter: Dyhrenfurth. Himalaja unsere Expedition (1930) 284.

(25) Richter: Dyhrenfurth. Himalaja (1930) 285. unsere Expedition

(3) Bernard: Philipp Borchers. Die Weisse Kordillere (1935) 363

(1936) 221.

Warren: Ruttledge. Everest the unfinished Adventure

(4)

(6) Krogh: Skand. Arch. Physiol. (1910) 23; J. of Physiol. (1915) 49.

(378)

(6) Ceruti: Arch. di Fisiol. (1931) 29; Boll. Soc. ital Biol. Sper. (1929) 4.

(7) Röse: Schweiz, Med. Wschr. (1931) 23

3 Knoche: Berl klin Wschr (1910).

(7") Fritz Bechtold: Dentsch am Nanga Parbat. (1934) 52

(8) Pöppig: Reisen in Chile, Peru usw. Leipzig. (1836). Zit. nach Meyer-Ahrens: Die Bergkrankheit. Leipzig

(10) Knoche: Berl. klin. Wschr. (1910)

(11) Ducceschi: Trab. Labor. Fisiol cordoba. (1910).

- (12) Handbuch der Balueologie usw Bd. 3. 69.
- (12') N. Humphreys: "Ruttledge. Everest the unfinished
- Adv. (1936) 207.

Kellas: Ruttledge. Everest the unfinished Adv. (1936)

(13)

236-238.

- (14) Schneider-Truesdell: Amer. J. Physiol. (1921) 55.
- Schrötter: Der Sauerstoff in der Prophyloxe und der
- Sauerstofftherapie. (1906); Erg. Physiol. (1925) 24. Therapie der Luftdruck-Krankungen in M. Michaelis
- (16) Diringshofen; Z. Hyg. (1931) 112.
- (17) Kellas: Ruttledge. Everest The unfinished Adv. (1936)
- (18)(19)Gillert: Jb. wiss. Ges. Luftfahrt. (1928). Gulielminetti: La Suisse aérienne, Tome 2. (1920).

Kaiser: Luftfahrtforschg. (1930) 6.

(20)

- (22) (21) 前田, 伊賀: 岡山醫學雜誌, 第49年, 第572,573號 Margaria: Arch. di. Sci. biol. (1928) 11.
- (22') Fritz Bechtold: Dentsche am Nanga Purbat (1934) 50 Barcroft: Die Atmungsfunktion des Blutes. Berlin
- (23') Warren: Ruttledge. (1936) 234-235. Everest the unfinished Adv.

(1927).

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田) (24)

Haldane: Brit. med. J. (1924).

- (25) Campbell: J. of Physiol. (1927) 62.
- (26) Loewy u. Knoll: Z. Hyg. (1925) 104
- (28) Norton: Die Besteigung des Mount Everest. (1926). (27) Murray u. Morgan: J. of biol. Chem. (1925) 6.
- P. Bauer: Im Kampf um den Himalaja 1929 (1931)
- (28/) 105-106.
- Kraus: 同書 157-158 頁.
- (30) (39) Bruce: Mount Everest Besteigung (1924). Saussure: Voyages dans les Alpes. (1796).
- (31) Norton: Die Besteigung des Mount Everest. Basel

(1926).

(31/) Bauer: Im Kampf um den Himalaja, (1931) 100

(379)

- (31") Fritz Bechtold: Deutsche am Nanga Parbat der Angriff. (32) Schrötter: Verh. klimatol. Tagg. Davos. 1925; Erg. (1934) 46.
- (33) Pöppig: Reisen in Chile, Peru, usw. Leipzig. (1836). (331) Conway: Climbing and Exploration. (1884). Physiol (1925) 24.
- (34) Guilarmod: Six mois dans l'Himalaya. Neuchâtel. (1905).
- (35) (36) Ducceschi: Arch di Fisiol. (1912) 10. Hedin Sven: Durch Asiens Wüsten. Lcipzig. (1899).
- (36') Hingston: The Geograph., J. 65.

かれ身體正常なる機能に異狀を起して來る。其の機能

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田)

(37) Warren: Ruttledge. Everest the unfinished Adv. (1936) 235—236.

(38) Humphreys: Ruttledge. Everest the unfinished Adv. (1936) 207.

(38') Hingston: Ruttledge. Everest the unfinished Adv. (1936), 205.

(39) Bassano, Bolloli u. Custo: Boll. Soc. ital. Biol. Sper. (1931) 6.

一、高山病(或は山岳病

(1) 高山病の概念

高所に於て發生する一種特性的病的症狀にして、山

者はこゝに山岳登攀に於て發生する場合を考ふるが故と高空病 Höhenkrankheit と稱する樣であるが筆に上昇する場合にも發生する。それで航空術の方ではふ。而し之と同一症狀は飛行機或は氣球によりて高層

人が高所に或は山岳の高度高き所へ登れば速かれ遅

異狀感である。

山岳病は斯かる場合に少し過激なる勞

ね山

岳病としての强き本來的症狀の現はれる前

に起る

に之を高

山病と稱することにする。

人によりて異なるが、而し著しき高所に於ては總てのる。そしてそれぞれの機能に變化を起す絕對的高度は或は又相當な高度に於て始めて變化を起す機能もあの內或る部分は旣に中級の高所に於ても變化を來す。

に於てのみ現はれる特性を有するものであるから、高なる病型に於て現はれる。而して此の病的症狀は高所其の症狀も亦個人的な體質と外的條件によりて種々異

機能は遂に變化を起して病的症狀を呈して來る。

而し

來ない處の症狀である。今述べた種々なる異常感は槪精神的無氣力感の如きは低地に於ては感ずることが出質的に異なるものと逼別される。故に低地に於けると本質的に異なるものと區別される。故に低地に於けると本質的に異なるものと區別される。故に低地に於けると本質的に異なる症狀例へば肺所に於て往々突發する病原學的に異なる症狀例へば肺

(380)

程度は、低地に於て烈しき勞作する時局部的に發生す 肉に於て部分的に酸素缺乏を起すが、其の酸素缺乏の 作をすれば發生するCD。 る酸素缺乏よりも大である。 此の如き場合には勞作せる筋

高山病 0

る際、 Acosta のその頃に於て此の症狀が大氣の稀薄なるが の僧父 Acosta^{C2} が Peru 高地の Pariacaca を通過せ 高山病は相當昔から知られて居り、シェスイット教 此の山岳病の發生せる事を1590年に發表した。

ビアアンデスに登攀せる記事中に山岳病に就て發表し 三人がスペインの海軍將校 Don Ulloas と共にボ 爲であると云ふ卓見は注意に價する。 佛人教授 Bouguet, La Condamine 及び Godin の 其の後、1736年 1)

3,000 m に於て此の症狀を發生し1787年 Mont Blanc

は 1778 年山岳病に罹り、 叉彼の案内者は Buet の高度 た。又Saussureのアルプス記事中にも見る。Saussure

の初登攀の記事 次いで高山の科學的研究が盛んになると共に山岳病 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 中に發表 した。

> た。 等が十九世紀の初め頃に、又十九世紀の中頃乃至後半 Chimborazzoに於て山岳病に罹つた事を報告した。 リの Aconcagua に於て、Whymper は中央アメリカ アアンデスに於て、Gusfeld, Fitz-Gerald 等は南米 に於て Illimani, Sorate, Conway 等によりてボリビ の發生並びに其の症狀に關する報告も漸次多くなつ 南米の高山で A. V. Humbolt, Poppig, Tschudi チ

Ararat に、1838 年 Wilkes はハワイの Mauka Loa, に、後に Franz. Kronecker も) より Kaukasus の Kasbeck の登攀行はれ、1834 年 亞細亞に於ては十九世紀の初め 1815 年 Parrot 登攀行はれ、此の際 K

(381)

其の本體並びに原因につきても皆各々夫々異なる意見 調査せる山岳病に就きての報告は極めて種 此等の先人達が彼等自身に體驗せる乃至は隊員に就て る諸遠征隊によりて調査研究が行はる、様になつた。 0 矢張り之に關する發表があつた。 Tibet 探檢に於て、乃至は近時 Himalaya に於け 其の後 Sven Hedin 々にして又

Meyer-Ahrens

を發表した。之等の總括的の研究は

(額田

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田)

Paul Bert, Mossb, Zuntz, Loewy, Muller, Caspari⁽³⁾

の功績に歸さなければならない。

失神發作、呼吸困難、又全身衰弱をも伴ふと、彼は之 吐に關して Ulloa の述べる處は、屢々發熱を伴ひ、 ものに非すして特に發生すべき處があると云つた。嘔 病は等しき高度に於ては如何なる處に於ても發生する た。 Bancroftss等によりて討議せられてゐる。 係あるものと信じた。 とした。印度人は之を叉山暈 Sorroche 叉は Soroche 起し漸次粘液を、次いで膽汁を吐き遂に血液迄も吐い に罹り、苦しき嘔吐を起したが最初唾液の分泌過剰を に)と稱し、ペルー高地に於ける山に暈ふ病氣である をペルーに於ける一種の山暈 "Mareo de la Duna" (船量病 Acosta は高度 4,500 m で騾馬に乗りて途中山岳病 と呼び地下の鑛脈より放射する Emanation 其の同伴者の或る者は下痢を發生した。彼は山岳 Zuntz, Reichel, Kolmer 及心 Docceschi(5) "Puna"に極めてよく似た症狀であるが故 此の點に關しては Knochecto, と闘

> Tschudi は Acosta の古き文献にも之に關するもの」 Humbolt, D'orbigry 及び Tschudi の報告があるが、 るが之れに關しては Andes に於て Alexander von 高山上に於て屢々唇或は眼瞼より出血することがあ

發生し得るものであることを知つた。1910 年 Knoche を知つたので 3,600~3,900m の高所に於て高 ある事を見た。主に高所の住民に就て此の症状の發生 山病は

は、濕氣を帶びた大氣中に於けるよりも烈しく高山病 有することを見出し、純粹なる大氣中で寒冷激 ると云ふ。Tschudiは高山病の發生が氣象的に關係 他の場合には既に 4,500 m の高度に於ても高山病に罹 的症狀發生することなく登り得ることをも得れども又 報告し、彼は或る場合には 6,000 m の高所迄も何等病 は南米チリ Andes に於て之と同様の症狀發生せるを しき時

Pasco に到着した際の不快感に關して具體的な報告を してゐる、呼吸困難に就て次の如く述べてゐる。 此の Tschudi の記述の他に Poppig ガジ Cerro de

は現はれると云ふ。

むかの如きと云ふ。又高所に於て談話する時に困難をび急坂の街を登る際肉體的衰弱感に就ては恰も膝が凹恰も眞空中に在るが如く……又其の胸苦しき不快感及

何等の神氣爽快が與へられず且つ夜中强度の胸苦しさ Pippig は著しき嗜眠を催すがその睡眠後の覺醒には

感すること等述べた。之れは Humbolt も述べて居る。

が Himalaya に於て受けた。 Sven-Hedin⁽⁸⁾ 及びを覺えた。これと同樣な經驗を 1812 年 Moorcroft⁽⁷⁾

Middendorf⁽³⁾ も此の不快感を經驗してゐる。睡眠中呼吸の不整を來し、心臓機能の衰弱を來すことを Pöp-

ある。

(383)

代アルプス登山の開拓者として卓越せる觀察力を以て は打克ち難きものであり、 にこの疲勞に就て、 Ш とは出來なかつたであらう、 .岳病に就て述べてゐる。彼は登攀に際してより速か 大の危險起るとも、 所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 の報告は古典的文献であるが而し其の時 空氣稀薄より誘起する疲勞の症状 それすら一 最高點に達せし時、 m し少時の休 步をも避けるこ 此の時 (額田) 息後に

> Щ 生活に酸素の必要なる事を知つた僅かに數年後 とをも知つた。 關連する大氣中酸素の分壓の低下によるものであるこ り身體への空氣の供給が妨げられるが如く感じ、更に ことに呼吸困難の亢進に就て、 たと云つてゐる。 は元氣恢復し低地に於けると殆んど變らざる能力が 岳病の症狀は空氣稀薄にの 此の事實は 又彼は測定用器具を取扱ふ時不快感 Lavoisier (1786) みに由るものに非ず之に 即ち呼吸が思はず止 が 動 事

於て、Himalayaにては 5,000 m の高度に其の限界が 於て、Himalayaにては 5,000 m の高度に其の限界が 於では 3,000 m に於て、Andes に於では 4,000 m に 於では 3,000 m に於で、Andes に於では 4,000 m に がでは 3,000 m に於で、Andes に於では 4,000 m に がでは 3,000 m に於で、Andes に於では 4,000 m に

あることが知られて來た。

勿論此の限界は高度馴致作

高所に於ける人體 0 抵 抗と順應及び高 山病 (額 珥

用

K

よりて甚だしく變り得る事は明かである。

叉

ある

告を見れば到る處に見参する處であるCIDo 犯されることは最近の 高 所に 經 驗を有する者の更に高き所へ登れば Himalaya, Andes 等の Ш 岳病 遠 征報 K

3 高 Ш 病 0 諸 症 候

は伴は

ない

0

が普

通

で ある。

なる 机 3 所に於て强烈なる筋肉勞作の結果表はれる場合を考ふ 時 高 高 其の 此 Ш し叉外的 Щ 病中最 病の 0 一發生の 勞作に 發 の條件 生 も其の 基因 時 0 期 特徴は極めて種々の症狀に於て により 症狀の純粹に現はるべきは完全な する病型も隨 條件は個 異 なる。 人的 伴することが多い。 高 の體質によりて異 山病の 發生が 現は 高

は最もよく分析 靜 IL: 一狀態に 於てど 的 な説明 あ から b 行はれ 此の條件下に 得る。 於て高山病

腄 る場合か或 最も 服 0 如き場 狀 態を誘起し、 嗒 純粹な高 眠 合に 心は氣 性 0 九進 著明に 球に搭乗して上 山病型は減壓空中に於て漸次減壓され で、 Д 度睡眠狀態に陷れば之を他より 之が漸 つ最 初に認め 大深く 昇する際 À 得 10 現はれ き症狀は疲 打克ち難 る。 寺

早くも此

0 症

狀を發する

自

忌感は伴はぬ事多きが、 **覺醒せし** 溜息を洩らすけれども本質 顳顬頭痛 むること甚だ困 を起し呼 吸の變調 時によると又體質的 難 的 C ある。 な呼 を伴 吸困 主 3. 難 一感的 及び心 自 覺 10 は 的 K 季九 前 餘 時 り嫌 額 12 頭

痛

ては種 滯在する兩場合に高山病に罹る有様は微細 自 一般的登高によりて及び受動的な登高 々に異なるが大體に於て兩場 合に似た型で により な點 T 表は 高 VC 於 所

K

3,500~4,000 m き)に際しては其の登行 異狀を發するが、 初の數時間 る。 何 登高者の少數は既に へば自ら歩行して登るが如き) は何等の不快感なく經過し、 に於て高 受動的 な登高 の途中で或は高所到 山病を發生する。 3,000 m (登山 鐵道 した場合には最 に於て、多數は 漸次に心身 自發的 K 達 依 直 る が如 な登

高

机

神的怠慢 に陷る疲勞感等の 發的な登行に於て發する症狀は大腦の 感、 無頓 着 感、 症 精 狀 神 的 を發生す、 勢 力の 缺 例 如 異狀症 感 ば獨 魔 人の 睡 的 精

睡

眠

Nanga-Parbat Expedition に於て人夫達が高度 7,200

m附近に於て疲勞困憊の極に陷りや」ともすれば所か

降するに非常に世話がやけたCtoo。此の例の如きは相 まはず雪上に倒れ深き魔睡に陷り勝で之を勵まして下 當

らずとも精神的 甚だしき高所に於ける例であるが斯かる著し に並びに肉體的に之の能力檢查 を行 所

き高

な

吸困難、

客觀的な方法によりて高山病患者を檢査すれ 眩暈等の突發も尚長く續く。

ば殆ん

ば多か n 少なか れ作業能力の低下を示す。 受動的 な登

す。 高に在りては眩暈、 憂鬱感、 失神 發作等の症狀 を示

稍長期

に高所に滯在すれ

ば更に頭痛

呼吸困

難、

1

又咽喉を犯されることが非常に多いいい。

或は又發熱

(385)

る混 機能 活動によりても不快感は亢進し、 に著しき變化を來す。又單に一つの器官系統に現 合狀態に於て現はれ、 全身的倦怠感、 嘔吐等を催し、 呼吸系統に、 各々の 症狀は複 心臓に、 極めて少し 消化 雑な 0

はれる病的症狀をも起し得る。 よりて發生する。 の如く、 斯の如きは個人的にもよるが器官の素因にも 又消化不良に陷り下痢を起すいる。大腦の異 而し食慾減退と食前 例 へば鎭め難き嘔吐 K 嘔吐 を催する 等

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額田

地

方に於ける旅行中脈搏の亢進はあつたが體溫は却

覺等を起す。 狀症狀に在りては倦怠、 至三日靜養すれば之等の の減退は尚續く。 歐洲アルプス程度の高度に於ては二日 物を持ち上げ或は腰の屆伸に 困憊、 症狀は著しく恢復するが食慾 疲勞、 無意識、 二重 乃 視

共に脈搏増加、 に粘膜例 ど總て顏色蒼白で皮膚は貧血を起して居る。 へば唇、 Cheyne-Stoks 眼球結膜等も蒼白を發生す。 型の呼吸となること。 叉外觀 的

Müller, Caspari 等が 昇する處の特徴を表はすものである。 の突發する事もあるが之は高所に於て體溫の急激に上 Monte Rosa 上で調査して居 Zuntz, Loewy,

腟温度が 熱を起した。Whymper は Chimborazzo 登攀 の現象も人によりて起る。 るし又 Ulloa は Bolivia Andes に登つた時に 38。にも昇つた事を見出した。而 例 ば Hedin し此 が チベ 0 0 反對 際 П

此

發

Ξ

所に於ける人體の 抵抗と順應及び高 山病

(額田

以下に降 つた事さ も見た。

冷、 は失神發作を往々伴ひ又危險に對する無感覺例 通りである。 此 再び恢復する。更に數步進めば再び同一症狀を發す。 前進することが出來ぬに到る。 が突然に甚だしく疲勞を起して勞作不能に陷り一歩も の缺乏に惱むは勞作せる筋肉に於てどある。 必要とする器官に於て表はれ の事に關しては 登高する隊に突發的な山岳病狀は酸素の供給を最も 暴風雨雪に對する注意力の衰滅、 此の衰弱症狀には更に眩暈とか憂鬱感或 Saussure が前項に於て述べて居る る。 而し暫らく休息すれば 即ち最も速か 切迫せる生命に 即ち筋肉 K へば寒 酸素

られるにもよると考へられ

る。

高所に於ては往々腸(Acosta, Tschudi)及び肺

裂を生じ易くなるのであらうと謂はれてゐる。 烈しき移動により皮膚が乾燥し脆弱に柔軟性を缺き龜 裂し唇及び眼球結膜に於ける毛細管の出血(Humbold, 對する危險を避ける精神力が消失する。 高所に於ては皮膚及び粘膜の境界の破裂、 及び П 之は恐らく高所の大氣寒冷と空氣の 腟 內粘膜 よりの出血を起すことがあ 故に之 或は龜

高

充血と、此の部分に於て血液の透過度が普通より高 が出來る。又此の症狀は空氣稀薄に基く毛細管部分の 要する。斯くすれば或る程度迄は此 を强く塗り込み常に皮膚を柔軟に保たして置くことを に對する處置としては皮膚 VC クリー ム等 の症状を防ぐこと の皮 膚 保護劑

は毛細管壁が酸素缺乏の爲めに透過性が増大すること も影響を及ぼすが爲めで る。之れは聲高く談話する場合に して肺胞中の壓力變化の大いさに基因するもの によりて説明することも出來る。 Hervey, Sven-Hedin) よらの出 Boussingaulti(15) 血 一呼吸の壓力が肺 叉肺出血は呼 ある。 此 は減歴空 の腸 とされ 吸に際 出 m

中で高聲で話をすることを禁する。 る事は相當以前より知られて居るが正しき音 で笛を吹けば喀血すると云 所に於て笛或は樂器を吹き鳴らすのに困 Poppig は減断空 難 の調子を た感ず

發生せしむるにはそれが空氣壓力の低減せる處では低

(386)

6 地 よりもある一定の壓力を要するものであるからであ 此 0 事 は水底作業に使用する潜函中に於ての 高

中に於ても矢張り異なつた狀態を生するはLoewyCo

によりて調査された。

~ 0 5 初めに述べ 外界の状 れて居る。 態 たが又種々なる山岳旅行、 が Щ 力 トリッ 、岳病發生に影響することは既に本文 ク教宣教師 Hug は蒙古より 遠征報告に述

又 Schlagintweit は西風の吹く時 5,100 m の高所で高 起らないが チ 酷しいが濕氣が飽和した空氣中では高山病に罹ること 云 Ш ~ 病に罹り、朝の凪の時は餘り之れに罹らなかつたと ットへの旅行に於て、風の吹く日に高山病は餘り Tschudi 、静かな晴天では其の發生が多いと云ふが は快晴で寒冷烈しき時は特に高 Щ 病 は

らされ 方に向 夜中不快感を感するが朝の太陽が空を照し が少い。 同 様 0 る高 3 事を Conway(18) も唱へてゐる。 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 Middendorfe の經驗によると高 步行中 地では峽谷よりも多く高山病が起る。 Guillarmod (17) は眼界開け風に曝 叉 所に在 初めると快 Himalaya (額田 りては 之と

> 中等度の太陽照射を受け、 遠征に於て Hingston Ciso の報告に依れば、 濕氣多き空氣中では高山 風を避けて 病

を起し易いと云ふ。

通過する時高山病を起し易いが、 に就ては前にも述べ 岩壁登攀や雪上の登行が如何に高山病と關 たが、 窪地 山 斯かる場所を 峽 、雪の積 係 机 通過 る谷 ありや を

再び皆の氣持は輕快となつたと云ふ(Rzewuski)。 人の内十七人迄が高山病に罹つたが其處を通り越せば 0 が多い Wallisの Randa より Dom への途中 Festijoch 彼方 3,724 m の窪地があるが其の處を通過する十九

て更に高き處迄登れば一度起つた不快感は消失する事

を經 身體を動か 止の狀態に於て不快感を感じない程になる。 はしない)。其の症状の一部が漸次に恢復すれば身體 少いものである の様に其の苦しみは甚だしいが之は比較的に危險性 高 過するに從つて(假令同一高所にあるも)其の症狀 Ш 病に罹ると其の感じは非常に重病にでも罹 せば呼吸困難、 줆 し高 身體衰弱感を起す。 山病も生命の 危險は無し 加し 更に 岩 つた L

カン

0

(387)

で屢 は輕快となり勞作にも すれば漸次重症化するから、 重き高山病の症狀を發生することがある。 等によりて受動的 は 頭 安々此の 横斷鐵道で Callas より Oroya Antofagasta 45 Oruro 痛 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 呼 如き高山病が發生する。 吸困 難、 に高所に達するが如き時には斯かる 漸次堪 或る程度の衰弱感であるが放置 低地へと移さなけれ 得るに到る。 へ の 此の症狀の輕きも への峠 4,153 m の高所 例 登山 (4,798m)へば 一額田 ばな An-I鐵道

(4) 高山病の原因

5

ない。

高所で

高

Щ

病の

爲

めに遂に死する者もあるか

である。

素分壓の不充分なるが爲 K 病に大なる役割を掌るもので無い事 を K 約百年して 新しき研究に依れば大氣中の空氣を稀薄にすること 研究せる學者 證明した。 Saussure Paul 尚高山· 8 高 あ Rert 山病の發現は高所大氣中に於ける 病の原因が其の他にも存すべき事 0 たが は其の事の めであると指摘し 而し 其 が知れた。 0 正しき事を實驗的 他 0 た。 因子は高 其の後 比較的 Ш 酸

例

へば

Berson 及び Süring は酸素吸入器を用ひ

カン 因を斷定的に説明せるものなく、 何となれば今日迄如何なる調査研究も異なる症狀 等の研究を絕對的に正しきと信ずることは出來ない。 て決定的な要素ではないと云ふことが解つた。 Margaria, Talent) よりて發生する病的諸症狀は一致しない により或は其 或は大氣壓は變化なく酸素のみを減少する實驗に の中の純酸素のみを充分に 故に酸素の にされて居ない 少き事は高 叉互に作用し合 からであ 稀薄とする (Kaiser(21) 山病に對し 而し之 いふ諸 0 原

するか又は恢復せしむることが出來るからであ 短時間でも酸素吸入を行へば直ちに症狀は著しく輕快 因 ば人為的な上昇 めて著明 る空氣稀薄なる處に於て高山病に罹れる者に對 ではある。 の如く高所に於ける酸素吸入は高山病の發生に 何 子に就きても明か れにせよ酸素の缺乏が高山病發生の重要なる原因 なる作用を呈するが特に之を吸 例 へば氣球或は飛行機又は減壓室內 高度を高めることが出來る譯である。 入して上 對し極 る K 極く 於け 斯 せ

Neuenhofen は飛行機で 12,800m 迄、Souzek は 13,150 り完全ではなかつたが) 氣球で 10,500 m 迄上昇し、

H 迄上昇せり。

ある。 全な有機物が排泄せられる事がある。 高度で身體靜止時に此の如き變化を發生することが 山病で酸素缺乏による變化の中で尿中に酸化不完 又極端に過激な勞作なくとも酸化機能の不完全 Monte Rosa 位

h

を發生するは高度 2,100 m に於ても見ることがある。

る。 きて研究の上解答が與へられなければならぬはずであ 否やは、此の症狀の發生並びに其の經 然らば此の病的症狀の原因が酸素缺乏にあるべきや Loewy は之に關し次の如く述べて居る。 過の特異性に

が盆々大となる。

狀態に於ては筋肉勞働には酸素使用增加を伴ふが、時 る事を高度によりて示すのである。 供給は不充分ならざるを得ない。 K より静 プス地方に於ては高度 3,000 m 以下で表はる。 身體靜止或は勞作狀態の下に於て其の症狀の現はる 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 止 時 の五 一〇倍にも増加かるが故 又身體靜止狀態に於 勞作を爲す時はア に酸 (額田) 此の 索 0

> 呼吸の型即ち徐々に深き呼吸は淺く速き呼吸よりも めである。又每分の呼吸容が個人的 能力の大小)によりて器官へ酸素の供給を異にする爲 しく差異がある、 て重症の高山病を起す高さは人によりて其の高度が著 血液への酸素の量は變つて來なければならぬ。 即ち體質 (解剖學的な身體構造と機 に異なることに依 且つ

量或は肺の膨脹し得る程度にも關係がある。 により多量の空氣を從つて多量の酸素を與 之に參與する。 よりて身體に與へる酸素量は これが大なれば空氣稀薄に對する抵抗 Krog の所謂擴散系數も へる。 叉呼 肺活 (389)

0 中 差違がある。 心臓力の强弱にもよる。 反應程 一個中及び心臓、 之は毛細管系統の發育狀態、 更に血液の組成、 度、 それが刺戟によりて擴大充分なるか否か 卽ち血液中の 血行運動神經に對する間腦胞及び其 循環の 血色素量の變化 狀態も亦高所 特に筋肉組織中、 の抵抗 、循環速度、 延髓 力に

三

0

能

力にも關係する。

所に 於け 3 人體の 抵抗 と順應及び高山 病 領 Ш

此

の呼

吸因子、

血液因子、

循環系統因

子

0

連

結に

る身體の りて大氣の酸素分壓減少に對し適當なる或は不適當な 狀態を惹起する。

に外的 而 し高 條件ことに天候が相 Щ 病に對する抵抗能力の差違は尚此の他に更 當なる役割を演する。 之に

た。

闘しては 「高山病の諸型」 並びに 「外界因子の作用」

風は體熱放散 に於て述べた。 好 太陽が體溫の調節を妨げ、 適條件を與 へるが强風は 正常呼吸 静かに吹く

を増進する。 岩上或は雪上の歩行によりて高山病に罹り易き者が

困

難ならしめる。

此

の呼吸條件惡ければ夜間の不快感

者の技倆程度にも よりて異なる。

あるが、

雪質、その硬度、

深さにも關係が

あり又人其

常に同 一の影響を 窪 地 に對向する山 與 へるものではない 頂、 絶嶺等の地勢的 が、 その各 條件

なに

L

は

觸れる器官、 は稀薄なる空氣中に滯在せる時大氣に 肺 0 血液は、 減壓に對 して吸ひ付けられ 道 接

から

第

卽

關しては研究が行はれて居ない

解に る様になり毛細管中の血液は酸素缺乏を起し之が内 官の機能を低下せしむるものであると云ふ。 對 する批判は 「血液循環系統の變化」に於て 此 の見 述

器

るは Kronecker である。 此の Haller の意見を支持し且 彼は空氣稀薄は血液の 0 此 の見解 を修 循環を IE.

世

妨げ、肺の充血を來し、心臓機能を弱むるものでありと 3 此の肺の充血は屢々 Bayeux, Loewy, Schrötter,

中に止 りて容易に起り得るが又空氣稀薄又は酸素少き空氣 此 Barak等によりて説明せられたが、之は稀薄なる空氣 A 0 現象が起り得る。 まる時のみならず酸素少き空氣を吸入する 心臓機能の低下は酸素缺乏に

障礙を起 下によりて影響せられ、 L これにより諸器官 叉肺充血は循環系統に 0 酸素供給因 樣 を起 0

呼吸する際に關連して發生する肺充血も心臓機能

低

その結果高山病の發生を催すと云 ち酸素缺乏が 原因は之によりて心臓機能が衰弱し、 高 山病に對する重要なる素 囟 第二次的 C

(390)

に他の諸器官に作用を及ぼす爲めである。

は空氣稀薄に伴ひ肺壁に變化を生ずると稱へる。即ち Bayeux は他の出發點に就きて主張する。叉 Barak

隔壁

の硬化は

肺壁中の血液循環に妨害を生じ、

に歸する者(Mosso,及び他の學派の Herlitzka, Mar-高山病の他の原因を血液中に CO2 の不足を來す時

がある(こと) (ころ)。高所に登るに從ひ血液中

002

んど變らず、故に高山病の發生には必ずしも血液中Cとすることは出來ない。高度4,000m 迄は此の値は殆をすることは限らないが故に此れを以つて全般的な説明を起るとは限らないが故に此れを以つて全般的な説明とすることは限らないが故に此れを以つて全般的な説明とすることは選がでいる。量の減少を來すことが多いが分壓の低減並びに CO2 量の減少を來すことが多いが分壓の低減並びに CO2 量の減少を來すことが多いが

山病 液炭酸の減少してゐない者もあるからである。 02と並行せず、相當重 の原因をなすと云 0 妨 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 害との 間 0 關 係を研究したのは ふ血液炭酸減 症 の高 山病患者にありて 少と中 Herlitzka (24) 樞神 (額田) 經 此 而 系統 の高 8 Im

であり、次の如く述べてゐる。

ことが出來る。自家中毒とは主 よりて招來する總ての作用は自家中毒作 るものであると云ふことが出來る。 り招來する物質代謝 酸素缺乏は寧ろ陽性的な作用であり、 之によりて高山病發生の説明を爲 體に就いて高山病となり得る病的代謝生成物を集め、 病の原因であるのと相反するものでなく寧ろ此 Dfluger の所謂高山病の の上に於て立論されたもので、彼は高所に滯在する身 であると、 高 山病は 此 の説 種 の自家中毒作用に依りて發生するも は理 生成物は高山病發生に影響を與 論的に 一般的説明は之を發生するに 考 に臨床的 ふれば酸素缺乏が したものである。 故に無酸素生存に 無酸素生存によ な概念であ 用とも見做す 0 理論 高 Ш

(391)

山病に在りてすら此れを見るの 異は少く、 占める。 病 原的 之を化學的に見るときは正常の K 高度の空氣稀薄中 此 の高 山病 は つの特異な色彩あ 0 である 長期滯在による重症 (Laubender 狀態より 3 位置 0 高 偏

病原的に、化學的

に特異性を有する。

式論し

阿所に

於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額田

状の經過に伴ふ自家中毒說は不穩當である。 血液中窒素量の增加著しきを普通とするが故に病的症すると云ふが、此の尿毒症では高山病に於けるよりも

すると高山病が發生する。 る所に依ると大氣中にある物質を混合せるもの 第二型に對しては 15% の CO₂ 混入酸素吸入が効果が しく嘔吐を催し、惡寒發生絲狀脈搏として現はれる。第 心悸亢進、食慾缺乏等の症狀に於て現はれ、後者は胸惡 型で他は中毒性型であるとした。 に之を大別して二つの型に分けた。 ンモン)によると云ふ。 水素の他に窒素の化合物 ある。Nageli^{C27)} が Monte Rosa 型に對しては酸素吸入或は皮下輸注が有効であり、 Bayeux(26) は高 山病は色々の形に於て發生するが故 此の酸化窒素及び硝酸アンモ 例 例 へば硝酸ガ へばオゾーン及び過 前者は呼吸の障礙 の頂上に於て調査 其の一型は窒息性 ス及び硝 を呼吸 酸 酸 11 世

ンは

有毒性であり、

之が分解して甚だ不安定なるニ

1

説は一 は大なる高度に於て疲勞困憊し盡くる迄勞作登行を續 もとに起り得るものとしなければならぬ。Friedlander 病の症狀を表はすが故に高山病は空氣稀薄なる條件 呈すると云 發生の原因でなく他に けると意識不明瞭となる事を高山病とした。 牛 · 種の精神の衰弱に歸し、 ール硝酸基を生じ、 \$ 而し之に對し減壓室中でも矢張り高 不明なる 之が體中に於て有毒 原因 空氣稀薄のみが があると云 即ち彼 高 作 Ш 用 病

反對に登山鐵道等によりて急速に登る時は高山病に罹 を馴らす事である。或は又受動的に徐々に登る。 登るか或は少くとも馴致作用を發生せしむる様に身體 かの場所に停滯 險高度迄は鐵道其の他によりて登らす、 することである。 體中特に酸素を必要とする器官に酸素の供給を適 び處置は講ぜらるべきである。 高山病發生の原因に基き實際に適合する其の L 高 此れが方法としては高 度に對 して 其の の順應作用を起 理論的 其の途 山病 0 發 要 豫防及 點 L 中 此 當 は 0 危 0 身

(392)

5

高山病の豫防及び其の處置

る動機を多からしめる。

ある。 中等度 の發達 なる。 る。 膜の充分なる運動を妨げる事より豐富なる呼吸を妨げ **榮養にも大なる注意を要する。榮養價の缺乏は容易に** を有し好條件に在る。 を壓し上げ胸腔を壓迫して高山病の發生を促す原因と 困憊的な衰弱を招來し易い。又胃に對する過食は横隔 によりて)は危險の發生的原因となることが多い。又 自 一發的 又腸ガスの發生を多量に誘起する食物は又横隔膜 又蛋白質の過剩攝取は避くべきであるが炭水化 徹夜した直後に高所に登ること(殊に飛行 0 かな、 高度に於て第一に 血液の ましいくいの 訓練を積める者は未訓練者に比して筋肉 循環、 故に甚だ高所に登行する前には 同一 1 の勞作に對して低き代謝値 レーニ ングを行 ふべきで 機等

きで ればならぬ。 < あり、 象の關係も高山病早期發生豫防に對して考へなけ 又步行の有様と負 所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 步行に際 身體靜止時は成るべく寒冷より保護すべ しては餘り强き日光、 ふ荷物にも影響がある。 强 風を避く (額川)

物の多量は好

出來れば治療法として 3-4% 身體を靜止せしめ、 吸入する事が最も宜し^{cso} Adersberg 及び 目 的 の所へ到達せる後に高山病に罹る時は絕對 勉めて深き呼吸に努力する。 CO2 を混ぜる酸素を Dorges 更に 的 K

歴並びに組織への れ肺胞中の 事を推奨してゐる。之れによりて呼吸作用が促進せら 酸性燐酸アンモンを一 O2 分壓を高めその結果は血液中の 02 日 の供給を促進する。 18gを水に溶解して與 0 分 る

高山病として尚著しき症狀の一つは心臓機能

の異狀

(393)

頭痛、 此の症狀に適應する治療法を講じなければならない。 を發する事であるが、 が有効である。 必要とする。カフェイン、 ン、ピラミドン、フェナセチン等を與 發熱等には解熱鎮静劑アンチピリン、 尚人によりて其の症狀が 多少異なるが 之には適當なる强心劑の投 デキタリス**、** へるが カンフォル 如き等 アスピリ 與 べ。 劑 を

特の藥劑、 Peru Andes 世界の高地帶內住民は夫々長き實際上の經驗 方法を用 地方にはコ ふる。 カの葉を嚙み、 Tschudi 0 報 7 告に 力 の茶を飲 より獨

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田

茶、 0 方の住民にも用ひられてゐる。 他 の强き臭氣を持つ植物を用ふ。之に對しコーヒー、 コレート、 アルコール等はそれ等住民には有 尙此の外に球葱、 並其

害とされると云ふ (Poppig)。

或は旣に ならぬ。 行中高山病發生すれば必要な休息を與へなければ 此の以前から罹つて居る者は低地に降すべき 到達の目的とする場所で高山病が發生するか

的急速に登る時に發生することが多く、之に對する處 からである。 である。 甚だしき危險性を伴はない以外は一時的 何となれば身體には馴致現象が漸次發生する のもの

斯かる高山病の發生は高度 5,000~6,000m 迄も比較

は見當らない。 あるが其の患者に對する處置方法には著しき遠つた點 更に高き所に登る時は發生する馴致作用は部分的 但し酸素吸入は之の適應症のみに對し

で

よし

り得るとするも危険性は極めて大である。

故に最後

層有効であり且つ必要で ある。

6 酸素の問

彼等はリモナーデをよく用ふる。これは Himalaya 地

吸困難

や胸惡しき事を踏すると云

3. 其

の他に

迄もない。今 Himalaya 登る高度と、登行の條件により趣が異なることは云ふ 験ある人による報告の二三を兹に記して讀者の判斷 高所登行に酸素使用が屢々問題とされて來た。 其の他の巨大山岳遠征の體

任すことにする。

Ruttledge の Everest 遠征に際して Warren(30) は

前で、 Everest の甚だ高所に於ては登攀者は彼等の筋肉の 四肢のみならず他の感覺も甚だしく鈍り失神の一歩手 高所氣象の爲め四肢の痲痺によるもので斯かる場合は 勞困憊の末屢々停止休息しなければならぬが、此れは 若し斯の如き場合に極めて重大なる危險に曝ら

如き場合に酸素吸入を行へば効果極めて有効であるか 生命の最も危險に曝らされてゐる時である。 されても、その危期の重大性を確實に認識し得られず、 29,000 呎の頂上迄も酸素を使用せずして登 若し斯

Ш 云ふ。 Dyhrenfurth の Himalaya Expedition 以際 頂突進には酸素を必要とする最も强き論證となると

pedition の如きは場合が異なつて居り、 には酸素吸入は絕對に必要であるが は飛行機で急速に著しき高所に上昇する Himalaya 眞に酸素を必 Ex-

眞に必要とする前の場合に當嵌まると云ふ。又獨逸 通 である。 馴致作用により酸素吸入の必要は認めないのが普 但し體質の特異性の者に就ては特に酸素を

場合の他は使用せざる意見であり、

高所へ徐々に勞作

作の爲めに心臓機能が衰弱した外何れも健康狀態良好

要とする實驗か或は科學的に酸素を使用して研究する

登行する全行程に酸素を使用する事は全く問題外であ

auscanによれば酸素の高所に於ける有効價値に就ては 際的に酸素使用無くして可能である。 屡々論ぜられてゐるが山頂に達するには理論的 が之の使用を放棄した。又酸素使用の有効なる事 Kangchendzönga Expedition に際し 叉我 人遠征 及び實 の方 K_{V} は

> 人のみが 何等の山岳病症狀を發するもの無く唯隊長 の困難と甚だしき勞作と闘ひしに拘らず彼等の隊員は 所に七週間、7,000~8,000 m の所に十日間 に際して Hartmann(35) は、 ふ。又 Bauer の第二回 Kangchendzönga Expedition 7,000~7,600 m の間に於て餘りに烈しき勞 遠征に際し 6,000 m の高 止り、 Bauer 登攀

は馴致能の減退を來すべき高度であらう。又 7,700 m 眠にも認め得べき減退を來した。故に であり、 の高度に於ける登行速度は歐洲アルプスに於ける半分 第十一幕營(7,360m)で僅かの食慾減退、 7,300 m 以上

(395)

300 m 高巨の克服が出來た。 乃至三分の一に減退し、膝を沒する深雪上を二時 だと云ふ以外酸素使用の問 困難を感する者なかりしが勞作烈しき時强き咳に惱ん 題 斯かる場合に何人も呼吸 には觸れて ゐない。 間

缺乏は漸次馴 極めて長期間 が 亞細亞旅行に見る處である。 致作用發生によりて輕減することは 高所に滯在する者に對しては勿論酸素

認むるも實際高所に於ける使

用 0 確

實

性

から

あ

りや

否

其の重

量の點とが使用に對して宣告を與

へたと云 (額田

din

所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

酸素の携行は推奬せられるが必要の時のみ即ち高

所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(額

田

するが如き、例へば Himalaya の巨大山岳への登攀 退することは免れない故に之に對して酸素吸入を行 病で症狀惡化を來し苦惱甚だしき時に之が使用を行 理 事は普通 山 きである。 の下に極めて高所に成るべく短期間に登行せんと 行はぬ處である。 高所に於ては大なり小なり勞作能 而し競技的に或は科學的 力 0 減 å. Щ 0 2

0 應じて酸素を利用することは、 よりて或る程度迄は登り、最後頂上への突進に必要に 如き場合には、 防止上賢明の策であると云はねばならぬ。英國第二 其の自然的に誘起せられる馴致作用 能率を高める點と危險 VC

chendzonga 易とならなかつたい。質例を見れば酸素の使用は無益 素吸入を行ふ時身體の條件がよりよく、 回 baso Dyhrenfurth であると云ふ者もある。 に於けるが如くその不必要を主張する者 遠征の場合最高地點に到達せる者で酸 の Himalaya Expedition に於 叉前 述の Bauer 登攀はより容 0 Kang-

呼んで居る。

T

も酸素使用價値につき斷定は下し得なかつた(尤も

容器よりの酸素の使用も必ずしも確實性が保證されな 素の容器が旣に 短時間隊員の一人の 此の場合餘り酸素の使用は行はなかつた、 高所の登行には負擔大となり得るし みが使用したに過ぎなかつた)。酸 唯 口 極く

所に於て能力を發揮せしめんとすれば絕對的に V 以上、その價値は低下される。 而し飛行機其の他によりて著しき高所に 到達 酸素 し尚高

必要性を認めるいめ 7 空中飛翔中の高空病

上高空病 (Höhenkrankheit Luftkrankheit) と一般に 高度大なる所とは場所が異なる高空に於てどある關係 張り高山 くとも高層に氣球或は飛行機によりて上昇する場合矢 高山 病の發生が高所に於て起る事は必ずしも 病に極めて類似の症狀を發する。 而 し山 Щ でな 岳

型に於て現はれる。 る。 此の高空病は高層大氣に上昇する方法によりて異な 氣球で上 昇する時に發生する症狀が最 此の場合發生する高空病は其の症 も單 純 なる

意識に陷り、 動遅鈍を伴ふ。8,000 m し漸次疲勞感、 10 的 報告によりて の減退を起す。 症狀 靜かにする時に發生し、 を發生する 明か 更に上昇すれ 肉體的 眠氣、 が、 な事 思力錯亂、 氣球 で、 能力に關しては著しく衰弱 の高空に迄上昇すると深 約 ば逐 第一に大脳の機能障礙 0 籠中に於て或は減 4,000 m 10 精神 死に陷る。 力減退、 0 高空に於て病 此 敏感度 の高度 壓 き無 を起 室中 運

此

が 減 壓室·

中で現はれる症

狀と等し

事

は既

に幾

多

0

題

なつた。 Berson 及び 為しつゝ上昇したが高度8,500mに於て喪神し、 搭乗し、60%の酸素を含有する酸素囊より酸素吸 を使用 佛人 Sivel, Crocé-Spinelli, Tissandier のみは飛行船が下降し始めた時覺醒したい。 して高度 10,500 m Suring は酸素吸入器が更に完全なるも に達して遂に喪心狀態と は飛行船 Tis-K

は酸素供給缺乏の大體に於ける限度でも

ある。

(397)

あるが 氣球中 尚氣象的 では空氣 所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 な因子 稀 薄 から 高空病 例 へば H 0 光强 殆 h 度、 ど決定的 寒冷等も問 (額田 な要素

で

此の機械的な條件により病的現象の發生を惹起する 度の高層に於ても氣球のゴンドラは風の爲めに動 操縦し得る氣球では趣が違ひ、 之は風のまにく て所謂船量と同 の有様は恰も海上波の荒き時 K なる。 丽 も風 様な症狀が起る、 氣球は流れ動くからであらう。 0 影響は餘 b 船上 無 酸素缺乏を生ぜざる程 即ち船量の特徴で V 之云 に於ける狀態 はれ てゐ K る。 耐 以

は、 ば、 に病的 る嘔吐 亂 的 要器官の平衡を失ふ事及び前庭神經系統 \$ り恰も船暈の症狀も加入し、空氣の寒冷、 ば酸素缺乏より來る症狀も起り又上下左右の動搖 病的 に又他方に於ては前 飛 此 更に複雑で高度 4,000~5,000m の高空に上 行機に搭乗して上翔する場合に發生する病的 な症 0 症狀發生の 血壓降下に を催す。 飛行機の上下左右 狀を惹起する。 より血管運動 原因となる。 庭神 經系 の動揺は一 Schcber (37) より 飛行機の 神 經反射 腦 方に於ては機械 動 0 K 0 から 研究 観れ 揺は 烈しき氣 異狀を來す 血液循環 る爲 身體 K 翔 依 すれ 10 症 狀

14 浙 ○額 IH

臟

保持に L K th かご 舵の操縦を誤り墜落を招くことがあ 飛 ば 行 自 C 機の は視力及び壓感が役立つが此 己の廻轉觀念に誤算を生じ易い あると云 運動によりても亦之に類する誤算感を惹起 30 角 速度を速め T 頭 の二つの感覺は空 る。 8 部 を運 0 器官 であ 動 の平衡 るが故 世 L む

> K 2

氣中

身體の

位置

を調整する

にも役立ち

位置

0

變位

をも

尙

帶びる多くの

他の

症

狀が

あ

る

學的 分に を鋭敏 8 を調整することは空氣中に於けるあらゆる方向と位置 極 感取することが出來る。 めて 樣 重 對 要な事 K 印 象に 壓感により して持續的な緊張を要することであり、 JE. 重大なる事 確 歸 である。 に認識することに關係甚だ深 せらるべ で、 て不斷の警戒力とは 此 き不斷の 身體 0 事 此 は視力並 並びに飛 れが飛行機の操縦安定性に の注 視 力 U 行 K 飛 0 機 壓 行操縦者に特 喚起と、 < 0 感 平 操縱上最 の神經部 衡 此 0 之と の光 亂 机

を る。 催 高 す。 層 飛 覺的 皮部 行に際 呼吸困難、心悸亢進、 及び可視粘膜の充血、 して見らるべき症狀は次 頭 確認せらるべき心 痛 胸 0 悪しく嘔吐 如 きも 0 C

> る。 斯

0

本

質的な餘後症としては眠氣、

消化障

礙

精

神的

衰

有

0

神

經

快

感

0

發生

原

因となる。

殊に時

×

飛行機中發火の經驗

を受けるか

或は近

\$

0

空

中

に於ける遭難

元を目

撃す

るが

如き場合には

ことに

者にとりて屢々惹起され、 斷の注視及び精神緊張 て重要である。 機能 よりて改善 肉體的 此 0 0 外に 促進 衰弱感等、 神 及び せらるべ 經 睡氣は酸素缺乏よりも來るが又長き不 不 過 敏 此の後に述べ 均 等、 きもので飛行機 K の要求の結果として現はれ なり易き症 典 而も操縦上 一型的 た事 な睡 狀 非 0 柄 氣 操縱 常 尚 は肉體的 を VC 那 催 危險 行機 VC は 性 操縱 る。 極 訓

在方向 冷に基くこともある。 頻繁を起す、 壓の異常發生 心臓及び脈管裝置に於ける障礙即ち脈搏 理解 感消 之は神 (多く血壓の亢進) 失、 經的 强 迫壓 眩暈感や平衡感受性 なものであるが 恐怖感等 も起る。 Ŀ 屢 層氣 又屢々 の消失、 0 發生す 變 温の 化 尿 寒 意 m.

如 き 恐怖 感を惹起 L 遂に神 經 衰弱を 伴 ふことが あ

(398)

弱感、虚脱、自信力の減退、亢奮、思想力錯亂等の發

に此の所謂 Fliegerkrankheit の治療には精神的、化的な患者を取扱ふと同様に取扱ふことは出來ない。故と稱することが出來るが、之を或る病氣として他の病と稱することが出來るが、之を或る病氣として他の病と稱することが出來るが、之を或る病氣として他の病と稱することが想來るが、之を或る病氣として他の病と稱することは極めて複雜で肉體的並びに精

- (5) Docceschi: Trab. I.abr. Fisiol. Cordoba. (1910).(5') Bancroft: Borcher. Die Weisse Kordillere. (1935) 360
- (7) Moorcroft: A. Journey to take Manasarovara in Undés.
- etc. Asiate e Res. 12. Kalkutta. (1816).
- Hedin: Durch Asiens Wusten. Leipzig. (1899).
 Middendorf: Peru. Bd. 3. Berlin. (1895).

(8)

(9)

(10)

) Bauer: Im Kampf um den Himalaja.

Pöppig: Reisen in Chile. Peru, usw. Leipzig (1836).

Bauer: Um den Kantschi, 1930.

Dyhrenfarth: Himalaja (1930).

Ruttledge: Everest the unfinisched Adv. (1936) Borcher: Dei Weisse Kordillere. (1935).

(399)

(12) Fritz Bechtold: Deutsche an Nanga Parbat (1934),

(13) Humphreys: Ruttledge, Everest, (1936) 204.

52-53

(14) Humphreys: Ruttledge, Everest. (1936) 208, 223.
 Richter: Dyhrenfarth, Himalaja, (1930), 247.
 Hingston: Bis zur Spitze des Mt. Everest. (1924), 172.
 Bauer: Im Kampf um den Himalaja, (1929) 106, 157.

Warren: Ruttledge, Everest. (1936) 221.
Richter: Dyhrenfarth. Himalaja. (1930) 245.
Borcher: Die Weisse Kordillere. (1935) 365.

(15) Boussingault: Bei Aley, v. Humboldt, kleine Schriflén I.

じなければならない。

學的、物療的其の他あらゆる有効適切なる諸療法を講

- Dufour: Sur le mal des montagnes. Bull. Soc. méd. Sursseron. 1874.
- (2) Acosta: Historia naturale e morale delle indie (Span)
- (3) Don Ulloa: Memoires philosoph, histor, et physiques Concernant la decouverte d' Amórique. Trad. française Tome I. (1787).
- (4) Knoche: Berl. klin. wscler. (1910)

高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病

(簡四)

- 高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病 (額田)
- Loewy: Arch. f. physiol (1899) (28) Rose: Schwez med. Wschr. (1931) 23
- Conway: Climbing and Exploration in the Karakorum Guillarmod: Six mois dans l'Himalaya, Neuchâtel. (29) 前田: 岡山醫學雜誌, 第49年, 第573號
- 30) Warren: Ruttledge. Everest. (1936) 239-1940.
- (32) (31) Kraus: Bauer, Im Kampf um den Himalaja (1929) Dyhrenfurth u. Wielard: Dyhrenfurth. Himalaja (1930) 271, 288.

(20)

Schrötter: Der Sauersfoff in der Prophylase und der

Blutes, Berlin. (1927).

(19)

Hingston: Bie Barcroft: Die Atmungsfunktion des

Himalaya, London. (1884).

(18) (27) (36)

- (33) (34) Hartmann: Bauer, Um dem Kantschi. (1931) 144-145 Hingston: Bei Barcroft: Die Almungsfunktion des
- Blutes, Berlin (1927).

Finch: Der Kampf um den Everest, Leipzrg (1925).

Younghusband: Der Heldensang vom Mount Everest,

(400)

- (36) Bert: La presion barometrique, Paris. 1878 Basel. (1928).
- 37 Schubert: Ref. klin. Wschr. (1931), (1932). (昭和十六年五月十日)

Angeli: Ref. Umsch. 36. (1924)

(25) (24)

(26)

Bayeux: C. r. Acad. Sci. Paris. 172. (1921).

Moog: C. r. Soc. Biol. Paris. 73. 31 (1912).

Herlitzka: Arch. di Fisial. 24. Suppl. (1926).

前田, 伊賀: 岡山醫學雜誌, 第49卷, 第572,573號

(23) (22) (21)

Mosso: Der Mensch auf den Hochalpen. Leipgig(1897)

Kaiser: Luftfahrtforschg. 6 (1930)

Therapie, Berlin. (1904).

Warren: Ruttledge, Everest. (1936) 234-235

35)

多期南湖大山行 (南湖溪溯行

昭和十五年十二月· 十六年一月

全土を擧げて豪華な繪卷物を繰り展げる様に種 紀元二千六百年を記念すべき奉祀行事の數々は我國 K 0

形

は

L

から

3

るもの」一つである。 であるが=臺灣五岳新登行路開拓行=も其の中 に於て行はれた。 我が臺灣山岳會に於ても會相當な行事が行はれ の主な たの

實 行 準 備

||南湖大山方面は出口、 de ら此 の計畫が發表せられた際には極 德永、 及川、 宮村の四氏と筆 一めて簡 單に

冬期南湖大山行 (南湖溪溯行)

(木田)

木 田 文 治

當れ、 に於て適當にやれ―との事であつた。 者の五名を以て一班を編成し、 新登行路の選定其の他の實行計畫は一 其の責任者には木田 切責

任者 から

れたが参加豫定の出口、 のである。 が偶然に役立つたことは何に彼につけて幸ひであ の縦走をして見度いと思つて内々調査中であつた計畫 ねてから南湖溪を溯行して、中央尖山から南湖大山 て實行準備にとりか」つたのであつたが、 私は命ぜらる」がま」に直ちに参加者各位と相談 斯うした事から入蕃の手續きも迅速に運ば 宮村兩氏は出發直前に参加不 質は私がか つた

四

の三人で一切の準備を完了したのは十二月廿八日の夕

能となったことは今も惜しい。

結局德永、

及川、

刻 であ つた。

出 臺北 I 豐原 明治 三平岩· Щ

り急行にて 昭 和十五年十二月廿九日、 出發 午前九時三十 分臺北驛發

此

0

日臺

北

地

方の空模様は灰色の

雨雲が低

く垂

机

T

なる。 東の 臺灣 頭が隱見する K b Vo る。 つれ 雪 然し山 疾風 北部多期特有 天候もやがて恢復するだらう、 カン 8 車 て桃園臺地 窓か 知れ 3 黨は此の位の事で逡巡せず何處迄も心が 加は AD 0 5 8 南方を眺めると雲間 と平然たるものである。 薄光を浴びる様に 面白 から竹北平野を過ぎる頃は雲も高 の暗澹たるものであつた。 つて何となく重くるしい氣 Vo 列車が大安溪の なつた。 から大覇尖山 或はお山 追々南下する 鐵 それに北 は念願 分を副 橋 K 差か 0 怪 强 < 通

乗で春光麗らかと言ひ度い程である。 街路を砂煙を上げて疾驅する乘合自動車や貨物自動 -後零時 74 + 五分列車は豐 京驛 に着いた。 乾き切つた豐原 天氣は・ J. かい

る頃

は太陽の

敬意を表することにした。 充 字 車 から十文字峽までの乗合自動車の事を依頼しようとす つて吳れたので助かつた。 れないと云ふ最悪の場合は 合せて居つたので、 く旅鳥の悲哀を味は らではわからぬ』と斷られてしまひ、 ると至極 分時 峽 を徐 明 間 け ながら アッ 治温泉行バ 8 ある サリ 驛 0 近く でゆつくりした氣分で豐原郡 一あ 荷物等 ス終點) った。 ò 0 自動車 小 料 追々時間も 幸ひに當地 序に警察課保安係官に豐原 の關係で、 理 迄のバスの發車する迄は 私が何とかします』 店で晝食をし は所轄違ひだからこち とりつく島 迫るので驛 乘合自動 0 舊友Y た 車 去 所 K K 來 な 引

當嵩が 殊に此 力 發着所に である。 返して先着の荷物を受取つて見ると思つたより大 ともかく受取つた荷物は各自ひ 5 ある 乘客 のバスは十文字峽迄直 運び、 さりとて之を減らす様なも 0 0 殺到は大したも で他の乘客 待合せてる自動 K 迷 通 0 惑をかけること夥 車に の今日の最終 つ擔いで乗合自 運 轉手 入れ のは一つも て見 8 車掌も、 000 たが ない のだ かぶ 車 3 相 0

般 顔も穏かでない。 立場をかえて考 へて見れ

ばこれも り値引きする譯にはいかぬ』と云ふ。四十五圓借くは あると云 で十文字峽迄の賃銀を尋ねると、 ないが客の イヤー 當然で ふ『往復賃銀を頂くことになつてるので之よ を飛ばすことに決心し早速客待の 弱 味に あるか 附 込む様な態度が氣に喰は 5, 度積込ん 驚く勿れ四十五圓 だ荷物 8 82 0 を降 を呼ん さり で

5 である。 を叱り飛ば とて止める譯にも行かず進退谷まつた様な顔をしてる Y君憤然義氣を發揮して雲助 賃銀は約牛額强二十七圓で行つて吳れると云ふの 先刻の運轉手を尻目にかけて出發したの L 自分の常得意を呼んで依頼して吳れ 根性の客待タクシ は聊 to 1

か溜飲を下げた思ひで今憶ひ出してもY君の意氣

には

何とも 雲助 ひ度い 運 つ乘合自動車業者等は、 ぶことの出來る車を準備する様な心構 根性 言 こと提唱して熄 のタクシ ぬ感慨に ー業者は斷乎排撃 打 まね。 たれ 客席以外 る 叉旅客 同 に或程度の 時に長途 0 弱 其 0 點 へを持つて貰 自 K 0 手荷物を 路 肅を要望 0 け込む 線 を有

期南湖大山行

(南湖溪溯行)

(米田)

するものである。

定刻に出發し て、入蕃其 斯くして豐原 0 他の御禮を述べて一路明 た乘合自動車 を出 一般し たのは午後二時 下を追越 L 東 治温泉に向つて 勢郡 Ŧī. + に立寄つ Ŧi. 分で、

ら明 昭和 ある。 2 1 に交る紅葉の美しさと云つたら唇 とも言へぬ面白味がある。 坦々として誠に心地よい。 驀進する壯快さは何とも言 17 東勢を出ると間もなく大甲溪右岸を走るが 右岸に屹立する岩山の肌に疎らに林立する松の緑 治温泉迄は二粁强 十年に移住 ン臺と云ふ蕃 午後四時三十五分十文字峽に着いた。 したものだと云ふ。 社が ある。 の道程で 殊に十 兩岸の 大甲溪上流 82 あつて此 文字 林 へ様のない 此 相 の選り のバ 峽 處 0 近 から徒 ウ ス くに 5 附 莊 變り 0 終點 1 近 噩 路 なる 步 社 K 3 面

(403)

何 は

惱 0 偖 種である。 7 應は落付い 夕餉を濟ますと直ちに明 たも 0 7 明 日 かい 5 0 治駐在 荷物 運 所に カジ は午後六時二十分であつた。

始まるのである。

荷物

の整理等

L

溫泉

10

落付

V

10

かい 0

かい かぶ は C

を訪

九

て

明

日

0

人夫につい

T

相

談

L

た

0

で

1)

1

橋

Ŀ

=

差

懸

ラ

2

1

ス

ル

t

現

在

浴

近

萱

原

3

たる道

を

爲

× 12

=

原

警

と記

頗 附

危殆

瀕 1)

なが

5

人 路

夫

彼等 場向 四十 て吾々 姿を遙 所と頻 等 就 は あ 礼 L あ ことで非 7 て る。 逃 b T 走蕃搜 蕃 174 實 あ 近 頂 同 側大甲溪左岸 ます』と云 て『其の由 大甲 塚本さ Ш 行計 る かん 人押 年二月十 時 K くことに 人は寔に 上此 常時 薫も入 山地 -溪兩岸交通 물 折 索 收 書を樹て ヲ h 0 局 資源開發の 衝を重ねて下さつて漸く所要 懇切で 拒 來は は尚 つて なつ 向 地 四 つて示され Ш 打 開 K 5 3 H に當つては斯ろしたことも考慮に 居られ た。 ねば 河原大岩 原警部 逃走 此 來ても に國 3 ほ 連絡三 路傍の ハロ IJ 0 此の 駐 爲め努力の シ 南 ならぬことを教 の總力を擧げつ」 見ら タルヲ 在所 ン臺 た。 た。 勢蕃銃器押收 廖 丸木橋ヲ架設 小 人夫難に就 石 備付 ト鐵線 巡 共 高 机 これ 以テ る 查 ク 0 V 需要頓 ラ 處 補 全 0 0 6 文に 橋 同 簿 K T 亦 ス ヲ 隨 社 月二十 ヲ 1111 あ あ 止 V へられたの 開 つた。 ある現 2 中 Ħ K る弔魂碑 tr K T 0 0 塚本さ ア 記錄 を得 増した爲 人夫 間 關 始 < 係駐 y 現 Fi. ス 明明 (當時 元在浴 日 ル 隨 實 な L 之 T 出 = + 治 T K 入 0 h 在 單 捧げ 様に ある せら 及廖 遠 + る 0 3 to 約 = -0 1 歸着、 身兇蕃 毒 藤 紙片 杆が 机 當るはなしである。 + 12 Ŧī. の無 1 巡查補 ヲ以テ 双ヲ浴 駐 號 開 れてるのであつた。 た。 + た幾多先輩 を見 を飛 在 機 兩 拓 名 それ 所 方 ノ重 ノ遺骨 せら 九 V 附近 ビデ ると次 から付 退 ば ハ馘首 死 のと勝手な事を考 兇 は鐵輪 る」 圍 却 蕃 L = 致命ス、 ラ脱 1 の鴻恩!!を考 セ = て大甲溪の絶景を觀賞し -生ヲ 墜落同 0 までの先人の + 1 いてるもので ラル 1 齊射擊 樣 出、 部、 K 環が 得 塚本さんは更に秘 ス に書 タリ、 幸二 依田 大正 私共は今日坦々 12 乘者二名、 慕標 刹那 付 ヲ V 九年十 T 2 特務曹長 V ^ 加 へてゐるけれども、 ある。 てその 此 テ あ なかつたらそれ 偉大なる業蹟 ナシ』(原文寫) = 數彈 駐在 5 る 品 遠藤警部 月 V 『警察飛 環 それに着 四 所

こそ罰 を示 (404)

生

命 此

藏

0

品

K

ボ

1

1

樣

當時

ノ有

意識恢復

2 倒

(壽分遣

所

日

東

勢

昏

行

第 T

V ル

偲ブ 記念品ナリ。 った。 昭和辰年正月寫之、 塚本國 雄巡

とあ

眞闇 して寝 小さくポツリー~!! 分夜 深くしようとは夢に のが から人夫の数も決まつたので人夫の数に荷物を造り直 して本島蕃地開發乃至は理蕃史上の も既かつた。 れ聞かされた好意を謝し駐在所を辭去した あるのであるが今宵此處で當時の慘事の思ひ 藤警部遭 0 中 に就い に繊 なと谷 難 たのは午後 の事實は筆者等の記憶にも 空は星一つない、 も思はなかつたことであ 杯に咆哮 大甲溪の流れの岩に激する音は 7 ·一時頃 L てる。 で 尊い秘史に種 松の零か つった。 溫泉に歸 生々 る。 霧 L 雨 0 は大 斯 出 々教 つて かい V < を 6

に自社 彼女等は今日ウライまで吾 5 健 氣にも賴母しい姿であつた。 に歸るのだと云ふ。 名が炬火をかざしながら來て起すのである。 た荷物を擔いで同じく炬火 H まだ眞暗 間もなく青年がやつて來て な午前 々の荷物を運んで夕方まで 四時 の灯 ハロ 行は六時 C ン臺の擔送 山道 五十分 を往

あ

齊先生 々員)

(臺灣山岳會評議員)

と木藤先生

(臺灣山

岳會

(405)

時雜談の後學生

一行も先生も元氣な足どりで明

治

VC 向 である。お互にやあくと奇遇を語り合

つて少

た。

吾

*

行は住

を渡さうとすると明

治から三人で上げた荷物を二人で 陽から迎ひの二人の擔送夫に荷物

は何とも言へぬ、 もまだ來ない。 に床を出た。 北高校學生の 着いた。 間位の處で晝食をして午後二時五分前に烏來駐 んでる。午前十一時十五分に馬崙も過ぎウライとの いの日和で途中の景觀を賞でながらゆつくり歩く氣持 分出發した。 一日夕方迄に平岩山 83 にお願ひして温泉に残した罐入りの荷物二個は三十 朝食も濟まし出發の用意も出來、 丁度霧社 今日も早朝から曇天で歩くには持つ クラス社から來る筈の人夫が 止む 團が來て居つた。 急がぬ様でもいつとはなし 八屆 を得ず 松嶺方面 けてもらふことに 駐在所に行 から明 引率者は岳友の齋藤 治溫 つて又も塚本さ 九時 し九時 泉に歸る 向姿を見 K K 歩が なつて 在所に + Ħ. 中 進

h

世

擔げぬと云ふ、彼等にとつては至極尤もな言分である。

期

南湖大山行

(南湖深潮行)

(木田

16.

冬期南 湖 大山行 (南湖溪湖行) (木田

銀をやることにして漸く擔がせることにした。 では近くの駐在所の方が集まつてお餅搗き最中であ ウライの宮城さん 自分達も少し宛荷物を分擔し又いくらかの増賃 (警察官) に潑勵の言葉もかけても

を休めて四時出發する。 楠木が雲を衝く様に林立して實に見事である。 十分小澤臺に着く。駐在所附近には見事に成長した梢 午後二時五十分御好意を謝して出發する。午後三時五 た。山もお正月の香りが漂ふて何となく和やかである。 此の頃から附近の山頂を掠 少時肩 ウライ 8 0

登仙 流點 少い故か 峽 ―の鐵線橋まで降りた。此の溪流も今年は降 の上り道となるのである。バラくしと降りか 水もありやなしやである。 之から上は有名な 雨が 7

つた時

雨も

路 面

を濡す程

にも至らなかつた。

難

いと

とである。

ウライを先發.

した住陽の

青年と一

緒 有

になっ

ていろく、話を聞きながら歩いた。 二人の内の 一人は佳陽社教育所を卒業したボ 9 1.

٠

50

7

ンと云ひます』と云ふ。

尚中央尖山はバブ・ビ

十一歳)と云ふ病身らしい男で、 ぎに來ました』と云ふ。今一人はバイソ・ノオミン(三 彼は足を痛め山に行けぬので『今日皆さんの荷物を擔 タイモ(二十一歳)と云つて眞面目さうな青年であ 國語も充分でない。

らしい面貌で鼻がないが何となく剽輕な片鱗を見せて 教育所も出て居るまいと思はれる。此の男、山では珍 仲々面白く、 山行の好 件侶である。住陽社に性 病 が

るとも思はれ

ぬがどうしたことか

る。タイモは歳に似合はず此の附近の山を歩い 云つて鼻が高い。 山の名を教へてくれるのは無論ボ 今後も『足さへ痛まなければ ット・タイモであ てると 財 津

て居

つた雲が段々下つて來て空模様も怪しくなつて來

やがてガオン、

ハボン、

カナジー=カナジー

溪合

の教 た。次いで南湖大山はバブ・バュではないかと反問す (バブ・ハガイ)、 山(バブ・トオハン)、劍山(バブ・バレホン)、次高 へた山名は大雪山(バブ・ボ 南湖大山(バブ・ビジャン) 等であ バイゴヘン) 佳陽大

ると彼曰く『バブ・バュとも言ふが佳陽方面ではバブ・ ん一行のお伴をするのだが!!惜しい』と残念がる。 彼

(406)

バ 大甲 アリックと教 溪 0 右岸登仙峽 へる。 それから眼前に峙つてる大斷崕 の大景觀を造つてる) を指して

アレは何かと尋ねると彼は言下にバブ・ハットイ(ハッ

を語 覺えず登つてしまつた。 までは略平坦 トイは断 b あ ひながら歩いてる中に登仙峽の急坂を疲れも 「崕の意と説明した)ですと言ふ。 こんなこと 一な緩匂配の道である。 此の坂を登つてしまへば達見 午後四時 四十 Ŧī. 分

分等の喰べてる蕃薯を惜氣もなく三人の が彼等は之を額付きで看破したかせぬかは判らぬが を覺えた。 物をおい 坂上の四阿屋に着く。二人の人夫は四阿屋の床几 て蕃薯を喰べはじめ 恥しいが事質だからそのまゝ白狀する―處 た。 之を見た途端 前 K 出 に空腹 L に荷 自 T

ウラ お世 心持と云 忘 『どうか喰べて下さい』と云ふのである。 れて何の屈托も、 82 辭 イで荷物の事でグ 優しさが を言 3.6 ふのではないが ある。 のは實に親しみを増すものである。 足の痛さも、 自分等のものを分けあつて喰べ ッく 彼等高砂族は實に何 言つた事などは 身の疲れも知らぬ様 貰つた 5 とも言 12 リと 先刻 から る

> 忍び寄る様に夕闇が迫つて來る。 のであつた。 10 ひ立てられる様に腰を上げて達見に向ふ。 VC 分達見駐在所に着いた。 佳陽まで頑張る』と云つて一 全く融け合つた心持である。 冬の日脚は早く斯うして休 足お先に 而も彼等は 山の風も冷たい。 + んでる間 午後六時 サと行 K 追

達見の字都さんは質に見るからに逞しい

立派

な青年

とこれ 事件の地に唯一つと云ふ駐在所に であつた。 警察官である。 つ旅の疲れを癒し、午後九時頃戸外に空を仰ぐとなん のづと頭が下る。 の爲めに身も心も共に捧げて居られることを思ふとお は空一 警備線の駐在所であるが生々しいピスタン 面 の星 奥様も内地から來られて間 用意の 土光りで お風呂に限 あ る。 明 夫君を扶けてお國 日 b 0 なき感謝をし 快晴と恵まれ もない

(407)

ない。 八時二十分達見を出發し 十二月三十 昨 夜來氣溫の低下は霜となつて=+ 日 眼を射る様な旭光を浴びながら午 10 几 一邊の Ш 0 V 色 0 たら Щ

前

た山

旅を感謝しながら寢床に這入る。

冬期南湖大山行 (南湖溪溯行)

(米田)

期

南

十時 た莊 K る。 掛けられ 佳 十分であつた。 たなな 陽 な V 三十分佳陽駐在所に着く。 重 社 Ji. かい あ 雄大な南 眞 た。 I 0 近に見える邊まで來ると突然ヤアーと聲 Ш 0 劍 感を深 幸 と成功 湖 佳陽社近くで遙 山から次高へ縦走の 大山 くする。 を新 を望見して少時見惚れ b 合 吾 うて 緒方さんに今度の 人 かい 行方に白 財津 别 行は氣合を過ぎて 机 たの 君 雪に 一行で は る。 一酸はれ 九 入山 午前 時 四 あ を

掃除 る。 残して來た荷物 h 付 0 最 御宅を訪れる、 T 角 中 種 0 で 時 あ 々御世話になつた御禮を述べ、 に連日 0 の事 12 御夫婦 の登山 西川さん御夫婦は今しも歳越 を御依頼 は 客に並々 した。 V つも親切で朗ら 久し振り ならぬ苦勞をし 更に K 西 明 カン Ш の大 C 治 あ 3 T K

く様 て荷物 居ら 0 保に御願 熱さを覺えつ」 n 0 ることを思 見渡 事 CA を 御願ひ L 限 T 出發したのは午前十 b ふと何とも + して今日中に平 お茶を頂戴して晝食を了へて午後 ラマ 點 0 オ駐 錾 一影も 言 在所に着い ぬ氣持に な 岩山 V 時三十 肌 まで荷物 たるる。 10 には 0 は 汗 Fi. 重 午後 分で ば ガジ 古 屆 ね

時

十五分である、

二時 三十分平岩山に着いた。 る。 と他愛な ンや次高山が素晴しく立派になつて 此 午後三時三十分太保久着 處を出 いもので 一般し 10 あるが、 劍 Ш 佳 0 陽大山 偉 百 容 四十 6 やバ 眼底を射 此 Ħ. 0 邊か ッ 分出發、 1 る 7 0 朓 Ŧi. C オ 8 あ 3

とを得 澄な流れを見られるだらうと思つて 保久の鐵線橋を越すまで往時の樣な綺麗な水を見るこ 少なからず失望を感じた。 L た時 去る二十 なか に大甲溪の水が滔々として白く濁 った。 九日午後 尤も濁 土牛 つてると云つても太保久まで かい 然し上 5 東勢橋 流 居 へ行けば (大甲 たの つて 一溪 K 丰 ツと 逐 を 通 0 太 调

來れば餘程澄んで居り集々邊で見る濁水溪の様な濁り

方でないことは勿論で

あ

る

カミ

あ

0

濃

V

藍色に

澄

h

難いも 何とも 愛い子供である。 シ さんどとに行きますかい カ + 言 לו のがある。平岩山駐在所直前で一息入れてると、 社 ぬ魅力を持つ往時を知つてるものには堪え 0 蕃 童が 山畑から歸る途中らしい。『南湖大山 通 b と聲を掛ける。 かい かい b K 寸會釋をして『皆 怜悧さうな可

(408)

か』と云ふ『歸りは臺北州シキクンの方へ降るよ』とに行く』と云つたら『歸りは矢張りシカヤウに來ます

話した『南湖大山はタイヤルは何と呼ぶか』と尋ねるた』の同意語を間髪を容れぬ突嗟に發した巧みさに思た』の同意語を間髪を容れぬ突嗟に發した巧みさに思

歸つて行く。山も斯うした少青年達によつて日一日とよなら』とお辭儀をして栗鼠の様な速さで自分の家に少年はベッカフ・ワリスと云ふ當年十五歳である。『さかなら』とお辭儀をして栗鼠の様な速さで自分の家にから、 と三つを言つて『何れでもい」、タイヤルには何ン』と三つを言つて『何れでもい」、タイヤルには何

大山の銀冠に輝く莊嚴さや、

尖鋭其の

もの」中央尖山

(409)

敷に上ると直ぐ明日から同行してくれる高砂族の人言つて居られた、心待ちにして居られたらしい)。お(出口さんの不参加は如何にも殘念さうに河上さん平岩山に着くと直ちに河上部長さんのお宅に導かれ

開

かれて行くことは嬉

L

い事であ

座が

冬期南湖大山行

(南湖溪溯行)

(木田

河上さんの御配慮と言ひ明治で苦勞したことゝ思ひ合つてると云ふことで安心した。西川さんの心配と云ひ數を伺つて見ると旣に手配濟みで十一人行くことにな

せて淚の出る程嬉しかつた。天候の恢復と人夫の心

る、豪壯な次高の岩塊や、何處までも悠々迫らぬ南湖だ夕陽の殘光は四邊の山波の線をくつきり見せてるだり場の残光は四邊の山波の線をくつきり見せてるがなくなつた安心とで浮き~~し、鼻唄でも唄ひ度いがなくなつた安心とで浮き~~し、鼻唄でも唄ひ度いがなくなつた安心とで浮き~~し、鼻唄でも唄ひ度いがなくなつた安心とで浮き~~し、鼻唄でも唄ひ度いがなくなつた安心とで浮き~~し、鼻唄でも唄ひ度いがなくなった。

と彼即座に

『バブ・シ

ガガ、バブ・バユ、バブ・ビジェ

ん御夫婦 と何時まで經つても眠れぬのである。 がせる荷物もすつかり出來た。 る。 を銘記するも 年の一年の憶ひ出を精算するに真に相應しかつたこと の峻峰の印象も忘る」ことの出來ないもの」一つであ 静かに更け行く平岩山 の事を考 ので へると、 ある。 明 此の大晦日 日 の一夜とそ此の記 かい 明 5 日からの探險を思ふ 0 準 と云 然し一方河上 備も ふん 整 へた。 迎 春

用意も吾々の闖入によつて一行の寝靜まる

のを待つて

ん限 居られぬ。 始 込みあげて來る、 b の力を盡して成 れることを思ふと又々言ひ様 此の絕大の犠牲精神を考へても吾々はあら 心すべきかな山薫よ!!と叫ばずには 功に 萬全を期さねば相濟まぬ 0 ない 感謝 0 念が

平 岩 Щ 南湖 溪 南湖 大山

昭和

十六年一

月一

日。

今日こそは正眞正銘

新 世紀の 思ふ心で一杯である。

0 0 初 D 頭で 泉であらねば であつた。元旦ひと時の感激こそ吾々永遠への生命 けもなく全身からもり上つて來る力の躍動を覺ゆる ある。 朝暾 ならぬ の光りは眩ゆい程の快晴で ある。 只

來た高砂族は別稿に紹介する。)

6 る。 n お座敷の床 た壽春數 0 K 間正 の飾 り付けが整然として床しき限りで 面には河上さん御夫妻の心を込め

VC から元旦の御馳走を頂戴し、 國 運 同遙か の隆 昌を祈り、 K 東天を仰いで大君の萬歳を壽 皇軍將兵 早速出發の準備を整 への感謝の默禱を捧げ ぎ奉ると共

> 同 であらうか。 なるまい。少時家人との別れを惜しむ時間もいること やがて身輕な連中はボッくやつて來た。 行シカヤウ社 衆を待つた。 連 中も お正 月を 夫々荷物 配 は ねば

を分擔させて一列に並ばせ、河上部長さんから心得

L 種の宣誓に似た固 にする間の彼等の心得について一應の注意を與 も責任者として今日から五日間に 行する様と、激勵の言葉を與 諄々と論され、 た のは午前十時二十五分であつた。ヘシカヤウ社 高砂 い約束をし、記念撮影を終へて出發 族の名譽にかけて完全に任務を遂 へられたのであつた。 亙つて苦樂起居を から 共

(410)

から一 は清洌な水流と、 畔に降つて此處から溪心を溯ること」した。 (蕃稱 3 此 0 2 駐 氣に南湖溪(リリョ バボ・ビバホワン) バ 在所から警察道路を少時北進して、 ンブンガ) 兩岸の岩壁の壯麗と緑の美林を嘆賞 合流點— ン・サウラウ)と耳無溪 の山腹シカヤウ社 假稱 一ノ俣=下流の 平 此の溯溪 0 岩 作 溪

IJ

る上部 しながら 邊では全然消え失せた。 水流 の方で相 の溯 の美しさも昨日まで頻りに苦に 淡で其 當な崩壞地が出來てるのではなからう の爽快さは想 思ふに 像 太保溪が本流 10 任 L す た濁 J b りも K 他 合す 此 な

かい

程の は右岸に或は左岸に地形 故 であ F 後出發してから約二時間も溯つた處で本流中 3 L K まつてる。 狀になつてる處に着 クザクに曲 階段式になつて急湍を爲してる處もあるがそれも大 たものではない、只溪流の曲折は相當なものである。 か渡渉に 南 深さである。 つたが 湖溪の 如實 困 想像した程 磧で豊食を濟まして愈と溯溪に K 延長は一五米突程の區間 此 物 折して兩岸相迫つた深谷の狀は水蝕の猛 難する程の水嵩でもない。 處は 語 そして流れも此處丈は水が澱んでる 0 てる 今時の渇 V の落差もない又水深も渇 10 に應じて溯るの のである。 水期 兩岸 ですら の幅員は五米突位 斯うした溪心を或 である。 尤も河 膝 であるが 頭 かい を沒する 唯一の廊 ムつた 所謂。石 床が 水期 晝食 K 處 0 0

と云ふとド

ン~と燃えさかる焚火を圍んで

(野營と

よろし

V!!

(411)

ろし り相當工夫をしなければ通過困 ることは恐らく不可能であらう。 る。 る。 然し若し水嵩が今少し増したら だから今日 0 渡渉は何等 の不安 難な場所もあつ 此 此 8 0 他 の地點 なく平 に二箇所 を通 た。 7 過 ば

あ

けさせて下さいと許しを乞ふのも可愛い、 殊に元旦でもあるので彼等が持参し な場所である。 と云ふ、 たのは午後四時五十分であつた。 夜は豪勢なものだ。 た難場を 谷が兩岸に開けた、 丹念に踏査 谷間の夕べは暮れる 何分若い高砂族の連中で L ながら今 若松の疎林になつた恰 タケジ た米 K 日 早 0 露營地 酒や栗酒 Vo ンと呼 露 あ 營 んでる VE を傾 b 地

K 高 で壽ぐのであつた。 面白く唄ひながら、 しては)豪華な酒宴である。 C 山登行の際同行した誠に素直 ある。 國 語 0 不 充分な 老蕃 ありがたい御代の タイ 0 が 彼等は得意 七 王 な然も豪膽な良い . K チ 疵 ワ スは T 初春を心ゆくま あ 0 即興詩 るが 私が 先年 彼 の純 力 を

期南湖

大山行

(南湖溪溯

行

(木田

情

と誠實さは誰が

何と云つて稱讃せぬ

B

け

K

行

かい

V2

2

で かい 期 南 湖 大山行 (南湖溪溯 行

B 0 ぶのであつた。一 6 今宵は彼 上る火炎と融け合つて何時果つるとも覺えぬのであつ ケジ 8 即興歌として唄 て吾 可 憐の極みである。 ン露營地は頭上にまた」く星斗と地上から捲き スー行 \$ 切 に對する思慕の情を綿 0 絆 行の誰彼にも一人へに歌をせがむ び續 を忘れ け、 文化人未踏の南湖溪の たもの」如く數杯の からだをゆす 々と老 ぶり なが V 酒 ほとり 0 一喉か ら喜 K 陶

10 月二日 谷一ぱい麗かな陽光が射し込む頃露營地

央尖山と南湖南山 を出發した。 ウラウ 午前九時であ (南湖溪)とリリョン・テガネワン(中 (間から流れ込む溪流) の合流點 つった。 溪心を幾曲折してガ 不

稱ハブン・パア)

に着

V

たのは午前十時二十分である

まで するつもりであつたが、 ある。 此の合流點は地形圖にも示されてる要衝なボ 適當でないと云ふので彼の言を容れて前日はタケ H 實は圖・ に來ることは出來ない、 上で計畫し タイモ た際は第 ・ チ 0 ワ みならず ス 露 がい 營地 此 露営の の合流點 を此 1 處に ント 箇

が

望の裡に全貌を曝け出してるのであつた。

とタ を期して別に探ることに意を決して更に南湖溪を約五 で行つて見られ して見たが此の谷筋 つたことを知つたのであつた)、此處=假 ンで露営したのであつた、 イモ・ 應リリョ チ ワスは ン・テ たが相當な悪場らしい。 ガネワ 0 = 張する。 部は絕對に通過 ンの深谷を が來て見て彼の 徳永氏も 溯ることを主 不可能 此の處は再 深谷の入口 稱 言 二ノ俣= 心であ 0 Œ 主 3 張

湖南 〇米突計り溯 な崕となつてハブン・パアの合流點に薙ぎ込んでるの 登りは全く思ひ掛けない収穫であつた。 の渡邊君がタイヤルと共に下降 であつた(リリョン・テガネワンは昭和十六年八月松本高校 ○○米突計り溯つて愈、尾根登りをすることに 五〇米突許り直登した、 である。此の急峻な岩嘴を避ける爲めに南 V 展望臺である。 山から眞西に延びてる大尾根で尾 つた 0 今までの である。 其の脊梁上は松の疎林 した 稍緩傾 暗 黑境 沼井註)。 斜 (文化-な林 根の 此 末 の尾根は 0 湖溪を五 處 端 此 したの で素晴 から が 0 急峻 尾

(412)

る のは午後三時三十分であつた。今宵の泊りは此處であ つム地形圖 つた大觀を愛でながら、松の落葉や枯草を踏みしめ 蕃稱 れから上は此の脊梁を行くのであるが、 バブ・サラスルと云ふ處で 中獨立標高二、八二〇米の隆起點 ある に着い 豫期しな た

大山 が高 所のないことを知つた時には場所の選定に誤りのなか て行つた。一行三名も落付いた氣分で野 つたことを喜んだのであつた。午後三時三十分まだ日 と色鮮やかに蘇つて來るのである。 尾根の眞上に天幕を張つて月光を浴びながら南湖 四邊の い。狩獵に長じた二、三の青年達は狩獵に出掛け 中央尖山を左右に仰いだ大觀は時の Щ を眺め盡した印象は忘れ難い 營 經過と共に 3 の準 のが 備 あ

であつた。

行は此

の尾根筋を更に直登して南湖南山を經

て南

(413)

カン 5 谷間 ともせぬ。 を揺り動 夜半 かし 寒さも大して感じない。 から風が吹き初めて物凄い響が山 てる様である。 天幕は不思議 位置 の選定 頂

冬期南湖大山行

(南湖溪溯行) (木田)

吹き募つた風も漸く凪いでホ が良かつたなあと思ひながら夜明けを待つ程 擴がつて來 かけて、南湖大山から南湖南山 のひを時が過ぎると又少々吹き初 た。 夜來の風と云 U. ッと思つたの の連嶺を劃して雨雲が 曇り具合と言 めた。 東か であ に物 ら北 る。 C

压

ると、 してバブ・サラスルの野營地を出發したのは午前 である。雪の降るのを見に來たのだからと彼等を勵 まれ續けた天候も、今日午後位から變りさうに思つて 若いタイヤル共は雪になると云つて惧れてる様 九時

さりとて此の尾根筋を踏査して此處より他に適當な場

處は露營地としては水場の遠い

のが缺點である。

2 に夕方迄に着けるか』と念を押す『許して貰へば必ず まで覺束ないと弱音を吐く、『若し之から左折して一度 湖大山に登ることにしたがタイヤルの青年共は皆さん ことを許して貰へるならば』と云つて頻りに哀願する。 南湖溪まで下つて更に南湖大山の大尾根から直登する 『汝等の希望 緒にあの峻嶺を越へて行つては今夜はブナッ 通りにすればキッと間違ひなくブナッケイ か

1

別れた。 らの を望見した。 と九つの人影が虫でも匍つてる様に登りつ」居ること 南 を責任者として一 等の方へ 11 が出來た。 湖 直登路 大山 た空模様もどうやら持ち直したらし を はタイモ カン から張 吾々は南湖南山直下に達した頃、 は彼等中 け シ YQ L を辿つてるのが見えてる。 午後 カヤウ社九人は丁度南湖大山 と誓 り出てゐる大尾根の線上を一人又一人 チ 切の支配をさせることにして二隊 の最 時二十分南湖南山 ワスの他一人の青年を残した。 30 も心 許してやることにした。 0 利いたワタ 朝から心配し 0 尖端に立 1 「南側の 遙か北方に . 東方の 17 ンガ 吾 一つ事 腹 花 オ 彼 T かい K 1

何と呼 VC る 次高 る。 胎 して 連嶺中點々と屹立する奇峯、 後 今まで登つて來た尾根から西方を見た時 間 ぶかと尋 時 の連嶺の壯大さは質に言語に絶するも 尖峯を辭した。 Ŧi. 十分去り難い思ひをいとも小さなケ ねると『モ 此の尖峯をタイモ サタ・バブ・ 怪頭を一 方 · チ K " サ 指してタ のが 77 0 大覇 と答 スに ル あ V

蓮港裏側

一帶は煙波渺

だとした一大雲海である。

直

南湖南山

を南側の急峻な主尾根を鞍部迄下つてか

方の クワ であ 之は或は彼の誤認 と判らぬが山 の隆起點である)、次がバブ・ハガイ(次高山)、更に る)、次がバブ・パ に見える)、次がタマラップ E 5 ピークを指してバット ・チワスに名稱 (大覇尖山)、次にバブ・シミタ た 頂は鋸齒狀になつて北側は急崕 ナパ かも を尋 リイ 知れ ねると、 ぬが素晴 (次高とタマラッ (三叉點か次高北 ノオミンだ等と教 北 しい尖鋭 0 (シミタの 方か 5 角かし なピ プ K なつて 0 へる 中 1 南 間 カン 7

粘板岩 板岩 靴の 塊の 項漆照)。 下の **起**禄山、 累積し N で つか 山腹 にもあん あることを下山後齋藤齊先生か 岩面はザラくして、 た岩場に着いたへ臺灣山岳第七號千々岩 を北に進むと之は又何と、 7 中央尖山、 b なのがあるものかと其の は何とも 南湖大山記事中八月 言 か 此 よく乾いてるの 0 岩 思ひも 5 七日 方の 開 石 かされ は 第 知識 かけ 石灰質粘 助 で鉄 ya 0 太郎 な

00 正

V

筆者はひどく感心した。

此の奇岩怪石

0

岩

場を通過

と垂 草 が の叢生してるのには全く驚かされ けて直登し T 涎不禁である。 かい 5 應椴松林 たのであつた。 更に直登を續ける中に這柏真帶 に遺 入つて更に南 此の林 の中 tc. 湖大 開花時を 0 新 Ш 高 頂 クリン F 想 を目 10 3

Ш

闘も間 つた。 突入して少時惡戰苦闘を續け、 るのは相當な苦闘と云ふより他ない。斯うした惡戰苦 此の地帯は相當の急峻さで崖石疊々たる中を登 もなく酬いられて、 頂上 間近になると何となく 最後の岩塊地帶 K かい

後四時四十五分南湖大山頂上に 春 机 ケ 合拔けの恰好である。 極みである。 で居つた雪も岩蔭や木蔭に僅か宛残つてるのは惜しき イの たタ の日長に土手山歩きをする様な心地になる、 1 山莊も眼下に見えてる。今朝固い約束をして別 ヤルも言葉違 折角のアイゼンもピッケルも 太陽も大分西に傾 へず先着して夕餉の支度に忙し 立つたのである。 V た、 ロープも 遂に午 ブ 望ん ナ 張 "

> つた。 に駈け降りて南湖山莊に着いたのは午後六時十分であ 分太陽が山 波遙かな西に落ちてか ら北側 面 を 氣

とは言ふまでもない。 卷く煙の中でも山黨は强い、 としたらキッと太い逞し をあけて居れぬ程である。 一莊の中に入つて見るとタイヤルの焚く榾の V 一行の中に若 尾を出したに違 賑やかな一夜を過したこ L ひな 狸が 居つた 煙は眼 渦

ブ ナッケイ= エキヂウ= 土場=

(415)

午後 潤葉: 大分荒れて ン社 中の急坂を辿つてキレットイ上の臺地で晝食(ピヤナ 頭の尾根上を通過、 き清めて午前八時三十五分出發、 月四日 のキチンと整 時五分出發同五十分キレ 林地帶となる。 傾きかけてる、 今日も快晴である。 0 た小 ピナ 此の大尾根をドンく一下る。 チンから椴松の 屋二棟あり、 補修を要する) 之から下は ットイ通過 山莊 九時五分大濁水溪 水場もあつた)、 0 林や 中を綺 (寄歴亭は 梅の密林 麗 K 掃

冬期南湖大山行 (南湖溪溯行) (木田 t

一名を加 陽

へて嚴肅に

行つた。

カン 事も一

くて午後五時三十

に輝く南

湖大

山人

頂の行

行三名にタイ

V

模様である。

山莊から立ち登る白煙も何となく懷し

南 湖 大山 行 (南湖溪溯 行 (木田

た。

九 丰 机 た山 ヂウ溪に 頭 旅で 上眞 着いたのは午後三時三十五分であつた。 あつた。 近に白雲が襲つて來る、 白雲に追はれる様に下り續けて 思へば思ふ程恵ま 先 工

着のタイヤルは眞裸になつて汗を流してるもの、 素足

を流れ 五十分此處を出發、 てるもの、 に浸して磧で踵をゴ 様々な恰好でホッとしてるのである。 四時二十五分エキヂウ駐在所着 シ~摺りながら垢を落し 三時

部補 Fi. 時出發で午後七時四十五分シキ 殿のお宅で御世話 になった。 7 ン駐在所着荒川

警

ながら歩かねばならぬ、若し盲目であつたら斯うし

to

(416)

丰

袋まで穿いて見違へる様な立派な青年團員になつてし まつた。今の今までの原始人が一躍文化人の様になつ 夫々青年團制服を出して紺脚絆をつけ、 して休むので何をするのかと見てると荷物の ・デウ駐 在所 近くに來るとタイヤルは皆 更に地下足 齊に腰 中 かい

> たど 蕃地警察官の御努力を思ふと全く頭が下るのである。 これはさもありなん彼は五十に近い老蕃であるから。 彼等の心構へが嬉しい。 獨りタイ ・モ・チ ワス丈けはもとの儘の姿で居たが 又之までに育て」下さる

るが ものである。 以上にひどく何れも昨年三 工 生じつか眼が キヂウ駐 道々德永、 在所からシ あるから此の怪氣な崩壞地 キク 及川兩氏と語 回の大暴風の慘狀を物語 ン迄の道 り合つ 路 の崩壊は想像 を用心し たので あ

思ひも 甲溪を下ると云つて夜分通りましたからね』と云つて はない、 た處が流石に山の警察官は事もなげに b ませぬ せぬで濟むことであらう!!と之は偶然出 先刻エキヂウ駐在所で路線の崩壊模様を尋 昨日も二人の盲 人がピヤ ナン鞍部から大 『大したことは た話

あ

笑つて居られ 臆病者になると云つて笑ひながら 荒川さんのお宅では又心からなる歌待を受け たことから起きた話 眼あきは不便であ 通つた ので あ た事

を感謝する。

衍 は他

< 州

0

から 0

儀禮である』と云つてニッ

7

1)

笑ふのであ

才

が

流暢な國

語で彼等の代表者の様な態度で『之から

2

牛

クン社に行く

のであるから正し

き禮装

た。

きつ

たのである。

理

由

を尋

ねるとワタ

2

П

ンガ

た。 月五 庭前の梅花は今が盛りである。 H 連日 の疲れも覺えず早朝から床を飛び出 シキ クンの娘 3

ん達

が土場まで荷物を運ぶ爲めに荷物を取

りに來て吳

甚其

シカヤウ社の青年達も別れを告げに來て吳れ

る。 と別れを惜しむ 0 よく守つて一行の構成分子となつて忠賞に働いてくれ たのは何よりも嬉しいことであつた。タイモ・チワス 彼等が出發の當初に河上部長殿から論された訓へを 從順と沈着と誠意、 彼等も連日の苦惱を忘れて來年も是非來て下さい のである。 ワタン・ロ 僅々五日間の短時日とは言 ンガ オの俊敏怜悧 3

溪の 零時三十分エボー キヂウ間 午前九時二十五分シキクン出發、 廣河原 ルモアン= より一層激甚で、 エボー I 2 ボ 通過、 1 シの手前まで歩き續けた。 シ間の道路の崩壊はシキク 同一時三十分土場着、 ルモアンからは宜蘭濁水 + 時ルモアン通 午後 同二 ン ||

時五十分土場

發(森林鐵道便乘)、五時四十五分羅東着

同

八時十五分羅東發、

同

十一時五十八分臺北驛着、之

冬期南湖大山行

(南湖溪溯行)

過

思ひ出の數々を残して彼等と別れたのである。

で七泊八日の山旅を了へたのであつた。

邁進せねばならね!! ではならぬ、 の前には小さな人間の力はあまりにも貧弱である、之 森林鐵道の車窓から眺めた昨 のものであった、 此の大自然に打克つだけ 今は復舊に大童である。大自然 こんなことを考へながら此の稿 年の大暴風の惨狀も激 の科學の建設 K

び

(417)

を擱く。

山行によつて培はれるのであり之が明日への大なる力 負ふものであることを特記する、 人の絕對的な協力と精魂を傾け盡してくれた高砂族 終り に此 0 Щ 旅の成果の大部分は洗練された岳友二 渾 融合は斯ろした

昭和十六年八月五日

であることを信ずる。

内地路省の途次 富士丸船室にて。

古

附

記

力 + ・ウ社 同行高砂族の氏名及び年齢

ワリス・ナッカオ(二十一才) 17 ウレ・スヤン(十七才) サン・ワリス(二十九才) IJ 1 イラン・ダウスへ十七才) ス・ラハ〇二十一才) モ・チワス(四十五才) 13 力 ウイラン・ナーボへ二十四才 ウイラン・ハユン(二十四才) ワタン・ロンガオ(二十一才) サン・ムビン(十七才) ワス・プレン(十七才)

本登山に闘する概觀

實行期間

至自 昭昭 和十六年 一 月 五 日 七 泊 八日

登攀路線其の他

臺北一豐原間 (臺灣鐵道)

豐原-東勢-十文字溪峽 一明治温泉、達見、 十文字溪峽間 (自動車) 佳陽

平岩山間蕃地警察道

平岩山一南湖溪畔(大甲溪上流) 溪底、 も假稱)を經て南湖南山西尾根、 南湖南山登頂 一ノ俣、二ノ俣へ何 (此の間

(徒步)

南湖南 未開拓 ウ溪駐在所の間(南湖大山登行路 山より南湖大山、 ル I 1 ti 9

ブナッケイー

牛

v

"

1

イー

牛 ヂ

路又は宜蘭濁水深磧通過) エキデウ溪駐在所よりシキクンー土場 (此の間審地警察道

土場一 竹林 (羅東)間 (營林所森

羅東一 臺北 (臺灣鐵道

參加員事務分擔

木田文治(リーダー) 德永芳雄 (調査及記錄)

及川富

携帶用具

嘉志 (一般庶務)

雪用 登山 具等、天幕 綱 三本、氣壓計 四〇米 一張 ρu 本 人用 個 アイゼ 雙眼鏡、 > 二人分、ピ 寫眞機其の他防寒用 ッケル

使用人夫(高砂族)

平岩山よりシキクン迄(シカヤウ社青壯年者十一名) 沚 十文字溪峡より平岩山迄 キクンー土場間 の青年又は蕃婦五名) (シキクン社青年二名蕃婦三名計五名) 2 П 盛社、 佳 陽 nd: 3/ カ +

經

自 八 總 一動車賃 圓 額 0 北 圓 豐 七.00回 原間 人當七 及び羅東、 〇豐原· 0 圓 臺北間三等 此 + 0 文字溪峽間ハイヤー 內 譚 質銀) 汽車 質 = 四

人夫質 宿 泊 料 八 PU 五六 · 九 五圓 五. 7 明 文字 治 溪峽 遠 廷見、 より 孪 岩 3 山 丰 3 V 3/ 老 + 7 0 V 總 人

臺片道

其 0 他 の雜費 五·七二個

夫質)

天候其 0 他

候

+ 二月二十 九日 同 1-H 验 楽 北 明 治 間 明 治 蓮 見

南 白 3/ 自 牛 湖 十二月三十 一月四日 南山、 2 土 午後四時至 南湖大山、 場 H 羅東臺 至 一月五 プ 月 + 29 間 " H H 4 午後四時快時、 1 午 後十 I キヂウ間 二時曇天、エ 達 見 + 25 岩 ヂ ウ 111

氣 温

十二月二· 九四粍 + 九日 午 後 九 時 明 治 溫泉氣溫攝氏 + 八度氣 IN.

三 十二月三 二月 7 + H 日 4 H 後九時、 午 午前 前 七 時 七時、達見氣溫攝氏六度氣壓六二六·五 達 見氣溫攝氏八度氣壓六 明 治 温泉氣溫攝氏十 六度 氣 熈 九

冬期南湖大山

行

(南湖溪溯行)

(木田

糕、 紙 月 同 同 日午前 日午後九時 日午後九時、 七時、 平岩山氣溫攝氏 平岩山氣溫攝氏六度五分氣壓六〇八粍 南湖溪畔露營地氣溫攝氏七度氣壓 废五分氣壓 六〇 七・五 六

0 耗

月

日

午前

七

時

南

湖溪畔露

營地

氣

攝

氏

废

氣

壓

九

同

カ

西

Ŀ 7m

氏 五

同日 废氣 八
托 壓五三三 月三日午前 壓五 午後九時、 三 粍 五三四粍 同 -H 時 ブ 時 ナ 4 後 南 " 湖南 5 五. 南 1 時 湖南 南湖山 西 南湖大山頂 尾根上露營地氣溫攝氏 14 莊內氣溫攝氏九废氣 尾 根 露營 上氣溫舞氏四 地 氣溫 -应度, 度氣 壓 +

月四日 一六粍 午前 七 時 プナッ 4 イ南湖 Ш 莊內氣 溫攝 氏 四 废

(419)

四

腿 風 Ŧi. py 一六·五

力

昭

かり 三日南 降 和 しも步行等に影響する事な 十五年十二月三十 湖南 山頂上及び南湖大山頂上 H より翌年 L 疾風 一附近 月 三日迄連日 程 は 北東 废 な 0 微風

風

相當

月

頂上附近 十二月三十一 帶白雪に蔽 日 佳 陽 附 はれ 近にて たるを望見 南湖大山

在

所

に至る迄終日樂し

み得

たるも

月

H

より快晴續

きた

L より

此

0 湖

H

平岩山

南

北

Ш

K

歪

響を見たるに不過、高度概略

三、〇〇〇米突內外

かりし

爲め、

三日登

頂

0

頃は催

かい

に木

隆岩酸に

南 湖大山 行 (南湖溪溯行) (木田)

ŋ

降

あ

2

湖

6

あるが

何

れ

九 定せら 日三十日 りたるもの 0 兩 H K 互る氣溫下降の時に之を見たるものと 推斷 せらる、 此 の降雪は十二月二十

本登路に就いて

から 3 17 他 + 街 來南湖大山登攀 一一一一 チン等を經で南北 から土場、 登るも 7 IJ 州の豐原 æ. 1 IJ 0 3 1, 3 ナキク 事路と云 から ンル 稀には臺北州側の舊太平山事業地 湖大山 ν, ートもないではない。 K 明治温泉を經 へば ny 頂上 トノフ、 x 最も普通なも 牛 に達するル ヂウ溪を經 南湖北山、 て平岩山、 てキ 1 0 K 1 猶此の外花蓮 F. 南湖 L は が 豪北 + あ " る。 大山 から ナン 1 1 鞍 K 1 其

要

側

4

11

よりタウサイ又はシラ

"

クより中央尖山を經

たの

出來る」 はない、 光を此 南湖 査方を から て内 6 にも又一 あ 南 の機會に萬全を期して 南湖 あ 0 大山 依賴 7々現地 然るに今回私共 7 つたのである。 使 14 に縦走せられ 云ふ快報を得たのに力を得て質行したのであつ 用 大山に亙る西側一 への溯溪、 般には勿論全然未知な、 般 高砂族 L た處、 に推奨する の狀況を佳 はシカヤウのタイヤル 或は直登は蕃路 同 た記録 の探つた登路と云ふの 氏より「南 私はかねて念願して居つた中央失 陽社 ことは考 探るべく尠 帶の渓谷乃至は尾根筋 駐在の審通 ~ 湖 EFF はなな 溪 から中 からぬ興 はど全くの處 0 を使 だと言は 西川警部 も登 が歩け 中央尖 は岳人仲間 へば何 味と期 171 の暗 ねば 82 14 補 家 とか 2 を經 殿 女

K

境 14 1 0 3 路

z 間 京 C

以

王 瀧

111

裏

岳

本谷及び各支流を總括したものとして讀まれ 文にて王瀧川本谷といはず、 單に王 一瀧川とい

n

K

高

橋

IF.

登山に容易な信仰の表山に對照して、

未踏

のと

0

たふこしはの

ちは王瀧川上 これは何かの本で見たやうにも記憶してゐるし、また のは最近のことである。 私 たち 中京山岳會が裏御岳の開拓に手掛けはじめた 流地方、 御 岳南側一 この裏御岳なる呼稱で、 帶を總稱してゐる。 私た

> ば、 くして酬ひられるものがない。 は尾根筋の登路も興味が少い。 の方面は裏と呼ばれるに相應し 未開の 體に御岳は森林に惠まれ、 深い原生林であり、 まして裏御岳ともなれ 森林を愛する者以外に こ」に溪の溯行が取り 尾根による登頂は勞多 い内容を持つ。

も、溪は幽邃の色こそ濃けれ決して凄慘なものでない。 が欝蒼たる木曾の原生林の間を縫つて流 坦な河床に惠まれた女性的な溪流を持ち、たとひそれ 及び各支澤の價値檢討となるわけである。 れる場合に 王瀧川は平

あげられ、王瀧川が大きくクローズアップされ、本谷

滩 JII

E

付が知り 岳南側

木曾の人々にも訊いてみたが、木曾谷を表木曾といひ、

加子母方面を裏木曾と呼ぶ習慣からいつて、御 を裏御岳と呼ぶのは不當でないといはれた。そ

公

(421)

六

する。 兩岸 たばし 著な特徴として、一 ではないかと素人鑑定が下される所謂である。 七〇度以上 必らず幕岩となり、 これ ある時代 が標高 の傾斜を示す瀧が懸り、 0 頂上よりの熔岩が 一七〇〇米から一 般に溪谷は、 以後は廊下狀に狭るところに 瀧は淵を伴 八〇〇米に至るや 溯行者を阻 この邊で止 Ċ, 更に顯 つた まうと 淵は 0

が、

王瀧川に深潭と見做すべきものがない。

溪流は瀧

賴となり、

との瀧

淵、

瀬の三つを繰返すものであ

3

からい

きなり瀬となり、

瀬は流れ

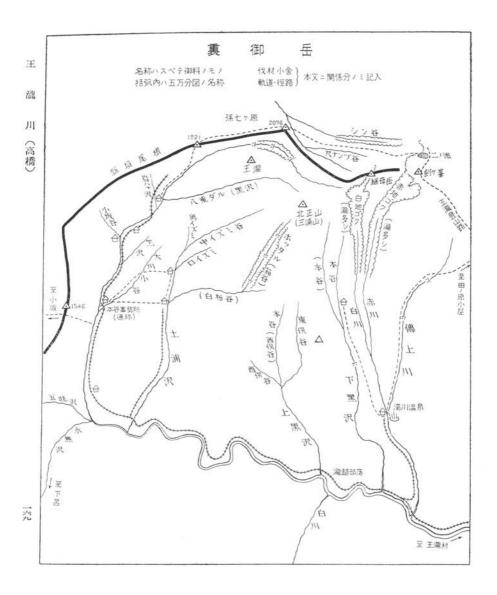
て再び飛瀑と懸るも

0

溯行者は徒渉の點で惠まれることが多い。

谷沿 至るも 務所に 相 2 代用される。 當利用されてゐる。また現今では一部の人々(主と n 王瀧川 8 ひに溯る徑路も 0 入るも ミ澤より縣界尾根を越 御 カジ 料 K ある。 入る徑路 0 その 0 林 用 軌道 下 後者は三 他 -呂驛 あるが、 を説明すれば、 を利 飛驒側よりは、 より鞍掛峠 一浦平にダ 用、 これは御料の林用軌道に へてコト澤を下り本谷事 若栃川 木曾王瀧村より ム建設中につき、 を越 飛驒 (大洞川) へて三浦 小坂 驛 平に を溯 から 本

では岩 表的 谷事務所に入るのが大體午後一時半とみてよろしく る。 用 九 が問題とならうが、 25 で、小坂谷、岩ハ 三浦事業區ではこの方面の主力を三浦平に注 谷との出會地點まで敷設され、 白川が てゐるため便利 軌道の幹線は現在では三浦平を經て、 本谷の溯 上松を朝の ハナ澤上部まで延長されてゐる。 ある。 行 王瀧川本谷 は ナ澤 八時半發林 Ŧi. 萬分の である。 の伐木 林用軌道が登山 地 崩 小舎は無 中央線上松を起點 圖 軌道 K しかも作業軌道は現 よれば に便乗を許されて本 の豫想外に延長さ 人になる虞れ 行 たぶし 本谷と大川 程 0 長い とする ぐと 本年は とと カジ あ かい 在 11



路 ろし ヅ北俣とシン谷との中間の尾根を登り、 原 廣 根 0 3 で徑路をつけ、 て笹藪に切り開きをつ 8 かい で迷ふ危險が 運 を 5 尾根は孫七 九二一のや」西に出る。 轉はまづあるまい) 2 からう。 時 70 徑路 間ほど歩くと、 會所 こ」より \$ その後、 ある。 や」明瞭になつたこと」思ふ ケ K 原 宿泊 と呼 け、 昨夏、 軌道を歩き の許可 岩ハナ澤小舎を過ぎてより ばれ、 路は登り一 御料の元氣者が數回登つてゐ 尺ナンヅ谷を沙り、 三浦出張所長以下大學 を得、 こ」からの縣境 丈を沒する (本年はこ」より先 方となり、 夜を過す 頂上二ノ池ま の駄 面 尺ナン の熊笹 縣境尾 のが オッ 徑 1

段狀 更 下 4 0 ほど K 瀧 b 本谷はこの一九二一への登りにか」る手前より溪に 10 K 溯ると第三の 時 出會ひ右岸を捲く、 行 たゞし一般には第一 間 る悪瀧 弱で第二の瀧、 八〇〇あ あ 瀧 b たりで高さ二〇米くら (御料 左岸を捲く、 の瀧を百間 五米くらゐの瀧が數本、 としから の地圖による名稱 兩岸幕岩となり、 次に 瀧と呼 また んでゐる る 0 百百 時 第 階 間 間

> 行く。 れる 夏 傾面を登り繼母岳 で終り、 けばよいが、 C. 形態で落ち、 本流はその向つて右より北向に大きく、 期 ある。 b E 水量豐かに南向 5 の輕装なら 淵を持たない溪谷のこと」て徒沙の煩がなく、 面 に出る 瀧は目 以後はの ―西向の直下草附に水量の少ない瀧が懸り、 夏期の藪潜りは苦しからう、 更に左手、 會ふ。 測 ば本谷事務所を早朝發、 で五 んびりとした源流を歩き、 (二八六八米)を經て頂上劍ケ峯 との瀧は大體二〇〇〇米 に流れ落ち、 縣境尾根より斜 六〇米はあらうか なかく見事なも 2 殆んど直下の 面 0 悪場はこれ の瀧 右岸 日 最 たり のうち 後 0 を捲 2

地 獄 谷 及び白 JII

K

剣ケ峯まで行かれよう。

(424)

共に 獄 過言でなからう。 頂 悪谷の 白川の F 一劍ケ峯 源流を 點ではあまり類を見ないも から落ちる 私たち 一百白 地獄 しは赤川 赤川 と呼 0 母岳から落ちる白 源流地 んでゐる。 Ø, 獄谷を といつても 溯 行根據 一赤 111

あ 5

地 は 南 麓 K 濁川 温泉とい ふ絶 好 のものが あ る。

物資 林の 濁川 王 瀧 濁川 なか 支線 村 0 點 田 かい から 温泉から支流 K 5 0 原 軌道 ポツンと一 御 小屋 料 の上 0 0 ても のや」上方で王瀧道に合し 林 を徒 用 軒ある山 軌道 傳上川に沿 これは普 步 約 T 約 の温 時間終點近く對岸の森 通 時 つて 0 泉宿を發見する、 間 Ш 御料の徑 小 、柳ヶ瀬で下 屋 にすぎ てゐるこ 路 が北 車 な

は

春

日

部

0 報

、告であ

る。

狀地 入谷、 出來ない。 意味す、 には硫氣孔 水量とてさほどでないが、 Ш 査の結果を中京 岳誌 帶 その全貌 も一七〇〇あたりから に發 を 以下同じ―編者註) 頂上まで續け、その 私たちは昭和十五年に會員(中京山岳會員 表 L た Щ を把み得 ん故、 岳 危险 會報 玆 には書 たと信ずる次第であ 極 7" 岩質は剝脱甚だしく、 熊澤をリーダー りなき悪谷で、 間 ルグロ 兩岸幕岩となり狭い 瀧が連續的 カン な イテレ S L に落下して、 簡單に ほ として二度 カン るが、 L か多くの 赤 上部 入谷 地 踏 獄

III

知る人も少い

が、

便利な道である

廊下

春日 會員 持たな 王 瀧 部 春 Ħ を溯行 Vo 堀によつて下降記錄 部、 白 堀が下 L 地 た時、 獄 は昭和 半の溯 谷の上半を下降偵 十五年六月、 行偵 が完遂され 會員 同 T + ねる。 北 月 同 岡 + + 以下 日 月、

カミ

さい 附近 映えてゐる。 獄の上部一〇〇米 上の名残で、今は腐朽して見るも勿體ない インを劃つてゐる、 は第一、第二、 淨められた御岳劍ケ峯の奥社 っまされ 皇紀二千六百年 岩稜を傳つて地獄の底へ下るル 穂高の岩場に遊ぶやうだ。 終つて勇躍處女雪を蹴 た堅 い岩 中 第三峰とドス黝い鋭穂を 程 -の佳辰、 壁が園 以下は五、 第 五〇米くらゐまでは漆黑の 峰にあ 繞 旭日 つて機 L 六〇米 0 第二、 岩 前 爽 る鳥居は往年の 間 母 カン K に昇 1 聖壽萬歲をことほ 傾 に朝 岳 第三 斜 1 10 つる頃 連 H 向 0 を 姿だ。 薄鼠 がご 選ん 0 ね 3 鞍部 スカ テ 色の砂 だ。 カ 下 織 研 0 2 呂 母岳 雪 1 地 小

(425)

同

程度

に悪

V

白

地

獄

VC

ついては世人は

向

に感興

木

草すら止めぬ

地 所

獄の底

は絶えず

岩なだれ

が

岩

0

累

々たる

堆

積

T

×

に黒

V

岩が

顏

を出し

T

2

す

Ŧ

渝

JII

(高橋

第 峰下に小さい噴氣孔あり、 濛 たる砂 塵 をあげ凄慘たる形相 間歇的 を呈してゐる。 に噴烟を出して

費して瀧

下に立つ、

高度約二四〇〇米、

大體こゝが

ゐる。 。 側 だけは赭く灼け爛れた四段の斷層をなしてゐる。 亞硫酸ガスの臭氣が鼻を衝く。 地獄の 中 間尾根

鞍部上部の岩稜は足場堅く快適の岩登りがたのしめ

降るにつれて剝脱甚だしき熔岩となり、

喉近く

るが、

り落ちる。落石を戒め合ひつ」三〇米くらる間隔をお ザイレンしてテラス狀のザラ場を選んでジクザクとす なると六○度の急斜面となつて辷り込んでゆく。 の左岸は眞黑の斷崖をなし、流水が岩石を激しく抉り いて交互に行動する。一時間半、落差一五〇米餘降る 地獄の喉とでもいふべき岩峽に入つた。 つて深さ約 二〇米の瀧をろが つてゐる。 覗き込むと 白地獄南稜 アン

> 界線をなしてゐる。 白 地獄南稜側は切り立つた屛風をなしてゐるが、

西

くなつた咽喉をうるほす。 兩岸迫り、 方は稍とひらけ、第二、第三の岩嶂が る。この附近より流水を見、 つてくる。一五米、五米の瀧にか」るころから次第に 四〇米白地獄本瀧 瀧壺はオーバ 悪ガスのため でクラ イマ 頭 E ーハングで見 " 1 クスに達 10 ガラッ 0 L かい

地獄の重壓より解放される。 えぬが、下方は俄かに豁達となりデルタ狀をなしてゐ か」ると機母岳は背後に廻り、 捨縄による懸垂下降、 瀧下の第二ルンゼとの出 西の低い乘越より三〇度 兩岸に樹木ある た

る。

10

逃避口だと安心して進む。 入つた北岡一行のものだ。降ると溪水が黄金色に變 の生ぶ毛を生やした如き奇觀に茫然とする。流水 金紗を流した如き二〇米の瀧が現はれ 草附斜 面が谷までつじいてゐる。これは絕好 ケル ンがある。 六月偵 10 全岩

澤をつめ、 を受付けない。 約五〇度の草附をトラバース、 右より喰ひ込んでゐる峻嶮なガレ支 四十五分を

は温

かい。

どこかに硫黄泉があらう。

六米餘の残雪は

=

=

光をうけて妖しく輝く。

侵蝕された岩は堅くてハーケ

た。

てゐる。

中の瀧水は

凍

b

岩面にベタ氷が

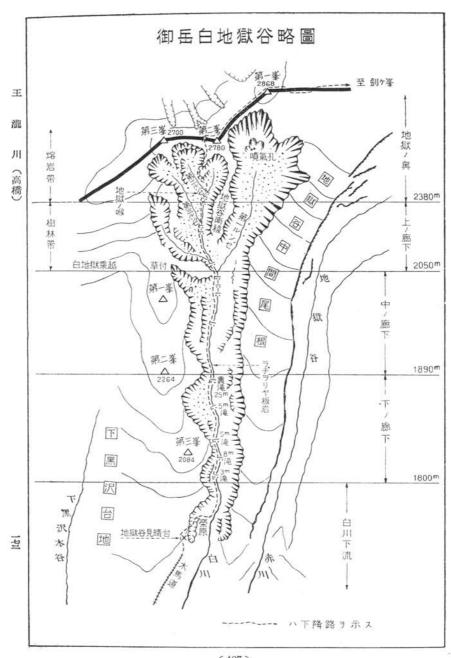
つき、陽

傾斜

0

二、三人容れるくらるの幅で三段約七〇米の洞瀧をな

(426)



(427)

E

相 K

幅四 する、 た二五 立し、 色の 白 ヂオラリヤ磐岩から落ちる水は血 日 つけ るやうに 右岸壁上に三〇米四方の るやうな小さな噴砂孔が隨所に 黄色に染つて 地 を遮つてゐる。 獄谷 米 淋しく生えてゐる。それにビレ 水が 嘆して進む。 た洞門を通 晝食 米 問 上部は原始 兩岸 題 0 0 してこの峽 流 神秘 を掃る。 瀧 の瀧だ、 れはじめる。 の岩間 だ、 ゐる。 を護る扉であらう。 L 時 この幽凄鬼氣漲る中 やがて一 林が大きな手を一パ T 左岩一 をうが 間は一 これは吾等が 暫く行くと足下に臭氣の强い を過ぎ、 條の慈光が そして高瀬谷 自然の洞門が 二時半はじめて安堵の胸 〇米餘上の岩壁上に岳樺が 〇〇米以上 つて落ちるこの見事 四、 ある。 幽 前回溯行して發見 五十分降ると瀧音 の川のやうだ。 この流水は飲用に イレて瀧を降る。 谷 イに ある。 に左岸眞赤 フト見上げると 0 0 K 洩 湯俣溫 **嶂壁兩岸に屹** 伸ば n 緑の る な離は して天 泉に見 なで 遁れ かなラ 思は 衣 牛乳 を

にはまだく な 廊下はつどくが、 谷幅相當廣く、 大

夕六 御料の廢屋 こ」より白い 苔や腐土の匂ひ K 與 白粉をふいてゐて、 變らず一五〇米ほどの岩壁をなし、 L ない岳樺、 廣い中洲、 へる。 た瀧もなくラクに歩ける。 時 濁川溫 白川の名はこれに起因する。 上あり、 椴、 岩石重疊する平凡な川原を二十分降ると 榮ヶ原にとび出す。 泉に着く。 ·白樺、 0 強い 更に一 ために溪谷は非常 閑寂境であ 樅、 時間 椹などの森林帶である L か かすかな踏跡を拾つて し地 る、熊の足跡が多い。 こ」は眺望の 谷 間の 廊下を出ると急 K 獄 明朗な感じ 中間 石 は 尾根は 得られ 樣

する熊笹藪で、 笹藪に覆れてゐるため一見平凡な藪漕ぎと見過つて立 J. よき徑路あり、下黑澤には百間瀧と稱する大瀧あれ 登山者にさほど興味ある溪ともおぼえず、 L た臺地 黑澤には瀧なし、 濁川 以外 狀を呈し 0 王龍川 T 體に ゐるが こ」で注意すべきは源流 支流のうち 裏御岳の尾根は尾 溪の 下黑澤、 兩岸は 根筋 F 共に御料 黑澤 は坦 で 0 文を没 とも × E 2

なっ 瀧川 惡谷である。 で伐木作業進行中であるが、 入つたら最後、 味覺をいふのではない じ程度の谷と見當をつけてゐる。野生のワサビの美事 七〇〇より兩岸幕岩となり三〇米以上の瀧が三本ある である、 流の小俣谷もその點でよい。その他の澤は地形の點 ら想像して興味なく、 真偽は知らない。大川小谷については知識なし。王 の美事な檜の森林を觀賞する方がよい、 萬人向 グ程度の輕裝で、溪谷のすぐれた風景を觀賞でき 五萬分圖に白布谷、 右岸の支澤では鯎川 注意され たゞしこれは大根ほどの大きいといふ意味で きの變化に富んだ眺めを持つ谷であ 八重ダル(黑澤)は大體王瀧川本谷と同 ズルく た Vo むしろ瀬戸川でも歩いて木曾傳 箱谷と記入してある澤) 土浦澤もイズミ谷は平凡な谷 と蟻地獄に落ちたやうなもの か林用軌道を利用 ーものが群生してゐると聞 ホッタル(又はホッ すれば と」は b, タル は 1 支 1 <

が

る。

は

冬期常住である。

來

官道 れるコー 路 として有名で、 スである。 大官 連 の視察には必らず

迷はずに降れたら…… 原より深い森林地帶を尾根通しに大川小谷事務所まで 更に惡場を孫七ヶ原まで滑降、 峰から發して繼母のナイフリッ も縣境尾根に比すべきはない。 る程度、 である。 は笹の下深くかくされ、 最後に北正山 積雪期にはまた利用價値もあらうと考 この方面 三浦· で積雪期 Щ. 2 私たちは野心を抱く、 どこが頂山 であるが森林深く、 0 = ヂで氷雪技術 磁石をたよりに孫七 雪質は上乘、 1 スとしては何 やら? 頂 困 を満 上劍 とし った 事 へら 角 務 Ш

(429)

註 名 名 稲にて、 文中名稱にてへ 稱 の喰ひ違ひは非常に多 (黑澤) 括弧内黒澤は五萬分圖 の如き、 八 を附し 重ダル たるも とは御料 の名称 なり、 0 たと 地 兩者 にあ ば 重



一七六

曾川本谷 溯

昭 和 + Ŧī. 年 八 月

梗

槪

流

域

0

長さ、

源頭に

鋒ゆる山

0

高さ等

あらゆる

點

カン 5

E, 松 0 木 附 曾 では無く、 近に至る III 眞 0 本 王龍川 御嶽山 流は、 なの 織、 傳 母岳に出で山麓 へらる」 であ る。 ムやうに境時に を 4 15 周 5 一發する

關

西

0

學生二名が溯行

を

企て

遭

難行方

不明

にな

つて

(431)

K 晝 2 出る支流 尙 n 暗 と言 V 深 2. 林 0 から を見た昔 中 0 8 仙 間 Ŧ. 道 を に添 なが 瀧 0 JII が、 ふ相 n 流れ に何 當 原始さながら 大きな谷を示 T る 時とはなく木 た 0 K 0 反 Ĺ 文字通 L 會川 T る 境

る 峠 b

5

そ

n

人

K

0 本 處

流 かい

と誤られてし

まつ

たのでは

なからう

かい

田

部

重

紙狀態

JII

小谷會所)

でも

魚止

一瀧より

10

關

L

T

は

談)、現在擔當地

III.

0

人も谷には入ら

た曖昧

2

0

氏 6 と言つて その 著書の をら n 中で、ゴ る カジ 事 王瀧川こそ木曾川 實、 その 水量 0 大きさ、 本流であ

木曾川本谷(王瀧川)溯

行

(上田

J. 田

雄

徹

推察するに 2 0 谷に 就 同 V 氏 T 0 言こそ 0 私の識る記錄は、 Ī. L きも 0 な 僅 0 T. カン K, あ 3 年

間離上流 るのと、 本年六 を歩かれ 月下 旬、 中京山 岳會の方達 K 依 つて

なか 0 たらしいといふ二つである。 林野局出 つたと言 上流 張所 ふし (三浦出 (大川小谷會所 張所及び大 全くの 測量部 0

その 0 使 用 して で あった。 居る地 品 \$ 實際 とは 甚だ異な

なも 樣 K, 廣重、 なの 英記 木曾街道

中中

六十

九次」

は

西麓 外の深谷らしく、 を持つて溯行を企てたのである。 とよりあれ程有名な木曾川の本流が知る人も少ない意 で静かに秘められ 而も、 T それがさかんな御嶽山 ゐるのに思ひ到り多い いのすぐ K 興味

廊 料林の到る處で威かされた恐怖が大きか とに易々たる處で「振り上げた拳の遺場に困る」とい つた拍子拔けのしたものであつた。出發前の緊張と御 一々々しい様な氣持が残つてゐる。 ところが、いざ當つてみれば、 谷沙きとしてはまこ つた故か、 馬

者に良き御嶽登路を提供するとも考へられるのが敢へ 多少の價値が ものであるが、 隨 何なる狀態におかれてゐるかとい つて、この一文は登山的見地からみると他愛も無 あ b 木曾川が有名なだけに、 叉王瀧川は静かな谷を好む登山 3. 明 その上流が 確なる記錄

KC 加 V

記

15

ーティ

原全教、

石井東

郎

古泽蜂、

幼方芳男、

rþ

元

なり。

發表する所以なのである。

瀧川

より冬の御嶽登山は興味ある問

題 なり。

三郎 丸山 信忠、 倉科由司、 J-EFF 忍、 Ŀ 田

徹雄

昭和 王瀧川添ひの帝室林野局林用軌道 十五年八月十 日 (雨後豪雨となる) 瀧本線に便乗、上

所にても、 なる溪谷なり。 魚止瀧上流王瀧川は誰 林野局三浦出張所 (庄田島) 一人知る者も無き狀 及び當會

約四時間半。

右に左に見降す王瀧川は林相美しき大い

松より大川小谷會所に至り、

豪雨となり

同所

K

泊。

たり。 當會所の高度は約 四〇〇米。 三浦御料の檜の 深

態にて、谷に入る事を、

危險を理由に極力阻止せられ

年最低氣溫マイナス三七度に到りしとか、 に圍まれ、 四米に及び、 冬は、 尚、 ワッ 軌道も多期間中運轉繼續とか、 クスも必要とせざる粉雪二米 され 本 \pm

b

於ては熊、 秋になれば、 羚羊も多しとか、 軌道に乗りつ」群猿をみ、 宛然此處は 「森の 會所附 生 近に

(432)

時間、 貯水池 會所の 15 0 島 ては田 如き一 近完達 本線 牛日行程にて達し得る。三浦は荒涼たる高原にて現在 三浦出張所あり、便乗はこゝに願ひ出づるを良しとす。 みはそ 全行 下手より本流を渡り、 I 軌 氏(信 時的 部重治氏著「山路の旅」(本曾川の水源に就いて) 道 事が行はれ、人夫小舍、 の歴史的研究に及んでは「山と渓谷」三十一 程 の現 五二 のものを除き、王瀧川最奥の部落、瀧越に就 飛國境の峠と山)を参照とせられたし。 在は當會 換 へ等を加算するも上 田島驛(王瀧村對岸)に王瀧出張所 所より上 コト澤をつめ大洞谷を飛驒落 流二粁 社宅等軒を並べり。 松より全所要時 の地點小坂谷出合 間 號

> П 0

Ŀ 松 (前八・四〇) 一大川小谷會所(後一·○○)

十二日 (驟雨後晴

瀧等問題無く、

古き鉈目も一、二見掛けたり。

從ひ溯る事二粁にして、該徑路は本流を離れ國境尾根 と登る地 終點迄、 監に天幕 點 再び軌道に便乘。 を張り偵察に向 K 至 机 ば、 此處より谷を傳ふこと」し分 ~ b . 驟雨來る。 御料の徑路 VC

間 瀧 の中 まで同様なりき)。 木曾川本谷(王瀧川)溯行 は流れ 廣 く自 由に渡渉し得て、深さも膝位(百 料にて魚止の瀧、その二〇〇 三田

> さ約 米手前 く不愉快なりき。 岸は岩壁にて登攀や」困難なるべく、 右岸ギャリーを登り、 上部に降り立つも前記 藪を搦む。 四〇米、 左岸に良き 大いなる瀧壺を持ち近よるを許さず。 アルバイト 泊場あ ギャリー 0 0 のみにて簡單に ギ t 1 消失地 條 0 は 瀧壺 水に濡れ 點から右 廣き瀑布 搦み終 0 手 浮 へ瀧落 へ熊笹 10 右 T よ 高 b

らし好 で至れ 再び和 地圖には無きも、 個 bo 0 やかなる澤となり渡渉自在。 露營地なり。 此處は幕狀三、四〇米の一枚岩を右 澤が右へ著しく屈曲する地 前述の小瀧は左岸を搦み、 小 瀧 滑が 岸 10 をす 滑 廻 ま

(433)

す。 極 ん めて易々たるものむしろ單調 偵 天幕を張りし (察を切 高度約一五〇〇米。 り上 げ引返すも本日 虚は増水とならば水中に沒するなら 0 の行程谷沙きとして 感 無きにし あ

御料の徑路とは、天幕場より 米を通過、 上俵二〇七六・ 九米を經て、尺ナンツ谷に降信飛國境尾根に登り、一九二 九米を經て、

木曾川 本 一谷〇王 瀧 川)溯 全田

が ŋ 踏 9 が正しきにあらずや。 跡 一、て一層歩き易しといふも名稱よりおして、林野局の言 は林野局の話なりき。瀧越某獵師の言に依れば、 別れて、 同登山口下山中注意を拂ひしも遂にみとめ得ず。黒澤れて、飛驒登山口嶽の湯上方に合するものあると閉く明らかならざる箇所多く危險なり。又、尺ナンツ谷よ 當地方にて「八重ダル」と呼び慣はし、 同登山口下山中注意を拂ひしも遂にみとめ得す。 谷に添ふ南の尾根を二の池小舎に達すると言ふも 流の連續なる 本流に

0

四五)——小瀧 | - | - : 五〇 | 點(一〇・二〇)――徑路上界地點天幕場(一一・〇〇― 方屈曲地點(一・一五 最奥の小舎(九・三〇――一〇・〇〇)――黒澤合流 (〇·五五)——滑瀧(一·〇五)——右 —魚止瀧 (後○·二〇) — 一·三五)——天慕歸着 -龍上(O: =

大川小谷會所(前八・三〇)――軌道終點(八・五〇)

十三日

9

まり約 も本日溯行を開始後、 偵察終了點に於て、 一〇米 の瀧に前途を遮ぎられ、 いくばくも無く、 暫くは良き狀態續くと思惟 兩岸は苔むした 澤は極度 せし K 狹

度は著

しく高まるも、

兩岸共に緩傾斜に開け、

右或は

再び上

流に 辿れ

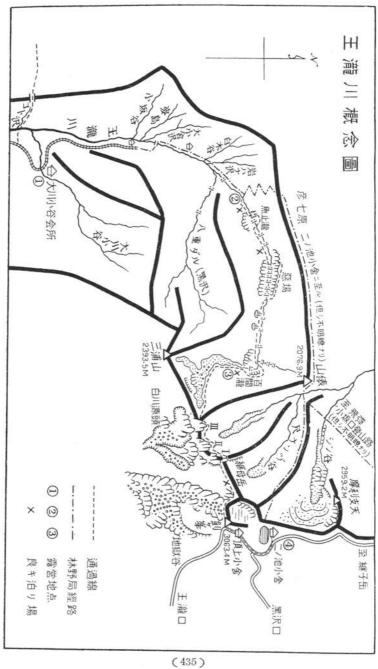
ば、

小瀧は次から次

と現はれ、

らず。 路無く、右岸は前記の屈曲點より續く幕岩を備へ、そ 谷は前にも増して穏やかなる様子なり。 惟さる處を二、三攻撃するに比較的樂に登り得る個 の上は熊笹の斜 る滑岩にて通行不可能、 面は歩き良く、 あり、これを登りて上部に至れば、 連續にて約二〇〇米上方で左曲し、 左岸は岩巢に針葉樹を交へたる急斜面で良き登 この廊下を搦み終 面の模様なり。 奥は尚三、 試みに幕岩の脆弱と思 へ上流 案の如く熊笹 四の同様の瀧と釜 更にその奥は解 再び降 n 0 ば 所

強は、 亭たる針葉樹林にて檜は日に無く栂、 ありて、その左側を登攀せり。該岩小合は濕氣多きも三人 瀧のすぐ下よりブッシュを分け同岩壁に突き當ると岩小舎 ツの釜ありて水邊を辿るは不可能なり。慕岩の通 惡場なりき。この廊下には連續して七、 場は始まりしかと思ひしに此處が全行程を通じての唯 位宿泊し得べし。 この廊下に直面 但し使用の痕跡は認めず。 出せし時、 愈々王瀧川の 白檜 八の同様 傳 密林なりの 廊下の上は亭 過 の瀧と九 6 影話は、 るム悪 0



乙

木曾川本谷(王瀧川)溯行 (上田)

せり。屈曲方向に相對し一條の小澤流入す。
り、この行程約一時間にて壯大なる瀧の下の廣場に出
り、この行程約一時間にて壯大なる瀧の下の廣場に出
る。この瀧を限度とし谷は再び右へ九○度の曲屈を爲

瀧の高度は約六〇米、王瀧川最大の瀑布百間瀧にし

て一條の簾狀のその姿見事なり。

に至り落口に降りしが、これは百間瀧乘越最良のルー葉樹林に達し、尙登り氣味に瀧を形成する岩壁の上部我々は瀧を越すのに前記小澤の右側の尾根を登り針

水量を二分の觀あり。百間瀧左岸は大岩壁にて偉觀なり。合流する小澤は上俵より出で瀧の連續、水量大きく、殆ど全

早きも天幕を張る。高度約一九〇〇米。この夜の月光水は伏流と變る樣子から、右岸針葉樹林中に時間未だ感あり。進めば、やがて苔むしたる大押出しと爲り、

トと信ず。落口上方は兩岸の山も遠く開け真に源流

0

天幕發(前八·三〇)——魚止瀧(八·四五)——前日

は素晴らしきものなりき。

——百間瀧上(二·○○)——天幕(二·三○) 上(一一·一五——後○·○○)——百間瀧下(一·○五)

十四日(晴後霧)

かむり幽邃の感、更に深し。ガレを登る登行は甚だは水流全く無く、幅廣きガレ澤を爲し、ガレ石總で荅を水流全く無く、幅廣きガレ澤を爲し、ガレ石總で荅を

り。右俣、左俣目測するに、ほぶ同等の距離とみる。込む谷を尙もつめ上部傾斜を増す邊にて二分するな圖に於ける本流は二岐となる筈なれど事實は左に廻りかどり、間もなく谷奥に聳ゆる三浦山直下に達す。地

を要すべし。已に、ガレを過ぎ灌木林の中を一條の石多く落石の危險も大なれば雨中の登攀には細心の注意二岐より高度を増し傾斜を加ふるに隨ひ、浮石非常に

溝と衰へたる本流を辿れば、やがて、それも盡き、優

松地帯に達せり。

高度低き爲、

偃松帶は丈高く頑丈にて甚だ困難を極

へり。霧の晴間に窺ふ白川源頭のガレ及び岩壁は壯觀ミッド形に聳えたる岩峯にて快適なる頂の氣分を味はめたるも遂に繼母岳第三峯頂上に到達す。同峰はピラ

の足跡多し。
一条とは機母岳(二八六八米)より数へて最西のもの、中二条とは機母岳(二八六八米)より数へて最西のもの、中二条とは機母岳(二八六八米)より数へて最西のもの、中二条とは機母岳(二八六八米)より数へて最西のもの、中

き事なり。

の峯へナイフリッジを進みて到達す。
南の峯へは草付きにて簡單。そこより神社を有する北極めて容易なるも注意を要せり。二峯より機母岳一峯極めて容易なるも注意を要せり。二峯より機母岳一峯

山劍ケ峯頂上に至り、こゝに王瀧川溯行を完了せり。午後四時、やうやく明らかになれる路を登りて御嶽

天幕發(前八十〇)——二股(八・五〇——九十一〇)

ヶ峯(四・○○──四・二五)──二ノ池小舎(四・四○)峯(一・○○)──繼母岳(一・四五──二・○五)──劍---繼母岳第三峯(一一・五○──後○・二五)---第二

木曾川本谷(王瀧川)溯行 (上回)

あとがき

も注意すべきは森林甚だ深く、五萬分の地圖も誤亦多持參せるザイル等一度も使用せざるも、只、くれよく全行程をかへりみると技術的には極めて、たやすく、

場なり)、或は頂上迄が最適ならん。 瀧上迄、第三日繼母岳東方鞍部(殘雪あらば絕好の泊 行程を運ぶに、第一日魚止瀧下泊場迄、第二日百間

(437)

ん」の傳說まで生みし木曾川本谷王瀧川の全貌なりき。まゝ白い樹肌を押し並べ、熊、羚羊の白骨散在す云ぬ蛇の棲家あり、其處は四時毒氣漂ひ樹木は立ち枯れの蚊上が、嘗つて、諸説紛々、又は「この谷の上に大以上が、嘗つて、諸説紛々、又は「この谷の上に大

註

き、文中にある鉈目及び百間瀧上流の小屋場はその時建設せ一、大和は遭難學生搜索に隨行し、王瀧川一帶を隈なく步內人大和由松より聽取せる事實、乃ち、昭和十六年正月、同行者幼方芳男、藏王にて信州有明村案

曾川本谷(王瀧川)潮行 全田

3 8 なる 曲

られたる事もあらんと思はれたり。 したれど不幸にして入手し能はず、 る模様よりおしても相當古き時代より何人かに依りて登降 右につきて筆者は遭難及び搜索を書かれたる文献を探 併し此の谷のおだやかな 4

說 は筆者の諒解に苦しむ處なれど、推察するに當時の擔當者は の谷と化す現在に到りしならん。 以上の事を擔當地區の林野局出張所が、 隨つて一時明るみに出でたる王龍川も再び傳 何等知らざる

1岳の西側登山路について

吉 澤 郎

池

分の經驗を述べて置く事にする。 部 輯者より上田徹雄氏のゲラ刷を見せて貰つたがその ヘーハの頁 一、二行目)誤りと思ふ節があるので一 中に 應 自

村尾金二氏と望月達夫君、 行かれた前年) して連れて行つた。 は矢張り王瀧川を遡行する心算で昭和十 八月五日東京を出て上松へ向つた。 それに有明村の高山 四年八上 郎 同行者は をポータ 一田氏の

出た。

Ŀ

田

氏の

紀行の追補

の利用や小坂谷の會所宿泊等の便宜は總て東京の

林

大鹽計畫課長の御世話によつて計られ たの

どうにか探り歩いて上俵 た徑を五万「谷」の字の鞍部から尺ナンズ谷に下り、そこの 米獨標の 雨 0 ために遡行は斷念したが林野局の經驗に從つて一九 東鞍部に登り、 ○二〇七六・九米)を過ぎ、よくなっ 彦七ケ原を東進、 不明瞭な細徑を

小屋跡に慕誉した。

に登つて二八○○米の等高線邊りからやゝ水平に捲いて二ノ とシン谷との間の徑路を登つた。實に明瞭な道でよく踏まれ てをり間違える様な所も危險な所も全然ない。尾根筋を忠賞 !の西北斜面に出て又幕營した。谷から四、五時間の爽やか 翌日は午前中雨だつたが少しあがつて來たので尺ナンズ谷

は綴道ら な登りであった。 地圖にシン谷の源頭と濁河温泉を結ぶ點線路があ るがあ n

で色々御 を下り、 算であつたが雨のための増水と面倒臭くもなつたので登山 一日は頂上を往復してから岳ノ湯泊り、椹谷を下降する 椹谷の事務所 馳走になった上、 へ追分の眞東、一一六三米獨標の眞北 特別に林鐡を仕立てゝ戴いて小坂 C

二七・四・六)

の意味で之を書いた。御諒承顧ひたい。

古 2

塚

本

繁

松

來

亡び =1 イイド た 峠 曲 の山道 1

カ シナギ 尾 根

三

叉

龙

亡びた由緒の山道

されて修理等も K 多にない事であるが、 ふ事は當然の理である。 け た道が不要となつて廢絕する例は山間等ではよく見受 便にするが、 る事がある。 人は必要に應じて山野に道 さうしたものには私共は大して心を動 なされず、 旦その道が不要となれば自然に放棄 測量等の為に一時的に開鑿され 併し平地ではさうした事は滅 次第に荒廢して経滅 を開 き 人 や車 馬 して了 0 通 行

境目

を通るやうに道が通じてゐたので

あつた。

所

が大

Щ

でも一番高い所なのであるが昔は忠實に木山と石

の境にあたるのである。

この附近の森林限界は富

土山

澤

の浸蝕が次第に進んで、

この越場附近が斷崖となつ

で、 うな場合になると、 る不動石と達磨石とが 大澤の越場の上方數百米の處に往昔の越場の遺跡であ いのである。 はなしに人との交渉が絶え次第に廢絕してしまつたや て多數の人が往來し何十年何百年と續 かされる事もなく見送り勝であるが、一 の越と言つて大澤を越すには此處を通つたものださう この越場は御中道の本來の目的 例へば富士山の御中道であるが、 中々深い感傷なしには濟まされ ある。 昔はこの である木 不動石附近を V た道が 旦道路 Ш 現在 が出 と石 何 時

(439)

0

黒部の古道を訪か

(塚本)

10

0

横

K

困

難

通

過

0

出

一來ない

時

偲

懷

< 5

岸を たも 過が T ない 事 事 10 今は亡き船 たかを察する事が出來るのである。 たと言はれる。 よすがとなつてゐるばかりであ が は 上下の勞苦を緩和する目的 登つた昔の御中 である。 の越迄又は三の越迄下つて對岸へ渡り、 不動 越附 全く不可 不動 ガジ あつてそんな折にはその下の三の越迄下つて越し よい越場を求めて現在の越場である二の越迄下 のださうである。 石 近の道は 石 不 それ 動 と石 の對岸 津 能 0 石 は既に五十年以上 私はその三の越の位置はどの邊か知ら 碑 中 0 の狀態となつたので、 全く 村氏に である達磨石 道 -と危險が加はり、 ケと棧道 0 の越で對岸 殷絕 往昔はこの二の越も亦越せない 通 よつて改 行が如何に して 0 で現在の森林 残 所 まで、 る を目の 一酸が 在 一撃さ 0 P 昔の 困 も不明となつてゐ 大澤 がて 難なも 何時 在 九 前 たも b 事なので、 に見乍ら或 兩岸 そのま」右 L 中の中道が 間も辛苦 一昔を偲 の越の のであ 0 だとの 0 劇 今 通 は 3 0

> かい K

つて れて 作られて敷百年、 えて訪れる人もないので、 なつた次第であるが、 あるか ゐたものと思はれ のであるが、今私の訪ねやうとする黑部の古道 時 應は述べて置きたいと思 は誠 不 K 感慨深 明 C その あり、 V るのに、 間細々乍ら人通りが毎年續 \$ その古道とはどんな所である 深い 0 現在はどのやうな狀態に が 興味を感じ探 あり 3. 近年は全く殷絶して 立ち つて見る氣 思ひ け

雲模糊 文氏 は言 他 共 T 年巡視せしめて信越飛三國との國境 0 ねたので 國 越 が 他 中の國は明治維新迄は加賀の からの越境盗 ふ迄もないが、 數年 として不明勝ちであつた往 を守護する爲に奥山 ある。 前三 口 との 10 伐や自國 瓦 加賀藩では領内の か本 間 の事情 廻り 誌 內 の盗伐を防 K 其研 役とい 10 前 昔の ついては會員中 を明 究を發表さ 田 黑部奥 藩 北アルプス 3 領であ 60 ぐ事 5 カン を設 に努 山 10 の森林 0 Щ け to 力 叉 每 IF.

2

0

不動

石の上に立つて往古の行者達の辛苦の姿を

る。 0

これ

によつて私など数百年

-の昔既

にとの

幽 で

狀況に一大巨火を點ぜられた事は

衆

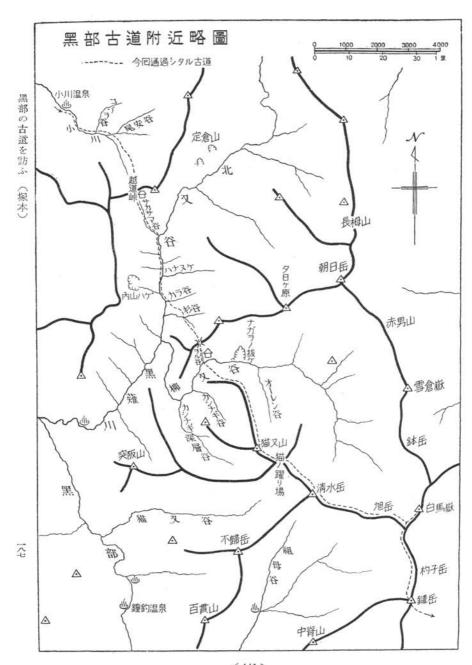
知

0

事 深山

實

あ



(441)

六

0 が K 黑部下 自 私のこれから訪ねやうとする 5 奥 だ思ひ 山 道 0 が 部である。 して喜びにた ~ のはその な かい つった 奥山廻り 0 T ある 道

山道

昔でも 道をつ 能に近 その本流 央集權となつた我が國 た譯 から to カン 自然こんな所へ道 と勞力を償ふに足る收益の道もなかつたであら 5 黒部本流附近を縦に つたの のは明治の御代も相 ない事であつた。 部 では その時代 奥山 けられ カン E ない であらう。 費と歳月さへ 0 K たか 沿 廻り道といへば、 けれ には特に ない事は無論 ふて道を通ずるなどとい らで ども、 を通ずる事などは殆んど考へられな ある。 2 激流絶壁が續いて道 通する道を聯想されるが、往昔は 惜しまなかつたら黑部 家の興隆の姿が今にしてはつき 巨 當に年代を經 0 黑部 額 流 石に封建時代とは事 0 L なかつたであらうが 開鑿費 本流 今日ではひよつとすると かし火薬を使は に沿 を償 T 一つて道 ふ事は思ひ かい 路工事が ふ代償 らで なか 0 K あ 3 遠ひ 開 だつて から つた から 巨費 つた 不可 もよ あ カン n 中 0

驚嘆

はれるが、 見やうとする下奥山 日も嚴として存在して主要な登山路となつてゐるので から平へそして針の木峠迄が主要道路であり、 距離なのだから、 と比較にならない程通 まで困難だつたとは思はれない。 あるが、この道などは 見して分るやうに殆んど一直線上 さて は立立 î な所を選ん 右 尊敬の念を感ぜ 山溫泉から湯川を溯り左良峠 0 こんな複雑した地形の所を通 事 情 で 0 爲 つけられた事は當然で この道筋を發見した先 奥 道 割に ずに は中 Ш 路の探索も困 廻り は居 地 × 地 形 道 が簡單 は地 5 形 然し今度私の訪 n 8 を通 形 な 難だつたらうと思 複 雜 なの 的 上り、 人達 あつた。 で、 K つてゐる最 り乍ら略圖 0 で發見もさ で 最 6 Ŀ あ 0 之は今 慧眼 中の る。 奥 通 山 ね 谷 奥 短 道 T VC

現在 うなも から 然的 猫 尚實に興 奥山道の一つは大體略圖に示す 叉山 0 な道筋でも であ へ登り 趣 つたと想 10 清水平 あるやうに思はれる。 富んだ登山 像さ カン 5 九 現在 1 3 が ス の白馬岳迄 私共 私の T あ 訪 b 0 L かい = ね 比較的 た柳 0 1 L 道 猫 ス 叉山 筋 叉 0 4

ばれ

るのである。

自

が、 早その道跡を探る事も不可能に近い程模糊たるも などは最早 して精細 れとて最 なつてしまつたと私は思つてゐるのである。 來ない程よりどころのないものとなつてゐるし、 はれるが、 いて行く道でありそして深い林中を通つてゐた道 て へて祖母谷に下つて 現地 叉谷に入り、 も通 K に調べ ついて どの邊を通つてゐたものか容易に想像 不可能な程 一過の容易な所を選つてつけられたものと n 必ず此處を通つてゐたと斷定する ば無論大體 現 るる道 森林 在の清水祖 は原始の姿に歸つてゐる。 は、 の想像はつくであ 殆 日母谷道 んど山 ナ 0 ある尾 0 しか 中 腹 5 しと 今は も出 と思 を卷 0 根 事 5 K

の頂上

登らずに、

力

2 ナ

ギ

谷、

カ

シ

ギ

深層

谷

を越

る

沿

0

筋 的 0 との道筋 カン した 考察であるが、 から先の 近接してゐたものと思はれる。 について、 事で、 はこれはもう言 道の作られた所は大體今日のもの その下流は近年迄河原を通行して 溫泉から越道峠(往昔は横山 先づ小川温泉から柳又迄の地 いふども ない それ 本道 は L カム で、 し尾 K 峠 谷 同 形 2

る。

づか る。 矢張り杉谷を溯行して現今の横 らうが、 を越し柳又の廣河原へ下つたものと思は 險難な谷筋 たのである。 つて下つて何 れるも この事は中島氏發表の古地圖を見てもそれとうな 合流點迄下つてそれ のが の事を考へると全く信じられない 越道峠 處 あ るのである。 から柳又へ越したかは から北又へ から柳叉を たゞこの杉谷の落 Ш 、出て、 0 鞍部 溯 中 北 れる (柳又乘越 叉 つたとは 問 0 0 0 題 流 C で 8 n が あ K あ

岸からカラ谷の 代になつて尚残つてゐた取付口 は先へ行つて取 瀧となつてゐて直接取付けないので、 この自然の道筋を採つてゐたものと想像されるのであ て又一山稜を越へて杉谷へ下つてゐた。 手前をへつつて一 ついてゐたも のと想像される。 は、 日. 內 カラ谷へ下りそ もつと手 Ш 恐らく往昔 ハゲの下 前 明 流對 冶

(443)

のだから、 Ŀ 又の廣河原を渡つて對岸 へくと行けば との 尾根が奥山 自 然に 廻り 今日 道となつてゐた事 越しすぐ尾 0 白馬岳 へ到 根 達す 取 る 付

部

の古道を訪ふ

(塚本)

れる筈である。只、今度實際に登つて見てこの尾根はの不思議もなく、地形圖を一見すれば成程とうなづか

餘りに長くそして藪がひどく深かつたので、

道路の開

全で近いに相違ないから矢張りこの尾根が選ばれたの道を切り開くとすれば谷筋を通るよりは尾根の方が安鑿前には餘り通られなかつたものと想像された。併し

は自然の理であつたらうと思はれる。

この奥山道にどんな變化が起つたかといふと、柳叉かる。それは元より夏だけの事であつたらうが、この深いる。それは元より夏だけの事であつたらうが、この深い鬼山もさうした早くから人間との交渉があり綿々とした書をかつたといふ事を思ふと、この奥山も單なる非情のものとして考へる事はどうしても出來ないのである。やがて明治維新となり藩は廢せられ、自然山廻りある。やがて明治維新となり藩は廢せられ、自然山廻りなるなくなり黑部奥山は國有林に編入された。其處でての奥山道にどんな變化が起つたかといふと、柳叉かでもなくなり黑部奥山は國有林に編入された。其處でての奥山道にどんな變化が起つたかといふと、柳叉かとの本くなり黒部奥山は國有林に編入された。共處で

5

先

Щ

の中腹を廻つて祖母谷に行く道の

消息は私

には全く判明せず、

恐らく維新後自然廢絕したのでは

長い年月續いた奥山道も衰滅する運命が來たのであつ

はれたのではないかと思ふ。明治維新後に奥山廻り道くなり、叉外にも新道が出來てゐるのである。その新道といふのは、柳叉の右岸に沿つて溯りゼンマイ谷の先といふのは、柳叉の右岸に沿つて溯りゼンマイ谷の先から鉢ケ岳(現在の雪倉岳)へ登る道で、この道は鉢ケから鉢ケ岳(現在の雪倉岳)へ登る道で、この道は鉢ケないかと思はれるが、白馬岳へ向ふ方の道は却つてよないかと思はれるが、白馬岳へ向ふ方の道は却つてよ

どへ入らなくても外に働く仕事も多くなつて、次第に 尚其の他に鑛石を探す鑛山師も隨分古くから入つてゐ れ等はお百草とか漢法藥の原料となつたものらしい。 言つてゐる。これは中々よい値で賣れたやうである。こ 翁の話によると翁は主としておうぎの採集をやつたと 山麓民の奥山入りが減つて來、 りに物を取つて來る事は固く禁ぜられたし、又奧山 達も中々多かつたらしい。所が後年國有林へ入つて妄 たやうだし、ぜんまい其の他の山物を採りに入つた人 に出掛けた為で、今年七十六歳で尚元氣な安達政 が保存された主なる理由は、山麓の住民が藥草の やがて流 石に 數百年の 採集 次郎

(444)

0 形 六年 た頃 た。 T 小杉復堂氏 が る 鉛 た白 は 旣 又三十年近 なかつたやうである。 木 幾分不明の所が生じてゐたやうであるし、 K 本誌前 馬岳 益 の明 三氏 への道も い歳月 號の の通行の 治二十八年登山 「白馬三 が經過し 際はカシナギ尾 明治三十九年川 このやうな經過を辿つて其 Щ たが の折 補 遺 誰 には にも 人登山者 島氏 根 V. 派 には全く道 0 K V 通られ 存在 た通 大正 0 通 L b

V

が、 部 登 8 Щ 自 分的には矢張り折々入つてゐるもの」やうである。 此 然な奥 處 路 何故に登山道としては採用されず、 が北アルプスにも四通八達した今日、 C 私の 山 不思議 0 通 K 路として發見開鑿され 思 ふ事は、登山が次第に流行し、 却つて 10 昔から最 時世と 此 0 道

うか

0 Ш

下に整然とした道の名残を止めてゐる所は

ない

だら

(445)

推定 谷 である。 0 せる何 溫 され 泉迄容 中でも るのは、 より 易に行 黑部本 0 原因であつたらうと思ふ。一方白 他に けるやうに 流に國 登山 に好都合の新道 有林の なつ た事 林道が は 2 出 から 一來て祖 出 0 道 來た な

貫

L

が

母 事

黑部

古道を訪ふ

は反

對

に衰

滅し

たかとい

ふ事

である。

其

0

第

0

原

因

未踏といつた方

面に最も心をひ

かい

机

3

10

は

相

違

な

が、

道とは言 馬岳登山は主に信州側 爲でもある。 ある。 0 登山道 へ如何 今一つはこの が 時 にも 近年昭和に 開鑿され 距離が長く手輕 道は から行はれ たが、 如何 なつてから小川谷から白馬 K その折さへと 無 るやうに な登 理 0 ない Щ なつた為で には適し 自 l 然的 の古道 な な

3

た此の は見向きもされず、新道は朝日岳へ直接に登つてゐる。 そんな譯で今日 0 登山界から全く取残されてしまつ

中に 由緒の深い古道が、 止めてゐるであらうか、 現在どんな姿でその名残 或は苔むした橅の 密

0

た形

跡もない様子である。

しかしその間も獵師達は

見されはしないか、 て今度の山旅を思ひ立つ ひよつとすると石碑か何 そんな事が たのである。 私の か人間 好 の作 私共は所謂 奇 0 一つた物 目 を 膛 が發 人跡 6 せ

大連 ある事は否めないのである。 華 た精細 今度のやうな懐古の 山 游記 な旅 (明治二十 行記は、 八年) 漢文で書かれ 山旅にも亦 より外に、 この古道に 强く to 11 U かれ より古いも ついては 杉復堂氏 るも 0 0

黑部 の古道を訪ふ (塚本)

のはないやうで、 る事にした。 此の旅行は忠實にこの記錄の後を辿

申込まれた會員竹內予念子氏、 さて私共の一行であるが、私の計畫に對して参加を それに富山高校生の竹

人夫として信州細野の案内人中村賞、 內肇、榎並豐一郎 の兩君を加へた四名である。それに 丸山繁の兩君 から

同行してくれた。この一行は年齢的にも相當の隔りが あるし、それに平常登山を共にした事もなく、其の上富

高の竹内君の如きは夏にも冬にも高山へ登るのは最初

たゞ此の附近は私の多年親しんで來た山地であり、時 といふ、考へて見ると誠に無茶な一行の編成であつた。 的に十分の餘裕があるので、こんな一行でも十分や

間

小川 は泊驛に勢揃ひをして七月二十八日 b 遂げ得るといふ見通しがあつたのである。さて一行 温泉の元湯へ向つてバスで出發した。 (昭和十六年)朝

7 1 F. 峠 の小屋

小川温泉の元湯で買物をしてゐると、珍らしく二人

2. の登山姿の青年に會つた。 上から下つて來たのだとい

何處から來ましたかし

日岳へ出て白馬へ行く積りだつたのだといふ。道 たのだが全然道がないので戻つて來たといふのであつ と聞くと、少しどぎまぎして、質は昨日此處を出發し 何處へ行く積りであつたかと聞くと、越道から朝 がなな

た。

りといふものがない爲に草が伸び放題になつてゐるの

事であつた。無論道のない筈はないのだがまるで人通

いといふのは何處の邊りかと聞くと、

越道の先だとの

であらう、この附近の山の靜けさが先づ思はれる。 小川の湯を出ると空模様が怪しくなつて來た。泊

着いた昨二十七日は大變よい天氣であつたが、それは

久し振りの晴天だつたさうで、七月に入つて霧 の日多

だといふ。今度とそお天氣が續いてくれなくてはと、 く冷温が續いて、 稻の作柄が甚だ氣づかはれ てゐたの

天で今日早くも雨模様、 農民達の顔に喜色が浮んでゐたのに、 どんなにこそ百姓達はがつか たつた一日 0

(446)

もつてゐるとは言へ天氣が續いてくれなくては十分目りしてゐる事だらうと思ふ。我々としても十分日數を

吊橋を渡つて右岸を少し登り新道を行く。間もなくて晝食をとり、内地米の上辨當に舌づつみを打つ。ない。溫泉を出て半里足らず吊橋の手前の河原に下り的を達する譯にゆかないのだから氣にせずには居られ

被つて休んでゐると、まるで雷鳥みたいだとい は久し振りで茣蓙を使 先に何ケ所も抜けた所が T よぬれになる所だが、 1. がある。そろく山の言葉も出初めた譯だ。 安谷を横切る頃は本降りとなつたので雨具を着た。 重いしゆつくりと平坦 ぽつりくと雨が落始め空は次第に暗くなつたが荷も ので初 ねれ ·峠道、 ずに行け めて もし此處の草を刈つてなか 通 る 道は大正 たのは有 人には 幸ひ草刈が濟んでゐるので大し な道を行く。 つたが中々具合が の半 難かか 相當不氣味な事だらうと思は あつてろくに足場も作つてな 頃から つた。 = 何十遍と通つてゐ つたら雑草でぐし しかし尾安谷から ゾヲ谷を過ぎ尾 よい。 阿 5.5 茣蓙 0 7 私 1 0 を

の地

表は

粘土質が多く雨水の浸蝕に安定を失ふ事が

多

(447)

いらしいのである。

所はありません大丈夫です」などとよく言ふが、山は共、人に道の良否を尋ねられた時など「あすこは惡いてゞあつた。山の變化といふ事をしみ (~思ふ。私るが、今度のやうに拔けた所の多いのを見るのは初め

それ等が相當崩れ落ちたらしいのであつた。此の附近ぞ、又洪水かと獨り思つてゐたのであつたが、今年はだ、又洪水かと獨り思つてゐたのであつたが、今年はだけるで、又洪水かと獨り思つてゐたのであつたが、今に抜ける

着く。 めて貰 らしく、 寢る事の窮屈を考へると、廣々とした營林署小 たが、先は草を刈つてないので物凄い深いやぶである Æ. FFF 六名泊つてゐたが、心よく席をゆづつてくれた。 はやまず、その中 今日は北又迄下つて獵師 ふ事に豫定を變 雨の中では困難だし、 を夕刻コ た。 植 林の下 狹 イド峠の営林署 小屋に入る豫定であつ V 獨師小 IIX b 屋 0 人夫 に六 小屋 屋に泊 人も K

黒部の古道を訪ふ (塚本

慮もせずに濟 ば 多くは多少の知り合ひの 人達 で あつたの で

來る。 明 5 5 かい 下つた。八斗越から先は全くこの夏人の通つた形跡な 0 つのを忘れるのだつた。 つた。草刈人夫衆ともなじんで來て夜は雜談に時のた 尾釣つて來てくれたので、久し振り て來たが、夕刻營林署の定夫の長津由五郎君が鮨を数 なか ずそれを眺めた。 日は目 に空が明るくなつて來たし北又迄樣子を見に 翌朝もまだ晴れる見込なく出發を見合はす。 翌くる日は 道を被つた文の高い草を踏みしだいて行かねばな 晴れる様子がないのでそろく それに目 0 い流れであらう。 的地 たが、北又へ下りつく頃晴天となり、い 廣い河原を悠々として流れてゐる。 日 へ進めるかと思ふと嬉しさがこみ上げて 前 小雨だつたので一 に見る北又の流は何時見ても何とい そして水晶のやうな流れ そして何とい 夜中時々雨が大きくなり、 K 先が氣懸りになつ 歩も外へ ふ豊か 山 0 珍味を味は 0 私共は飽 出ずに暮 な水量で そのう 中を戲 よく 同で 2

> 評して川幅僅かに十餘間と評して居られるが、 見たどけでも來た甲斐があ る事は私には何よりの驚異であり歡喜でもあるのであ け方も知らない不精者揃ひなので當然であつ 人でたつた二匹しか漁がなかつた。尤もろくに餌の の水源を越へて、 それから數時間鱧釣りに一生懸命になつ 此處で戻るやうな事があつても、 り歩いたのであ 明治二十八年に登山した小杉復堂氏は此 川幅十餘間の大流が悠々と流れてゐ つつた。 中には、 つたと滿悦し 運悪く天氣 此の美し てゐる たが たが 人も 小川 10 0 なら Ш 流 私 付 1/4 谷 あ を を

つた。

ずに れ沙

が、 で、 L て私の針にもひつか」る奴がないとも知れないと期 など、よつぽど馬鹿な鱂がゐて、ひよつとすると誤 へて焼いて食つたりして夕刻再びコ て糸を垂れ た馬鹿な鯖はゐなかつたらしい。 獵師小屋にとぐろを卷いてる 又も空模様が悪化して夜は驟雨性の大雨となつて てゐたのであつたが、 た二匹 鯌が不漁だつたの 北叉には生憎さう イド小屋に戻つた 0 青大將を捕 待

L

まつた。

(448)

る。

草刈 小屋で三 衆も仕事を休む程の 夜 を過 L たが、 始末に、 朝目 を 覺すと 此 0

北又の水量は懸念した程の量ではなかつたので渡渉に 雨が續くと假令晴れても最早渡渉は困難となる 心配はない と懸念される狀態が迫つて來た。前日實見した所では 登山どうやら此處で引返しの運命になるのではないか と見極めをつけて置いたが、 さててれ以上 0 が

44 ぱつと晴れて來たのでさてはと早速外へ では晴 番怖 V ので れてさへくれ」ば何時でも上機嫌となる。 ある。 そんな心配をしてゐると十時 飛び出した。 頃 K

かし

出發には遲過ぎるので近所の山

へ遊びに出掛ける

で通せん棒をしてある。さては此の道危険にして下る

~

事にした。人夫達は鮨を手摑みして來るとサカサマ は途中で北又へ下つて魚止瀧を見、 ゐる炭燒の道を定倉山 へ下つて行つた。 私共は小川 の方向へと散步に出た。 と黑部の分水嶺に すぐに對岸 この道 つい 渡つ 谷 T

て朝日岳 るが 止瀧 を見せてやりたい 今は既に破損して通 へ登るやうにする爲吊橋迄かけたのださうで とい ふ親切は有 行は危険との 難い 事 が である。 朝 H

魚 あ

部

の古道を訪ふ

(塚本)

るのである。 魚止瀧 神秘を瀆すものとさへ思はれる。 價値も素晴らしいが單なる横斷ではむしろこの 登る だけ のに元々さうし を 北又の美しい流を溯つて見てこそ魚止 寸見た所で何にならうかと私は た廻り 道は無 所謂名所紹介のお 、理であ それ 秘 境 瀧

0

K 岳

世 0 いてゐると道が下りとなつて北又へ向ひ始めた。 つかいは有難迷惑だと思ふ。そんな事を考へ乍ら歩

た。 そ今腹を立て」考へてゐた瀧 れる道をたづねてゐると、 私達は分水嶺を尚先へ行つて見る氣なので左へ分 面白い事にこの下り道 へ下る道 だなと氣が に木

(449)

やそれは熊の落しであった。 立派な道が左 からずといふ印かと早考へしながら左方を見ると この落しを見たついでに此の邊で作る熊の落し 通せん棒を跨いで左へ曲つて暫く行くと、 曲つてついてゐる。 まだ熊は引懸つ 我等の行先はそこ てゐ 豊らん K

ついて一寸説明して置きたいと思ふ。

此

の附近で行はれる熊の落しとい

à のは、

熊

0

習

性

どかし 5 T る は は藪潜 くのである。 る する。その誘導する箇所は元よりよく切開いて通り易 だといふ。其處で既に切開いてある道を熊取りの いやうに周圍 いやうにして置くのである。 なるべくならば藪のない を 荷 利用するのである。 巧 るには れてしまつて 0 で あるとの その熊を或所で通せん棒をして巧みに横道へ誘導 の入れるやうに仕組むので、元より難なく熊 3 ある。 がつて周圍 りの名人と我 10 上 11 利 カン 其 さ過 用 事 た處が 熊の その 5 に垣をめぐらす。そして落しへと誘導す L ずである のされ きる は意味がないから、 た 通行する穴はそのま」熊が樂に通 つけ目なので、 落しといふのは、 の圍ひをけ飛ばすやうに仕懸け 8 々に思はれ乍らも、 0 0 で、 熊は人の切開いた道を歩い である。その習性とい から たい 所を歩きたいとい のでははね除け 斜めにねぢれ 熊は身體を斜 やがて横道へ逃げられ 熊は五十貫や百貫の 中央附近で熊 木を組んで辛うじ た身體ではね 我々と同 る力は十分持 8 K 3. ふのは、熊 のが ね いぢつて て來 て置 はも に通 習性 人達 行 な 岐點附 けその 横た 大な朝 000 b 0 00 0 熊の 古, ける力は極めて弱い 日

道理でこの落しを作つた連中は、 本格的の熊の獵法ではない。私と一しよに行つた二人 のである。こんな獵法は元より無雪期 のまゝ息が絶えてしまふ。その様にして熊を捕獲する る所を怒らしてはねのけさせるのである。 つた事を知つてかなり心配をしたとの事であ つて了ふので、 高校生は、 れてしまつ へてある丸太と石がどさりと熊 落しの中を潜つ 若し私が たかも 熊はその重しにどうする事も出來すそ との事 知れ たかも知れないし、さうしたら 一しよでなかつたら或はうつか ないと笑つたのであ で、 必ず斜 私達がその附近 の上に押しか に行ふもので、 め すると上 K な つた。 っつた。 うって るさ 向

つけて尙先へ進んだ。 附近では私の最も愛好する山であるが 私共は熊の落しを見物して少し引返し稜線の道をみ 美しさ 近迄行くと、 岳 は 頭上 に驚歎し 高くその雄 朝 合 日岳方面 途中見事なしだの大群落をみ つたので 歴姿を現 の雲が あ L 0 殆ん た。 た 朝 ど切 定 しか 倉 H も此 岳 和 山 の分 T は

邊りか 風 が JII 雨 の相 中で 其の時は ら仰望した事は殆んどない。一度吹澤谷から小 0 あつたので落付いて見る事は出來なか 又に越さうとしてその乘越で仰いだ事 山 「の形をはつきり見る事は出來たが は つた 生僧 あ る

ぐ事 が、 仰いだ事はなかつたと思ふ。それ程此 ない程高くく 日岳の姿は、とても二、四〇〇米やそこらの を下して仰望した。 0 仰望臺としてはよい所だと思つた。 今度は散歩中の は幾十度か敷へる由もないが、 氣高く仰がれた。 雲が次第に切れて晴上つて行く朝 事だから見晴しのよい所で十分腰 朝日岳を山上から仰 此 の時 0 Щ 稜は朝日 程高く尊く 山とは思 岳

だ細 れなかつたら斷念して引返すより外はないと諦め 刻コイド小屋へ戻つた頃は又もや雨となつた。 歸つて見ると人夫の結漁獲の當は外れて一尾も取れな 走になった。 定 つたさうだが、 全倉山へ 々乍ら分水嶺を續いてゐた。 の尾根の分岐點の手前で引返したが 夜は斷續する雨の音を聞き乍ら山 草刈衆は數尾とつて 再び霧が深くなり夕 歸 つたの 明 0 T 道 日晴 御馳 は 人達 る。 去

の面白い話に夜の更けるのを惜しんだ。

二、柳又迄

するの あらう。 附近に立つて杉谷のあたりを睨んで通路を求めた事 り拔けたい、 距離一里餘りしかない 又さう思はねば旗を卷いて歸るより外ないのだ。 に敬服するばかりである。 も痛感された。 の形が尾根の様子が手に取るやうに見える。 みをしみんしと見入つた。 出發と決めた。 した様子に見える。もう大丈夫だといふ氣がして來た。 夜が明けて見ると曇つてはゐるがどうやら天候も回復 八 八斗越の上で今日の通路である柳又乗越附近の山な 月一日。とうく四夜をコイドの小屋に過した。 かと思ふと嬉しさがこみ上げて來る。 あすこなら必ず樂に越せると睨 昔始 七時頃小屋を後にサカサマ谷を下る。 行を無事 めて柳又へ のだから。 に通し 深い森林である。 地形を十分視察の上北又谷 たいい、 越した人も恐らくこの あの 深林 中 × んだその 責任の重さ 0 ろまく通 中に沒入 何しろ直 L カン 眼力 L で

(451)

黑部の古道を訪ふ

0 0 理は全く行はれて居らず、 通行は容易でない樣子なので、往昔のやうに北叉本流 流れに沿ふて川岸を下る事にした。林道とはい 越すと直ぐ黑薙林道へ取付くのだが、 道 の變化の の劇 通 なら八斗 L V のに驚くばかりである。 越を下つてサカサマ谷を右岸 草の密生、 倒木、 近年林道の 崩壊等で へ山 修

J

(一待望の澤下りだ。今は空もすつきりと晴れ

ら下の やうが ふ脛 て來て幸先もよい。 事 あつたのかと私は驚いた。 これこそ谷歩きの醍醐味だ。その嬉しさ愉快さは例 浴びてすき通るやうな美しい溪流を沙つて行 もなく私は腐木の上を通つてゐて誤つてすべり左の向 すはなか 慌て」草鞋をはいた。しかしろら」かな日差しを これが先づリーダーとしての失敗の仕初めになつ を强たたか ない。 北又は林道から見下すばかりで直接渉り歩 つたのでこれだけ美しい谷だと知らなか 北 叉 打つた。 0 流 直にぢやぶく、渡渉を始め 机 中々の痛さで血もにじんで來 私は今迄サカサマ谷落 此處にもこんな美しい く気持、 10 つた 流が 間 to かい

+

四年に陸地測量部が初めて

測量したので、

それによ

ある。 流 り乍ら下つて行つたのだつた。 だつた。水量も手頃なので思ひの儘右岸へ左岸へと渡 迫る緑林の素直な木立、それは私の想像を超へ たのである。今歩いて見てその溪流の美しさ、 V のだが。 b だと草刈の人達から き、どうしても河岸を通れない時は で晝食とする。 て右岸に内山 ナ たのであつた。 も關らず、そのやうな制限は受けず溪流を右 、越す徑 景觀に魂を奪はれたのであつた。 歩いて内山ハゲを直前 の北叉谷の美しさは私の既に本誌に紹介した ヌケの谷、 しかしそれから下の流は問題にしては居なか 今初めて溪流を歩いて見てすつかりその 路を探策せねばならない。 右岸に上、 ハゲの 此處でいよく 此處迄は水量の多い 聞 瀧 V の落下を見る所 下の藤橋の兩谷を數へてやが たのであ に見る大河原に 左岸にコ 北又本流 5 たが 時は専ら右岸を 此 林道迄逃げ登る カサマ谷から上 へ着い 0 附 達 ウ と別 クロ 連 近 し豊 K 日 は れて柳又 たも III 食とし 左 明 0 美し 此 岸 に渡 雨 b 治 K K

(452)

谷に入るやうに記してある。 る五 は北 萬 カラ谷を過ぎてから左岸 分の 又の溪流に入つて右岸について流に沿つて下 地 形 圖を見ると、 しかし土 へ移つて岸に サカサマ 地 の古老 谷を下つた步 沿 ひ乍 K 開 5 3

所によつても、

又最も古い確かな記

錄

であ

る小

杉

氏

0

カラ谷は豫想外に開けた大きな谷であつた。

量も

(453)

能となつてゐる。 ても 文章によつてもカラ谷の手前で一 ラ谷の流に下つてゐるので、恐らく陸地測量 みの誤りであらうと私は想像するのである。 通 過路の偵察は不可能ではなからうが カラ谷の落口の手前で左岸は岩壁の爲に通過 右岸に渡つてカラ谷落 つの尾根を越し П カラ谷 0 直前 何れ 部 0 不可 聞 の落 K K T 到 込 カ L

にごく 上の うに思へるが、 谷へのヘツリの箇所を偵察した。 一谷を溯 それは行はず、 細 V 溝のやうな谷があつて、 b カ ラ谷 何となくそれが不安に思はれて今一つ 左岸の行きづまりの へ越 7 事 K 决 行止まりのすぐ手前 小 之を登れば越せさ した。 直前からカラ 之がそも

な心

配であ

つたので、

初め

に越せさうな溝を

0

數

をもぐつてその下迄行つて見る。

しかし之だと斷

部の占道を訪ふ

生し、 尾根を越 上る方が捷徑であつたやうに後に思 時間程を要した。 食後ゆつくり休んで豫定の小谷を溯 昔の ヘカラ谷の川岸 道 0 遺 跡 山の斜面は山竹其の他 など見屆ける に下つた。 曲も 案外時 つたので な り適 カム の矮木 0 間 當な所で あ カジ つた。 かい から

下へ 川岸の草叢の先に る。 見上げる谷はそんな谷底などは見えず草に覆はれてゐ 出てゐた。 谷を探さうと下から二番目の堰堤の上 聞いてゐるのは白く谷底の見える谷だとの事だつた。 よれば杉谷 程の距離でもないやうに聞いて つて見た。 相當にあつた。 共處で今少し上へ溯つてその直 落ちてゐる谷がそのやうに思はれ 私の聞いた所では、 私は杉谷への越場を探す爲に落 の越場は、 私共は落口の瀧の上にある堰堤の上に 0 の緩 奇徑線の如しとある。 P かい な谷が ねた。 その越場は落口 線の る。 11 落ちてゐる。 へ出た。 谷白い 杉氏 しかし П 近く 0 谷底 記錄 から何 堰堤 見ると 一下 K 草 0

口は

大きな瀧となつて落

ちて

る

3

0

は

確

かい

な事

なの

カカ

定も る事にしようかとも思つたが、 る勇氣もなくなつた。それにしてもこんな奥山 度河原 へ戻つて 深い草の中を戻つて調 確 信 0 ある所 を登 0 谷

K ると左岸の上方に二つの拔けがある。といつが土砂 どうして堰堤など作つたのだらうと思つて地圖 を見 を

流し出すんだなと思つた。

明治四十五年の大洪

水の

被

害 であつたが其の時こんな小谷迄人工の手が及んだので の後此 0 附近にも土砂止めの工事が相當施され たの

ある。

處を上れ 左岸に取 めた。流は瀧などあつて歩き難いので歩きよささうな **戻つて調べるのが面倒臭くなつた私は、とにか** ば杉 b 付いて見る。 谷 へ越せるのだからと思つて谷を溯り始 私の考では、 これしきの く此 1 3

谷を越さうと思ふが谷近くの斜面が急で中々谷を渡る くとこの谷は意外にも段々左へ曲つてゐる。早く右 が出來ない。 越せると思つて上り始めたのだが、さて登つて行 困つたく と思ひ乍ら思はずも豫定以

な谷なんだから何時でも必要に應じて左岸へ(即ち右

が、

まづく行くと其の手

夕暗が迫つて來た。

にいさ」か

驚いた。

平な尾根

ぬとも限らない。

事

ある。 。

夢中に川岸迄下つた。

何とそれは杉谷の二つの

岸 遅い。どんく上へ の形も不分明となつた所で右の方へ移動し始めたが、 J. へさへ取付けば問題はなかつたんだと思つたが の高度へ登つてしまつた。 追ひやられてしまつた。 こんな事なら上 やつと谷 П で左

夕暮に近いのにまだ杉谷へ越せない 取らない。 カラ谷を出たのが二時半頃だつたが、 のはどうした譯

今度は横這ひで山竹に足を滑らされるので歩行も果敢

其 か、 平の先の谷は杉谷に遠ひないと言ふ。私はその判定力 平な尾根の向ふに杉谷がある事になる。實地に見ても 平な尾根へ向つて少し下つて見る。 の通りで どうも左へ登り過ぎた事は確 ある。 此 の附近初めての人夫の中 かだ。 圖面によるとその 右方に見 村君 えるる

て見ると直ぐ目の下に杉谷の流れが潺湲と音を立て 困つたと思ひ乍ら尾根の突端 何としても杉谷迄下つて泊 前で泊らねばなら の先へ行きつく頃 YD 事 は既に K

はれ から杉 な 距 面 よると、 流 ラ谷から上つた杉谷との分水嶺の所はどうしても 迄 離も 線の下の平の鞍部と思はれるが、 が合流する一寸ばかり上の地 かとの る。 0 高 あ 谷の水面迄は少なく共一〇〇米以上下つて相 度の るの 此 小杉氏の言はれる奇徑 疑 の附 念が 差 K, 近 8 起る 事實は分水嶺を越へてから杉谷の 0 距離も極めて少ない 地圖はどうも間違つてゐるの 0 であつた。 線 點であつた。 0 しか 圖面によるとそれ 如しと言は 8 L 0 此の事は再 ムやうに思 地形 九 では 八百 る 圖 水 當 カ K

K,

夏、 この であつたの ひどく悪い を下り北又へ出やうとして、 つて北叉に出 悪場を避けて北叉の魚止瀧下の長瀞附近に出 私 Ш Щ は此處で思ひ出すのであつた。 友鈴木弘 中に暮したといふ。殆んど信 が、 事 たとい を知 長瀞どころか遙に下流も下 杉浦 つてゐたの ふのであつた。 0 兩 君が、 で、 北叉の合流點近くの 朝 途中でイブリ その間費す事三日 過ぐる大正十二年 じられない事 日 岳からイブリ 流杉谷を下 る Ш 積 谷 K To 谷 谷 カジ

調査

の上でなけれ

ば斷言出來ない事勿論である。

左岸を上りさへすれば何時でも自由に

右

へ迂回する事

右

側

卽

5

(455)

からはたと思ひ當つた事があつた。 く惡場を避けたへつりに過ぎないので 流からカラ谷 ふ事である。 を通らうとしてつひ無用の遠廻りをしてしまつたとい ある以上は最少限度の遠廻り道をすべき筈である あるが、 なるべく危険地帯 て聞らずも 私は今日カラ谷の支流を上つて杉谷を越さう カラ谷の支流を上る際にも谷の 越し 遠廻り 更に杉谷へ越したのは言ふ迄も からいくらかでも遠い安全 をして長時間を要し 私共が今日北 ある。 たとい へつりで 一な所 又本 ふ事 0 な

とし

つも が、 そんな事を知らぬ 思はれる右岸 も臆病な飛行 が出來たのに少しでも危險地帶から遠ざかつてゐると 方へ逐ひやられ、 近年 の人命を預かつてゐるといふ責任感もあつて無能 と無用に逃げる心理と似てゐると思はれ 暫くこんな山旅をしてゐないのと、 士が 取付いた為、 山に衝 程山の素人とは思つてゐ 意外に時間を費やしたのであ 突する事を避ける為に高 谷 0 左 0 迁 曲 ない 大切 10 0 爲 る。 な幾 0 私も K だ 宛 左

部

の古道を訪ふ

(塚本)

天然杉の大木の根元が流れにゑぐられて宛も自然に

由も 取 あるが、 流で二里程度も されたのであつた。それにしても兩君は豫定よりも 左へくと追ひやられ、 つてどうにもならぬ儘に思はすも考とは反對に次第に を溯るのに左岸につかず右岸へ取りつき、 なるべく早く右へ廻らうと思つてゐるに關らずさて谷 のである。そして兩君も今日私の取つたと同じやうに、 述べた鈴木、 り過ぎてつひ 始めてうなづけたのである。 矢張り未知の山 たの 杉浦兩君がとんでもない遠廻りをした理 下流 (遠廻りをしたのだなと想像された だと述懐されたのであ へ下つてゐる事は驚 思はぬ遠道をしたものと想像 なる爲に見當がつかなかつた つまり兩君も大事 かされ つたが、 谷の形によ るので 先に 河

我等の 光、 し少々の雨でも天幕を張らずに濟むし其處を一 根の出來た小屋のやうな或は岩屋のやうな箇所を發見 ど一度の寢返りも tc. る澤音の床しさ、 つて來た。寢床は上々の居心地であるし、 とする事とした。早速草を刈り集め褥を作り上げ 枕邊近くに聞き乍ら何時しか深い眠りに落ちた。私な 爲ではなかつたかと一同 に取りかゝる。 だが半日 何の心配もいらないこの夜の我が家に落付い 山に憧れ慕ひよつて來たのは此の境地を味はう の藪こぎに相當疲れもしたので、 折しも下流の方向から 深い天然杉の木立を洩れて來る月の しないで翌朝の たゞ喜びにひたつたので しらん 月が山 と明 潺湲と流 の端 溪流 夜 た上 あ 0 n を

さぼり飲んだが さて夕暗の中を川岸へ下ると、 想ふ間もなく今夜の宿を選定せ 早速杉谷の清流 ねば 無上 は杉谷の二つの流れの合流點のすぐ上に宿つて 0 好

ならない。

急い

で河原の平の所を探し廻ると、

川岸の

であつたが、この居心地のよい閑寂な宿に、何時し

動を見て、もう自分も相當やきが廻

5

たかといさ」か

光を迎

へた。

深い

木立の

から

僅 かい

晴を示し 間

朝風涼しい

ねた

カン 杉 のであらう。

他

人の

事はともかく今日

歩い

た自分の

行

悲觀せざるを得ない

のであつた。

に仰ぐ空は青くすきとほ 爽やかな朝だつた。 けゆく (456)

岸は その は + る 附 見 ラ 待 目 深 0 T K は 碰 つて 北叉の 林も たが 谷から は 先 町 進 右 下つた。 る を 風 近 外に桂 近くも 天然杉 路 10 所 VC 程 から落ちる 遂に見 出發 色のよい ゐる事だし 限りなく擴 に相 を讃 桂 々に發見し 面一大深林をなし幽邃極りない谷である。 合流點 0 との谷へ それ などの 違ない 0 下つた積 へて 老 多い 休 樹 極める事は出來なか 數株 合流 み場で 居られるが 迄下つて様子を見たか 谷 は此處で合流 、越す昔 ため 途中心を残 つて 濶 事 10 がい 薬樹 0 b 點 を確める為であつた。 獵師が わ で K 私 あ あ に荷を置い 共の る事 つた to からの本道は何 あつたが の巨樹の多い谷で、 名づけられたものと思ふ それ を誌 入れ その間 これ と思 して引返し してゐる谷 て下流 つた。 たら 、平は何處迄も續き、 \$ は 3 から取らうとし 何處 机 に比較的新し 食 此 0 0 處か 小 た。 たが 事が 0 T 0 0 (下流 狀況 杉谷とい 地 附 杉 あ 650 氏は此 其の 平坦な右 點 と探 終ると私 近 から見 かい を調 0 私は 行は 密林 い鉈 つて 間 がご T 私 あ は 0 カ 2

<

0

りや

が

て谷は二つに分れた。

左

少

L

曲

つてゐ

る

0

た。一時間餘り溯ると、次第に

水流も判然としなく

つてゐてうるさいだけで、

通行

K

は

至

極容易な

谷

で

あ

(457)

と共に上 にゆづる事として合流點 きり讀 谷は極めて 恐らく其 只人の通過が全然ない為に灌木 相 を急ぐ儘 0 違ない 老樹は依然として立つてゐる筈で 流 み取る事は出 ~ 0 向つて 足場のよい谷で瀧とか瀬 K とも思はれるが、 老 調べ 樹 には る餘裕もなくそれ 右の谷を柳叉乘越 何か 來なかつたが、 へ急ぎ戻り、 人間 今は豫定 0 記錄 が 何 流 E 待 等 を と急い つて居 の檢討 K かい H 刻 あ 机 おつか 數旣 み付 る にし 一ケ所も けて だ。 る K てもそ そし 3 小 な

く先

る T 0

K

谷

六

テルと命名され

てゐた。

私に取つては

生印

象

K

桂

はれ 草 本流 2 眼 乘越 前 付 の様子、 たので右の のやうに思はれ の溝を登るやうに 又側 K 達 L 粘土質のぢくく to 谷を上 柳又乘越は全くのや るが、 なつた。 り始めると間も 乘越 上を仰ぐと乗越はすぐ 0 した所を勢づけて登る 道 は なく 右 せ 尾 0 方の 根で、 水は かい 谷と思 北 n 叉

側

と柳

の境目はやつと二尺内外の

1:

0

尾

過

部

の古道を訪ふ

がら な 膫 0 to に残つてゐ 叉側は乾 T ねるの で 本 0 細 道 0 名殘

つくり休憩した。 私共はこの細い 分水嶺に休み場を求めて 荷を下し 肠

下る事 電 T ある 爲に、 近 になつてゐる。 尾 の地形圖には此處から柳又北又の合流點に 根 柳叉の に細 徑 水測 の記 この道 用 號 K から 作 あ は富山縣電氣局が水力發 b つた道との 此 處か 5 事 柳叉廣河 C あ る 原 下つ ガジ

る。 的 0 出來てゐた道で、 に反するからと言つて聞入れなかつた因緣の道 難場を避けて此の尾根道を だが 此 の道 も最 其の 近二二 折の 私の一 年前迄柳又 通る事を主 人の人夫が柳 水 測 張 0 爲 列又下流 私は目 K 相當 であ

これ

は昭和六年私が初めて柳又を溯行した折には既に

たが、

大正十一年に黑薙温泉から北又を溯らうとし

IF.

疑問 得 て今年は既に保證し T K ない 合流 使用された筈なの で のである。 あると思はれ かい 5 此 處迄道形 此の道などは元々 得ない た に可成り荒れてゐる樣子で、 このやうに山 から 不確かなも 完全に残 水測用 つて の道は のと言はざるを ゐるかどうか の道だから 去年あ 果し 0

> その きは やうな事はなかりさうに見えて質は左様でない事を今 から北叉を下つて黑薙温泉に達する營林署林道 何しろ立派な官用林道 必 要がなくなれ ば棄てられるのは當然だが ではある L 通 過 0 出 來 な の如

峠

出來たのは大正の時代になつてからと思はれるが 八 年に 初めて私 0 北又へ 入つた時は立派な道 C あ 大 0

であるとつくんへと思つ

たのであ

る。

北又黑薙

林道

から

叉此處で思ひ出し、

危いのは奥山

の地

形圖

0

細

徑

記

號

10 猪之頭鑛山の所で柳又を對岸 翌十二年には北又から下つて矢張りその鑛 へ渡る術 は 旣 K な Ш の所 かい

で逆に對岸へ越さうとして釣越の針金が切れてしまつ

ゐ る。 定の 恐らく全部安全に通過するなどは思ひも もあらう全く修繕はされず 8 其の後 のであつたが、 も修繕され 特に たりされ 廢たれるま」に 此處數年は人手も なかか つたり よらぬ たなつて ない 頗る不 事 居 關 で あ b 安

をへらして命からん

川溫泉

へ引返した事を覺

えて

て居り水深深い為に渡渉も

不可能でや

to

なく引返し

腹

(458)

らう。 られてよい Ш の道は今日 事 だらうと思はれ あつて明日なしとい る。 ふ事は常に考

子では絕對に柳又には人はゐまいと思はれたのであ て、 知れないとい 聞 かすると、近年柳叉水電の發電を頻りに急いでゐると のはこの旅程は全く無人の境を通る筈であるが、どう の荒れた様子では恐らく柳又の水測小屋には人は居 く富山縣電氣 さて柳叉栗越で休 といふ事であつた。 無人の秘境 ふ事であつ が思はぬ賑やかな所に變つてゐるか 局 0 水電工 んでゐて考へられた事は、 この旅 た。 事の人々 だが に出發前 この乗越の靜寂 が柳叉に入つてゐ に私の思つた この 放な様 道 6

廣

0

々とした所はない筈である。

從つて周圍の山

なの

(459)

だけで、 あつて、 餘り下つて遂 間もなく切株も不明になつて往昔からの通路 私達は柳又へ向つて下り始めた。 谷へ入つた。 杉谷と同 草や木が に待望の 様實に 兩 ヲル 側 谷は流 からおほひかぶさつてうるさい 又廣河原 步きよい 石に 谷で 古くか 0 河岸 暫く道芸 あ 5 に出たのはま 0 た。 0 形はあつた 通路 である 時 だけ 間

0

が

た爲に遂 だ正午前であつた。 つたのに に半 カラ谷から杉谷 日遅れてしまつた 豫定は前 へ越すのに意外 H 中に 0 で ある。 此處 0 K 時 下る T

び出した。それが廣大な廣河原だつた。 つて柳叉に注いでゐる。 廣場であるの 年振に見る柳又廣河原の風景はどうであつたらう ヲル谷の下流は廣河原の平な土砂の下に伏流とな みならず、 草叢がつきて明るい 黑部全流中でも 柳又全谷中第 河原 され 程 K

か。

濃 地であるに關らず二、〇〇〇米以上の山が な眺めといふより外はない。 も左も綠の大樹林の限りなき連續である。 V 大深林群を一望にする事が出來る。 たゞ此處は又とない 見上ぐる それは雄 一つら 見 仰望 所

貫き流 點は朝日 ないのは少し淋しい氣がしないでもない。 K 過 ぎない れる柳 岳 0 又の のである。 手前のタ日ケ原の下 激 流の とはいへこの 何と力强 方 流で 0 廣河 あらう 角 原 僅か が 仰 0 中 が K 最 央 机 3

杉

氏は大きさ北叉に倍すと言つてゐるが、

行

學

の古道を訪

V てすぐ下流も上流も敷町にわたつて渡渉點を調べて見 感嘆した。それに比べると北又は餘りに優美過ぎると 生はこれこそ我等の待望する黒部らしい流だと言つて てしまつたのであつた。 た。私は此處へ到着と同時にその水量を見て先づ驚 ふのである。 若い者に取 何處を渡るか、 つてはさもあるべしと思は 荷物を下し

る。 より るものもなければ、 橋に熟練してゐるであらうかと案じたのであつた。 な狭い流の所も一寸見當らないし、果して人夫達は架 私は 私には此處を架橋する實力を有してゐないのであ 行の額を見廻した。 何處を渡るのかと質問する者もな 誰も不安さうな顔をす 元

撫で下したのであつた。その後でやつと分つたのであ 架橋より外あるまいといふ。では架橋出來るかと聞 出來ますと明 丸山君にどうして渡らうか 否氣なものだなと驚いたのであつた。後で私は人 瞭に答 へる。 私は始めて安堵 と聞いて見た。 丸山は の胸

叉小

に積み上げた。

この小屋は現在のは縣電の

水測用に作

見てもどうせ水のない藪の中の野宿に決つてゐる。そ 筈だと安心したのである。 れよりも午後ばゆつくり此處で休養し、 に時間もかゝらうし、 との事であつた。 るが、丸山君は歸還勇士であり、中村君と共に 山の獵師ならこんな架橋など譯 その後で猫叉の尾根 私は考へた。 明朝早く出發 架橋には相 へ出發して 一个の流が

つた。 たいと希望したが私はその説には賛成出來なか して猫の躍り場でキャンプした方が得策であらうと思 人夫達は早く川を渡り終つて少しでも先 つた。 へ行

である。どうしたものかと一人悩んだ。

架橋するやう

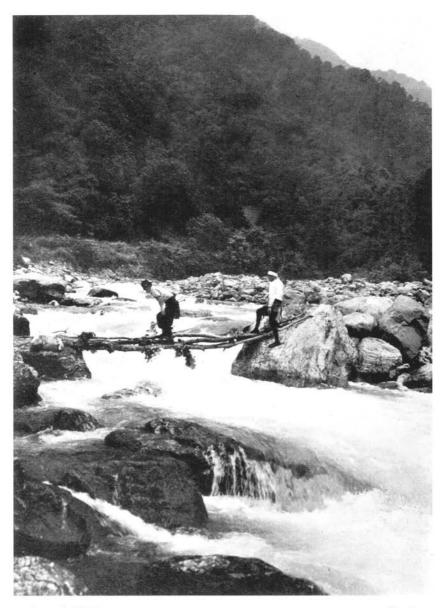
た。然し何處にも絕對に渡渉可能の地點はなかつたの

案内人であると推賞するに躊躇しなかつたのである。 卷いて感心する事連りであつた。私も亦二人を立派な かつた。見物してゐた榎並君は其の見事な腕前 晝食後人夫達は架橋點を選定して木を伐り架橋

に舌を に取

渡つて明日の尾 念もなく對岸 やがて見事な橋が對岸 屋を整理して流木を集め今夜の薪として小屋 へ越す事が出來る譯 根 へ の 取付きを偵察した。 へ架けられた。 だ。 私は早 明朝は何の懸 その後で柳 速對 の前 岸

(460)



柳又の架橋作業

促木繁松



兎の保存する山道

塚 本 繁 松



カシナギ尾根の針葉樹林

爆 本 쑔 松

つたものらしいが、 最近修理したのは小川谷の獵師 達

L 0 で 直されて續いて來た事は多くの記錄に殘つてゐる。 V よい場所はヲル谷の落口近くの臺の上で ある事 た所は決して古人に見落される譯はなく人間生活 昔から小屋 は開 が建てられ、 V てゐ た。 しか 潰 れ」ば又必ず間もなく建 L 此 0 場 所にはずつと古 あり、 かう 0 2

V

ぶきの深くか」つてゐるのが

偲ばれるのである。

程

Ш 0 カン

を忘れてゐた。

やがて水のやうに澄んだ滿月が東の

來た流は此 る。 近 0 取入口となる様子であるのは我々にはつらいのであ 頃は人間 古くから人のいぶきの 地 形圖 處か で判る通り上 0 V ぶきが 6 先 大迂回 か か」つてゐた事は嬉しいが 流から一里 ムり過ぎて、 して再 餘 75 此 b 此 0 の間西流して 處は將來水 廣河原 0 裏

つたのであ

を 間 ぶちぬけば僅々數町しかない。 を谷に沿つて 近くに流 れ寄り間もなく北又と合流してゐる。 F 机 ば 里以上二里に近く、 それでるて落差は三 真直 その に山

な

のであらう。

これだけは此處

0

難

點で

ある。

黒部の古道を訪ふ (塚本)

V

譯はない。

未だに

I

事

K

カン

16

ない

のは全く工事資

の不足の爲であらう。

○○米もある。

こんなうまい所を水電専門家が睨

まな

を領してゐる。 な晝の餘熱を岩に感じ乍ら山氣を滿喫して時 日 が暮れた。 私は一 今はたど轟々とした流の音のみが 人岸の 大岩の上に 仰 臥 0 T たつ かす

隱れてしまふ迄私は容易には小屋へ戻る事は出 行く山肌は印象深いものであつた。 0 際から上つて來た。 美しいものであ った。 夢のやうに次々と淡く照さ やがて襲ひ 己が魂に喰ひ入る よる 晴 霧 K 月 n

治時代の ので餘り寢心地はよくなかつた。 小屋の中へ蚊のやうな小虫が襲來して 記錄にも あるから この小 との 屋 0 夏には 史 顔や手 0 居る事 つきも をさす は

(461)

74 力 3 ナ +" 尾 根

張 落ちたらそれ して見守らずに居れなか 八 月三 H の朝 切 b 早 な 朝 出發 0 0 L つた。其處でどの邊か 同 T の渡り終る迄は矢張り緊 橋を渡り終る。 ころり ら尾 2

が、 根 すぐ前にある筈の小清水といふ谷がどうもはつき 取 付 くか ż. 0 が 私 の数年來の懸案であつ た

b

た形をなしてゐ

ないので判断に

苦し

んだ

0

で

あ

が。 る。 此 その小清水を上れと前から数へられてはゐるのだ の附近は尾根への取付場所は殆んど崩壞した急

斜 小屋の對岸から一町 面 でいづこも一 寸取付きたくない所ばかりである。 ばかり下つた所に少し水の流れて

敎 ねる 原を歩い られた小清水と合點して取付く事とする。 細 溝が てゐる間 ある。 に積石を一ケ所見た。恐らく獵師 谷とい ふ程 の所でも ないが其處を まだ河 0

相當の深さであるので先が思ひやられる。 仕業であらう。いよく へ入り谷を右に見て尾根形の所を藪をこぐ。 細い溝を登り始めた。 間 もなく何 早くも 数間で

た事か左方から新しい切開

きが來てゐるではない

事になるかと案じ乍ら三十分ばかりも行くと、 けるものとしたら案外樂に行けよう。しかしどういふ れて右の谷間へ平に切つて行つてある。さて切開 それ が尾根を上つて ねる。 有難いそれについて行 尾根を ŧ

中

物凄い。

今は諦めて藪漕ぎの持久戦と覺悟し

段々に左方からの尾根も集中し

け共藪ばかりだつた。

高い

橅立ちで

生

6

て見ると尾根の切開きは間もなく消

滅し後は行 あるが下

け共行

く登り續けた。

ゐるらしいが左手が

オ

1

V

ン谷となる所

へは

中

一々出る して來て 果しな 見に行つたが 迷はされる。 に從つて右すべきか、真直に尾根を上るべきか 確かに 丸山君は尾根に切開きがあるかどうか 尾 根にもあると言 Š 小杉氏 大大い の文 K

は之より先數里水のない事を告げてゐる。 で水を飲んだ事を記してゐる。そしてその時の案內 によると柳又を越へてから一山を越へて谷へ下り其 して見れ ば

今右へ行く切開きはその所へ行くものかどうか、暫く ある様子も ない。 私は出来

だけ舊道の跡 間違はない んでもない所へ廻り道しては大變だ。尾根さへ行けば ついて行つて見たが水の 00 のかどうか判明しない。うつかりついて行つて飛 のに相違 のだからと遂に尾根行に決 を拾ひたいのであるが、 ないから果して舊道の跡 めた。 今の切開きは獵 を行つてゐ 所が 行

るも 師用

(462)

大樹に を道 根を踏 事 た。 て行くより外なかつた。 と書いて居られるが、 から 何 to から 林に入つた。 叢篠人を沒すと誌してゐるが當時はそれでもその んぷん分らなかつた。 條の小 が出 + 0 後にも先にも唯一つの古人の遺した形の殘影であ あるやうで、右すれば深曾谷、左すればカシ K だからあきれざるを得ないのである。 相 年 が通つてゐたと直感させられた。其處で晝食とし のと大きく 前 時過ぎ 來なか 違 かすかに不二と讀まれる落書を發見した。 み登る所へ出たが此處で始めて、 なかか 徑はあつた譯だが今はその眞只中をかき分け 0 8 つた。 極の つた。 が交り 漸く深山の感が深くなつた。 0 期待 か判斷も 大樹林帶が終つて欝蒼とした栂 初 小杉氏の文によれば追分とい **栂帯に入つたのでそれは相當に續** L 只藪々の連續である。 左様な所は何 た お晝頃やせ尾根となり大樹の た が案外に 出來ない 柳帶 が 0 \$ 處 所は千 間 餘 もなく 程 かい 古 往昔必ず此處 ちん この落書は 其處で栂 四五百米 V 小杉氏 ナギ尾根 林 8 ぶん 相 0 これ ふ所 は衰 であ 中 0 密 ic かい 0

> た人も出て來て一旦休むと中々御輿を上げない。 は藪潜りには慣れない 憇場へ出た心地である。 位の高度と想像するだけであつた。 點と想像されたが、折悪しく霧が深くなり の下穴とい た草付 ふ所だと小杉氏は書いて の平へ 人が多いので既に相當に疲 荷を下して休 出 た。 今朝來初 時 也。 ある。 めのて 過に 此處は金華 本當の 初めて 單にその しか 11

猫山

L

廣

× とし 地

した事はあるまいと私は早合點したのだつたが之は儚 しこんな草付が出て來たのだからこの先の藪は と休んでゐる中村君が言ふ。 な泊場をみつけるやうに頼んだ。 出來たので私は先に行つた人夫達に追ひつき早く適當 り場に着く豫定などは全然放棄せざるを得ない 密生で一 到つた。 希望に過ぎなか 少し ば 既に夕暗が迫つて來たしひどく疲れた者も 行の步行はにぶるばか かい b 0 つた。 平 が あ それからは竹藪と灌木性 b 何 見ると一 とか すると此處はどうだ 寢床 b 寸土 今はもう猫の かぶ 作れ 0 崩 さうだ。 狀態 九 う大 小樹

(463)

立

0 V

それ だが

に眺望もよささうだ。

よし此處に

しようと決定

黑部の古道を訪ふ

(塚本)

遲 和 れてゐた。 た者を迎 K 下つた。 共 の時はもうびつしや b H

八

草を敷き中々立派な寝床が出來た。

2

昨 Ш

夜の

野宿の地點を約

一、八〇〇米と私は計つてゐた

宴が 空は どの れ初 み初めた。うす暗の れから焚火とい る。 事に晴れ上つてしまつた。 景を眺め廻すのに餘念はなかつた。そのうちに月も上 く出るら Ch の言葉が連りに洩れる。 を梢に見上げて中 始まる。 諸峯であつた。一同 何山ぞと見つむれば、鉢ケ岳、 めた。それは真に驚嘆する程高く雄大な姿であ よい機嫌に醉 雲と言へば今は柳又の底にたなびくばかりで見 面の銀砂の星群、 ふ賑や 竹 最早疲勞も忘れて偉大なる夜の高 ふ順序である。 内氏からは秘藏 カム 0 中に真黒な巨大な山々の さん た私と中村君は郷土 嬉しさに寝つかれなか から驚喜の嘆聲が湧いて出る。 飯は炊けないが月光の下に酒 東の空が明るんで月も間もな 夜更けて床 中村君から天に對する感謝 折よくどん 0 ウ 雪倉岳、 た人 中 ス る。 0 丰 〈霧 俚謡など歌 1 朝日岳 姿が つた。 寢乍ら 出 が沈 山風 現 され 6 な は

月

×

な。

0 東斜

面は 0

々廣い草付

の平で、

これ

躍

b

場 猫 交山

續く高原狀の草原の廣大さに今更驚

目 かい

崩れがすぐ眼の下に見える。何とい あるし勇躍 さかと今更あきれ は間 月四日の夜は明けた。 近であるが、しつとい程藪の難澁は續いてゐる。 して再び藪潜りを初める。 るばかりである。 見下せば北又の内 ふ我 だが天氣は上 見上げれ × 0 足 Щ ば猫 0 のろ ゲ 2 C 0

びは る。 以 がそれにしても猫叉山の三角點迄はまだ高 側の草付をよつて登つて行くと始めてオウ 草原もぼつく、現はれて來た。 くといふ豫定はどうやら晝食の E ぶら~~登るうちそれでもやつと高山植物の吟 ある。 層のろくなるばかりだ。 何しろ十分食事を取つて もう 時 朝食は猫の 間 つるない 猫 K 又 な Ш b 躍 ので足の V 距 四〇 近 り場で炊 ン谷に うで 〇米 運 南

ちる雪溪の頭に出た。雪を食べ乍ら雪溪の下へ水を求

めに下つたが生

一僧流れ

てはゐなかつた。

却

一の方

行つて雪溪の上

方の谷に 中

水を發見し

むさぼり否 って上

(464.)

瞠らずには居 n ない。 チ ング ル 7 0 群 れ咲く原 を 逍 遙

それにしても此の尾根は何といふ長い藪續きで ぎ越し方を見返りつゝ中 つ」二、二一七・五米の三角點に到着し勞多か 村君と無言の 握手を交し あつた 0 た過 た

550 登つた經驗はあるが、 い藪は私としても初の經驗である。 尾根の長さではもつとく一長い道のない ひつきりなしに續くこんなに長 舊道の面影を偲ぶ 尾 根

を

目的 なら無論こんなつらい尾根を登るのでなか つた。

爲にこそこんな尾根を登つたので、

單にこの

Щ

登る

此の緩斜面は

一年のうちの長時日間積雪下にあるとい

(465)

その かつたのだから餘計に苦勞が目立つのである。 舊道 0 面 影は残念乍ら殆 んど何處にも發見 出 來な

猫

又

山

の最高點はこの三角點でなく躍り場へ寄つた

方が の方を仰ぐと、 それ 四 〇米 は躍 程 り場 高 草付に明 0 方か 面白い 瞭に道形が らも望めるのであ 事 に三角點附近か 残つてゐるの るが ら最高 で 私 は あ 點

つてゐるも たけけ 黒部の であ 0 る事 と想 古道を訪ふ が今判明し 像 してゐ (塚本) たのである たの C ある。 が、 それ この道 は りり 形は

b

を知つてゐたのでもつと下方にもそんな道

跡

は

殘

草付

附近だけどうしてこんなにはつきり残 かく此處は烈しい風雨 いて私は考へて見た。大樹の下の苔蒸した所ならとに 來るやうに相當に明瞭に残つてゐるのである 往時鍬を入れ た事は確かだが、 を受け易い 揷 草付であ 入の つて 寫真でも ゐる 其處 判 此 别 K 出 0

ハテハ か二〇米に過ぎないから上からの强い 先づその原因と考へられるのは、 ふ事が何よりの大きな原因であらう。今一つは 最高點は僅 水流が殆んどな 々一〇米

兎の通路となり往來の繁しい結果道は絶えず踏まれ と思ふ。今一つ一寸珍らしいと思はれる原因は、 ふ事も此の道を保護する主要な役目をなしてゐるもの 常に

猫の はれる事である。この附近は特に兎の多い所ださうで、 躍り場とい ふのは實際は兎の躍り場なんだと古老

れが道の形のなくならない重大な因となつてゐると思

は語 つてゐる。

猫 其處が白檜などの密生し 叉 Ш 猫 0 躍 り場との た深い藪となつてゐる。 間 には敷土 米 低 から 2

部

は大變迷ひ易い らそれこそ五里霧中であらう。 0 鞍 のないやうな平である爲に、 部 から あ る 事と藪が深 所だと思ふ。 いのと躍り場 もし霧一 數多くの谷の頭が集中 初めて此處を通る人に でもか」つて の地 形が つか あ た 4

ねる。

してゐる事も亦甚だしく地形の判別を困難ならしめて

並び張られた。そして大天幕の支柱に國旗を掲揚した。 カン たのである。 つた。 散々腹をへらした私共一行は正午頃やつと猫の 到着し、 食事終つて廣場の中央に二張の天幕が 何よりも先に炊事にかくり腹を拵 これを以て今度の山 旅 0 主 目的は果され ぴんと へにか 躍 b

それから一同揃つて一帶の廣場の見物に出た。

此處か

を歩いて見て今年は らもつとも崇高 つたのは若 K して居りもやがあつて今日は展望に適した日でなか 奇異の感に打たれ V 人人 に仰がれる劔 には氣 一體に高山 後で白馬岳の北側を見て一層そ た。 の毒で 雨 の多い 岳は雲から 植物の あつた。 H 0 花の数の少ない 多 出たり隱れ またこの かつたせ 廣場 12

T

あらうと思はれる。

h

此

の夜は特に持参

0

の底をた」

いて幸ある夜を樂しんだ。そして月光を

なき事では

あるまい。

どく花が少なかつたとの事 の感を强くしたが、 下山後聞い で あ る た所では 日光方 面 6 Ch

く日の暮れる迄散歩したり寢轉つて大空を眺め 三〇〇米の廣大な草原は天上の樂園といつて過言でな 花が少なくて幾分淋しか つたとは言 へ、この海 たり

言ひ、叉、地平濶にして幽花細草に覆はると讃嘆して に對し、 物象頓に異なり人間の世に非ざるに似たりと

快な半日を過したのであつた。

小杉復堂氏は此

の附

近

地 V を呈してゐるが、此の仙境には依然として訪ふ人も 今は白馬岳は毎夏萬を越える登山者を送迎する賑はひ 居られる。小杉氏の此の地を訪れて旣に五十年に近く、 を訪 のは奇異な事だと言はねばならぬ。 ふ事三度に達 L たが、 いづれ 0 しかし私は此

登山界から 苦難の多く伴ふ旅であつた事を考へて見れば現在 は 絕海の孤島のやうに隔絶してゐるの も故 ら尚

御馳走を總ぶるまひ 旅を回顧 酒もび L ても

天幕

0 豫 定で は 此 處 0 天幕 を 根 據とし T 柳 又の奥 廊 F 10 下

杯 亡 浴 CX 作ら軟い しとねに熟睡した。 私 0 初 8

道へ出ると、 \$ て立派な道だらうと感嘆してゐる。 珍らしいものでも見るやうに 若い連中は珍らしが つて、 同 見上げ ح

机 た。

がご

道

かい

何 0

清

水

L 違ひない。 がご つかりする。 私共の山旅はこれで終つたのだと思ふと少 清水平 T 晝 食を攝り 誰 ゆ つくり 6 感ず 休 3 事 10

たのに 最後

比べると既に五日 天幕を張る考であ

後れ

て居り

豫定の歸京

日

びが迫

0

つた

が

順調に

豫

定

通 b n

b

行

0

0

雪溪や岩場に遊んで、

後に柳叉を水

源迄溯

其

一處で

つて雪溪の

模樣等

を偵察し、

通過

から

ना

能

で

あ

ば

附

近

つてゐるの

で、

今後の

プ

11

グラ

4

は

切中

止

L

T

清

水

0

4

へ登る事

K

た

何もなかつた。酒などは無論なかつた。 村營小屋 昨 白 年の 馬 岳 私 向 へ買物がてら上つて見たが 0 3. 天幕場で再 旭岳の先で柳叉 び天幕 を 張 0 水源 b タ方白 牛 へぐんと下り 山の戦 + 5 X 馬 Щ ル 時 狀態 以 莊 外 B

が、 今度の旅で感じた事は 同じ北アルプスでも 南部 北ア より ル .7° 相當低 ス 0 北 部 0 南ア 林 n 限 界

天幕

0

た

夜で外してしまうの

は

勿體

ない よく張

が

ない。 をた はない

荷造をし後を清掃して出發する。

これ

かい P つた

K t

逢 月

のは有

難いと思

. ž. 世

折 力

角居 既に

心地

登り、

溫泉を廻つて下山

L

た。

あ 月

n

程 日。

FI

0

續

V

た後の

V

Ŧi.

日

間

少

L

8

雨

6

V

よく

本格的に

なつたと思つ

た。

37

六日

朝

頂

Ŀ

K

(467)

 \mathcal{T}_{1}

との

日は餘り

よい

天氣ではなか

つたが

上の を得

清

水平迄

尾

根と來たら

凄い

偃松の

海

通

ス

や秩父等に較べると一

層低い

為に、

落葉樹

K

L

T

代物ではない

0 0

だが

今度通つて見ると所

べに で

鉈

がご b

入 0 5 to

つてゐて大いに

助かつた。それでも清水平迄は矢張

b

とい 亦黑木に ふ事であつた。 しても所謂大樹 こん な事は 林帶 0 範 無論其の道 圍 ガジ 意外に 0 狭 はよ 0 だ

く御存じ 0 事 であ 5 うが 私 自 身は 黑雍 JII 流 は

四時間

要し

た

清水の平の下で、

久し振

b

K

E

0

Ш

道を通る登山者の 黑部の古道を訪ふ

一聲を閉

き

人影

を望み見てさ

資

源

0

大寶庫だとばかり

信

じてゐたの

であ

る。

運輸方法

K がい は 相違 無論 高 カン ない つたとしたら森林量の増加は莫大なものとなる 大寶 のである。 庫 には相 千四 違あるまい Ŧi. 百米を越へ が、 後三 たら俄 四百米限 に林 界 相 杉、 姬小松、 ねずと、 しらべなど殊によく、

が あつた。秩父など二、〇〇〇米程度で堂々とした栂 衰へるといふ事實を今迄氣付かずにゐたのは迂濶 の巨 T

考が廻るやうになつた。 隔 見て此の附近と秩父邊りとでは森林價格に相當大きな 木帶である事を思ひついたのである。 りが 出て來る譯だなと、年を取つたせいか妙な所 前田藩の黑部奥山廻り道とい 從つて面積的 10

時の人達はこの資源をどのやうに評 の大阪營林局職員の黑薙川上流原始林調査談である。 山廻り役」の などとも思ふ。 2 のは要するに森林資源 面白 に紹介して居られ V のは、 の監視道で 中島氏が あ 價 る大阪朝日 0 してゐたかしら 「黑部奥山 たの だが、 新 と奥 朋

5

そ

の終りの方に

、山は想像以上の美林だつた。

山毛

櫸

ある。

材所を作り一 話によると、 位は樂に出るだらうといふのである。 さへつけば廢りもの」木を擇伐した丈けでも 大伐採計畵を立て」見たらし 營林局では北又のサカサマ谷附 所が V ± 三百 が 近に大製 地 0 豫想 萬圓 人

外に上の方の森林が貧弱な為に結局は費用倒れに終 だらうから中止するとの話を聞いたとの事だつた。 新

聞とはまるで逆である。 森林限界 Vo は黑薙川流域の大深林を決して否定するものではな 只森林限界が低いといふだけの話である。 かい こんな事を書い たか らとて そし 私

其處を我等 の高さの の生命 所に幾多の高原狀の美しい草の平を發見し 低ければこそ我々は二、〇〇〇米やそこい の憇ひ場として來る事が出來たので

(468)

(昭和十六年八月)

會 務 報 告

昭 和十五年十一月定例理事會並に役員總會

111 一月五日 席者 武田、 中司、吉澤、 午後六時半 冠、植 **椒本、望月 茨木、木村、** 於虎ノ門本會專務所 委任十六名 三田、鳥山、 加 藤

-1-

日本山岳聯盟結成に關する件

員

委員とする小委員會を組織し、 冠 つゝ本聯盟の結成に努力すること 氏を委員長、角田、西堀、吉澤、 各方面との連絡をはかり 加藤、 中司の五氏を

社團法人役員選出の件 人の理事及び評議員を決定すること 厚生省より設立認可あり次第直ちに評議員會を開き、

法

郭

津田、

水野兩理事解任申出の件、

飜意を求むること

法

人の會計帳簿組織改正の件、中司理事に一任のこと

山岳、 14 日記、 會報編輯報告

登山用具、 日本山岳會學生懇談會の件、 資材配給方申請の件、 詳細は望月、 目下陳情書起草中 総内爾氏に一

食 務 報 告 任のこと

十二月三日 午後六時半 14 席者 木暮、武田、 冠、 津田、角田、 木村、 於虎ノ門本會游務所 加藤、 西堀、 額田、三田、 塚木、 野口、 **茨木、**吉

中司、 員 總 望月 會 委任十二名

日本山岳會は聯盟結成に至る迄の費用を全部支辦するこ 九日官民合同懇談會、十一日發起人會、十六日實行委員 に向つて進行中、 日本山岳聯盟結成の件 とを決議す 官職側の意向と民間側の意向とは完全に一 十八日結成式(都合により結成式は延期せられたり) 今後の豫定は十二月六日賞行委員會、 致、着々結 成

1 目下官職當事者不在の爲認可延引し居れるも、 認可 0 下るやう 適當の處置を講ずること

> 刻 も早

社團法人申請

0

紀 元二千六百年記念講演會 の件

「高山探谷」刊行の件、 紀元二千六百年記念講演會の 會員中適當の方に講演を依賴し十二月上旬無料にて 目下各書店につき交渉中

五. 名

入會申込者承認、

十二月定例理事會並に役員總會

(469)

JI こと決定 名を 講演者、 單 K H 本 Ш 岳 武 會講演會と 田 冠 木暮 L 0 -1-四氏、 H 蠶 絲 會者吉澤 館講堂

山岳、 會報、 Щ H 記 編 韓報 告

本會は後援者とし 谷川岳山小屋 等 に就き指導することとす。工事は明年初夏溍工の豫定。 11 7 0)

立場から設計、

一亦竣工

一後の

經

取次寄附金は

取敢す郵便貯金とし

曾計擔當理事之を

本年十一月末迄の會計 高山深谷第十 輯 0 件 概況報告 H 下アル ス 書店 心と変 涉 中 な n

關西會員大會の

登山用具資 十二月十二日清交社 括 聯盟と日 材配給の件、 一本山岳會との關係につき論及される筈なり K T 陳情書 開 催 講演 条文大體出來上る 者田 中薫氏と決定。

本山 月 十六日第 任會學生懇談會 回 一會合を 0 11: 別 記 0 如

開

借

+

充分の

爲理事の下阪が願へず、

岳聯問題

の真只

中で

あ

われる 水め

205

知

ŋ

(470)

5

け誠に借

L

V

事であった。

明年度 法人認 本年會員 專業計畫 可 未解決につき 0 件 次 明 翅 年 專 月 會迄に腹 0 理 專 案持 會 後 寄りのこと に開催とす

和十五年度關西會員大會

入會申込者承認、

九

が、 は會員各自の希求されてゐた郷にちがひな れなかつた隔意なき討議、 意見を參酌するの要は多分にあり、 事は進み行く會全體の為にも亦慶ぶべき が検討の機を得、 位は行はれてもよいと考へその旨理事 0 昭 本山岳聯盟問題を考慮するに當つても、 といつて不言不質行でも誠に困る。 い。質行の伴はない論議 事と信ずる。從來關西會員間に於て行 和 11 今回具體化した事は關西在住 會が、〈會員大會又は有志晚餐會の形式に於て〉 或は本部支部間 集會以外に會員同志が打 -1-Ŧ. 十二月 叉東京 1-の空気流通 は幾らあつても へ支部の壓として送られるに 親陸が 於清交社 融けて談合し、 一会員 方針や意見の 大會を通じて進めら 最近に例を 又從來小 はれ の方に通じて の齊しく歡迎 各方面 何にも 部と 50 T 集會では いはねばならな ゐた論 心志の疏 なら 今回は聯絡不 0 採るならば 情勢を 底

な

いが

て久方振りの が全會員 務の報 當 夜は講 活躍振りが推察され誠 に集中 0 意見、 師 富田 關西 田 中蒸氏を聞んで有志晩餐會を 各 11會員 方面 希 委員の支部會計報告あつて後 望は期 各 大會に移る。 種の熱ある論議が發表され、 に頼 せずし もしく思はれた次第である。 て日 先 本 づ津 14 杨 田 會 理 開 整談 の動 海より 個 後別室 向 に入った 本會將 挨拶 2 伝聯 Ł

會

來

年

M

る等 老

\$6

た

一世ら

れ

た

談

李

った

文書を以て本部に詳 當夜 の主要意見(多数養成のもの)の 細報告するに決 み闘 L 休憩の 西 侧 後講演 0) 希望として、 に入る。

指 ペルの著書その他) 並びに最高峰五指山 た際調査された黎族 溢 約 最等海南 十時前有意義な大會を閉ぢたのであつた。〈富田記 近臺灣より軍用飛行機で 海南島と黎族 時間に互り未だ知られざる数々の興味深きお話を何 島 の山岳に就き衣服、 の分布、 習慣、 約 Ŧī. 寫眞等を回覧させて敷き 時間を以 風俗、 員 (一八〇〇米餘) 文獻 て海南島 田 ○獨 中 人スチ へ赴か 蒸氏 0 t 2 れ

出 席者 西岡 田中藻 雄 石原正 津 田周二、 直 富田健一、 外一 名 〇以上晚餐會及び大會 藤木九三、安藤博、

席

淺井東 光雄、 阿江正造、 西 一、杉本俊二、 井常造、 r|ı 村勝郎 岡本治之助、 湯淺殿 下川友記、 小谷部全助 金井健二, 小 川正 + 橋本茂、 郎 前 EH

和十六年一月定例理事會並に役員總會

H 出 席者 一六日 西圳、 木暮、 午後六 吉澤、 冠、 時半 木村、 塚本、 於虎ノ 椒 望月 門本會專務 黑 H 恋 中司、 任 1 ポ 所 名 加 藤 角 H

日本山岳聯盟結成經過 吉 澤南氏よ り報告ありたり。 報 告 H 本山岳會と

役

白

務

報

44

EM 係 法 K つき 人の 種 2 協

本日 쏨 あ 00 理 附にて厚 よつて創立總管を二月中に開催する事に決定す 生大臣より認可 ありたる旨加藤 理 事より

報

新年度強算並に事業について 和 十五年废收支決算報告、

塚

本

理

亦

t

ŋ

報

告

あ

ŋ

たり

昭

編輯經過報告 **次回理事食にて検討すること**

入會申込者承認、 八 名

二月定例理事會並に役員總會

二月四日 出 席者 吉澤、 木暮、 午後六時 角 武 田 田 於虎ノ門本會事務所 藤島、 冠、 島山 塚本、望月 茨木, 黑田、 委任十三名 西堀、中

司

图法 冰 役 人日本山岳會役員推選 木暮、 員 總 冠、 會

0

件

より一

mf:

監理 亦 木村鏡、 黑田孝 息山、 植 西 堀 關西

田 藤 部 茨木, 角 H 族島、 額 H 松方、 rþi 司 關西 沼 井 上 ŋ 19 H

rfa

村

評

識

1

吉澤、 金山、 逸見、 谷 福島、 Ü, 早川、 横 14 關西 探本, t 背木、 ŋ 村尾、

於

專

11

二六

會 木

副 堀

創 法人許可書は一月二十二日到 る こととす 立總會は來る二十七日(木)日本商工俱樂部に於て開催 清 目下設立登記手續中なり

日本山岳聯盟報告

過報告あり。よつて本會の小委員會は解散することとす 盟は 理 一月二十八日を以て結成せられ、 吉澤理事より經

編輯報告

山岳は來る 定にて、 會報總目錄 Щ 伝と一 二月二十日頃出來上る豫定。 (自五一號至一○○號)も二十日頃出來の豫 緒に發送 會報二月 號及び

アルス書店より發行し 渉方塚本理事に一任す たき 旨 申 出あり。

定價

約 Ŧ. 圖。

交

高山深谷刊

行の件

社. 會員名簿作成の件、 法人日 本 Щ [岳會第 創立 回 總會後直ちに作成の事とす 役員總會、 三月六日(木)の豫

入會申込者承認、 八名

團法人日本山岳會創立總會

社

月二十七日

午後六時

於日本商工俱樂部

るに付、 , 藤島理事挨拶、 創立總會を左記の 木暮會 長を本總會の 議長に推す

Y. 昭

申請

中の所

一月十六日附にて厚生大臣より

認可

ありた

通り

開催

す

和

+ 四年

度會員總會の決議に基き、

社:

團 法人日

14

岳

木暮議長挨拶

. 社團法人設立經過報告 (複評議

.

理事、 舊日本山岳會財產繼承及び會計報告 監事、 幹事選任の件 (中司理事) (鳥山評議員)

り左記の諸氏を選擧す

定款第十三條に依り、

去る

二月四日の役員總

會の

原

(条通

理 亦 木暮理太郎、 冠松次郎、

鳥山悌成、

有

恒

點 木村鎮吉、 西堀榮三郎、 黑田孝雄 中原繁之助、

吉澤一郎、 早川義郎、 松井久之助、塚本繁松、 **交**野武一、 前田光雄、 福島昌夫、 金山淳二、橫山直介、 村尾金二、 逸見眞雄 湯茂嚴、

として左記の諸氏を推擧す 別に理事會及び役員總會を開き 青木昇 評議員及び會長、 副會長

.評議員) 額田敏、 中村清太郎、 三田幸夫、 谷徹藏 沼井鐵太郎、 加藤誠平、 藤島敏男、 角田吉夫、茨木猪之吉、 松方三郎、 中司文夫、三木高岑 田部重治、

今四錦司

合 長 理太郎

(副會長) 槇有恒、西堀榮三郎

とを決議す 次に幹事の 補充二名の選擧は之を役員總會に一任するこ

議長閉會挨拶

昭和十五年度

(三月迄)

豫算附議の件

(鳥山部

:議員)

ŋ て午後九時解散とな 事終了後、 吉田竹志、 る 西 加祭三 郎兩氏の所懷披瀝等 あ

塚本繁松、鳥山悌成、槇有恒、

敏男、中司文夫、

望月達夫、

北島隆、今村己之

冠松次郎、

族島

出

中村謙、 助、 義、 山根雅男、 吉澤一郎、津田周二、寺澤一磨、交野武一、 **茨木猪之吉、石原憲治、** 黑田孝雄、 木暮理太郎、 金山淳二、武 當本正

田久吉、 榮三郎, 横山直介、外委任八六三名 吉田竹志、井上皓司、早川義郎、西堀

三月四日 三月役員總會、 午後六時 理事會、評議員會及び常務役員會 於虎ノ門本會等務所

出席者 中司、 木暮、 横山、 額田、 冠、 鳥山、 青木、 角田、早川、逸見、交野、 金山、塚本、望月 中原、三木、沼井、黑田、茨木、 委任八名 吉澤、村

出

會長社團法人初の役員總會につき挨拶ありたり

員

總

務

報

告

社 月十六日厚生大臣より 團法人設立經過報告(塚本幹事) 認可

二月二十七日創立總會

二月二十八日設立登記完了

, 顧問として左記五氏を推選す る理事の登記をなすことゝす

小島久太氏より電話の名義書替の後定款により就任した 三月一日舊日本山岳會より財産事務の引繼ぎをなす

補缺幹事選任の件 小島久太、高頭仁兵衛、 武田久吉、

大島堅造、

藤木九三

滿三年になる來る五月より正式就任を願ふ事とす 山口稔一、望月遠夫の二氏を推選、 但し望月氏は入會後

本會々員の岳聯加盟方法につき、 日本山岳聯盟と本會との關係再檢討 一應決定をみたるも

事務擔當者に主事と命名する事は次回に議すること

主事の件

更に今一度檢討すること」なる

理 郷

常務理事選任の件 春 槇 西堀、 鳥 Щ

0

四氏決定

評 員

評議員追加の件

別宮貞俊、 津田周二の二氏を推選すること」す

(473)

食

茨木、 加藤、 角田、 藤島、 中司の六氏と決定

常任評議員選任の件

常

務

員

愈

會報編輯委員會は一應解散すること」す 昭和十六年废限り退任する幹事は、年度末に決定のこと

新任退任役員送迎會は三月十三日(木)田町「司」で行ふ

幹事々務分擔の件は十三日の送迎會當日迄に具體案作成 こと」し、一切は島山、塚本二氏に一任のこと

のことへよつて十一日幹事集合のこと」す)

關西支部經費の件 開西方にて減額方可然考究願ふことゝす

入會申込者監衡方法內規の件

入會申込者に對し五名の役員承認したる場合は入會內定 の通知を出すこととす

入會申込者承認、十七名

務役員會並に新舊役員送迎命

三月十三日 於司俱樂部

出

席者 高頭、木暮、西堀、 黑田、沼井、塚本、福島、逸見、早川、横山、 金山、交野、青木、 爲山、 藤島、 前田、湯港、 中司、 山口、望 茨木、木

當

務

役

H

9

归邊、

吉田、

中村謙

14 日記 事々務分擔左の (治學、 早川、 通り 村尾) 山口) 決定

1110

(逸見、 福島

闘

(交野、

口口

會 (望月、 塚本

會計庶務(塚本、早川) 錄 (横山、望月)

岳聯連絡(吉澤、村尾)

研究調查(青木、金山、

逸見、

横山)

集 會(青木、塚本)

常務役員會終了後、新舊役員送迎會にうつり、愉快に歡談 時の移るを知らず、 前役員總會に於て關西支部經費減額方申入れたる 學生懇談會(金山、望月) 增額方申出あり。追つて審議することムす 九時盛會裡に散會す

役

三月二十五日 田席者 高頭、武田、鳥山、 ,午後六時半 於虎ノ門本會導務所 槇(議長)、 茨木、 西姐、沼井

出

三田、中司、早川、福島、逸見、塚本、 山口、交野、望月 委任十一名

本會の現狀に就いて 現在會員數、來室者數、 會費入金狀况等に付說明

ŋ

(474)

に對

武 田顧問 より 岳聯加盟方法に關して質問 あ 9 此 0 問 題

出

席者

冠

E

Щ 中

木村、

招井、

田

加蘇、 高頭、

角 武 H 田

茨木,

司

早川、

青木、

塚本

委任十六名

定款 は近 細則 役員 作製の件、 總會を開き決定する部とす 加藤、 中司、 招井の三氏に 一任

昭和十

七

年

度山日記編輯の件、

吉澤、早川、

山口三氏に

任

新年度事業及び強算 幹事集合 衆の 件 次回 に審

が小委員會を開く亦とす 各 事務擔當者

次 回 に審 識す

主事の件、 置くことを原則 とす

四月下

旬頃開催の

2

٤.

講

演會を併

せ開くこと

山岳 會報合本定價の件、 會 報の編輯報告あ

部金五

圓

送料三十三

高山深谷刊行の件、 ŋ 目 會員 録作成準備のこと。 理 の希望を聞くこと」す 0 目下 付圖 晋購入については 投書箱を作 寫 眞

入會申込者承認、 t: 名

月

役

員

總

月 八 H 4 後 六時 報 4 於虎 F 本 會 專

所

務

告

OU

新年度事業と鎌算案の 横山、 逸見、

塚本幹專案を基礎に鳥山理事繳算案を作成

L

その

ありの 都度役員會にかけて決すること」 右を會員總會にかけることに決定、 新導業はその

3.

時

٥ は一應解任の形をとる事とす 幹事に委嘱すること」す、但し 加を聞られたき事。 は支部の事業とせず本會の事業として要請せられたきこ 關西支部の經費は昨年通り八五○圓とし、 現在の關西支部會員数の二倍以上に至急會員 法人改組後の本會事務を引續き塚本 哲日本山岳會の専務委囑 事業を行

(475)

れかの 會員 日本山岳會は岳聯に對し滿腔の支持をする事、 は機構上一国として加入出來ず、 方法により 加入する事 從而會員は次の H 本山

會員の岳聯加盟方法に就いて

職場その 府縣毎に會員 他の 0 地域團體を通じて加入する郡 團 愷 を組 織してそれを通じて入る事

谷川岳避難小屋の

4

角田評議員 小屋は雪溶けを待つて より 報告ありたり 着工する事になり既に入札濟の旨

二開室 一時間 變更 四 月 九日 t n 左 0 通

會

毎日 Œ 午開

火木土—— 月水金—— 午後五時迄 午後八時迄

入會申込者承認、八 名

日曜祭日閉

室

員

PC

月 出 席者 十五日 本年度行ふべき事業大綱作成の件 鳥山(議長)、 尾、交野、金山、山口、塚本 午後七時 沼井、中司、吉澤、早川、望月、 於虎ノ門本會事務所 委任二名 村

90 に入り左の通り決定 の決定なきを遺憾とし、速かに決定せられたき必要を要 右に就き塚本幹事より緊急開きたる本會合の趣旨説明あ 四月の役員總會を終りて尚本年度行ふべき事業大綱 事務所に集りたる次の如き新事業案を提出して審議

登山年譜(日本登山史) 0 作成

究に入る ることに決定、木暮曾長を委員長とし最近に具體的研 昨年來懸案の本年譜作成を、 當面の本會主要亦業とす

ロ、圖書の刊行 一、登山技術に関するも 山と戦争

0

日本山岳會法人改組記念講演並に映畫會 高山深谷刊行記念山岳寫眞展覽會七月開催すること 高山深谷第十輯

14 一月下旬開催のこと 后講演映畫

六月下旬開催の

2

獎勵金の交附

て其年度中のものより選ぶこと」す き獎勵金を交附すること。右は年度末の役員總會に於 に寄與ありたる行為に對し、 日本山岳會賞とも稱すべ

山に關する優れた研究發表、研究的登山其の他登山界

關西側よりこの點に關し申告あるも

この問題は保留

ト、講習會

チ、所戴圖書充質整理の件 圖書の整理、 圖書目録、圖書原簿の作成及び圖

書の充

リ、天幕及び各種の登山用具の比較調査 質を期し、 山岳圖警館としての完成を期す

ヌ、雪洞の研究 右調査開始すること」す

尚新事業のうち相當の經費を要するものは收入の狀態 論をつけんことを期す 最近雲洞流行の爲打薬で置けざるものとし、

研究、

結

2

付

のと思はれるに

(476)

合 L 會計 0 安 全を期 して 行 3 0 とす

講演會 會員總會 會員總會 毎年六月及び 後 の講 五. 月 演會 + 五. 日(木) は早大冠帽 + 月 の二回 三會堂に開催 略 遠征 行ふこ 隊を依 K 決定 賴 すること

~

.

小集會

東京に於ては毎年九月及び

二月

0

回

行

ふこと

0

高山深谷編輯委員

の決定

浼 鳥 川 見 山口, 塚本(閣)、 総内の十氏に依頼すること」す 塚本(繁)、 早川、 藤 島 青 木 横 山

申

西會員大會(臨時)

四

者全部 事會に 先づ湯淡幹海より 後の いて い問題其 つた。 幹 の事業、對日本山岳聯盟、對關西學生山岳聯盟及び先輩 本 月 方針を決定せ 幹事會に於て審議した事項を前田幹事より說明し、 海より 會の社團法人認可其の他に關する報 + 的 より 學 於て決定を見た委員を推選し 八 K 0 日 生 終って愈々本論に入り、 研 究的 新組織による關西側役員を紹 他に就き關 聯 隔意なき意見及び希 盟 於中央公會堂小集會室 實踐 社團 んがために關西會員臨時大會を開 14 方 岳 面 法 ・會報に對する意見を 西在住會員の忌憚なき K 人認可後の會務を報告 進 展する必要性を强 望を聴取し 關西支部の今後 今後館のため 介し、 告並 た。 に開 初 意見を聽取し今 劉日 左記 ï, 調する 8 の事業 に御盛力を 四 本山 Щ 0 次 催 支部 「岳會が 通り幹 いで前 L 意 見が べに就 クラ 岳聯 参集 たの 0 4

Ŧ.

田

ブ 後

願

會 大多數を占め熱あ き言であつ の性格を從來よ ŋ る 論議が繰返さ 變して 欲し れ v Ł た。 V 某氏が强調され ふ意見は充分考 た本 慮

本部との密接なる聯絡 合せ盛會裡に 討議を實行に移すために緊急役員會を開き、充分研究の上、 とまれ本大會はあら 昌 西 岡 散會し 雄 栗飯原健三、 た。 0 ゆる もとに 點で 14 有 意義 Ш 岳 中正之助、 會 な會 0 ために努力する 合であって、 15 Ш Œ + 鄓

席者 富 田 健 入江保太、 中 村勝 郎

出

藤幸一、 今西 小川 郎 IE 壽 中郎 湯茂殿、 雄 藤木九三、 前田光雄、 入江保太、 淺井東一、 津 田周二、 木藤清 西岡一雄、 吉岡武治郎、山口季次郎、 郎、 栗飯原健三、 長岡榮作、 直 上木重 青木竹 郎 會員 伊

(477)

五 月 役員 總 仓

外六名

月六日 出席者 塚本、 木 4 · 暮(識) 後六 額 望月 田 時 長し、 4 三田 鳥山、 委任十 於虎ノ門 青木、 茨木、 八名 本會 村尾、 西堀、 事務 見 jil 加 中 司 横 Щ

定款細 則作成 0

支部規定

會員總會に關する 部 則

會

務

報

告

處 務規

あ D. 規定の草案讀 次回 に再審議の 館。 何れも字句に幾分修正を要する Ŀ 一完成の事とす

談長 會員總會再務分擔の件 木幕會長

昭和 本會の現狀報告 十五年度收支決算報告 木平 谷長

本年度新亦葉計費 探本幹事

昭和十

六年度繳算附證

鳥山

理事

登山年 司 會を開き協議する。 登山年譜編輯委員其の他委嘱の 一評議員に會計擔當を否赐す 譜編輯委員の件は會員總會後適當 委員會の 構成は木幕會長に一任、 の日を選び委員

ф

新事業報告の件

六月末の 游演者 詩 ٢ 演 田國男氏(交渉中) ロエン大陸横断旅行へ會員袋一平氏を介し 會 は 六月二十 Ĥ 木幕會長 夜、 場所軍人會館に決

山岳寫眞展覽會、 七月上旬頃開催のことムす

渉中) 際觀光局所有 交涉中)

映盘

-,

卷

へ會員織內信彦氏を介し交

入會申込者承認、

九名

昭和十六年度「會員總會」 並に「講 演會

五月 出 出席者 + 五. H 關 根吉郎、 後六時半 望月逸夫、 山崎安治、 於赤坂 木暮理太郎、木村鑛吉、槇有恒、 佐野和男、 塚本繁松、

岡鍵藏、

烏山悌成、

酒井忠一、織內信彦、

沼井鐵太郎、早川義郎、

茨木猪之吉、 野

n

末 谷

清孝、 府 科 法政大學山岳部、 豐田種英、內山均、 郎 延 野關夫、 立 大 學山岳部、 杉本義信、 松野節夫、 高校山岳部、 櫻井信雄、笠原茂雄、 石原博和、 鈴木正俊、田邊主計、 青山學院山岳部、慶應義塾山岳部、 **諮岡一次、小野幸、** 東京農大山岳部 東京高校山岳部、 學習院山岳部西崎一郎、 太田敬、玉木六郎、岩崎京二 岩永信雄、伊藤久行、 東京慈思會醫 吉田竹志、 委任出席八八 小原勝郎、 小林 藤

和十 議長 六年度通常總會、 木暮會長

塚本幹亦

司

會

0

下

K

0

通

ħ

開

催

+

名

(外に講演會出席者會員外三十名)

昭

を置か 本會の 前 本會創立以來本年は三十 L ŋ ぬ事を原則として來たが、 現狀に就 倉長を置く 、に到 つたが、 七年目に當る事。 2 机 時勢の變化と共に数年 は絕對に戴く 本會には會長 0) では

(478)

L 會 K 員 來百 萬 居る 毀 逵 數 < 名以 0) L 0) は T 程度で 迄 流、 納入者は五 てゐる亦。 昨 圓 PE 年 F 0 增 あ < . 月以 なければ成績良しと言ひ難い 二ヶ月間 加して 3 0) であ 等。 來二 會費納入狀況も稍良好にて既 割五分に塗してゐるが、 る る部を力 會員数は現在 るみの を昨年度同期と比 0 名である郷の 退會死 說。 現在 九三三名で 一等 圖書室 0 會 較すると約 - 神等 九割五分に塗 減 あ 財 民に本年度 0 必した會 ス發展 0 產 來室者 は 三倍 L

海日 從 0 昭 本山岳會昭和十六年 和 + E. 年 废 (昭和十六年三月一ヶ月) -, 二月收支決算及び法人改組 鳥 收支決算 14 理 報

T

あ

つた。

早大山岳部諸氏の勞を多とし

感謝を表したい。

ズ

手袋その た天幕を會 食糧に

つ」ある本

會の現況について熱意ある説明あり

ŋ

右 山は満場 致に て可 決

鉄算は H 昭 右 和十六年皮強算附 豫算案を説明し承認を求 幾 新事業も逐次計畫され居るを以て、 分の變更を要するやも知れず、 也 佝 本年度 その それ は法法 鳥 都度役員 14 に從つて 人改組 理事 會 後

を 右に就いて説明、 新印紫計 は菩處するを以て了承されたき旨要請、 强調 全會員 费 の支持を懇請す 役員 同熱意を以 7 滿場一致可 遂を期し居る旨 塚本幹專 決

俞 終了 後今 演 冬の 早大山

五岳部冠

帽

晔

遗

征

K

è

15

1

務

報

告

會員總

部 演 かい あ 帽 0 た 概

粮

裝備 K 5 T

食糧につ

に興味深く話され、 0) 登山史を物語られ、 根氏は周到なる準備を以て冠 次に山崎、 更に今回 佐野 帽 の北方よりの の兩氏は装備、 临 0

地

理的

概觀並

K

積

登攀に

及び

0

佐 Ш 關

野 崻 根

和安 吉

治郎

期

實際 場の き失々要點を示され に使用した装備品を目の 隅に張られ、 た。 マット、 殊に今 邊り示されたことは甚だ有意義 オー 回 早 ヴァシュー 大隊が使用し

六 月 役 員 總 會

六月五日 席者 息山(議長)、 午後六時半 逸見、 橫山、 茨木、 於虎ノ門本會 山 沼井, П 村尾、 中司、 事務 望月、 加 青木、前 角 田

田

黑

出

關西支部報告

塚本

委任二十名

1 關西支部役員 集會に 於て本 會 0 方 決 識

關西支部 委員委嘱の件可

栗飯原 JII Œ + 健 鄓 木藤精 富 田 健 郎 • 西 岡 入江保太、 雄 111

中 直

Œ 木

之助 重

0

八

氏

支部の 圖書充質の爲本部にて餘分のものあらば移管

會報に 반 5 れ たしと要望あり、 頁程度の支部欄を設け編輯して會報係に送 問書保善處すること」 す

付するの

件は實施のこと」す

木 役員 入場料にて費用を支出し得ば差支 法人改組記念講演映養會を關西にて開催する 會出席の爲の旅費は關西支部費以外に支出され へなきこと」す の件は

1 研究會を毎月第二金曜に行ふ

たしとの要望は俄に決定し得ず考慮しをくこと」す

岳聯の 山日記編輯方針に就て 現狀報告

1 14 昨年と大體同様の編輯方針 岳遭難救助機關を整備、登山日程の追加、

登山團

軍機保護法は登山 體 0 高度表復活 表の充實、 山小屋欄擴大、 K 直接關係ある拔萃を作られたし 地圖の増加、 外國 0 山

高 山植物一 覧表 0 揭 方要望

と要望

支部規定細則

の決定

會長 に相 談の上成文として發表すること

會員 共 增 の他に相談の上發送すること」 加の爲會員に依賴狀發送

會長

7

高 六月二 山深谷 十日講 編輯報告、 的演映遊 會に就 約百點選擇濟にてアル T

スに引

學生懇談會報告 山岳第三十六年 號並に會報編輯報告

登山用具資材配給 申請 の件

五月二十日、

第三回

開催、

近く第

四回會合開催

登山年譜編輯方針 結論つかず次回再 編輯の根本方針は木暮會長を委員長とする五月二十三日 に就 識 いて

しとの論出で今 るとと 並 0 右には異論なかり 委員會にて左の通り檢討されたる旨報告 行し手近な文獻より早速涉獵し、 各山脈地域別毎に可然き擔當者を委囑し文獻の蒐集と **施検討すること** しも會員の登山經歷をも 基本カードを作成す

これに解決を與へられ度旨要望、 山と生活刊行豫定の件 議決事項にて實行したるや否や未解決のも 議決事項の報告 善處整理すること」

の相當あり

と生活」と題する寫眞集を刊

行し

たき提言あり。

厚生省にて山 小屋に闘する闘舎刊 小屋調査中なるを以て右完了 行 0

0

上その

材料

14 可決 明年「山

(480)

併せ蒐集す

~

を以て本會にて圖書 FI 行したらばと提 考處すること

入會申込者承認、 + 名

關西支部役員總會

する爲に、 意思の疏通を計つた て談合をなした。 會合を重ね、 會社團法人改組後、 私的に 舊役員との事務引繼及び本會の將來に就 或は それと共に本部との密接な連絡を必要と 公的に文書の交換及び上京をなして 既發表の役員は支部 ルー ムに數回

を決定し、 への甚とした。 き支部今後の方針其 四月十八日、 關西在住 其 別記 の後第 」會員 0 の他を打合せた 通り關西會員大會を開催 の協力を求め本會の益 回の正式役員總會を左記 々强化發展 L 7 の通り 委員

五月五日 . 出 日本山岳會支部規定(案)檢討 一席者 中原、 午後六時半 松井、 前 於關西支部ル 田 湯 淺 1 15 M 4 西 岡 飯原

٠ 關西支部內規立案の件

本年度闘西側導業の件、 小集會一原則とし 究會-原則として毎月 て隔月開催 左 回開催の の通り決定をみ ح 3

0)

こと

書に 知 は會報紙上。 通 知 但 し第 回 0 み関西在住 員 全部 に葉

豁

報

告

て徐々に變化し、 進行方針、 に對する質疑應答の會も加へる考へである。 目的の爲にその道の大家を招き、 共に親睦の賞を擧ぐるを目的とするものである。 験を語り、 員總會に於て議題を選定し、 時局下の非常食糧に就いて」と決定した 間は一般的問題から研究し合ふ事となり、 々な計畫があるが、これは何れ發表の時期があらう。 の決定專項中研究會は每月 運用、成果等に關し、 研究を發表し、 充質したものにしてゆきたい考 批判し、 會員が 一回 この會が回を重ねる 専門的方面の話を聞きそれ 會員相 各 開催するを 自 その題目 Ħ. 研究會 第 0 向 原 上を計る K 或は又同じ 則 就い 研 -0 ٤ に從つ 形態、 究 あ L

七月常務役員會

0 色

> 最初 30

會

は

(481)

七月三日 出 席者 木暮、武 午後六時半 早川 田 湯茂、 茨木, 於虎ノ門本會 **交野、青木、逸見** 木 村 藤島、 事務 招 井 委任六名 中 司

定款細則決定の件

處務規定、

會員總會に關する細則決定す

講演映畫會報

關西支部規定決定の件、

右決定す

圖魯整理 大體百圓以內の支出にて總經費を支辨し得たる旨報 報

會計幹事選任の件、 松井久之助幹事に決

> T Ł

經

112

告 和書單行本は 近く其 0 他 一通 の部門にも着手する錬定 り整理終了、 蹇帳記入も終りたる旨 報

山岳寫眞展の 件

高山深谷印刷の都合にて、 かムり、 九月頃開催と内定す 印刷所より寫真返還次第準

關西安部提案入會粉誘狀 本會より會員外へ勘誘狀を出すことは不可と決す

講習會開催並にその輯録刊行

の件

具體案を研究することムす 提案者望月氏都合にて缺席の為詳細は次回審議となりた とすることに決定。 るも、大體の望月案を塚本幹部より説明あり、 今冬第一回を開催すべく關西支部とも協同にてその **尚現地にての講習會も** 行ふことに決 開催を可

次回講演映畫會の件

關西にて法人改組記念講演映畫會開催の件 十一月日比谷公會堂にて 開催と決定

山岳 事とす、詳細は關西支部に 會報、 高山深谷、 山日記編輯報 一任のこと

十月頃開催と決定。

會長或は副會長、

塚本幹事出席する

. 關西支部亦業報告

毎月の役員會に關西支部より役員一名出席の件 交替にて役員一名必ず出席することになりたる旨報告、 旅費を經常費外より支給されたき旨要請あり、 考慮

すること」す

會員月原俊二氏より右の趣旨にて寫眞貸與方申出あり、 高山深谷寫眞展を北九州にて開催方申出 眞等二十一點貸與せる旨報告、 與方申込あり、 會員加藤数功氏より山小屋資料展覽會開催のため資料管 筑紫山岳會より山小屋資料貨與方申込の件 議の上、山小屋の模型、木履、 時日に餘裕なき爲角田評議員塚本幹郷協 外國及び國內の山 右は異議なきも 0 とす 一小屋寫

八月中ルーム開室時間の件 異議なく可決

月水金 土曜 午後一時-五時迄開室と決 午後六時一九時迄

入會申込者承認、 十七名

八月常務役員会

八月七日

務

所

出席者 監專、 幹将補 木幕、 委任 午後七時 模、鳥山、 充の件 沼 井 於虎ノ門本會再 逸見、 木 福島、 村 中 司 村 尾、 津 青木、 H 早川、 横山 塚本

望月幹事の代行者として吉坂隆正氏に委嘱し會報編 湯茂幹事公務多忙による補充の件は、 黑田監事公務多忙による監察補充は當分行はざる事とす 代行者に張陽關西支部代表者をも願ふこと」す 富田健 一氏を幹事 船軒を

0

依 類すること」し、 その交渉方塚本幹事に 任

諸編輯報告

霓 闊 一上金にて支辨し得るや与支部にて取計ふ事 派遣費用は本會にて支辦の事、 講演映畫 會 0 會場費其 0

他 は切符

關西支部研究會々場費の件

支辨する事 毎月開く關西支部研究會々場費は本會研究調查費として

日比谷公會堂は借手多数にて借用困難の旨報告あり、尚、 + 能 木暮會長に依頼して借用方交渉することとするも、不可 なる場合は他に變更すること」す 一月講演映豊會々場の件

九月は役員總會とし十一日(木)開催の 懸案の未決議題は翌月識すこと」す 入會申込者承認、二十八名

事

九 月 役員 總

九月十一日 出 府者 木暮、 午後六時 武田、 鳥山、 於虎ノ門本會專務所 棋 西堀、 **茨木、沼井、藤島、**

中司、 木村、 早川、 逸見、 **敬山、青木、** 塚本 委

定款改訂に關する件 任十三名

事業及び會計年度は歴年制によるを好都合と認む。

務

4

よつて主 會に諮り會員總會を招集すること」す 務官廳の意向を開き、差支なくば次回の役員

會費變更 次回まで各自案を練ること

定款第二十一條會員總會の招集は五日以前とあるを

編輯報告 關係者缺席につき次回に聴取すること」す 岳聯改組等經過報告 會員總會に諮ること」す

+

日以前と改訂するやう、

п, 1 山岳第三十六年第一號は編輯完了近日發行の旨報告 會報次號より吉阪隆正氏に編輯を委嘱すること」す 高山深谷編輯完了近く發行の旨報告

小集會の件

山日記十一月末發行の旨報告

H ポルネオジャングルの旅、 開催と決定 日石社員駒野久德氏、

十月三

十一月講演映畫會の件 茨木氏, 田中薫氏, + 一月廿九日、 軍人會館を借用したる旨報告。 浦松氏等に交渉のこと。映畫一本は

講演者、

會員千名突破記念の件 右の意味を含み有志晩餐會を開くこと」す

日本の氷河」に決定

會場は小西、 高山深谷刊行記念展覽會の件 期間約五日間、 出 版を待ち開催のこと。

倘

限とな

會員幹 西 九 加運動經過報告 州 に開催の申込みにつきても善處の 2

月以來二 會報誌上にその經過を報告し、 百名足らず、七月以來百名足らず增加 尚會員 の支援を願 の旨報

役員會決議事項中未決分の處理

役員會決議再項中決議のみありて實行の有無明かならざ は再檢討し、 大部分は實行せられ居る旨各自說明。倘存實未決のも るものあるも、 質行を可とするも ものにより發表し得ざるものあり、その 0 は逐次賞行のこと

入會申込者承認、六十九名 次回役員總會 十月九日(木)

+ 月役員總會

+ 月九日 出 鳥山、高頭、 午後六時半 村尾、 額田、 木村、茨木、沼井、中司、 於虎ノ門本會事務所 青木、塚本、 加藤、

逸

會報形式變更の件

現在の會報を菊判の雜誌とし一部市販となす操本幹事

中原、 小島、 大島、 植、 田部 富田、津田、山口、早川、角田 藤島、高野、冠、三木、松井、

部改訂の件

木暮、

吉澤、

武田、

藤木、榎本、中村、

厚 生省にては希望せず、 會計年度變更問題、 歴年制に戻す事は好都合なるも よつて便法として明年度會費

> は二月 して運行することムす 末日、 明後年度會費は三月末日を納

會費變更の件 十一月決定の

事

役員定員增加の件

役員にして公務多忙の爲會務執行不可能となりたる場 合は、やむなく鮮任せられたるものとし定員を増加せ

明年度幹事更改の 會計年度を變更せざること」なりしを以て二月

頃

K 延期 ざること」す

前田幹事解任の件

横山幹事公務多忙の件、 健康上辭任を申出られたるに付承認の 必要に應じて後任を補充の औ

、家族會員會費の件 山小屋調査書の件、

集は材料を見た上にて出版方法決定の 厚生省元施設課にて調査せる山 亦

小 是

提 定案は 應否決の事

登山年譜は尚檢討の事の 登山年譜、 山岳會賞委員委囑の件 山岳會賞は理事會に一任し、そ

14 0 岳研究講習會の件 報告を得て決定の事

講師候補者に公務多忙者多く、 適任者あるまで 延期とす

クラブタイの件 山日記內容の件、 早川、 延期 山口兩擔當者檢討の上決定の 冰

編輯報告、各擔當者の報

入會申込者承認、二十名

十一月役員總會

十一月六日 午後六時半 於虎ノ門本會事務所

鳥山(議長)、 木、早川、吉阪 委任十八名 藤島、逸見、富田、金山、塚本、山口、吉澤、青 武田、

長されたる爲その間の會費問題は次回に考慮すること 會費變更は行はざること」す。但し會計年度が三月迄延 會費變更の件

家族會費一部減額の件 減額を行はず。入會金に於ても同じ

岳聯報告 冠、吉澤兩氏より報告あり、

山日記內容報告 増加したるもの─七○○○米級高山名

とす。東京府岳聯についても同じ

本會は今暫く靜觀すること

ハ、十一月末發行豫定 軍機保護法に關する記事は大體抹消す

報

告

講演映畫會の件

高頭、冠、木村、茨木、沼井、

學生懇談會の件 入會申込者承認、十八名

十二月常務役員愈

十二月十一日 出席者 木暮(議長)、 中司、吉澤、交野、塚本 午後六時 高頭、 於虎ノ門本會事務所 鳥山、槇、三田、沼井、藤島、 委任十八名

昭和十六年度會費追徴に關する件 へ會計年度變更により十六年度の實際は十五ヶ月となり

マチガ澤遭難問題 (善處のこと)

終身會員の件

(變更のこと)

たる爲〕追徴は行はず經費減額を圖ること

切符賣上高、所要經費につき嫁本幹事より報告ありたり 講演と映畫の會報告

入會申込者承認、二十三名

尚青木、村尾兩幹事は轉任の爲鮮任せられたり

スター、 チラシ、 切符出來上りたるを配布援助方懇請

編輯報告

压山山 用紙等の關係より印刷所を變更する旨報告

關西支部報告 口、會報、

登山年譜の作

第二號內容につき説明

ありたり

十二月八日 於關西支部ルーム

出席者 打合せの上開否を決定し速刻通知の事とす り各方面の障害が考へられるので出席決定の機副會長と 關西會員大會通知狀發送濟みなるも本朝の日米開戰によ 富田、 木藤、 西岡、栗飯原

會員大會當日の事務分擔決定

會報關西欄は現在原稿は集りつムあるも編輯上種々の難 り説明、 現下登山界の動向に對する本會の方針宣明の件、富田よ ること」す 審議の結果、その方法時期につき本部と協議す

點あり一先づ廢止と決定す

昭和十七年一月常務役員會

出席者 月二十二日 村 木暮(議長)、鳥山、茨木、沼井、藤島、中司、木 早川、吉澤、逸見、山口、 午後六時 於虎,門本會事務所 塚本、 吉阪 委任

日本山岳會賞候補者 檢討

PL

新年度及び缺員幹事補充候補者檢討の件 高山深谷出版記念展覽會開催の件

會員大山氏、 交野幹事の努力により一月二十五日から三

> 入會申込者承認、 二月常務役員會 十三名

十日まで銀座三越にて開

出席者 午後六時 槇(議長)、 逸見、 早川 武田、 於虎ノ門本會專務所 委任十三名 高頭、 鳥山、

茨木、

一月五日

井、加藤、逸見、早川、塚本、 日本山岳會賞候補者詮衡の件 委囑して會賞の標準を定めしむる事とす。 山岳會賞を權威あらしむる爲、萬全を期し、左の役員に 以上七名

植

藤島、

1. 新年度及び缺員幹事候補者檢討の件 非常の際なれば新年度に行ふべき幹郡三分の

選は之を行はざることゝす

幹事の残任期間とせず新任幹事の任期は三年間とす〉 缺員中の幹事六名の補充を行ふこと」すへ但し缺員

ハ、以上二項は會員總會の承認を得て實行す 關西支部委員聚飯原氏の三名は新幹事として推薦する 既に幹事の任務を代行しつ」ある富田、 吉阪氏及び

とととす

高山深谷」出版記念展覽會の件 東京は一月廿五日より三十日迄銀座三越にて開催。 残り三名の候補者(全部東京) は次回に推薦とす

0

會 務 報 告 經費につき家本幹事より報告ありたり 萬人の麥觀者を得て盛況裡に終了したる旨と所要

大阪阪急百貨店にて開催 窩田代理幹事の努力により關西展は二月三日ー八日

關西支部二月役員會

入會申込者承認、五名

出席者

富田幹事の代行期間終了と空席一名計二名の新幹事 二月研究會の件

山岳研究講座開講の件 會場交渉の結果により時期を確定する事とし引續き各細 上開講の可能性を各方面より檢討審議。開催と決定す。 に就き再検討の上原案を確定す 田幹事より講座内容及び開催方法に關する試案提出 0

富

目

の件

二月十三日 、日本山岳會賞候補者銓衡の件 中原、富田、直木、西岡、 於關西支部ルーム 栗飯原 委任五名

(487)

會 務 報 告

意を表する れ たる 8 ので 報 あ 0 發表 るの 遲 れ たる 6 弦に深く

田

口

君

追 Щ

悼 柘

51

は は

本

誌 員

次 田 外號に

掲載の

豫定であ 逝去を深く悼

H

本

郎

氏

0

野 雄 氏

昭 B 一響の 和 0 0 + 五年十二 あ 戦死を遂げらる。 一六八八番) 京 月十四日午後四時、 商科大學山 は 后部 本會は弦に謹みて哀悼の意を表する 陸軍歩兵中尉として中支に轉戰中、 先輩鷹野雄一氏(二十八歲)(會 浙江省某地點の戦闘に於て

Ł 兵 なり 小隊長として中支に活躍せられ、 沚 八入 野 氏は昭 同 社 十三年七月少尉任官、 〈山岳第三十六年第一號參照 同 和 十二年一月松本聯隊に入营。 + 年商大專門部卒業。直ちに日 同十一月出征、 同十五 年 甲種幹部 t 月 爾來二年間 中尉 本郵 に昇進一年間歩 候補 船 株 生 定

田 郎 氏

Ш

本ば 和 にし 六 スイ 電 は 世 四月 離 5 て異境に倒 元 れたっ ス滯在中なる合弟本 tr 理 入會) で哀悼の 專終身會員 氏の本會の爲に盡された功績を思ひ、 れられ は 意を捧げる次第である。尚本會は亡兄と ス イスに滞 田 印一郎 たるを痛惜し惜別の情に堪えず弦に 會 日々員 在中急性肺炎の爲八月十四日 氏 (會員番號 田 П 二郎氏に宛て左の如 110 且 志 昭 4

> 集 記 事

昭和 + Ŧi. 日本山岳會講演會 年 + 月 + 日 後 の記

4

於丸

內

館

有

恒

H.

秘境秋· 温き山 14 . 鄉 き Ш

會員 會員 會員 木 冠 武 春理太郎氏 田 松次郎 人 吉氏 氏

時局と発

登

登山五

+

年

なる山登りから、 の見方等に就き示唆多き講演をされた。 々なる態様を、 に立ち、 づ 司會者吉澤理 例によつて靜かな壯重な日調をもつて、 力强き能動的山登りに及び、登山者の態度、 豐富な經驗を以て語られ、 事 の開 會 の挨拶 0 後、 評 温き、 議員槇有 心の糧と 山登りの 恒 氏演

種 壇

時 野 企 紙九枚張りの大説明圖に竿差し 次で名譽會員 0 反池 D 結果を 過 の巧みな話術を以 んとする長講演であ から ぎるを知らざる狀態であつた。 源を發 「北越雪譜」 武田博士は右記 する魚野川 て説 其他古今の文獻を引例しつつ、 つたが、 き來り說き去る郡正 の上流にある秋山に 0 作ら、 やうな演題下に、 聽衆 何囘にもわ 同 全く 、魅了 K たる質 つい 上越國垃 せら 間 7

C K 士 調 全 0

7 は 同 憇 K 其 如 0 深 0 何 後 8 な 他 評 5 感 3 Щ 議 0 銘 0 ili 員 を與 淨 遠 掛 冠 大 化 をも 松次郎氏 を へた。 ts 强 つて 3 調 æ. 進 77 牛 L to 5 ス 登山 今 ~ ~ デ き П 1 人の かに 0) やう 31 結 就 12 東を to き は時局 0 脱き F 或 高 00 は將 述べ 14 15 長

ح -必 3 0 0 會長 しは 然性 自 最後に木 夜 Di 六 E 集 くて 然 0 百年」と題 0 ふき 一金で 7 聯 た は 觀 を 初 衆は 非 П 强 + から 常な 暮 あ 調 ーつ 訓 其 83 7 說 會 0 L 0 會 0 開えな た 員 感 L 力 謙 た 他 き 長 一滿場 0 會 激 た 强 遜 邊 0 始 裡 方 な 9 蘊 は 員外を合 8 41 がよ 講 て近 0 言 v 落 嬉 K 薬と 拍 閉 程 演 聴衆を全く 0 L な感 をさ か 世 手 カコ 會 端を は違ひ、 現 裡に 世 L つたと思ふ 0 在 たの たの れ 激 T U 立 0 約 的 その な 5 は 演 签 5 四 質に豐 場 + 壇 8 14 L 百 時 < 內 面 Ŀ カン K 9 名 ĸ 5 容 6 0 4 及 作ら大 先づ かな音 溫額 N 落 近 U は あ 全く 其 着 かゝ 7 0 に引 我 つたが、 たの 0 V た氣 量と熱 から 登 古 è 附 富 代 持 14 0 此 日け 0 0)

字に T 其 3 欲 の後 あ る て今 田 3 いと 會員 博 他 が 0 元 士 木 t 度 から は 講 春 ŋ あ 3. 尙 そ 0 希 あ 師 感 湿も 0 E に武 0 やうな * 亦 激 田 0 すは強定 恐らく 賞 0 來 地 兩 浸 T りた 意義 踏 氏 る して る 奎 承 カン と を 諾 5 V 0 ٤ は日に あた 深 L L 7 T 0 00 希 か> 會 V C 5 快 望 早. た は 書く 諸 \$ 1 年 各 だ 講 あ 00 K 續 け 2: 師 返 0 K 3 內容 答 V K ٤ を は 曲 B 思頂 非 依 出 を 壮 賴 活 催

> 意象 込で 居 5 礼 3 か 5 期 待 4 b れ た 0

合

席 和 + 計十八 **藤波男**、 飯 年 **以**塚篤之助 Ħ. 月 横山直 谷恭 名 田 H 邊主計、 鳥山 大熊 つかか 悌成、 保失、 士. 藤 屋 鎭 野 雄 中野 關夫、 栗 原 3米年、 角田 和 福 輔 吉夫、 H 中 嘉 村 20 德 郎 隆 尾 金 鳥

出 昭

と思 なった。 かと御多 つて 昨 0 年 延び延び T 29 るた晩 月世話 忙の を食館が、 人を何 人 8 せつ 年 秋 から 彼 から カン 改ま 是 0 す 暮 7 3 る とか 中 秋 け \$ 社 K 5 團 T 6 法 五. 14 b 人設 月 16 なっ 聯 座 文 멦 た な 問 開 つて 題 か 75 (501)

何 起

に落 K 5 カン 25 0 た な 0 た v で 心待 所も玉 たの が が カン 着 行つ 新 0 ちに T 結 た 唯 L たら L 111 0 御 局 V の方で は 玄 下手の考 出 瀕 いつた。 てね 觸 ٤ 席 か 餘 の御通知 れ た丈け 程 0 8 方も 特別 こんな具合で あ 出 休むに似たりで、 ムでもない、 かけたら を頂 相當見 K 0 淋 御 いた長 弥 元えて か情 Ł 集 か 0 0) たっ こうで \$6 老 賑 ŋ あ 高 は IJ どうか ŋ 頭 カン \$6 3. 馴染 0 氏 だ 多 3 郊 35 0 な 7 と心 サ \$6 た の「つか 思 見 2 19 元えに は 配し は 色 7 有 を x れ な カン

14 深 谷山 應 夢寫眞 七 白 餘 枚 0 中 かっ 選り 拔

は

報

告

た二十数葉 0 優秀作品が飾られて、 爽凉な高山深谷氣分が 堂

話

中 K.

Щ

に接するには山

小屋等に泊るより

8

ち

カン K

がて次回 味佳肴 る 通 諡きることを知らない歡談數刻。 ムには惜 六時過ぎ開會 市電 と芳醇な酒に、山の話から世相の話まで話がはづんで、 の世話人を神谷恭、 の晋も、後を走る省線の響も一向耳に入らない。 い初夏の背を散會したのが九時。 0 僻から始まつて、 土屋鎭雄兩氏にお願ひして、 初めは暄しいと思つた前を 名に負ふ「つかさ」の 別 40 珍

一世話人、 角田、 村 尾

社團法人改組記念「講演と映畫の會」

昭和 講演 講演「山に省りみ 十六年六月二十日午後六時 山 と生 活 3 於軍人會 會員 會長 館 木暮理太郎氏 田 國 男氏

映畫「亞细亞大陸橫斷」及び「富士の地質」

氣の定まら やらな へつて心 語るに相應し 0 たが夕方は少し蒸し暑かつた。 古く から多く を打つも ない梅雨の時候の中で幸ひ雨は降らず朝 講演と映遊の會」は讓定通り催された。 しい言葉つきもなく、誠に心易いものであつたが、 いものであつた。 0 山々を歩き、今もなほ絕えず山を好む人 0 がある、 又その若若しさを人々は特に 木暮氏の 別に人々を指導し 講演は演題 やらとす は凉しか 當 H 通り は天

3 0 2 0

た

私は大いに同感なのであつた。 易く、特に山登りに於てはそうであるといふやうな部分には、 を深めて行くのでなければ、 精神や身體が必要であると言はれ、まづ一人々々がその教 事にあはて 地上にねるの な がよく又一人が一番よいが、 又風雨に躁されても参つてしまは 園體といつても烏合の衆となり それには少し 15 强 位

等を愛讀した一人である。 づきを感じてゐるものもあつた事であらう。 のであつた。 ili 0 先から我々にのこされて來てゐるものである事を說 や山の神様に關する諸説に就て述べ、更にそれら 柳田 生活との交りを話されたのであるが、 氏 の講演はその専門とされる民俗學の方より、 聽衆の中には既に同氏の多くの茶書を通じて近 殊に山に對する 私も「民謠覺書 の山 かれた Ш 々が 人 (502)

たが、 < 0 かに目 事があるが、誠に興味深く又何とか一言したくなるのである。 エン自動車旅行の記録映書である。 が目 講演は何れ本會に於て活字にする豫定である。 「亞細亞大陸横断」は一九三一年に行れたフランス の山を歩いた人であつたらうか、と思つたのである。 或 人が當夜の聽衆の印象を談つた。私も、私の近くに明ら 耳に手をあてゝ身 に映った。 の不自由な人が娘と思はる人に手を引かれて入つて來 講演者 の知合の人であらうか、 體を乗り出すやらにして聽 私は以前にもこれを見た 尚來場者總 又は以前多 0 いてゐる 2 當日 ٢

支部有志晚餐會

演喜多 20 昭 たところ、 關西支部會 和 八で午後 六年 六月 員間 議員藤島敏男氏の御來阪 六時半より + に有志晩餐會を持ちたいと爺て 開 於北濱喜多 た。 を 機 會 K から考 御 911 处 0 へて

北

K

た

7

遇

つた。 ては時 食糧、 會は和 賓縣鳥敏男 知が 局談等 器具等の今昔の比較、 急だつたた 氣氣 遮きるところの知らない微談に初夏の将は短か 々裡 氏を 初 め御参集の會員 に始められ め珍らしく複 そして最近の登山界の批判、 たっ 人は少な 面 谷微藏氏 白き懐密談や かつ の御 た が 出 失敗 腐 そ を得 話 れ 3 T

> 內 內

(503)

い希 次回は 席 望で 藤島敏男、 'ある。 葉 の秋 K 榎 7 b 谷徹藏、 近郊の 西岡 山か谷で、 雄、 宮崎 8 つと盛大に 武 夫 11 111 P ŋ Œ

出 た

西支部小集會

游貞雄、

栗飯原

健

郎

湯淺殿、

宮田健

下

川

友紀、

前

田

光雄、

近

昭 氏 和 亚 + 年 + H 御 年 話 t 六 ŋ 月二 をう 一ケ月 士五 か が 間 0 日 た。 佛 領 於堂ビ 先づ佛印 印度支那の旅をさ 清 交 0 n I 1 れ 後 ٤ た蘇島敏 t L て氏 男

山寅造

百

湯

淺

會員外七名

粉

報

告

北より 佛印 23 を分除米 ぐらされ 佛印は重要な役割を持つだらうと講演を結ばれ 支間和平後の雲南 ンコ 米の 村落 に始 3 就 0 0 れた Ш 山岳に就いて氏の見聞された概 0 れ いて高山はなく、 V まり、 伝は 峰 1 T 南 た東京ー . 公山 出 12 興 水 の佛教 さし ラオ・カイ線のファ 一來海など興味深く聞く事が出來 田 味ある印象談や 0 佛印の の對象としては不適 . 五. 産 山路 0 沖繩— て高度の 業事情等も . ·西康· 概要に 印度教の遺跡 ŏ . 河水 粁 兩者及び他 14 の横断 灣 美し 海 概略 西 就 1 はなく、 「藏方面 いて精 - 版東 岸線・ を話 い異國 . 自動車旅行に 當で 0 の探訪や泰 され = の山への出發基 14 シ・パン三一四二米 要を述べら しく御説 > 南 大平原• 興味は無 も酸はジャ の風景を語 たっ 島ーハ ダン た。 愈々話 國 15 明 9 内蛇 14 れ 最 3 20% 1 が ング た。 後に られ 脈 4 あ 1 ングル 附 地 0 通 は 0 0 とし ルにめ 三二八 近で遊 將 佛 た。 過 の山 3 FII EΠ EΠ 行 叉 等 T 國 國 れ

來た。 と御開 席者 **高演終了** することが出 柏岡英男、 藤島敏男、 後同氏を関み座談的に講 中 原繁之助、 淺井東 富 來て、 田 健 西井 -本 元好雄、 常造、 小集會 小川正 西 岡 演以外の御話を 一中郎 山口季次郎、下川 雄 は盛大裡に終る弥 增本茂、 山本保、 栗飯 的 名古屋 つく 友記 原 が

出

季 11 集

和 木 野 幹 期 + 水 氏 ejr. 暫 ル 0 3 木 年 へ地 司 0 オ + 質測量 間 會 月 休 K 1 會 H 中で 技 ŋ ガ 4 12 師 後 前 あ 六 つた 0 記 時 話 0 4 小集 は 通 豐 n 於 開 會 H 富な體驗と 催 を 本 商 L たの 秋 I 風 俱 励 爽 野 か 部 久 な 德 夜 氏

> 閱 6 港

あ

でなく、 しの 7 ぜ 地 付 餘 \$ 跡絶えたる密 L 全 道 け 0 非 多數 める di. た。 K 的 直 5 を見 K A. 15 下 れ 我 程で かい Ł 猛 公務とは 0 T 0 後 た 未開 7 から 19 Ł 和 出 本 4 獸 而 あっ ル 去つて、 して多 3 3 す は 帯 邦 人と住 ~ 0) 此 林 蛇 後から 0 k の奥 の危難 國の なる 中 思 野 -6 0 0 云 た To は 獸 8 0 U 分 v 30 駒 秋 種 0 n. や爬蟲類 ポ 集 地 民 乍ら其處に果す K 意 る氏 深く と戦 團 を指揮し 野氏が單なる 1 0 味 々な参考品 夜長 熱帶 生活 險的 住 1 JE. K 的 分け 民 め處 於て、 と本邦 な奇異 如 に迄 見開 0 を 0 がき人に 蕃族 なほ 7. 入 8 體驗 立派 2 8 候を恐れずに疫病を克 なく を前 極 人 7 P 道 ~ 南 1 15. 8 き に成 疫病 一つ餘 流れ て興 種 なき L 談 方 物 K 0 彼方此 に単 - -7 0 0 語 L 愛情 0 3 ŋ T 出 味 8 は 害毒 比 始 15 遂 0 旅行者とし の、風 て來 1 K 0 知 方と を感ず 3 U Ħ 較 83 V 短 深 5 ガ 的 T 飓 を 的 染 カン K ± 排し きを 教 斯 れ 其 n 味 を 8 厚 的 持つ K 3 以 た 同 此 0) 0 1 72 L. 道 嗤 全 を 6 惠

玄

五

H 太

桂 郎

瀬 主 交野 岡一

H

久吉、 谷重

田

邊

須

M 安江安宣、

雄 縣根吉郎、

石

井鶴

内

井

E

皓

司 戶强三郎、

Fi.

十嵐清

郎

石原

憲治 山義夫、

智

初 嘉

見 PU

武

E

宗吉、

織內

信彦、 次

今村 已之助、

14

口

稔

福

郎

15

林

Ŀį.

茨木猪之介、野

П

末

延

沼

井鐵

事 途 して科 習 0 K 3 あ n 0 れ 性や 興 る ば 0 環 特 行 岳 る 味 C 人駒 垃 仕 學 0 得 夜 0 は 郭 優 的 卽 T 勞 狩 深 75 を 九 5 野 5 K あ 働 成就 た登 5 0 V れ 氏 鄉 1 者 物を處 話 カン た 0 自 群 と思ふ。 山省 且っ 0 中 산 思ふ 土人の C L に强くあつたればこ ٤ 意義 め得た、 的態度と は 理 0) あるま L 恒 0 困 斯かる であ 珍 に深く 0 猫 て行からとする、 奇 恋 to 信念が、 るも な 大きな る 集 6 意味に 言 かと思ふ 融 が 團 合し 動 0 生 0 C 要 そ 活 於て、 話 因 此 そ あつたと思 れ T を 等 0 0 0 K 困 L は 7 此 登 から 400 難に 如 此 0 あ 0 14 7 绑 ĸ 何 で る。 難 0 者 \$ 30 夜 あ 亦 3 的 指 其 3 る 言 虚 8 0 to 話 郻 3 を 面 U 動 L 誇 云 地 白 類 14 :fi0: 面 Thi 周

席 E 者 會 者六 扩 なく 島 倉 野 -1-敏男、 志郎 久德、 九時半 名 塚本 散會し 川 一落田 同 繁松、 佝ほ 關 决、 たの 壯 太 盤 郎 青 鈴 A हे 木 木 12 族岡 34 思 U 鍵 黑 木 を 治治德千 残 村 L 中 T 村清 代神 俞 場の 井 太郎 忠 谷 都 合

出

0 誠 ~ 9

+ 七 三田 幸 鈴 木正 俊 麻 生 卯 郎 他 K |會員 外

たの

色

々御厄介願つた方々に對して厚く御禮申上げる次第

講 演と映畫の會

和 講演「登山四十年」 講演「山と人との + 六年十一月二十九日午後 境上 八時 會員 會員 於軍人會館 **茨木猪之吉氏** 田 中

氏

映畫「氷河」「富士山

て下さつた田中薫氏、茨木猪之吉氏、 するうちにこの會の內容を報告する機を失してしまつたので 一處では單に報告する事に止めて置きたいと思ふ。講演をし 際觀光局、 た。 季「講演と映費の會」は多数の参會者を得て盛會裡 此處に改めて厚く御禮申上げたい。 其の後間もなく大東亞戰が勃發したので、 又切符賣捌の為に人知れぬ苦勞を願つた會員 映畫富士山を貸與され かれこれ K 終

、集會記事了

Щ B 記」(第十二輯)

につ によつて行つたので可なりなものになつたと思ふ。 いって は内容に於て餘り昨年と變つてゐない。種々の都合で創品和十六年十二月十五日發行、本年度の「山日記」、第十二 いもあ るが 帝 室 登 林野 局 山園 その 「體」の調査は 他の方面から種 「岳聯」 4 0 事務局の資料 接 助 「山小屋」 を 頂

な

い次第である。

愈

務

報

4:

あ る。 記事は大體抹消し 増加したるものは七千米級高山名、 軍機保護法に關

Ш 日記」編輯委員 吉澤一郎、 早川義郎、 14 П 稔

高山深谷」(第十輯)

年の 位も全部心よく承諾せら 案外容易に取編める事が出來た。 募集にかくつて見ると、寄稿家各位の絶大な御援助によつて さへしたのであつたが、いよく刊行と決定して先づ寫眞 誠にめまぐるしい限りで、 時日を要した譯である。 成にあたり寄稿家各位に深甚の謝意を表する次第であ 及び繪の依賴は主として家本繁松その衙に當つた。 谷」委員が數回の選別によつて決定せるものである。又隨筆 會で募集又は依賴した寫眞七百餘點の中から左記 一高 九月で、一 和 山深谷」第十輯の刊行を最初に理事會に提案したのは 十六年十二月十五日發行、本輯々録の寫眞百葉は、 册の書物となつて生れ出る迄には一年有餘 その間出版界其の他諸情勢の變遷 れて執筆して下さつた事は感謝 途中幾度か流産の憂目を見ようと 又隨筆や繪を御願ひした各 の「高山 本輯 完 深

(505)

とし で山 又個人的に偏するを避け 輯の寫眞內容は、 の質感をよく表現したものを集めてあるつもりであ 地域的といふ點も相當考慮したが、 3 爲 一人の人から三枚以 は採 #

翰

カン 0 た 事 を Ł せら 九 t

本書關 3 0 と言はれる 厚く感謝の意を表した である。 が 4 一高 みの親で、 文を 保省で、 114 深谷」 たど 寫眞と繪 時 今回 旣刊の 氏 いた高野 0 の序文を得た海は仲々意義深きを感ずるも 企は恐らく本輯を以て終となるであらう も亦非常な努力の上御寄稿下さつた事に をいたどいた石崎光路氏も亦古くから ものには全部 態滅氏は言ふ迄もなく 關係してゐられ 一高 3 111 0 深 T あ

輯に雑然たる 私の獨断に終つた事を深く謝す次第である。 本書の裝釘は以 のも の極端な不足 委員諸氏とも十分の連絡が取れず、配列等は心ならずも 輯の寫真の選定が大體終つ 山深谷委員 のを出 800 版 心書肆 は 前から相當に凝つたものであつたが、 青木 があるとしたらそれは全く私の罪であ K 到底其處まで心を配る徐裕はなく、 任 する 織 た頃 より外なかつた事を諒とせら 内 信 から出版を急 塚本繁松 從つて本輯 塚本繁松記) 塚本問治 だ 今日 闘 有合 かの編 3 查

> 富田 力によって行はれた。記して兩氏に深く感謝の意を表したい。 合せて約三萬人近 九州展 九 健 州展終了 氏の犠牲的の奉 後 倉井筍屋 福岡市に於て又三井鐵葉所に於ても開催 い人々の觀覽を得た。大阪展に於ては特 率仕を得、 (昭和十 七年二月十八日一廿二 九州展には橋本三八氏の努

K

山深谷刊行記念 「山岳寫眞展覽會」

息山山

梯成 稔

早川義郎 横

蘇島敏男

逸見真

14

П

14

直介

高

大阪 不京展 展 阪 銀 急百貨店 座 = 越 公昭 公昭 和十 和十 七年 七 华 月 一月廿五 H 日 三十日) 日

Ш 岳 投 稿 規 定

原稿 投稿は 然らざるとを問 0 何人 採否は常務役員 自 はず。 H 會に 0 H 本山 於て決定す。 岳會員たる 2

原稿にはその梗概を附せられるの費用は筆者の負擔とす。 別刷所要の向 原稿は返却せざるもの はその旨 原稿に とす。 せられたし。 朱記

せられ

たし

校正は編輯者に 紀行には概念圖を添付 寫眞は光澤印 は振假名を附 名及び外國 紙 K 説明記入を乞ふ。 語は特に 畫紙に燒付けられ度、 せられ 一任せられた 度し。 せられたし。 明確に書か 20 n 度、 裏面或は

地

名

有所權作著

發

行

東

京

別

町 は前記編輯所宛て申込みあ 日 不二 本 屋ビ Щ ル 岳 = 七號室 輯 所

印

刷

靜

岡

給

元東

京

度原

統稱用

紙

所要

0

向

原

稿蒐集所

京市芝區

琴平

昭 昭 和 和 發行所 + 七年六 七年六月三十日 東京市 月 # 芝區 Ŧi. H 發 印 刷 行

色

「定價金參

法社 人團 四零平町 不二屋ビル内

替口座 座東京四八二九平一 六 四 九 平 番番

逸》市 豐 島 見這 (袋四ノ 1 四 七

東

京

編

輯

日本出版配給株市神田區淡路町 川市 株縣 高縣 式資 麵 濱田松 喜町 松 會市 區淡路町二 TH. 市 元 年 年 七二 一七二 一七二 社元明城争 ·--壯番 用) 1 三善郎 郎〇 カ

印

刷

静

岡

日本出版文化協會員番號 222033

配

山

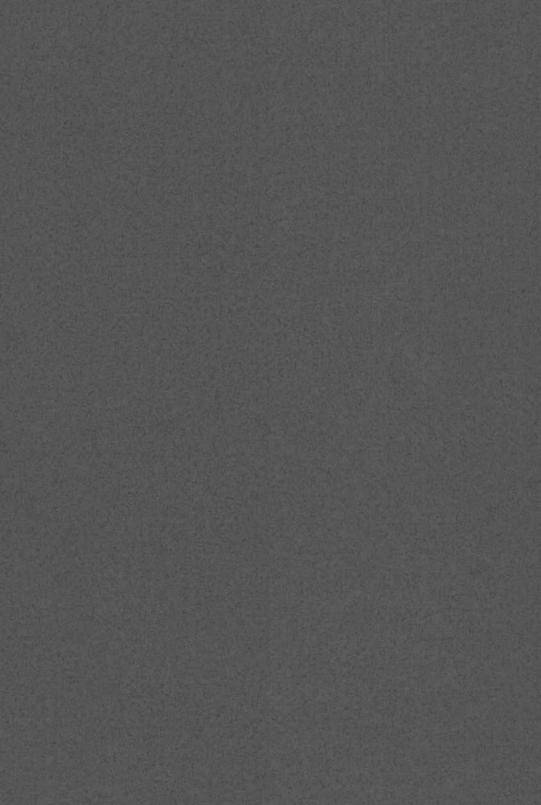
岳

第三十六年

「山岳」第三十六年總目大

額田	高所に於ける人體の抵抗と順應及び高山病	内蒙古の調査旅行(II) 鈴木 木	極地法と明神岳東稜 質和日ナ島	登山五十年 木暮理太郎	『臺灣登山小史』索引 沼井 鐵	井鐵	_:	白馬三山とその以北補遺 塚 本 1	額田	高所に於ける人體呼吸に就いて(綜說)	1		托印	神河內志中島一	クングール山群 望月 コ	積雪期の鴨絲江源流 大阪商科大學
	(綜乳	IET.	山岳	太	太	太	郎ラ	繁	1.1.			打		止	達上	山岳
敏三	0				郎	- 1	н-ф-	-	敏一		信夫	-		文	夫	部
烹		量	尧	盖	錄號	芫	兒	0	空		竞	9		晝	Ξ	一頁
自船津至松本往還之圖	鴨綠江源流より白頭山た	鴨綠江源流の一部	警備隊と苦力の行進	天池の外壁	圖版		會殺執告	3	里広一才で忙	態野推一書と意ふ	追悼記	黑部の古道を訪ふ	木曾川本谷(王瀧川)	王龍川(裏御岳)		冬期南湖大山行(南湖溪
	を望む												溯行			溯行)
	空								,	1.		塚	行	高	木	溯
	空								1	谷		塚本	行	高橋	木田	溯
	空								1 岩	谷部			行上			溯
	空								7 4	谷部全		本繁	行 上 田 徹	橋	田文	溯
	空	17.			44		ロッカ	9	名音 多 里	谷部		本	行上田田		田	溯

【スニト―ラマ廟(純支那式)ラムレン近傍―包と彂の煉瓦塀鹽廟―楡の野生、	張北近傍―驢馬の放牧、遠景楊の植林草原を走る道路(東スニト―貝子廟)	明神尾根「鷲の巢」の天幕明神岳主峯(右端)、鷲の巢附近より	コ ブ 尾 根明神尾根第二キャンプ	故 鷹野雄一氏	蒙古相模(羊群廟にて)	ラマ踊り(多倫にて)	多倫郊外の砂丘 蒙古人住居(砲臺營子にて)	砲臺營子(左翼旗牧場)にて	羊群廟にて、盛裝せる旣婚婦人(祭風景)	富士三合目附近	二子山ラヂオ基地	「自船津至松本往還之圖」の添文	飛驒より信州松本に新道筋明細繪圖	飛驒往來新道筋略繪圖
三三元	룬 증	三 元 元 四	팔		一	一至	三 三	1美	三元	三	三	允	仌	全
部古道附	王瀧川槪念圖	裏 御 岳 明神岳東稜附近略圖	內蒙古槪念圖富士山斷面圖	飛驒新道概念圖	クングール山群概念圖	鴨綠江源流概念圖	揷圗	カシナギ尾根の針葉樹林	鬼の保存する山道	柳又の架橋作業	鷲を捕ふ(徳化―西スニト)	賣買の幕營(徳化―東スニト)	既婚婦人(西スニト)	シラムレン―ラマ廟本堂(純西藏式)
四四	四里	四元	對 一	凸	對	=		哭一	哭	哭()	喜	픮	100 100 100 100 100 100 100 100 100 100	100



The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXVI 1942 No. 2.